

家逸。勝家大怖。終走。歸末盛城。信長母六角氏。愛信行。與之俱居末盛。於是。六角氏令信行作誓書。勝家通勝皆被僧服。來謝其罪。信長謂通勝曰。是吾之罪已。吾前背德忤諫。使平手自殺。汝自今代平手匡我。乃遣守那古野如故。信行仍不悛。城龍泉寺。欲與岩倉兵合。略取東郡。令其將都築藏人招聚兵士。勝家數諫。信行疏斥之。永祿元年。正月。信行饗諸將士。不及勝家。勝家怒。夜來清洲。告信行反。信長乃稱疾。使村井貞勝告六角氏。欲讓家於信行。六角氏悅。告信行。信行即至。將入信長臥內。信長豫伏力士三人。斬之。不成。信行走出。池田信輝要擊于廊下。斃之。

【標悍】……音ヘウカン。標は急性なり、悍は強狠なり。氣早にしてたけしき也。光春……美作守。【卒】……にはかに、不意に。【詞】……うかふ、容子をうかひ探る也。【耳語】……音シゴ。耳うちする。【行大事】……弑逆のこと。【名家】……尾張に在り。【佐久間大學】……秀盛。【織田造酒丞】……信房。【森可成】……三左衛門。【俟】……待つ。【鑑殺】……音シヨウサツ。鑑は、矛戟を以て撞くこと。つき殺す。【逸】……のがる。【六角氏】……六角高頼の女。【忤】……さかふ。【匡】……正す。【仍】……なほ、やはり。【不悛】……あらためず、改心せぬ。【龍泉寺】……尾張に在り。【都築藏人】……正勝。【疏斥】……音ソセキ。うとんじりぞく。【永祿】……正親町帝の時の年號。

通勝は、信長が氣はやくしてたけしきを心配し、弟光春、柴田勝家など、相談して、信長を弑して信行を立てやうと巧んだ。信長は、之を感じて、弘治三年の五月に、信長は、たゞ、第四番目の弟信時とともに、不意に、那古野に出かけて行き、其様子をさぐつた。さうすると、光春は通勝に耳うちして曰ふには、これは、天幸で御座るから、速に大事を行ひ信長を弑するが宜しう御座ると曰つたけれども、通勝は信長を殺すに忍びかねて、手を下さなかつた。信長は、選つて、名家にとりてを築き、佐久間大學をして、之を守らせて置いた。八月に、勝家と光春とは、銘々、一千騎の兵を引き連れて、手きびしく名家を攻め立てた。名家は、危急なることを信長に報告した。信長は、直ちに、現在あり合はせの兵七百人を引き連れて、出掛けて行つて援け、織田造酒丞等をして勝家に當らしめ、そして、自分は、光春と戦つたが、我が味方の兵が負けた。然るに、我が部下の一隊の將森可成が、信長に向つて曰ふには、今日の戦争は、味方の軍勢が勝利を得るで御座りましやうと曰つた。すると、信長は、どうして御前はそれを知つたかと問ふと、可成が曰ふには、光春は、一寸勝つた爲めに、おごりたかぶる様子が

ありますから、御座りますと曰つた。信長は馳せ出でんとした。可成が曰ふには、しばらく御待ちなさいと曰つた。とかくする中に光春は、いよく、勝つた勢につけ込んで、その旗もとの兵を縱つて、押し寄せた。すると、可成が曰ふには、もう馳せ出で、もう宜しう御座ると曰つた。信長は、そこで、馳せ出で、撃つて之を破り、手づから、槍を揮つて、光春をつき殺し、遂に路を變へて、勝家の軍に赴き、大聲で呼ば、つて曰ふには、我は、すでに光春を討ち取つた。勝家を逃がしては成らぬぞと曰つた。勝家は、大に恐れて、終に逃げ走つて、末盛城に歸つた。信長の母なる六角氏は、信行を愛して、之と一處に末盛城に居つた。こゝに於て、六角氏は、信行をして、誓の神文を書かしめ、勝家、通勝は、皆、坊主の衣を着て、出で來つて、其罪を詫びた。すると、信長は、通勝に向つて曰ふには、これは、吾の罪である。吾は、さきに、道徳に背きたる行を爲し、諫言にさからひて聞き入れず、平手をして自殺せしめるに至つた。汝今より後は、平手に代つて、我が過失をたゞしくれよと曰つて、そこで、派遣して、那古野を守らしめること、もとの通りであつた。信行は、それでもなほ、改心せず、龍泉寺に城を築き、岩倉の兵と一處になつて東郡を切り取らうと思つて、その部下の大將なる都築藏人をして、兵士を寄せ集めしめた。勝家は、たゞ、諫言したので、信行は之をうとんじ退けた。永祿元年の正月に、信行は、諸將士を饗應したけれども、勝家をば招かなかつた。勝家は、怒つて、夜、清洲に來つて、信行が謀叛することを告げた。信長は、そこで、病氣であると稱へて、村井貞勝をして、母六角氏に、家督を信行に譲らうと思ふと告げしめた。すると、六角氏は、悦んで、信行に此事を告げた。信行は、直ちに、清洲に至り、まさに、信長の寢室の内に入らうとすると、信長は、前以て力強き武士三人を伏せ置いて、信行を斬らしめたが、うまく行かずして、信行は走り出で、逃げ去らうとした。池田信輝は、廊下にて待ち受けて居つて撃つて之を斃した。

二年。四月。齋藤秀龍欲廢長子義龍。立少子某。義龍誘殺少子。與秀龍鬪。遂弑之。信長將兵援秀龍。不及。還。義龍躡之。信長自殿而退。會岩倉城主遙援義龍。以兵三千軍丹原野。時我見兵僅八十三騎。乃驅清洲市人。伐竹爲槍。列于軍後。敵以爲大兵來也。乃退去。七月。信長與犬山城主織田信清。合兵二千。攻岩倉。岩倉兵出。戰于浮野。信長令弓銃手橫擊。走之。追至城下而返。信長南行。信清北行。城兵視信清兵寡也。出尾之。信長返援。夾擊大破之。遂圍城。三月拔之。於是。信長盡取尾張。獨智多一郡。

屬今川氏

【秀龍欲廢長子義龍立少子某】……義龍の母は、はじめ、土岐頼藝の妾たりしが、已に姪んで後秀龍に嫁す。秀龍、義龍が己が子に非ざるを以て之を廢し、少子右京亮を立てんと欲せしなり。少子某……右京亮【驍音セフ】追ふ也、あとをつけて追ひ撃つこと。【岩倉城主】……織田信安。上に見ゆ。【丹原野】……尾張に在り。【浮野】……尾張に在り。【追至城下而返】……返に一に還に作る。下同じ。

永祿二年の四月に、齋藤秀龍は、長男の義龍を廢して、少子某を立てやうとしたので、義龍は、少子をおびき寄せて殺し、秀龍と闘つて、遂に之を弑害した。信長は、兵を引き連れて、秀龍を援けに行つたけれども、間に合はずして引き返した。義龍は、其あとを追つかけて之を撃たうとした。信長は、自身に、しんがりとなつて退軍した。折しも、岩倉の城主なる織田信安は、はるかに、義龍に加勢して、兵士三千人を引き連れて、丹原野に陣取つて居つたが、其時に、我が信長の現在有る兵は、おづかに八十三騎であつたので、そこで、清洲の町人を驅りあつめ、竹を伐り取りて槍と爲し、軍隊のうしろに、ずらりと並列せしめると、敵は、大軍が来たのであると思つて、そこで、退却して立ち去つた。七月に、信長は、犬山の城主なる織田信清とともに兵三千人を一處にして岩倉を攻めた。岩倉の兵は、城を出で、浮野に於て戦つた。信長は、弓方鐵砲方をして横合から之を撃たしめて、之を逃げ走らせ、追つかけて進んで、岩倉の城下に至つて、引き返した。信長は、南の方に向つて行き、信清は、北の方に向つて行つたが、城兵は、信清の軍勢が少數であると云ふことを見て取り、城を出で、之を追つかけた。信長は、ひき返して、信清を援け、挟み撃ちにして、大に城兵を破り、遂に城を圍み、三個月かゝつて、之を攻め落した。こゝに於て、信長は、残りず皆、尾張を取り、たゞ智多郡だけが今川氏に附いて居つた。

先是、鳴海城將山口某畔。附今川氏。又取大高。沓懸二城。更城于村木。信長攻下村木。又攻笠寺城。城將戸部某驍勇不可下。信長收兵而歸。以戸部善書。令侍史學之。期年而得。乃贗作戸部通織田氏書。令森可成爲賈人。齎赴駿河。上之義元。義元怒。召戸部殺之。又殺山口父子。義元既定駿河。遠江。參河。將大舉攻尾張。信長修諸城壘。令佐久間大學守鷺津。飯尾定宗守丸根。與大高。笠寺兵數戰。不決。

【鳴海】……尾張に在り。【山口某】……左馬助。畔……をむく。【大高】……尾張に在り。【沓懸】……尾張に在り。【村木】……尾張に在り。【戸部某】……新左衛門。【驍勇】……音ゲウユウ。武勇なると。【令侍史學之期年而得】……侍史は、祐筆、君側に居りて文書の事を掌るもの。

期年は一周年。得は筆意を呑み込む。偽筆せしめんが爲めに、側右筆をして戸部の筆法を學ばしめ、一周年にして、その筆意を得たり。【贗作】……音ガンサク。贗は偽なり。【せの手紙を作る】……賈人……音コジン。商人。【齎】……もたらす。持參する。【鷺津】……尾張に在り。【丸根】……尾張に在り。

【譯】これより以前に、鳴海の城將山口某は、織田氏にむきて、今川氏に附き、又、大高、沓懸の二城を攻め取り、更に村木に城を築いた。信長は、村木を攻め落し、又、笠寺の城を攻めた。笠寺の城將戸部某は、武勇にして、攻め落とすが出来なかつたので、信長は、軍勢を引きまゝとめて歸つた。戸部は字を書くとが上手であつたが、信長は、その祐筆をして戸部の筆蹟を稽古せしめ、一年かゝつて其筆意を得たので、そこで、戸部が織田氏に内通することを書いたるにせしめ、森可成をして、偽つて商人のふりをして、これを持參して駿河に出掛け、行きて、これを今川義元に差し出した。すると、義元は、その贗し手紙を信じて、大に怒り、戸部を召し出して之を殺し、又、山口父子を殺した。かくて、義元は、すでに、駿河、遠江、三河を平定し、將、大軍を引き連れて尾張を攻めやうとしたので、信長は、諸の城やとりでを修復し、佐久間大學をして鷺津を守らしめ、飯尾定宗をして丸根を守らしめて置き、又、今川氏方の大高、笠寺の兵と、たびく戦争をしたけれども、勝負が付かなかつた。

三年。五月。義元自將三國兵四萬五千來攻。十八日。大學。定宗馳使清洲。告曰。義元昨日至沓懸。今夜將運糧大高。而日攻兩城也。信長召將士。言曰。我欲赴援如何。林通勝等說曰。敵衆垂五萬。而我兵不過三千。宜避其來銳。據本城待之。信長曰。不可。吾視天下英雄。恃其地利。以失事機。自取滅亡者。不爲少矣。先君有言。鄰國之來犯。苟有遲疑。我將士且變志。當亟出迎戰。吾不敢背先君之教。明日將一戰決勝敗也。與吾同志者。努力。諸將莫敢諫者。信長因命酒與飲。酒酣天明。信長自起舞。謠古謠曰。人世五十年。乃如夢與幻。有生斯有死。壯士將何恨。舞畢。即被甲上馬。

單騎擧鞭而出。騎能屬者十餘人。比及熱田祠。得千人。自祈戰勝。陰使祠官鳴甲于龕中。信長顧軍士曰。神助我也。乃取山路。行收諸城兵。兵凡三千騎。東望見兩城火起。將士逡巡。信長益鞭其馬而進。林通勝。柴田勝家。池田信輝。毛利秀高。扣馬諫曰。彼大衆新勝。以寡兵犯之。立覆沒矣。信長厲聲曰。汝輩且聞吾言。吾非妄意進犯敵也。敵納糧大高。終夜不息。今亦拔兩城。其兵罷極。而義元侮我。不復設備。吾乘是時。出其不意。可一戰而擒也。梁田出羽進贊其計曰。敵拔兩城。未更其陣。中軍必在後。我直襲之。義元可獲矣。信長乃伏旗鼓。循山而馳。至於桶峽。瞰視義元營。信長欲下馬接戰。森可成曰。衆寡不敵。宜騎而突之。信長曰。善。乃馬上揮槍。先衆馳下。會大雷霧兩昏黑。我兵鼓譟。斫營而入。敵衆大驚擾亂。不知所出。服部小平太進入幕中。薄義元。義元拔刀擊其膝。毛利秀高縱義元。斬其首而出。駿河軍遂大潰。信長追擊。斬其精騎二千餘級。乃賽熱田而返。士女夾路迎觀。信長揭義元首于馬前。凱旋清洲。大高。沓懸諸城皆解走。信長以此名聞天下。

【垂】……なんくとす。【來鏡】……攻め来る鏡勢。【特地利】……土地の要害よきを頼みとする。【事機】……事の機會。【遲疑】……遲は緩なり。疑つて遲滞する也。【手間取る】……すみやかに。【先君】……信秀を云ふ。【酒酣】……酒たけなは。酒宴なれば。酣は酒樂なり。【古語】……音コエウ。教盛の語。【人世五十年】……一代を云ふ。【幻】……音ケン。まぼろし。【屬】……つゞく。【熱田祠】……尾張の熱田に在り。【龕中】……音ゲンチウ。龕は、神體を收めたる處。即ち厨子。【兩城】……鷺津。丸根。【逡巡】……音シユンシユン。却退の貌。あとさざりする。【扣】……控。同じ。ひかへる。引きとめる。【立】……たちどころに。即座に。【且】……しはら。【妄意】……むやみにあてども無き推量。【罷極】……罷は疲と通ず。大層疲勞する。【梁田出羽】……政綱。【更】……變へる。【桶峽】……尾張に在り。鳴海と池鯉鮒との間に在り。義元の墳墓あり。【瞰視】……音カンシ。視おろす。【擾亂】……音ゼウラン。さわぎ亂れる也。【不知所出】……爲す所を知らずと云ふが如し。途方にくれて、どうして善いか分らぬ。【薄】……せまる。【縱】……音シヨウ。槍などにてつゞく。【賽】……音サイ。報祭なり。願はどきに參詣する。【返】……一に還に作る。【揚】……か。高く擧ぐる也。【凱旋】……兵樂を凱と云ひ。旋は還る也。かちどきをあげて還る也。永祿三年の五月に、義元は、自身に、駿河、遠江、參河の三國の兵四萬五千人を引き連れて、攻め寄せた。十八日に、大學と、定宗とは、使者を清洲に馳せさせ、報告して曰ふには、義元は、昨日、沓懸に到着し、今夜は、まさに、兵糧を大高に運び入れ、そして、明朝、この鷺津、丸根の二城を攻めやうとしたして居りますと曰つた。そこで、信長は、將士どもを召し寄せて、之に向つて曰ふには、我は、出かけて行つて鷺津、丸根の二城を援けやうと思ふが、如何であるかと曰つた。林通勝等が、説き勧めて曰ふには、敵の軍勢は、多數にして、五萬人になんくとす。ほどの大軍で御座ります。而るに、味方の軍勢は、三千に過ぎぬ少數で御座りますから、これは、敵の大軍の攻め寄せて来る銳き勢を避け、この城に立て籠つて、之を待つが宜しう御座りますと曰つた。すると、信長が曰ふには、それは宜しくない。吾、つくつく、天下の英雄を見るに、其要害の善いのを頼みとして、そして再び來らざるの機會を取りにがして、自分から滅亡の禍を取つた者が、實に少くは無いのである。又、父君が言はれたことがあるが、隣國から攻め寄せたときに、若し手間取つてつゞくして居ると、味方の將士どもでさへも、志を變へるやうにも成るものであるから、速に出で迎へ戦ふべきである。と言はれたことがある。吾は、敢て父君の教に違ふことを致さず、明日、まさに、一戦争して勝負を決しやうとしたのである。吾と志を同じうする者は、力を盡してしかつりやれよと曰つた。諸將は、敢て諫め止めやうとする者は無かつた。信長は、因つて酒を言ひ附けて、將士どもに飲んだ。酒宴なればにして夜が明けた。信長は、自ら起ち上つて舞ひ、古い語を誦つたが、其意味は、人間が此世に生きて居る間は、わづかに五十年であるが、さすれば、一夜の内一寸見る夢の如く、形有るが如きも實は形なきまぼろしの如くである。生れて此世に出づれば、必ず死なねばならぬのである。であるから、勇壯なる士たるものは、死といふことを何ぞそんばに恐るゝことも恨めしく思ふことも無いと曰ふのであつた。信長は、かく舞ひ終つて、直ちに鎧を着、馬に乗り、たゞ一騎にて、鞭をあげて馳せ出でた。騎士の信長に附いて行くことの出來たものは、十餘人のみであつた。熱田神祠に到着する頃に、千人となつた。信長は、自身に、戦勝を祈願し、ひそかに、神官に言ひ附けて、鎧を本殿の中に鳴らさしめた。そこで、信長は、軍士を振りかへつて見て曰ふには、これは、神様が味方を助けなされるしである。と曰ひ、そこで、山路を取つて、行くく、諸城の兵士を取りまとめ、兵はすべて三千騎であつた。かくて、東の方を望むと、鷺津、丸根の二城は攻め落されたと思つて、火が燃え上つて居るのを見えたので、將士どもは、皆、おとしざりして進みかねる様子であつた。信長は、ますく、其馬に鞭をあて、進んで行つた。すると、林通勝、柴田勝家、池田信輝、毛利秀高が、馬を引きとめて諫めて曰ふには、彼れ義元の軍勢は多數であつて、勝利を得たばかりで、まことに盛んな勢であります。然るに、今、味方の少數の軍勢を以て之を犯すときは、立ちどころに味方の全軍討死するに至りまじやうと曰つた。すると、信長は、聲をあげまして曰ふには、汝等、まづ、吾が言ふところを聞けよ。吾とて、無暗に向う見ずなる考を以て進んで敵を犯さうとす

るのでは、決して無いのである。敵軍は、兵糧を大高に収め納れ、夜もすがら、休息せず、今亦、鷲津丸根の二城を攻め落した事なれば、其兵士は疲れ切つて居るであらう。そして又、義元は、我を輕んじ侮つて、もはや備を設けて居らぬであらう。吾は、此時につけ込んで、敵の不意に出でたならば、一戦争を以て彼れを生捕りにすることが出来るであらうと曰つた。すると、梁田出羽が、進み出で、信長の計を賛成して曰ふには、敵は鷲津丸根の二城を攻め落して、まだ其陣地を變へないから、本陣は、屹度、後に在るで御座りませう。味方が、直ちに、之を不意撃しますならば、義元を討ち取ることが出来ませうと曰つた。信長は、そこで、旗や太鼓をかくし、山に沿うて馳せ進み、桶峽に至つて義元の陣營を見おろした。信長は、馬を下つて接近して戦はうと思つた。森可成が曰ふには、敵は多勢、味方は小勢で、大層な相違であるから、馬に乗つたまゝで突かかると、宜しう御座りませうと曰つた。信長は、成程尤であるといひ、そこで、馬上で槍を揮ひながら、多くの人々に先だつて馳せ下つた。折しも、大雷が鳴つて、霧の如き雨が降つて、真暗であつたので、我が軍勢は、攻め太鼓を鳴らし、喊の聲をあげて、敵の陣營へ切り込んだので、敵の軍勢は、大層驚いて、さわぎ亂れて、途方にくれて、如何して善いやら分らず、まご／＼して居つた。服部小平太は、進んで、敵の幕の中に入り、義元にせまつた。義元は、刀を抜いて、小平太の膝を斬つたが、毛利秀高が、義元を槍でつき、其首を斬つて出でたので、駿河の軍(即ち義元の軍)は、とう／＼、大に崩れてちり／＼になつて逃げ出した。信長は、追つかけて之を撃つて、敵のすく／＼抜き、駿河の首二千餘級を斬り取り、そこで、熱田神祠に御禮参りをして、返つた。男も女も、道路を中に夾んで、出迎へて見物した。信長は、義元を馬の前にかゝけて、清洲に凱旋した。大高杏懸の諸城は、皆、兵備を解いて逃げ走つた。信長は、此一戦を以て、名聲が天下に聞えわたるやうになつた。

道家祖看記

今川治部大輔義元、三河、遠江、駿河、伊豆、四ヶ國の軍兵を引率し、三州と尾州との間に、信長の城、大高、杏懸二ヶ所の取出を一刻に攻めめし、永祿三年五月十八日の晩、桶峽間と申所に陣取也、尾州清洲城にて林、平手を始め、清洲日本一の名城なれば、御立籠可然由申上候、信長聞しめされ、昔より籠城して、運の開く事なし、明日は未明に鳴海面へ打出で、義元の首を刎ね候か、我等打死せんと被申候、日比心懸候侍、森三左衛門可成、柴田權六勝家など申者、心よき仰事、我等御馬の先に立ち、打死仕候はんと申す、其外何れも可然由申上げ、座敷を立つ、十八日の夜半過に、信長公廣間へ出させ給ひ、さいと申す女房に、時は何時ぞと尋ね給ふ、夜中過と申す、く／＼召させ給ひ、馬に鞍置かせよ、ゆつ／＼致せと仰せられ、御せん過、昆布搦架持ちて参り候、即ち聞し召し、床几に腰を懸け、小鼓取り寄せ、東向になり給ひ、一人間五十年、下天のうちを比ぶれば、夢幻の間なり、一度生を受け、滅せぬもの、あるべきかと、三度舞はせ給ひて、城の中をば、御小姓七八騎にて出給ふ、大手の口にて、森三左衛門、柴田權六、其外三百計にて控へたり、兩人早し／＼とのたまひて、熱田源大夫殿の宮の前にて、千七八百になり給ふ、星崎表に控へたる佐々下野守政次、三百餘にて、六萬餘騎の押へを仕り候者、信長を出迎へ、某一人なりとも、今川と組み打死せんと巧み申すに、さても妙なる御出也、某命を捨て候はゞ、今日の合戦に御勝候事必定なり、今日天下分け目の合戦これ也、天下を治め給ひ候時、弟内藏助成政、我等侍を御見捨てさせ給はじとて、我々は東向に、今川旗本へ亂れ入るべし、殿は脇鎧に御向ひ、鐵砲弓も打捨て、只無體に、打て懸らせ給ひ候へとて押向ふ、義元油断して有る所へ、三百五十計打越したり、按の如く、本陣に喧嘩出来たりとて、六萬餘騎の者共騒ぎ立つ所へ、信長二千餘にて、一人も通さじとて、喚き叫んで大音を揚げて、切て掛り給ふ、一支へ支へずして、どつと敗軍、義元之首を毛利新助秀高取る、折節西より大風吹き、霞降り、大高杏懸の大木吹き轉び申なり、五月十九日巳の刻、首數五千計打取り、大利を得

させ給ふ、信長廿七歳也、云々、

當此時。足利氏大衰。三好氏。松永氏。專京畿之政。而七道將士各據其國。迭相爭奪。信長慨然有戡定天下之志。初尾張人道家某。與京師人立入宗繼者相識。宗繼爲左京亮。自父祖居京郊。多田業。供御乏絕。每取給焉。嘗說中納言藤原惟房曰。方今天下大亂。宮闕頽敝。供御之邑。盡爲武人所占。而以臣視之。其勢非得天下豪傑。不足以定天下之亂。聞尾張有織田信長者。年甫二十。割據東國之咽喉。能以少擢衆。是其人必有絕世之才。君盍奏請綸旨。囑信長以撥亂反正之事。惟房畏憚内外。不敢決。宗繼再入。說之曰。事如漏泄。臣獨任其責。帝探闕鏡室。決計。五年十月。惟房宣言。天子感異夢。將奉幣于熱田祠。乃使宗繼及磯貝久次齋密旨。赴尾張。因錫信長以御用合香館。道家氏。信長獵歸。過道家。道家告以故。信長乃沐浴更衣。出見宗繼。宗繼宣達勅旨。信長謂宗繼曰。吾聞天子天下之君。宜自我共職焉。而今反辱使命。加以寵貶。吾何以堪之。當藉天威。以夷凶徒。不日入朝。竭力圖報。因自調食。以享二使。召森可成。柴田勝家。

丹羽長秀。木下秀吉。瀧川一益。菅谷長頼。堀秀政。諭以勅旨。於是日夜議西上之策。

【三好氏】……長慶。細川晴元の家臣。【松永】……久秀。三好長慶の家人。【迭】たがひに。【慨然】……内自ら高亢憤激する也。いきどほりなげく貌。【裁定】……音カンテイ。裁は克つ也。勝ち定める。【道家某】……清十郎。【左京亮】……左京職にて、權大夫の次の官なり。左京職は、左京の戸口の名籍百姓を字養する等を司る。京都は、左京、右京の二に分る。【京郊】……京都の近在。【多田業】……田畑を多く所有する者。【供御】……天子の御入用。【乏絶】……とほしく又絶える。【每取給】……いつでも宗繼が差出す。【頼敵】……音タイヘイ。環なり。くづれやぶる。也。【占】擅據なり、しめ取る。【咽喉】……咽は食道。喉は氣道のどくび。天下の要地に喩ふ。【以少摧衆】……三千の寡兵を以て義元の四萬五千に克ちし類。【絶世】……遙に世にすべれたる。【繪旨】……天子の詔を云ふ。【撥亂反正】……音ハツランハンセイ。撥は治むる也。騷動の世を治めて正しく治れる世にかへす。春秋公羊傳の哀公十四年に、撥亂世、反正、正、莫近於春秋とある註に、撥は治なり、除なりとあり。また、漢書の高祖本紀に、帝起細微、撥亂世、反正、正、莫定天下とあり。【帝】……正親町帝。【探圖鏡室】……圖は音キウ、みくじ。鏡室は、所謂内侍所なり、内侍所は、神鏡を置く處、故に鏡室と云ふ。内侍所にてみくじを取りて、繪旨を信長に下すべきや否やを決する也。【幣】……音ヘイ。神に捧げたてまつるみてら也。【錫】……たまふ。【御用合香】……天子の御用になる調合の香。【宣達】……口上にて達する。【共職】……共は供と通ず。職をつとめる、職務をつとす。【寵賜】……音チヨウキヤウ。賜は賜なり。ありがたき賜物。【藉】……音キヤウ。享宴、御馳走する。【丹羽長秀】……五郎左衛門。【菅谷長頼】……九右衛門。【堀秀政】……久太郎。【諭】……告ぐ、告げて相談すること。【西上之策】……西の方京都に上るべき謀。

この時に當りて、足利氏は大に衰へて、三好氏、松永氏が、京畿地方の政務を自分の思ふままにし、そして、七道の將士どもは、銘々、自分の國に立て籠つて、互に争ひ合ひ奪ひ合つて居つた。信長は、慨然といきどほりなげきて、天下の亂に勝ちて之を平定しやうとの志望を持つて居つた。はじめ、尾張の人道家某といふ者が、京都の人立入宗繼と云ふ者と、知り合ひの間柄であつた。宗繼は、左京亮であつて、父祖の代より、京都の近在に居つて、田畑を澤山に所有して居つた。そこで、天子の御入用が缺乏することがあると、いつても、立入家に申し込んでそれを供給せられることになつて居つた。宗繼は、ある時、中納言藤原惟房に説き勧めて曰ふには、只今は、天下が大に亂れて、天子様の御所は、くづれやぶれ、御入用の物を取るべき御領地は、残りず、武人の爲めに占領せられて仕舞つて居ります。そして、私の考へるところでは、その勢は天下の豪傑を得ませぬときは、この天下の大亂を平定することは出来ませぬ。聞くところによりませうれば、尾張國に、織田信長といふ者があつて、この人は、年はやつと二十歳でありながら、東國の咽喉とも云ふべき要地に割據して居りまして、能く少數の兵を以て多數の兵を打ち破つたといふことで御座りますが、これは、屹度、遙にかけはなれて世間にすべれたる才能のある豪傑で御座りませう。されば、あなたは、天子様に奏上して、御詔を請ひ受けて、信長に、騷亂を治めて正道の世にかへす事を御頼みなされるやうにしては、如何で御座りませうかと曰つた。けれども、惟房は、内外を畏れ憚つて、敢て決定しなかつた。宗繼は、再び御所に入つて、之に説き勧めて曰ふには、此事が若し世間に漏れ聞えましたときには、私ひとりでのその責任を負ひませうと曰つた。そこで、天子様は、内侍所に於て御圖を御取

になつて、この計を御決定なされた。永祿五年の十二月に、惟房が言ひふらすには、天子様は、不思議なる夢を御覽になつたので、その爲めに、熱田神社に幣物を捧げんとせられるのであると言ひふらし、そこで、宗繼及び磯貝久次をして、内密の勅旨を持參して、尾張に赴かしめ、因つて、信長に賜ふに、御用の合香を以てし、道家氏の家を旅館とせられた。信長は、獵より歸り、道すがら道家氏の家に立ち寄つた。道家は、御勅使の下られたる故を信長に告げた。信長は、そこで、髪あらひ湯あみし、衣服を着換へて、立ち出で、宗繼に面會した。宗繼は、勅旨の趣を申し達した。すると、信長は宗繼に向つて曰ふには、私が聞くところによれば、天子様は天下の主君であらせられるのでありますから、御勅命が無くとも、此方より進んで職務を盡すべきで御座ります。然るに、今や、反つて、御使を遣はされて勅命を辱うして、その上げほろぼし、遠からずして入朝し、私の力のおらんかぎり盡して、御恩返しに報い奉ることを圖るべきで御座りますと曰ひ、因つて、自ら食物を調理して、二人の御使者を饗應し、森可成、柴田勝家、丹羽長秀、木下秀吉、瀧川一益、菅谷長頼、堀秀政を召し寄せて、此等の者共に勅命の趣旨を告げた。こゝに於て、日となく夜となく、西の方京都に向つて上るべき謀を評議した。

刈谷城主水野信元説曰。參河徳川氏。舊屬今川。公宜結納之。委之東事。而西面以圖天下。信長從之。甲斐國主武田信玄。國富兵強。信長厚贈遺之。約爲婚姻。以順適其意。而西圖齋藤氏。

【刈谷】……三河に在り。【水野信元】……下野守、徳川氏の舅なり。【委】……委任する、まかせる。【約爲婚姻】……信長、女を以て信玄の子勝頼に妻はせ、又、其子信忠の爲めに信玄の女を娶りしと云ふ。

刈谷の城主水野信元は、信長に説き勧めて曰ふには、三河の徳川氏は、もと、今川氏に附いて居つたのであるが、貴殿は、之と申し合はせて、之に東方の事を委任し、そして、御自分は、西の方に向つて、天下を平定するとを圖られるが、宜しう御座りませうと曰つた。信長は、此言に從つた。甲斐の國主武田信玄は、國富みてゆたかに、兵強くあつた。信長は、手厚き進物を信玄に送り、約束して縁組をなし、以て信玄の意に順ひかなふやうにし、そして、西の方に向つて、齋藤氏を滅ぼさんことを圖つた。

齋藤秀龍之未死也。有二驍將。信長計除之。乃乘夜外出者數。夫人齋藤氏疑其有所私。頗有妬色。信長曰。吾非有他心。乃欲成秘計耳。夫人問其計。曰。不可與女言也。固問。信長乃誑之曰。美濃二將。陰通款於我。圖

舅氏。曰。事成則舉燧。吾每夜出望之。未舉也。夫人憂恐。密爲書告之。秀龍。秀龍驚。即誅其二將。齋藤氏兵力。遂自是削弱矣。義龍既弑。秀龍傳子龍興。龍興暗弱。其將士多歸心於信長。

【所私】……密通するところの女。【妬色】……音トシヨク。嫉妬の顔色。ねたましき顔色。婦が夫を嫉むを曰ふ。【誑】……欺く。あざむきたぶらかす。【舅氏】……音キウシ。しうとの家。齋藤氏を指す。【燧】……昔スホ。烽燧なり。のろし。【暗弱】……暗愚柔弱。

齋藤秀龍が、未だ死ななかつたときに、二人の驍勇なる大将があつた。信長は、之を除き去らんとおもひ、そこで、夜に乗じて外に出かけると度々であつた。信長の夫人齋藤氏は、信長が人知れず寵愛して居るところの女があるのであらうと疑ひ、餘程、嫉妬の様子が見えた。信長が曰ふには、他の心のある譯では無い。それは、秘密なる計略を成し遂げやうと思ふだけである。と曰つた。夫人は、その計略とは何で御座りますかと問うた。信長が曰ふには、汝にそれを話すことは出来ないのである。と曰つた。夫人は、固く問うた。信長は、そこで、夫人を欺きたぶらかして曰ふには、美濃の二人の大将が、ひそかに、我に内通して、舅殿(秀龍)を亡ぼすことを巧んで居つて、そして、其事が成就するときは、其相圖として、のろしを擧げまじやうと曰つたので、それ故に、吾は、毎夜、出かけて、火の擧るのを望み見るけれども、未だあがりぬのである。と曰つた。すると、夫人は、大に憂へおそれ、ひそかに、手紙を書いて、此事を秀龍に報告した。秀龍は、大に驚いて、早速、其二人の大将を誅殺した。かくて、二人の大将が無くなったので、齋藤氏の兵力は、遂に、是れより弱くなつた。義龍は、すでに秀龍を弑害し、家の子龍興に傳へたが、龍興は、暗愚懦弱にして、其將士どもは、心を信長に附けて其部下に屬せんことを望んで居る者が、多くあつた。

武將感狀記

尾張の國主織田上總之介信長は、美濃の國主齋藤山城守道三と地を争ひて相戦へども、常に克たず、信長これを憂へて、道三の君臣を離すべし謀をぞ運りさしける。先兩老に就いて使者を遣し、我は道三の敵にあらず、道三の濃姫を我に許されば、嫁娶を調へて、旗下に屬し、難におもむき危きを救ふべしと、云ひ送りければ、道三同心せらる、信長濃姫を迎へて後、一年ほど過ぎて濃姫の熟睡するを伺ひて、ひそかに起きて外に出で、曉に至りて歸ること、一月許りなり、濃姫これを怪みて、君忍びて心を通はしたまふ者あらば、はにの玉へ、何ぞ身を寒(ヤツ)して、深くつゝませ玉ふぞや、妾いさ、か妬む心は侍らぬ物を、此頃の御氣色いぶかしことと恨み顔なれば、信長、いや、さる事にあらず、我一つの秘計あり、我のみ知りて人にしらすべき事にあらねば、疑はるゝも理なりとて、又前の如くすること一月ばかり、濃姫怪みてこれを問うて止まず、信長、夫婦の情は淺からねど、匿すべきを隱されば、事泄れて謀策調ふべからず、されば口を噤むも實に隔てあるに似たりと打ちわびたる體なれば、濃姫、是程に心置れまゐらせんと兼て知らざりけるこそ、女心の愚さなれ、古さりぬべきかことと今思へども云ひがひなし、御志の厚からん方を、是にはすさせ玉へ、妾はいづ地にも出でいなばやと、涙を流してかこちかくれば、信長詮方なき體にもてなし、城州と我とは深き仇なり、一旦和團したるは我が本意にあらず、城州の兩家老、我と心を合せ、城州を殺害し、子丑

の間に火を揚ぐべしと、固く約束したりしが、早五六十日に及んで、毎夜星をいたゞき霜を履みてこれを望めども未だ揚らざるは、定めて其便りを得ざるならん、火の揚ると均しく、軍兵を率ゐて美濃に亂れ入りて、その地を取るべし、あなかしこ、口より出たす事はさて置きぬ、心にも思ふべからずとて、濃姫の方よりの使も守者を付けて止められぬ、兩家老には、屢々使をつかはし書を送りて、人のうたがひを起さしむ、尾張の將士には、深夜俄に師あらう用意して下知をまてと令せらる、道三が尾張に入れ置きたる間者これを告ぐ、道三何事やうんと思ふ處に、五七日すぎて守者いつはりて少しく緩弛す、濃姫その隙をうかゞひ、具に右の事を書きて告げたりければ、道三怒りて、三家老を斬罪に行はる、是より道三の鋒稍衰へぬ。

四年。五月。信長將兵千五百。出西美濃。洲股城將長井某。日根野某以六千騎迎之。觀我兵寡。徑淖而來。信長分兵爲三隊。以一隊自衛。一隊蹙其前。一隊橫擊之。斬二將。於是城于九條。洲股。令織田勘解由守九條。木下秀吉守洲股。五年。五月。齋藤龍興在井口城。謂其將士曰。洲股河漲。信長未能來。吾欲以此時攻九條。乃率其將稻葉。牧村等。攻九條。九條告急。信長。信長即赴援。至河側。不可渡。信長曰。吾寧溺死。豈可坐視不救乎。乃鞭馬亂流而渡。全兵從之。時既夜。九條城將爲先鋒。擊走牧村。與稻葉鬪而死。池田信輝。佐佐成政。識稻葉聲。交刺于暗中。斃之。讓其首不取。柴田勝家取之。獻曰。信輝。成政讓首不取。臣謹獻焉。信長褒賞三士。凱而歸。終徙居小牧城。以迫美濃。遣丹羽長秀。攻下一城。龍興將稻葉通朝氏家經國。伊賀範俊。諫龍興失政。弗聽。七年。八月。三將送款於信長。信長

許之。乃聲言攻參河。以聚兵。兵既聚。乃率而西行。上瑞龍山。以瞰井口。縱火疾攻。城兵惶駭而降。乃逐龍興。三將來謁曰。君來何速也。信長既定尾張。美濃。徙居于井口。更名岐阜。會有獻佳鷹二者。信長卻之曰。吾方有事四方。未暇遊獵。吾定天下。然後受爲。未晚也。

【四年五月】……信長記には五年に作る、是なり。上文の五年十月惟房宣言の前に入れ、五年十月の五を此に作るを當れりとすべし。下文の五年五月は、六年五月の誤りと知るべし。【洲股】……美濃に在り。【長井某】……甲斐守。【日根野某】……下野守。【徑渚】……徑は行き過ぐる也。渚は音タク、泥なり。沼田の中を横切り過ぐる也。【登其前】……登は音シユク。其前より攻め付ける。【九條】……美濃に在り。【勘解由】……信益。井口城。……美濃に在り。【稻葉】……又右衛門。【牧村】……牛之助。【讓其首】……功を譲り合ふ也。【三士】……信輝、成政、勝家。【小牧】……尾張に在り。【稻葉通朝】……伊豫守。一鐵と號す。【氏家經國】……常陸介。ト全と號す。【伊賀筋後】……伊賀守。道足と號す。以上の三人は、美濃の豪族にして、稱して三士となす。經國は一に直元に作り、範後は一に守就に作る。【聲言】……言ひふらす。【瑞龍山】……美濃の井口の南に在り。

【開】永祿四年の五月に、信長は、兵千五百人を引き連れて、西美濃に打つて出でた。洲股の城將なる長井某、日根野某が、六千騎の兵を引き連れて、之を迎へ、我が軍勢が少数であるのを見て、沼田の中を横きつて攻め寄せた。信長は、軍勢を分けて、三隊となし、一隊を以て自身を護衛し、一隊は、敵軍の前面から攻めつけ、一隊は、敵軍の横合から撃つて、長井、日根野の二將を斬つた。こゝに於て、信長は、九條、洲股、城を築き、織田勘解由をして九條を守らしめ、木下秀吉をして洲股を守らしめた。五年の五月に、齋藤龍興は、井口城に居たが、其將士に向つて曰ふには、洲股の水が漲りわたつたから、信長は、未だ來るとが出来ないであらうから、吾は、此時につけ込んで九條を攻めやうと思ふと曰ひ、そこで、其將稻葉、牧村などを引き連れて、九條を攻めた。九條は、危急なることを信長に報告した。信長は、すなはち、援けに出掛け、洲股河の側まで到着したが、渡ることが出来なかつた。すると、信長が曰ふには、吾は、いつその事、此川の水に溺れて死ぬるとも、どうして、じつとして視、居つて、救はずに居ることが出来やうぞと曰ひ、そこで、馬に鞭うち、流を絶ち切つて渡つた。全軍は、之に従つて、渡つた。時は、はや夜分であつた。九條の城將が、先鋒となつて、撃つて牧村を走らせ、稻葉と打ち合つて討死した。池田信輝、佐々成政の二人は、稻葉の聲を知つて居つたので、まづ暗がりの中に於て、かほるゝ之を刺し殺したけれども、二人は、互に其首を譲り合つて、取りあげなかつた。柴田勝家が、之を取り上げて、信長に差し出して曰ふには、信輝、成政の二人は、互に首を譲り合つて取り上げませぬので、それ故に、私が謹んで之を献上いたしますと曰つた。信長は、信輝、成政、勝家の三士に褒美を與へ、かちどきを揚げて歸り、終に徙つて小牧城に居り、以て美濃の齋藤氏に迫り、丹羽長秀を派遣して、二城を攻め落した。龍興の部下の大將稻葉通朝、氏家經國、伊賀範後の三人は、龍興の政治の失策を諫められたけれども、龍興は聞き入れなかつた。七年の八月に、通朝、經國、範後の三人の大將は、信長に内通したが、信長は之を許

した。信長は、そこで、三河を攻めるのであると言ひふらして、軍勢を召し集めた。軍勢がすでに集まると、そこで、信長は、之を引き連れて、西に向つて行き、瑞龍山に上つて、井口を見おろし、火を放つて、手きびしく攻め立てた。井口の城兵は、おそれおどろいて、降参した。そこで、龍興を放逐した。三人の大將は、來つて信長に謁見して曰ふには、あなたの御出でになることは、どうも御速いことで御座りますと曰つた。かくて、信長は、すでに尾張、美濃を平定して、徙つて井口に居り、改めて岐阜と名づけた。折しも、善い鷹を献上した者があつたが、信長は、之をしりぞけて曰ふには、吾は、今は丁度、四方に爲すべき事業が多くあるから、未だ獵を爲すべき暇は無いのである。吾が天下を平定して仕舞つて、其後に受け納むるとしても、まだ遅くはないのであると曰つた。

十年。十月。天子復使立入宗繼齋。詔信長曰。朕顧四方。莫如卿武。曩降密勅。囑以征討。卿存心王室。不憚跋涉。聞已平尾濃。奮庸宣威。朕深嘉之。宜益迪果毅。以副朕望。因錫戰袍一領。信長召村井貞勝。讀詔。領旨感激。受其袍曰。臣督師詣闕之日。當服以拜賜耳。

【齋】……もたらす、持参する。【詔】……共天子の命なり。臨時の大事を詔とし、尋常の小事を勅とす。【卿】……天子呼ぶに卿を以てす。卿は汝の義。【曩】……嚙なり、さきに。【跋涉】……音バツセフ。草行を跋と云ひ、水行を涉と云ふ。山川を踏み越えわたるの義也。【奮庸宣威】……庸は音ヨウ、いさほし、功。周禮に、民功を庸と曰ふ。庸功を奮ひ起し威光をしきのぞ。【迪果毅】……迪は踏む也、行ふ也。果は決なり。果を致すを毅と云ふ。決然として勇進して事を成し遂げること爲す。書經に、爾衆士、其尙迪果毅以登乃辟とあり。【副】……そふ、かなふの義。【錫】……賜ふ。【戰袍】……音センパウ。陣羽織。【領旨】……勅命の旨を受ける。領は受くる也。【當服以拜賜耳】……禮記に、衣服は服して以て賜を拜すといへるこれ也。

【開】永祿十年の十月に、天子様は、ふたたび、立入宗繼齋をして、詔を持参して美濃に來らしめ、信長に詔して仰せられるには、朕、四方の諸國を顧みるに、卿が武勇よりすぐれたる者は無い。さきに、内密の勅旨を下して、征伐の事を依頼した。卿は、王室の事を忘れずして、山川を踏み越えわたることを苦勞とも思はず、聞けば、已に尾張、美濃の兩國を平定し、功績をふるひ起し、威光をしきのべたと云ふことである。朕深く之を嘉賞する。そこで、まづ、果決勇進の道をふみ行つて、そして朕が希望にかなふやうにせよと仰せられ、因つて、陣羽織一領を賜はつた。信長は、村井貞勝を召し寄せて、詔書を読ましめ、勅旨を受けて感激し、其陣羽織を拜受して曰ふには、私が軍勢を管督して御所に参内いたしまする日に、この陣羽織を着用して賜物を拜受することに致しませうと曰つた。

先是三好氏弒將軍足利義輝。義輝弟義昭。走依六角義賢。欲借其力。靖

難。三好康長。三好政康。岩成左通。稱三好三黨。專京師政。陰令義賢圖義昭。義昭懼。走依武田義統。義統辭。又依朝倉義景。義景諾而不果。又喪其愛子。志氣頓沮。義昭流寓於外三歲。聞信長威名。欲往託焉。使卜人太華筮之。遇臨之節。曰。知臨。大君之宜。吉。是之謂柔任於剛。任於剛。則不勞而治也。義昭決意。十一年七月。遂使使來諭信長。信長方計西上。即諾之。遣將吏迎之。館于立正寺。義昭見信長。託以興復。信長答曰。是在信長度內耳。幕下臨此。當築館以奉之。然信長爲幕下定京師。不出兩月矣。莫以館爲也。

【六角義賢】……近江に在り。精進……騒動をしづめ安んずる。【武田義統】……若狹に在り。【朝倉義景】……越前に在り。【頼】……にはかに。【沮】……沮喪する。意氣の衰へること。【卜人】……音ボクジン。うらない者。【筮】……音ゼイ。うらなふ。著トを筮と云ふ。めとぎを取て占ふ也。【臨之節】……地澤臨三三の五爻が變じて水澤節三三となること。【知臨六君之宜吉】……臨の卦の六五の爻辭なり。道を知つて其下に臨むは、天下に君たる者の宜しき道を得たるものにして、吉なりとの意。【是之謂柔任於剛不勞而治也】……臨の六五は、柔中順體を以て尊位に居り、下、九二の剛中の臣に應ず、是れ能く二に倚任し、勞せずして治まる、知を以て下に臨む者なり。柔順なる君主が、自ら事を用ひずして、剛中の臣下に委任するときは、自ら勞することなくして、功を成し、天下治まるなり。【使使來諭信長】……使者は、細川藤孝、上野清信なり。【方計西上】……勅命に依つて西上のことを計る最中なり。【遣將吏】……將吏とは不破河内等なり。【立正寺】……岐阜の南に在り。【度内】……度は量なり。計中、胸の中。【幕下】……將軍を指して云ふ辭。【莫以館爲也】……御館をこしらへるまでも無し。

【附】これより先に、三好氏は、將軍足利義輝を弑し、義輝の弟なる義昭は、逃げ走つて、六角義賢にたより、義賢の力を借りて騒動をしづめやうと思つたが、三好康長、三好政康、岩成左通が、三好の三人衆と稱へられて、京都の政治を思ふまゝにして居つて、ひそかに、義賢をして義昭を弑するとを圖らしめたので、義昭は、懼れて、逃げて走つて、武田義統にたよりうとしたけれども、義統は辭退して、義昭のたのみを引き受けなかつたから、義昭は、又、朝倉義景にたよつたが、義景は、承諾はしけれども、其たのみを果すことは出来ず、又、其愛して居つた子及んだが、信長の威勢名望あることを聞き及んで、出かけて行つて萬事を頼まうと思つて、うらなひ者なる太華をして、此事の吉凶をうらなはしめた。すると、地澤臨の卦の五爻が變じて水澤節の卦となる卦が出た。其意味は、然るべき道を知つて其下に臨むは、天下の君たる者の宜しきにかなへるものであつて、吉である。これは、柔順なる君が剛強なる臣に委任するといふ譯であつて、剛強なる臣に委任するときは、自分は格別骨折らずして、天下が治まるのである、と云ふのであつた。そこで、義昭は、意志を決定して、永祿十一年の七月、遂に、使者をして、美濃に來つて、信長に説き諭さしめた。信長は、其時に丁度、西の方京都に向つて上らうと計つて居る最中であつたので、即座に、之を承諾し、將士役人を派遣して、義昭を迎へしめ、立正寺を義昭の旅宿として入れ置いた。義昭は、信長に面會して、足利家をもとの通り、に再興することを、信長に頼んだ。すると、信長が答へて曰ふには、それは、信長の胸の中に在ること、御座ります。御依頼の事を成就すること、は、必ず疑ひありませんとの意。あなたが此處に御出でになつたに就いては、御屋敷を新築して御入れ申すべき筈では御座りますまい。しかし、私信長が、あなたの爲めに、京都を平定することは、二月もかかりますまいから、あはて、御屋敷を新築するにも及びますまい。しばらく、此處に御出で下さるやう願ひますと曰つた。(足利氏記を參看すべし。)

八月五日。大會將士于岐阜。謂之曰。吾將有事於京畿。汝衆各修兵備。以俟我令。乃盡散遣之。自率數十騎至澤山。使使六角義賢。說以順逆。義賢及子義弼。業已與三好三黨。三黨聞信長助義昭。則益啗義賢。義弼以利。曰。竭力以拒信長。曠日彌久。我以大軍爲後援也。信長在澤山。十日。使者三反。義賢竟弗聽。信長乃歸美濃。索近江地圖。與諸將計畫之。下令管内曰。以九月五日。會于岐阜。會者凡三萬人。七日。信長將諸軍而西。義賢。義弼。居觀音寺城。修箕作。和田山等十八城。以和田山當美濃之衝。最固。其壘壁。守以精兵。欲待我軍攻之。而首尾相救。信長諜知其計。



乃使美濃三將備和田山而宣言向觀音寺。因引兵襲箕作。城兵出戰。木下秀吉丹羽長秀等爲先鋒。故緩攻之。漸至城下。則奮擊突入。卒拔之。和田山城望風解去。義賢義嗣夜棄城遁。信長三日下十八城。自入觀音寺。爲政國中。招衆逃亡。使人迎義昭。相見于守山。明日濟湖。陣于園城寺。湖山之間。無非兵者。三好三黨驚懼。棄京師去。於是信長整諸軍入京師。天子使藤原惟房迎勞之粟田口。信長稽首。謂惟房曰。臣屢辱過寵。不勝悚懼。幸爲臣謝。立入宗繼。又從惟房至。信長指所服戰袍。謂之曰。是嚮所賜也。於是使義昭居清水寺。而自陣東福寺。自出美濃至此。蓋十有二日矣。京師士民固聞信長威武。慮其暴掠。相驚曰。信長至矣。皆荷擔而走。及信長至。號令嚴明。秋毫不犯。使菅谷長賴巡行街市。織田氏養卒有與賈人爭價者。輒執縛之。樹以視行道者。於是士民相告而歸。物情大安。

【疾】……俟に同じ。まつ。【澤山】……近江に在り。即ち今の彦根なり。【順逆】……義昭を迎ふるは順、三好に一味するは逆。【業已】……すでに。【昭】……くらはす。利を以て人に餌する也。餌にかふ。曠日彌久……日をむなしくして久しきにわたる。曠は空なり、廢なり。彌は竟なり。むだに日を久しく送ること。【三反】……三度往復する。【計畫】……つもりだてする。【觀音寺城】……近江に在り。【箕作】……近江に在り。【和田山】……近江に在り。【衝】……音シヨウ。衝き來るべき路、往來の道。【首尾相救】……首を撃たるれば尾救ひ、尾撃たるれば首救ふ。

前後にて互に救ひ合ふ。美濃三將……通朝、經國、統俊。【故】……ことさらに。【守山】……近江に在り。【湖】……琵琶湖。【園城寺】……近江に在り。三井寺のとも。【稽首】……音ケイシユ。拜して首が地に至る也。かしちを地に著けて拜すること。【過寵】……過分の恩寵。【悚懼】……音シヨウク。ぞつとするほど恐れ入る。【清水寺】……京都の東に在り。【東福寺】……京都に在り。【慮】……おもんばかる。氣遣ふ。心配する。【荷擔】……音カタン。荷物をになひかつぐ。【秋毫】……少しも。毫は、秋に至りて極めて細細なり。故に物の細かきを、秋毫といふ。【養卒】……炊烹の者を養と云ふ。賄方の小者。【視】示す。八月五日、信長は、大に將士を岐阜に會合して、之に向つて曰ふには、吾は、將に京畿地方に於て、一仕事しやうと思ふのであるから、汝等は、各々、兵備をと、のへて、以て我が命令の出づるを待てよと曰ひ、そこで、盡く之を分散し其邑に歸らしめ、自身に、數十騎を引き連れて、澤山に到着し、使者を六角義賢に遣はし、義昭を助くるは順にして、三好氏に一味するは逆なりとの道理を説かした。けれども、義賢及びその子義嗣は、この時に、すでに、三好の三人衆に一味して居つた。三人衆は、信長が義昭を助けるといふ事を聞き、そこで、ますます、義賢と義嗣とにくらはすに利益を以てし、そして曰ふには、力を盡して信長を拒いでくれよ。そして、日をむなしく送りしめて久しき間にわたれば、われは、大軍を引き連れて、後援をなすであらうと曰つた。信長は、澤山に在ること十日間で、六角氏への使者は、三度も往復したけれども、義賢は、承知しなかつた。信長は、そこで、美濃に歸り、近江の地圖をさがし求め、諸將とともに之を見て、攻撃の手筈を定め、命令を領内に下して曰ふには、九月五日を以て、岐阜に會合せよと曰つた。かくて、會合する者、すべて三萬人であつた。七日に、信長は、諸軍を引き連れて、西の方に向つて進んだ。義賢、義嗣は、觀音寺城に居り、箕作、和田山など十八城を修繕し、和田山が美濃から衝き來るべき道に當つて居るので、最もその壘壁を丈夫にし、且つ之を守るに、すくりに拔きの兵士を以てし、我が織田氏の軍勢が之を攻め寄せるに及んで、前後互に相救ひ合はうとして居つた。信長は、そののびのびの者を遣つて其謀を知つたので、そこで、美濃の三人の大將をして、和田山の敵に備へしめ、そして、觀音寺に向ふのであると言ひふらし、因つて、兵士を引き連れて、箕作を不意撃ちすると、城兵は出で、戦つた。木下秀吉、丹羽長秀などが、先鋒となり、ことさらに、ゆるゆると之を攻め、だん／＼に城下に到着するに及んで、急に奮ひ撃つて突入り、とう／＼之を攻め落した。和田山の城兵は、其威風を望み見て、兵備を解いて立ち去つた。義賢、義嗣は、夜の間に、城を棄て、遁れ去つた。かくて、信長は、わづかに三日の間に、敵の十八城を攻め落し、自身に、觀音寺城に入つて、政令を國中に布き、逃げ走つた者を招き集め、人をして義昭を迎へしめて、守山に於て會見し、明るる日に、琵琶湖をわたり、園城寺に陣取つた。湖水と諸山との間、兵士で無い者は無いやうで、まことに夥しき人数であつた。三好の三人衆は、驚き懼れて、京都を棄て、逃げ去つた。こゝに於て、信長は、諸軍勢を整頓して、京都に入つた。天子様は、藤原惟房をして粟田口に出で迎へて、信長を慰勞せしめられた。信長は、頭を地につけて禮拜して、惟房に向つて曰ふには、私は、たゞ、過分なる御寵遇を辱うし、まことに恐縮にたへませぬ。どうぞ、私の爲めに、宜しく御禮を申し上げて下されるやうに御願申しますと曰つた。其時に、立入宗繼が、又、惟房の御供をして、來て居つたので、信長は、自分が著て居る陣羽織を指さし、宗繼に向つて曰ふには、これを取つた。信長が美濃を立ち出でしより、こゝに至るまで、蓋し十二日であつた。京都の士民も、もとより、信長の威勢武勇なることを聞いて居つた。其亂暴掠奪に遇ふことを心配し、相驚いて曰ふには、信長が到着したと曰ひ、皆家財道具などをかつかひたり又になつたりして逃げ走つた。しかるに、信長が到着するに及んで、號令嚴重且つ明かにして、少しも、人氏を犯すやうな事を爲さず、菅谷長賴をして、町々を巡回せしめ、以て不逞の徒を戒めた。織田氏の賄方の小者に、商人と物の價を争うた者があつたが、直に之を執へて木にしほりつけ、以て道を行く人々に示した。こゝに於て、京都の士民は、相告げ合つて歸り來り、人心大に安心するやうになつた。

信長聞二黨據山城。攝津河内諸城。即日遣柴田勝家森可成等一將萬人。涉桂川。攻岩成左通于青龍寺。明日自以五萬騎繼之。左通望見大懼。以城降。乃以左通爲先導。攻三好政康于芥川。篠原長房于越水。二城皆潰。乃奉義昭於越水。而自入芥川。十月。自攻池田勝政于池田。勝政善拒。我兵縱火奮戰。奪關而入。勝政終降。獻質子五人。乃宥之。加賜二千貫邑。高槻茨木諸城。聞之。皆降。三好康長等。棄河内走。歸阿波。信長告成事於義昭。於是使信長自擇邑。信長辭不取。請分之幕府功臣。先是伊丹親興。畠山高政。三好義繼。松永久秀。數與二黨戰。先送款于美濃。以故分河内于高政。義繼分攝津于親興。勝政。及和田惟政。令久秀居志貴城。以定大和。攻筒井順慶。順慶降。信長自置吏于界浦。大津。乃歸京師。陣清水寺。

【桂川】…京都の西に在り。【青龍寺】…京都の西に在り。【芥川】…攝津に在り。【越水】…攝津に在り。【池田】…攝津に在り。【奪關而入】…門のくわんの木を取り除きて入り込む。【質子】…人質。【二千貫邑】…鈔録に千坪を貫と云ひ、十貫は百石、百貫は千石に當る。これに由れば、二千貫は二萬石に當るなり。【高槻】…攝津に在り。【茨木】…攝津に在り。【成事】…事の成功。【辭不取】…取の上にて、一に敢の字あり。【志貴城】…大和に在り。【筒井順慶】…陽舞坊。【界浦】…和泉に在り。【大津】…近江に在り。

【信長】信長は、三好の三黨が山城、攝津、河内の諸の城に立て籠つて居るといふことを聞いたので、直に其日に、柴田勝家、森可成などを派遣して、一萬人の軍勢を引き連れて、桂川を渉り、岩成左通を青龍寺に攻めしめ、明るる日に、自身に、五萬騎の軍勢を引き連れて、後より繼ぐと、左通は、望み見て、大に懼れ、城を以て降参した。信長は、そこで、左通を以て案内者となし、三好政康を芥川に攻め、篠原長房を越水に攻めた。芥川、越水の二城は、皆潰散した。信長は、そこで、義昭を越水に連れて來り、そして、自身は、芥川に入つた。十月に、信長は、自身

に、池田勝政を池田に攻めた。勝政は、なか／＼善く拒ぎ守つたが、我が織田氏の軍勢は、火を放つて、奮ひ戦ひ、門の關の木を取り除けて入り込んだので、勝政は、とう／＼降参し、人質五人を差し出したので、そこで、之を赦し、二千貫の領地を加増した。高槻、茨木の諸の城は、之を聞いて、皆降参した。三好康長等は、河内を棄て、逃げ走り、其領國なる阿波に歸つた。信長は、成功したる事を義昭に告げた。義昭は、ここに於て、信長をして、自身に領地を擇び取りしめやうとしたけれども、信長は、辭退して受けずして、請うて幕府の功勞ありたる臣下に分ち與へることにした。これより先に、伊丹親興、畠山高政、三好義繼、松永久秀は、たゞ／＼、三好の三黨と戦ひ、眞先に、美濃に内通したので、それ故に、河内をば高政と義繼とに分ち、攝津をば親興、勝政、及び和田惟政に分ち與へ、松永久秀をして、志貴城に居らしめ、以て大和を鎮定せしめ、筒井順慶を攻めると、順慶は降参した。信長は、自ら、役人を界浦と大津とに置き、そこで、京都に歸つて、清水寺に陣取つた。

當是時。京畿將士執謁信長。軍門如市。朝廷論信長功。叙從四位下。任左兵衛督。信長辭曰。臣以天之道。得克強賊。敢攘以爲功。以辱顯爵。乃叙從五位下。任彈正忠義。昭私以信長爲管領。賜號副將軍。皆辭不受。義昭賀成事。欲張散樂十三曲于其第。信長諫曰。方今凶賊纒服。四方未平。此非優游之秋也。且諸軍士多思歸者。宜如式而止也。乃省爲五曲。即日釋兵。撤畿内關塞。以便行旅。遠近悅服。義昭病。信長有功無賞也。爲書褒之。呼信長曰父。信長乃歸岐阜。

【執謁】…謁は名刺なり。名札を出して謁見を乞ふ。目見えをする。【軍門如市】…陣營の前が市の如く往來繁し。【敢攘以爲功】…攘は、ぬすむ也。其の自ら來るに因りて取るを攘といふ。敢攘以爲功以辱顯爵とは、自分の力でなくして、天の道なるものを、今、高位高官を拜して、天の道をぬすんで、自分の功となさんやとの意。【顯爵】…高き位。彈正忠義…少弼の次の官なり。内外を巡察し、非違を糾彈することを掌る。【散樂】…猿樂。いはゆる能なり。【十三曲】…十三番。【優游之秋】…秋は時なり。のんきに遊ぶべき時。【關塞】…音クワシサイ。關所、とりで。【呼信長曰父】…先祖尊氏が赤松則村を遇せし例。

【この時に當りて、京都畿内の將士どもは、信長に面謁しやうといふので、陣營の門の前は、にぎやかにて、ちやうど市の如くであつた。朝廷にては、信長の功勞を評議して、從四位下に叙し、左兵衛督に任せられやうとした。すると、信長は辭退して曰ふには、私は、天の道によ

りまして、強き賊に勝ちおぼせることが出来たので御座ります。私は、どうして、敢てそれをぬすみ取りて自分の功勞といたして、かゝる高き官位を辱うすることを致しやうぞと曰つたので、そこで、從五位下に叙し、彈正忠に任ぜられた。義昭は、私に、信長を以て管領となし、副將軍と云ふ稱號を賜はらうとしたけれども、信長は、皆辭退して受けなかつた。義昭は、事の成就したるを賀して、能十三番を其屋敷に於て興行しやうと思つた。すると、信長は諫めて曰ふには、只今、凶惡なる賊が、やつと服従いたしたばかりで、四方の國々は未だ平定いたしませぬ。是れは、呑氣に遊ぶべき時では御座りませぬ。其上に、諸の軍士どもは、故郷へ歸りたいと思つて居る者が澤山にありませぬ。されば、儀式だけにして御止めになるが宜しう御座りますと曰つた。義昭は、そこで、はぶきて、五番となし、直に其日に、兵士を解散し、畿内の關所やとりでも取り除き、旅行する人々に便利にしたので、遠近の人々は悦び服した。義昭は、信長が功勞ありながら賞與の無きことを心配したので、書面を作りて之を譽め、信長を呼んで父と曰つた。信長は、そこで、岐阜に歸つた。(足利記を參看せよ)

十二年。正月。二黨與齋藤龍興等圍義昭于本國寺。信長聞警。單騎赴援。至則已平。諸國兵後至者五萬。信長初令畿内豪戶納金于足利氏。獨界浦不奉命。又資二黨。信長宣言屠界浦。浦人號哭乞哀。乃使上贖金二萬貫。就二條武衛陣故址。拓修幕府。四月。成使義昭居焉。以備寇賊。於是信長召村井貞勝。島田秀滿。僧日乘等。諭之曰。應仁以來。天下大亂。王室衰微。宮闕墜廢。凡居王土爲王臣者。誰不嗟悼。信長夙有修舉之志。兵亂倥傯。延而至此。今畿内粗定。當修禁內。以安帝座。雖然。亂後興役。不可急迫。恐擾民情。宜以漸成之。乃留木下秀吉守京師而歸。遂略近畿諸國。

【警】…警報、事變の報告。【豪戶】…金持。【資】…助。【屠】…ほふる。誅殺するところ多き也。【上】…たてまつる。【贖金】…音トクキン。あがなひ金。罪を免れんが爲めに納むる金。【武衛陣故址】…斯波氏の陣所也。武衛は斯波氏なり。【拓修】…音タクシウ。拓

は斥開なり、とりひろく。土地をひろげ家を建てる。【貞勝】…信長記には、道家に作る。【應仁】…後土御門帝の朝、應仁年間、山名持豊、細川勝元、京師に戦へり。【嗟悼】…音サタウ。なげきいたむ。【夙】…つとに、早く。【倥傯】…音コウセン。事迫促なり、事が多くしてさしむること。【禁内】…御所を云ふ。【急迫】…追はんに逼るに作る。【擾】…亂す。

永祿十二年の正月、三好、三黨は、齋藤龍興等とともに、義昭を本國寺に圍んだ。信長は、その報知を聞くと、たゞ一騎にて馳せ出して赴き援けたが、京都に到着したときには、其騒動は、もはや平定して仕舞つた。諸國の軍勢の後に到着する者が、五萬人にも及んだ。信長は、はじめ、畿内の金持に命令して、足利氏に金を差出さしめたが、たゞ界浦だけが、その命令に従はず、又、三好の三黨を助けたので、信長は、そこで、界浦の人民を屠り殺して仕舞はうと言ひふらした。界浦の人民は泣き悲んで、命だけは助けられんことを哀願した。信長は、そこで、過料金二萬貫を差し出さしめて、それを以て、二條の斯波氏の陣所の跡に、地をひろげて、幕府を修築し、四月に、落成したので、義昭をして、ここに居らしめて、以て仇をなす賊どもの攻め寄せるに備へた。ここに於て、信長は、村井貞勝、島田秀滿、僧日乘等を召し出して、之に諭して曰ふには、應仁このかた、天下は大に亂れて、戦争止むとき無く、帝室も衰へ、御所も散々に壞れつれて仕舞つた。すべて、天子の土地に住居して天子の臣民たる者は、之を見て、誰人かなげきかなしまぬ者が有らうぞ。われ信長は、早くから、御所を修復しやうとの志望があつたけれども、何分にも、兵亂の爲めに、多事に切迫せられて、延引して今日に至つた。今や畿内は、あちまし平定したから、御所を修復して、天子の御座を安んじ奉るべきである。けれども、兵亂の後に工事を興すのであるから、餘りにいそがしくしては成らぬ。もし餘りにいそがしくするときは、人民の心を動かし亂すことがあるであらうから、だんくんに之を仕上げするやうにするが宜しいと曰ひ、そこで、木下秀吉を留めて、京都を守らせて置いて、自分は岐阜に歸り、かくて、遂に畿内近傍の諸國を切り取つた。

七月。遣兵以伊丹親興。池田勝政爲先鋒。略但馬。攻山名氏。八月。自將兵五萬。略伊勢。攻北畠具教于大河内。旬餘。具教將柘植某送款信長。殺具教以啓我兵。信長縛柘植。數之曰。汝爲人臣。弑其君。以降敵。不可容也。乃斬以徇。以次子信雄爲北畠氏後。居大河内。食十萬石。三子信孝爲神戶氏後。居神戶城。弟信包居上野城。各食五萬石。信雄幼字茶筌。信孝幼字三七。皆庶出也。十一月。信長徑入京師。戒皇宮工事。是歲。置赤黑母衣各十騎。以將士子弟材武者充之。

【山名氏】…豊邦。大河内…伊勢に在り。【栢植某】…三郎右衛門。啓…手引する。案内する。【敷】…責む。【不可容】…赦すとは出来ぬ。【徇】…となふ。宣令なり。行く。罪の次第をふれ示す。【神戸氏】…北島の族神戸藏人。【神戸城】…伊勢に在り。【上野城】…伊賀に在り。【庶出】…妾腹の子。【戒】…指圖する。【母衣】…ホロと訓じ、鎧の背に負ひて矢を防ぐ具。竹を骨として、大に張り、上に布を被ひ、紐にて肩腰に括り締む。漢の樊噲が戦に出づるとき、其母衣を脱いで馳となす。噲之を鎧の上に被て勇戦せり。其後、軍令を傳ふる騎士、之を用ふと云ふ。我が邦にては、初めて三代實録に出づ。

七月に、信長は、兵を派遣して、伊丹親興と池田勝政とを以て、先鋒と爲し、但馬を切り取らうとして山名氏を攻めた。八月に、信長は、自身に、兵五萬人を引き連れて、伊勢を切り取らうとして、北島具教を攻めること、十日餘にして、具教の大將栢植某が、信長に内通し、具教を殺して、我が織田氏の兵を案内した。信長は、栢植をしばりつけて、之を責めて曰ふには、汝は、人の家來でありながら、其主君を弑害して、敵に降参した。其罪は、差し赦すこと出来ないのであると曰ひ、そこで、之を斬り殺して、其罪をふれ示した。かくて、信長は、次男の信雄を以て北島氏の跡嗣となし、大河内に居らしめ、十萬石を領せしめた。第三男信孝をば、神戸氏の跡嗣となし、神戸城に置き、弟信包をば、上野城に置き、各々五萬石を領せしめた。信雄の幼少の時の名は茶筌と云ひ、信孝の幼少の時の名は三七と云ひ、いづれも皆、妾腹の子である。十一月に、信長は、たゞちに、京都に入り、皇居の造營の工事を指圖した。この歳に、信長は、赤母衣の騎士、黒母衣の騎士、各々十人置き、將士の子弟の材幹ありて武勇なる者を以て、之に充てた。

元龜元年。二月。入京師。四月。張散樂于將軍新第。大會徳川氏以下諸將領。義昭爲奏。請進信長官爵。信長固辭。以朝倉義景拒命。自往討之。至敦賀。攻手筒城。一晝夜。拔而屠之。進攻金崎。降守將朝倉景恆。以爲先導。欲遂定國內。會淺井長政招六角氏餘黨。與義景約。夾擊信長。長政爲小谷城主。信長妹婿也。信長得報不信。警聞益至。信長乃欲自若狹入京師。恐義景追躡。木下秀吉自請留備。信長壯而許之。令諸將人出三四十騎。以助秀吉。而引兵西。徳川公爲殿。至朽木谷。朽木元綱被甲率兵而迎。信長疑其有異心。松永久秀曰。臣請往質之。卽有他故。刃之而死。乃馳往諭。

元綱。元綱脱甲撤兵。以饗信長。送至京師。秀吉亦至。信長乃爲義昭徵京畿將士之質。割近江地。令森可成守志賀。宇佐山。柴田勝家守長光寺。佐久間信盛守長原。木下秀吉守長濱。而歸美濃。聞敵兵要于鯨江。市原乃以蒲生賢秀等爲鄉導。由千種路歸。六角義賢使善銃者杉谷善住伏山木中。狙信長過。連發二丸。中其衣袖。從兵愕欲索之。信長不許。金森長近密與信長易衣。乘其輿而歸。終達岐阜。

【元龜】…正親町帝の時の年號。【敦賀】…越前に在り。【手筒城】…越前に在り。【金崎】…越前に在り。【小谷】…近江に在り。【警聞】…警戒の知らせ。【追躡】…音ツキセフ。追撃なり。【殿】…しんがり。【朽木谷】…近江に在り。【質】…正なり。たゞす。卽…【撤】…音テツ。除き去る。【質】…音チ。人質。【志賀】…近江に在り。【宇佐山】…近江に在り。【長光寺】…近江に在り。【長原】…近江に在り。【鯨江】…近江に在り。【市原】…近江に在り。【千種】…伊勢に在り。【杉谷善住】…叡山の僧徒。善住坊。【狙】…ねらふ。【連】…しきりに、引きつゞいて。

元龜元年の二月に、信長は、京師に入り、四月に、能を將軍の新築の屋敷に於て興行し、大に徳川氏以下の諸の將校を會合した。義昭は、信長の爲めに、奏上し請うて、信長の官職位階を昇進させやうとしたが、信長は、固く辭退した。信長は、朝倉義景が命令を拒んで従はなかつたので、自身に行きて、之を征伐し、敦賀に至り、手筒城を攻めること一日一夜にして攻め落し、其城兵を屠り殺し、進んで金崎を攻め、城の守將朝倉景恆を降参させ、景恆を以て、案内者となし、遂に越前の國內を平定しやうとした。折しも、淺井長政が、六角氏の殘黨を招き寄せ、義景と約束して、信長を夾み撃ちにしやうとした。長政は、小谷の城主であつて、信長の妹婿であつたので、信長は、長政と義景とが自分を夾み撃ちにしやうとして居るといふ報知を得たけれども、之を信じなかつたが、警戒のしらせが、ますます、到着したので、信長は、そこで、若狭より京都に入らうと思つたが、義景が追ひ來らんと心を配して居ると、木下秀吉が、踏み留まつて敵の追撃に備へしやうと、自分から請ひ願つたので、信長は、勇壯であるとして、之を許可し、諸將をして、一人毎に、三四十騎づつ、を出して、秀吉を助けさせることにし、そして、軍勢を引きあげて西に向つた。徳川公(即ち家康)が、しんがりとなつた。朽木谷まで到着すると、朽木元綱は、甲冑を被り軍勢を引きて出て迎へた。信長は、元綱に野心がありはせぬかと疑つた。すると、松永久秀が曰ふには、私、何卒、行きて之をたゞして見まじやう、もし、怪しい様子がありましたならば、之を刺し殺して、討死致しませうと曰ひ、そこで、久秀が、馳せ行きて、元綱を説諭すと、元綱は、甲冑をぬぎ、兵士を立ち去らせて、信長を迎へ入れて、之を饗應し、送つて京都に至つた。さうする中に、秀吉も亦到着した。信長は、そ

こで、義昭の爲めに、京都畿内の將士どもの人質を差し出さしめ、近江の土地を分割して、森可成をして志賀、宇佐山を守らしめ、柴田勝家を長光寺を守らしめ、佐久間信盛をして長原を守らしめ、木下秀吉をして長濱を守らしめて置いて、そして、美濃に歸るとしたが、敵兵が鯉江と市原とに待ち受けて居ると云ふと聞いたので、そこで、蒲生賢秀等を、案内者となし、千種路から美濃に歸つた。すると、六角義賢が、鐵砲を打つとの上手なる者杉谷善住をして、山の樹木の中にかくれて居らしめ、信長の通り過ぎるのを狙つて、つゞけざまに、二つの彈丸を發して、信長の衣服の袖に中つた。隨從して居る兵どもは、驚いて、之をさがしめとめやうとしたが、信長は許さなかつた。金森長近が、内々にて信長と衣服を著換へ、信長の輿に乗つて歸つたので、信長は、とうとう、無事に岐阜に到着した。

六月。六角義賢糾合土寇。出野洲川。勝家。信盛邀擊破之。加賜各三萬貫。淺井長政。朝倉義景。壘于比長。刈安。令近江驍將堀某。樋口某守釜川城。信長欲誘降之。美濃人竹中重治。爲信長說。二將曰。子守城者欲何爲。曰。欲立功。曰。立功以爲何人乎。曰。爲淺井。朝倉氏。曰。織田君爲天子。將軍起義兵。而二氏不助焉。欲乘其危圖之。是天下所切齒。而子爲之立功。爲士者固如此乎。二將乃因重治降。各獻質子。信長以爲先導。自將繼之。諸壘皆解走。乃攻長政于小谷城。城甚險。森可成。坂井政尙等。與城兵戰于雲雀山。破之。信長引諸軍。上虎姬山。議攻城策。佐久間信盛進曰。拔之不難。恐損我兵。主君以身任天下。何必乎此。信長乃焚城四面而返。令佐佐成政。梁田出羽。中條將監爲殿。柴田勝家曰。此輩兵不盈千。盍命臣若信盛。信長曰。否。大兵敗於險地。不可復收。故命此三人。且吾自留號

令之。卿等先去。乃自引近臣二百騎。返助三人。三人辭之。迭殿而退。城兵尾擊。三人且戰且卻。遂全軍而歸。遂攻橫山城。城將告急於長政。長政乞援於義景。義景使族景健先往。合兵二萬餘騎。軍于大寄山。我兵望之。攻城益急。

【糾合】……音キウカフ。寄せ集める。【土寇】……土地の一揆。【野洲川】……近江に在り。【加賜】……加増する。【比長】……近江に在り。【刈安】……近江に在り。【堀某】……次郎。【樋口某】……三郎兵衛。【釜川城】……近江に在り。【竹中重治】……半兵衛。【切齒】……齒をくひしはつて怒る。【雲雀山】……近江に在り。【虎姫山】……近江に在り。【何必乎此】……どうして是非とも此城を攻め落さねばならぬといふこと無し。【焚城四面而返】……返は一に還に作る。【迭殿】……かばるるしんがりする。【横山】……近江に在り。【大寄山】……近江に在り。【六月に、六角義賢は、土地の一揆をよせ集めて、野洲川に打つて出たが、勝家と信盛とが、迎へ撃つて之を破つた。信長は、勝家、信盛に城を守らしめて置いた。信長は、誘うて之を降参させやうと思つた。美濃の人竹中重治は、信長の爲めに、堀、樋口の二人の大將を説いて曰ふには、あなたがたが、城を守つて居るのは、何の爲めにしやうと思ふので御座るかといふた。二人は答へて曰ふには、手柄を立てやうと思ふので御座ると曰つた。重治が曰ふには、手柄を立て、それを何人の爲めにするので御座るかといふた。二人は答へて曰ふには、浅井氏と朝倉氏の爲めにするので御座ると曰つた。すると、重治が曰ふには、織田殿は、天子と將軍との爲めに義兵を起されたのに、而るに、浅井、ひしはつて怒つて居るところであるのに、しかるに、あなたがたは、この浅井、朝倉氏の爲めに手柄を立てやうといはされる。武士たる者は、もとより、此の様な事を爲すもので御座らうかといふた。堀、樋口の二將は、そこで、重治に因りて降参し、各々人質を差し出した。信長は、この二將を以て案内者となし、自身に大將となつて、其後に繼いで攻め寄せたので、諸のとりでは、いづれも皆、守備を解いて逃げ走つた。そこで、信長は、進んで、長政を小谷城に攻めた。この城は、甚だ險阻にして、要害が善かつたが、森可成、坂井政尙等が、城兵と雲雀山に戦つて之を破つたので、信長は、諸軍を引き連れて、虎姫山に上り、城を攻め立てる計策を評議した。すると、佐久間信盛が進み出で、曰ふには、之を攻め落とすとは、六つかしい事では御座りませうが、恐らくは味方を損ずるとが少なくないで御座りませう。あなたには、御身を以て天下を引き受ける大役を持つて居られるから、何も必ずしも此城を攻め落さねばならぬと云ふ譯は御座りませう。と曰つた。信長は、そこで、城の四方を焼き拂つて、引き返し、佐佐成政、梁田出羽、中條將監をして、しんがりとならした。すると、柴田勝家が曰ふには、此者共(成政、出羽、將監等)の手勢は、千人にも足らぬほどの小勢で御座ります。しかるに、この大切なるしんがりには、此者共されて、どうして、私又は信盛に御言ひ附けなされぬので御座るかといふた。信長が曰ふには、左様では無い。もし大軍が險阻なる處に於て負けるときは、ふた、び取りまとめることは出来ないのである。それ故に、此しんがりをば、大軍を引き連れたる汝等に命ぜずして、反つ

て、此三人に言ひ附けたのである。その上に、吾が、自身に留まつて之を號令するであらう。されば、汝等は、先づ立ち去れよと曰つた。そこで、信長は、自身に、近侍の臣二百騎を引き連れて、引き返して、三人を助けやうとすると、三人は、之を辭退し、かはるる、しんがりとなつて退却したが、城兵が、追ひ撃つと、三人は、戦ひながら退却して、遂に、軍を全うして歸つた。かくて、我が軍勢は、遂に横山城を攻めた。すると、横山城の主將は、危念なることを淺井長政に告げた。長政は、加勢を朝倉義景に乞うた。義景は、其一族なる景健をして先づ往かしめ、軍勢二萬餘騎を合せて、大寄山に陣取つた。我が織田氏の軍勢は、敵の援兵の來るを望み見て、ますます手きびしく城を攻め立てた。

長政。景健議曰。吾待朝倉公而戰。恐城不守也。宜急救之。今信長陣龍鼻。距此五十町。直馳赴之。人馬皆疲。吾且日移陣于三田。乘曉襲其中軍。彼必驚擾。莫不敗矣。淺井半助進曰。臣嘗遊美濃。爲稻葉氏客。視信長將略。非驚擾者也。公計恐不中耳。遠藤某奮曰。彼何足畏。公第進戰。吾雜敵兵。與信長決耳。議乃決。信長夜望大寄山。顧呼宿直諸將曰。柴田。木下。佐久間在乎。皆答曰。在。信長乃召而前之。指示曰。北軍炬火徹宵。是將乘曉襲我也。乃下令勒軍爲十二隊。坂井政尙。池田信輝等爲先鋒。以當長政。德川公獨將其兵當朝倉氏。稻葉通朝助之。乃留丹羽長秀備城兵。而引兵西向天明。遇北軍于姊川。北軍大驚。政尙。信輝進戰。不利。信長使氏家經國。伊賀經俊擊其橫。通朝顧而助之。大破長政。而景健亦大敗走。獲其驍將遠藤。眞柄等十餘人。斬首二千餘級。横山以下諸城。皆解走。秀吉欲乘勝

取小谷。信長不許。使母衣騎傳令收軍。親論賞戰功將士。遂攻磯野員正于澤山。置戍而西。獻捷京師。遂歸岐阜。

【龍鼻】……近江に在り。【距】……三田……近江に在り。【驚擾】……音ケイゼウ。おどろきみだれる。【將略】……大將たる器量。【遠藤某】……喜右衛門。【第】……たゞ、何がなしに。【前】……す、む。【炬火】……たいまつ。【徹宵】……夜とほし。【勒】……音ロク。勢揃へす。【姊川】……近江に在り。【北軍】……淺井、朝倉の軍勢。【眞柄】……十郎左衛門。【母衣騎】……母衣武者。【長政と景健とが相談して曰ふには、吾等、若し朝倉殿(義景)を指すの來るを待つて戦はうとするときは、恐らくは、横山城は、それまで守つて居ることが出来ないであらう。されば、急いで之を救ふが宜しう御座る。今、信長は、龍鼻に陣取つて居るが、此處を去ること五十町移し、一宿して、次の日の夜明け方につけ込んで、敵の本陣を不意撃するときは、彼れは、必ず驚き騒ぎ亂れて、敗北せぬことはあるまいと曰つた。淺井半助が進み出で、曰ふには、私は、以前に、美濃に遊んで、稻葉氏の客となつて居つたことがありまして、信長の大將たる材略を、つくづく見るに、物事に驚いて騒ぎ亂れるやうな人では御座りませぬ。貴殿の計策は、恐らくはあたらしいで御座りませうと曰つた。す敵兵の中に雜り入つて、信長と勝負を決しませうと曰つた。評議は、そこで、決定した。信長は、夜、大寄山を望み見て、ふりかへつて、宿直して居る諸大將を呼んで曰ふには、柴田、木下、佐久間は居るか。曰つた。皆答へて曰ふには、居りますと曰つた。信長は、そこで、召し寄せしやうとするのであると曰ひ、そこで、命令を下して、軍勢を勢揃へし、分けて十三隊となし、坂井政尙、池田信輝等が先鋒となつて、以て長政の軍に當り、德川公は、たゞ、其部下の兵だけを引連れ、西に向つて進んだ。夜明け頃に、北軍に、姊川に於て出遇つた。北軍は、大に驚いた。そこで、政尙、信輝は、進んで戦つたけれども、勝利を得なかつた。信長は、氏家經國、伊賀經俊をして敵軍の横合から攻撃せしめ、通朝が、引きかへして、之を助け、大に長政の軍を破つた。そして、景健も亦大に敗戦して、逃げ走つた。かくて、我が軍は、敵の強勇なる大將遠藤、眞柄など十餘人を討ち取り、首を斬ること三千餘級であつた。横山以下の諸城は、皆、兵備を解いて逃げ走つた。秀吉は、勝つた勢に乗じて小谷を攻め取らうと思つたけれども、信長は、之を許さず、母衣武者をして命令を傳へて軍勢を取りまとめしめ、自身に、戦功ある將士を評定して之に褒賞を與へ、遂に磯野員正を澤山に攻め、守備兵を置いて西に向つて行き、京都に至り、勝利を得たことを報告し、遂に岐阜に歸つた。

八月。三好三黨。與齋藤龍興。糾兵一萬。據野田。福島。信長自將討之。九月。陣天滿林。義昭陣中島。堙壕薄陣。而一向僧賊以大坂應賊。信長曰。彼長

袖者何能爲。遣佐佐成政赴拒。而自繼之。成政等冒矢石進。將領多死。我兵潰走。賊軍乘之。前田利家揮槍大呼。手殪數十人。賊辟易而去。利家幼爲信長近士。忤旨被逐。私從軍。先登獲首級者數。信長乃復之。擢爲尾張荒子城主。至是力戰。以全信長軍。信長軍方困於三城間。淺井長政。朝倉義景時之也。合兵三萬。軍比叡衢。將焚坂本。宇佐山城將森可成出拒。死之。信長弟信治及尾藤某。道家某。皆死。北軍遂攻宇佐山。畱後武藤等能拒。北軍乃過大津。縱火醍醐山科。

【野田】……攝津に在り。【福島】……攝津に在り。【埋壕】……壕は、うづむ、塞ぐ也。壕は、音ガウ、城下の池なり。ほりを埋める。【薄障】……薄は迫る也。障は音ヒ、城上の女牆、ひめがき。城の築地まで攻め寄る也。【一向】……浄土真宗。【長袖者】……僧侶を指す。僧の衣服は袖長し、故にかく云ふ。【瘴】……たふす。忤旨……忤は、さかふ。御機嫌を損ずる。利家嘗て信長の侍女に戯れて、放逐せらる。【三城】……野田、福島、大坂を云ふ。【時之也】……時節よしとする也。【比叡衢】……近江に在り。【坂本】……近江に在り。【宇佐山】……近江に在り。【尾藤某】……源内道家某……清十郎、勘十郎。【留後】……留守。【武藤】……五郎左衛門。【醍醐】……山城に在り。【山科】……山城に在り。

【畱後】八月に、三好三黨は、齋藤龍興とともに、兵一萬人を寄せ集めて、野田と福島とに立て籠つた。信長は、自身に大將となつて、之を征伐し、九月に、天満森に陣取り、義昭は中島に陣取り、城下のほりを埋めて、ひめがきに迫つて攻め立てた。しかるに、一向宗の賊どもが、大坂を以て賊(三黨及び齋藤を云ふ)に味方した。すると、信長が曰ふには、彼の袖の長い著物を著て居る坊主共は、何程の事を仕出かすことが出来やうぞと曰ひ、佐佐成政を派遣して、赴き拒がしめ、そして、自身に、其後から引きつゞいて出かけた。成政等は、矢や石の下るを物ともせずして、突き進んで撃つたが、我が將校が多く死んだので、我が兵は崩れて逃げ走り、賊の軍勢は、之につけ込んで攻め寄せた。すると、前田利家が、槍を揮つて、大聲で呼ばつて、手づから、數十人を斃したので、賊は、其勢におそれ、たゞくとなつて逃げ去つた。利家は、幼少の時から、信長の近侍の家來であつたが、かつて、御機嫌を損じて、放逐せられたけれども、そつと、軍に従つて、先陣し、敵の首級を討ち取ることにたびくであつたので、信長は、そこで、利家を本の如くにし、引き上げて尾張の荒子の城主となしたのであるが、こゝに至つて、利家は、力を盡して戦つて、以て信長の軍勢を全うした。かくて、信長の軍勢は、丁度、野田、福島、大坂の三城の間に苦しんで居る最中であつたので、淺井長政、朝倉義景は、善き折であるとして、兵三萬人を合はせ、比叡衢に陣取つて、まさに坂本を焼き拂はうとした。宇佐山城の守將なる森可長が、出で、拒ぎ戦つて討死した。信長の弟なる信治、及び尾藤某、道家某は、いづれも皆、討死した。かくて、北軍は、遂に進んで、宇佐山を攻めたが、宇佐山の留守の大將武藤等が、能く拒ぎ戦つて、なかく、落城しなかつた。北軍は、そこで、大津を通り過ぎて、醍醐、山科に火を放つて、京都に突き入らんとするやうであつた。

信長聞警。曰吾藉得拔三城。使奴輩蹂躪京師。則我之恥也。乃令攝津河内諸將備三城。而還救之。三城兵大起。尾之奪舟於江口渡。諸軍患之。信長自視于岸。曰水淺可渡也。乃亂流皆濟。整軍徐退。敵不敢逼。遂達京師。日向北軍。北軍驚上叡山陣。信長陣志賀。宇佐山分兵攻叡山。每夜襲擊。而使入說其僧徒曰。汝等能捨彼而助我。則他日使汝寺封如故。否則中立不倚。莫有所助。二者不聽。他日必縱火赭山。鑿殺僧徒。不釋一人。僧徒弗聽。十月。信長遣菅谷長頼。佐佐成政。言於北軍曰。吾與公等相持曠日。若士卒勞倦。何請一戰以決勝敗。長政等不答。六角義賢糾近江土兵。將夾攻信長。木下秀吉自橫山。丹羽長秀自澤山來援。行破土兵。至於志賀。信長登樓望之。驚以爲義賢至。至則秀吉。長秀也。二人以首級謁曰。北人深入至此。自送死耳。請彌擊之。莫使一騎還。信長大喜。長政等請和。不許。六角義賢來降。十一月。堅田人猪飼甚介等屬信長。請

得一將。坂井政尚自請而往。北軍來爭。政尚力戰死之。會大雪。北軍慮歸路梗。數請和弗許。乃請之義昭。義昭自來。信長營。言之。信長乃聽之。各解兵歸國。

【警】……警報。【藉】……借と同じ。たとい、かりに。【蹂躪】……音シウリン。ふみにじる。【尾】……追つかける。【江口渡】……攝津に在り。【志賀】……近江に在り。【寺封】……寺領。【否則中立不倚莫有所助】……彼を捨て、我を助けずんば、中立して、どちらへも片寄ることなく、彼をも我をも助くるなかれと也。【緒山】……緒は音シヤ、赤色、又、赤土なり。山を焼き拂つて赤土にする。【塵殺】……音アウサツ。皆殺しにする。【土兵】……土地の農兵。【彌擊】……音センゲキ。皆殺しにする。【堅田】……近江に在り。【梗】……音カウ。塞がる。

信長は、警戒の報知を聞いて曰ふには、吾、たとい、野田、福島、大坂の三つの城を攻め落すことが出来ても、奴等をして、京都をふみにじらしめるやうな事があつては、私の恥辱であるといひ、そこで、攝津、河内の諸大將をして、三城に備へしめて、引き返して、之を救はうとした。すると、三城の兵が、大に起り、其あとをつけて追ひ撃ちにせんとし、江口の渡し場の舟を奪ひ取つた。我が諸軍は、之を心配した。すると、信長は、自身に岸に行きて河水を見て曰ふには、水が浅いから、渡ることが出来るぞと曰つた。そこで、川を横切つて皆渡り、軍勢を整頓して、ゆつくりと退却した。敵は、敢て逼り近づくやうとせずして、かくて、我が軍は、遂に京都に達した。我が軍は、明るる日に、すくなく、北軍(浅井、朝倉の軍勢)に向つて進んだので、北軍は、驚いて叡山の上つて陣取つた。信長は、志賀、宇佐山に陣取り、兵を分けて叡山を攻め、毎夜襲ひ撃ち、そして又、使者を遣りて叡山の坊主共に説き諭さしめて曰ふには、汝等、能く北軍を捨て、我が軍を助けるならば、後日、汝等の寺領をば、もとの通りに致して置くであらう。左様でないならば、中立して、どちらにも片寄ることなく、彼をも我をも助けずしに居れよ。この二つを聞き入れぬときは、我は、後日、屹度、火を放つて、寺を焼き拂ひ、全山を焼き拂つて、赤土にして仕舞ひ、坊主共を皆殺しにし、一人をも赦さぬであらうと曰つた。けれども、叡山の坊主共は、聞き入れなかつた。十月に、信長は、菅谷長頼、佐佐成政を派遣して、北軍に言はしめて曰ふには、吾と貴殿等と、對陣して勝負を決したいと思ふと曰つた。けれども、長政等は、何とも返答しなかつた。六角義賢は、近江の百姓一揆どもを寄せ集めて、まさに信長を夾み撃ちにしやうとしたが、木下秀吉は横山より、丹羽長秀は澤山より來り援けやうとして、道すがら、土地の百姓一揆を撃ち破つて、志賀に到着した。信長は、物見の上つて之を望み見て、驚いて、義賢が攻め寄せて來たのであると思つて居つたが、到着して見ると、秀吉と長秀とであつた。秀吉、長秀の二人は、討ち取つた首級を持參して、信長に謁見して曰ふには、北國の人々(即ち浅井、朝倉の軍勢)を云ふが深く攻め入つて、此處まで参りましたのは、これは、自分で死を送つて來たので御座ります。どうぞ、之を撃つて皆殺しにして、一騎をも生きて還らせぬ様に致したいので御座りますと曰つたので、信長は、大に喜んだ。長政等は、和睦せんことを請うたけれども、信長は許さなかつた。六角義賢は、來つて降参した。十一月に、堅田の人猪飼甚分等は、信長に附き従つて、一人の大將を得んことを願ひ出でた。すると、坂井政尚が、自ら願つて堅田に出かけた。しかし、北軍が來つて其地を争ひ、政尚は、力のかぎり戦つて討死した。折しも大雪が降つたので、北軍は、本國に歸るべき路が塞がつて通行することが出来ぬやうにならんことを心

配して、たゞ、和睦せんことを請うたけれども、信長は、許さなかつた。そこで、北軍は、此事を義昭に請うた。すると、義昭は、自身に、信長の陣營に來つて、此事を申し述べたので、信長は、そこで、之を承知し、各々、兵備を解散して本國に歸つた。

二年。二月。磯野秀昌以澤山降長秀。五月。浅井長政以二萬騎攻箕浦。秀吉赴援。擊卻之。先是。一向賊起於長島。攻信長弟信興于小木江。殺之。五月。信長入長島。縱火而退。賊乘風雨迫嶮要擊。氏家經國死之。八月。以柴田勝家爲先鋒。入近江。出小谷。山本之間。縱火而退。兩城兵八千出躡之。勝家返戰三次。敵不復出。信長再發。攻拔新村。下小川。常樂寺。

【箕浦】……近江に在り。【長島】……信長譜には、尾張に屬すれども、今は伊勢の桑名郡に屬す。【小木江】……伊勢に在り。【嶮】……一に險に作る。【新村】……近江に在り。【小川】……近江に在り。【常樂寺】……近江に在り。校刻本の標記に云はく、諸書を按ずるに、信長、時に小川金森に城を下す。常樂寺は、特に其頓軍の地のみと。

元龜二年の二月に、磯野秀昌は、澤山を以て長秀に降参した。五月に、浅井長政は、二萬騎の軍勢を引き連れて、箕浦を攻めた。秀吉は、出かけて行きて箕浦を援け、撃つて長政を退けた。これより先に、一向宗の賊徒が、長島に起つて、信長の弟なる信興を小木江に攻めて、之を殺したので、五月に、信長は、長島に打つて入り、火を放つて退却すると、賊は、風雨のはげしきに乗じ、險阻なる處に追ひつめ、待ち受けて攻撃したので、氏家經國は、そこで討死した。八月に、信長は、柴田勝家を以て先鋒となし、近江に入り、小谷と山本との間に出で、火を放つて退却した。小谷、山本兩城の兵士八千人は、城を出で、あとを附けた。すると、勝家は、引き返して戦ふこと三度であつたので、敵は、ふたたび出て來なかつた。信長は、再び出發して、新村を攻め落し、小川、常樂寺を落城させた。

九月。陣勢多。命諸將縱火焚叡山。諸將皆失色。佐久間信盛等諫曰。自桓武帝創建此寺。幾千年于此。爲王城之鎮。莫敢或犯者。今而滅之。其如之何。信長曰。吾除國賊耳。汝輩何沮我邪。吾欲定四海。興王道之衰。勞



筋骨輕軀命未嘗一日安居。去歲略攝津。兩城將陷。長政義景舉兵窺我後。吾舍兩城而返。棲之山上。將殲之也。遣人諭僧徒。陳說禍福。而彼竟不服。務右凶徒。以梗王師。此非國賊乎。今而不行芟除。乃貽患於天下也。且聞彼犯其律。茹葷蓄妾。束閣誦呪。安在其鎮王城也。圍而燔之。勿使有遺類。諸將乃服。明日圍叡山。燔中堂及二十一社。僧徒婦女。無老少皆斬之。以志賀郡賜明智光秀。城坂下使居之。歸岐阜。令丹羽長秀誅高宮某于澤山。以其通大坂也。是歲皇居成。信長貸金于京畿豪戶。令每月納息縣官。以充供御。且爲計畫廷臣家計。與廢繼絕。

【勢多】……近江に在り。【桓武帝創建此寺幾千年于此】……桓武帝の延暦二年、都を山城愛宕郡長岡に遷したまふ。七年、僧最澄、比叡山の根本中堂を創め、藥師如來の像を安んじ、以て新都の鬼門を鎮護すと稱す。後延暦寺と號す。十三年、葛野郡に遷したまふ。即ち今の京都なり。元龜二年まで、七百九十餘年を経。故に幾と云ふ。幾は、殆んど。【王城之鎮】……平安城鬼門の鎮守。【兩城】……野田、福島。【棲之山上】……棲は音セイ、鳥の止宿する所を云ふ。信長、淺井、朝倉二氏に逼り、叡山に依らしむ。故に鳥にたとへて、棲と云ふ。【右】……たすく。【凶徒】……長政、義景を指す。【梗】……音カウ、塞ぐ也。【芟除】……音センジョ。芟は刈なり、除は去る也。草を刈るが如く、除去すること。【貽】……のこす。遺なり。【其律】……その戒律、天台宗の守るべき規律。【茹葷】……茹は食ふ也。葷は音ケン、辛臭の菜、葱、蒜の屬。なまきさき物くさき物を食ふこと。【束閣誦呪】……閣は度藏の所、たな也。束閣は、高閣に束ぬる也。棚の上になげやりにして置くこと。誦呪は、佛經を云ふ。音シヨウジユ。御經や陀羅尼。即ち咒をば棚の上になげやりにして、讀誦せざること。【燔】……やく。【中堂】……根本中堂、即ち總本堂。【二十一社】……鎮守の末社。光秀……美濃の土岐氏の族にして、亡命して越前に遊び、終に織田氏に事ふ。高宮某……右京進。【豪戶】……金持。【息】……利子、利息。【縣官】……朝廷を云ふ。供御……音クゴ。天子の御入用。【廷臣】……朝廷の臣下、即ち公卿。【家計】……一家の會計、活計。【久しう廢れたる禮を興し久しう中絶したる故事を繼ぎ行ふこと】。【廢繼絶】……久しう廢れたる禮を興し久しう中絶したる故事を繼ぎ行ふこと。【九月】……九月に、信長は、勢多に陣取り、諸將に命令して、火を放つて叡山を燒かしめやうとした。諸將は、皆、大に驚いて、顔色を變へた。佐久間信盛等が諫めて曰ふには、昔、桓武天皇が、此山に此寺をはじめ建てられてより以來、こゝに、ほとんど千年の間、王城の鎮守として、敢て

之を犯さうとする者は有りませぬ。しかるに、今日之を燒き滅さうとなされるのは、如何したもので御座りましやうかと曰つた。すると、信長が曰ふには、吾は國家の亂賊を除き去らうとするのである。汝等は、どうして、我が企を妨げ止めやうとするのか。吾は、天下を平定して、王道の衰微したるを再び盛んにいたしたいと思つて、筋骨を疲勞させ、身命を輕んじ、未だ嘗て一日といへども安樂にして居つたことは無い。しかるに、去年、攝津を切り取り、野田、福島二つの城が將に落城しやうとするとき、長政、義景が、兵を擧げて、我が後をつけねらつて襲はうとしたので、吾は、野田、福島二つの城を捨て、引き返し、長政、義景等をこの叡山の山上に追ひ上げて、將に之を殺し盡さうとしたときに、使者を叡山に遣はし、坊主共に説き諭して、災禍となるべき仕方と幸福となるべき仕方との區別を陳べ聞かせたのに、彼等坊主共は、つひに、吾が言葉に従はずして、却つて、凶惡なる賊徒をたすけて、干師を邪魔しやうと務めたのであるが、此れ、國家の亂賊では無い。か。されば、只今に於て刈り除かなかつたならば、乃ち心配すべき厄介物を天下に残して置くわけである。其上に、聞けば、彼れ坊主共は、其宗の戒律を犯し、くさき物なまきさき物をも食ひ、妾をたはへ、そして、經典陀羅尼を讀誦することをば、打ち捨てて置いて、修めないと云ふことである。これでは、どうして、王城を鎮護するなどと云ふことが有らうぞ。圍み攻めて、之を燒き拂つて、一人も残つて居る者があつてはならぬと曰つたので、諸將は、やつと、その理に服し、明るる日、叡山を圍み、根本中堂及び二十一社を燒き拂ひ、坊主共や女どもや、年寄りたる者ども、若い者ども、區別なく、殘らず皆之を斬つた。信長は、志賀郡を明智光秀に賜はつて、坂下に城を築いて、此處に居らしめて、そして、岐阜に歸り、丹羽長秀をして、高宮某を澤山に於て誅戮せしめた。これは、高宮某が大坂の一向宗の賊徒に内通したからである。この歳に、皇居が出来上つた。信長は、金を京都畿内地方の金持に貸しつけ、毎月、その利息を朝廷に納めしめ、それをば、天子様の御入用に充てることにし、又、公卿たちの爲めに、其家の活計の道を、然るべきやうに取り計らつてやり、久しう廢れたる儀式を再び興し、久しく中絶したる事を繼いで行はれるやうにした。

信長燒比叡山

去程に、信長卿は、岐阜の城に在りて、暫く兵士の勞を休められけるが、元龜二年八月十八日、淺井長政を討つべしとして、五萬餘騎を引率し、江州志村の城、小河の城、金崎の城を責落し、瀬田に暫く滯留ありて、九月十三日、俄に總勢を以て比叡山を取圍み、只一息に責崩さんと、四方より攻め登る。是はさいつころ比叡山の衆徒、淺井、朝倉に同心し、信長卿に敵對せし恨を報い給ふ也。山門の衆徒等思ひまうけぬ事なれば、大に驚き、谷々嶺々の切所に支へ防ぎ戰ふと雖、纔に三千人の衆徒なれば、信長が大軍に攻立てられ、防ぎ事能はず、道を求めて遁れ去る。織田勢勇み進んで金鼓を鳴らし、関を作りて責登り、山中の寺々に火を放てば、折節風烈しく吹き發り、火炎天を焦し、黑煙一山に充ち、さし建て連ねたる山王二十一社を始めと、大殿、佛閣、經藏、鐘樓、寺々院々に火移り、年久しき靈像、作佛、唯一片の烟となり、山門破滅の有様こそ言語に絶えし次第也。信長の大軍、烟の中より斬登り、逃げ殘る僧徒等も愛の岩根彼所の谷陸に突殺し、追詰め討ちける程に、死人の山を築きにけり、大將信長勇み勇んで、東坂本大島井より責登り、坂中に至り給ふ。爰に山門第一の惡僧金剛坊といへる強弓の精兵あり、怨敵信長を討取らんと、谷を隔てて樹蔭に忍び、一尺二寸の鐵すげたる大矢の十五束なるを、五人張の弓に打番ひ、忘る計引絞り切て放つに、矢頃遙に遠かりければ、ねらひ下りて、信長の馬の太腹射通したり、信長早業の大將なれば、馬よりひらりと飛下り、傍なる岩に尻かけて、猶士卒を下知し給ふ。金剛坊は大事の矢を射損じ、心苛ちて二の矢を射んとする所に、後の方より大音にて、金剛坊暫く待たれ候へと聲を懸けて切て放つ鳥銃、噓と響きて聞えけり、金剛坊驚いて是を見れば、杉谷の善住坊、去年信長を打損じ、重る恨を露さん

と、これも木隆に忍び居て狙ひ打ちにぞしたりける。好運に乗じたる信長卿、さしも名を得し金剛坊、善住坊が矢玉なれども悉く狙下り、左の股を打ちかすつて、御身は更に恙なし、織田の從兵是を見て、此谷のそなたこそ曲者の籠りたるぞ、打殺せよと云ふ程こそあれ、三百餘人、鳥銃の筒を揃へ、茂りたる木の中へ霞の如く打入るれば、兩人の惡僧天なる哉と歎息し、谷間傳ひに遁れ去りぬ、されば、山門三千の衆徒、或は討れ、又は落行き、堂塔残りず、灰燼と成り、比叡の靈場一時に元山(ハゲヤマ)と成りけるこそ、悲しかりける次第なれ、(下略)

三年三月。縱火小谷。山本城下。徙軍志賀。攻木戸。田中二城。置成焉。遂入京師。陣妙覺寺。義昭使信長置第于武者小路。固辭不許。乃令村井貞勝董役。不日而成。細川昭元。岩成左通來降。大坂僧徒亦贈物納款焉。三好義繼。松永久秀。私與畠山氏鬪。築城交野。信長素疾二人。欲因事誅之。於是遣兵攻交野。城兵夜遁。久秀竟降。七月。信長長子信忠。幼字奇妙。始被鎧。從信長。攻淺井長政于小谷。令木下秀吉別攻山本。聞朝倉義景來援。壘於虎姬山。待之。義景以二萬騎至。信長曰。及其未陣。襲之。莫使安營也。將士乘夜更襲之。北人患之。多來降者。會義昭使來諭弭兵。乃令秀吉守虎姬山。宮部某守宮部壘。鑿山開道。以便往來。

【木戸】…近江に在り。【田中】…近江に在り。【成】…音シム、守備兵。【董役】…工事を監督する。【不日】…多くの日数を經ずして。【畠山氏】…四郎。【交野】…河内に在り。【疾】…にくむ。【莫使安營】…陣屋に落ち付いて居ることの出来ぬやうにせよ。【更】…かはる。【弭兵】…明は、止む也。戰を止むるを云ふ。【宮部某】…善祥坊、一に世上坊に作る。【宮部】…近江に在り。【鑿山】…山をうがつ、山を切り割る。

【元龜三年の三月に、信長は、小谷、山本の城下に火を放ち、徙つて志賀に陣取り、木戸、田中の二城を攻め、守備兵を置き、遂に京都に入り、妙覺寺に陣取つた。義昭は、信長をして、屋敷を武者小路に置かしめやうとしたが、信長は、固く辭退したけれども、義昭が許さなかつた。

ので、そこで、信長は、村井貞勝をして工事を監督せしめたが、日ならずして落成した。細川昭元、岩成左通は、來つて降参した。大坂の僧徒も、亦、物を贈つてよしみを納れた。三好義繼、松永久秀の二人は、私に、畠山氏と喧嘩をなし、城を交野に築いた。信長は、はじめより、此二野の城兵は、夜逃げ出し、久秀は、つひに、降服した。七月に、信長の長男なる信忠は、幼少の時の名は奇妙と云つたが、はじめ、鎧を著て、信長に從つて、淺井長政を小谷に攻め、木下秀吉をして、別に山本を攻めしめたが、朝倉義景が來り援けると云ふことを聞いて、鎧を著て、に、とりてを築いて、之を待つて居つた。義景は、果して、二萬騎の軍勢を引き連れて、到着した。すると、信長が曰ふには、敵が未だ陣取らないうちに、之を不意撃して、敵をして、陣屋に落ち着かせぬやうにせよと曰つた。そこで、我が將士どもは、夜に乗じて、かはる、之を不意撃した。北國の軍勢は、之を心配して、來つて降参する者が多かつた。折しも、義昭よりの使者が來つて、雙方を諭して、戰をやめさせたので、信長は、そこで、秀吉をして虎御前山を守らしめ、宮部某をして、宮部のとりてを守らしめて置き、山を切り割つて、道を開き通じて、以て、以て人々の往來することを便利にした。

當是時。長政。義景。與越後國主長尾謙信通好。以抗信長。而武田信玄亦以甲斐。信濃兵。西出。信長遣佐久間信盛。平手汎秀。援徳川氏。拒信玄於東海。不利。汎秀死。義昭時與信長惡。欲乘是時圖之。先是。信長病。義昭多失行。上書諫曰。幕下之入京師也。信長首請朝參。勿敢或怠。幕下諾之。後乃違焉。夫光源公。怠於王事。天譴立至。信長竊爲幕下懼之。忠臣亡賞。而佞夫得官。以虐下民。下民何罪。罪人納金。即便宥之。僞稱叡山賦稅。以掠民財。或陽責征課。而陰蠲之。以賈私恩。此皆非幕下所宜爲。朝議欲改元龜之號。而幕下特愛費用。不果從。遠近有惡御所之目。信長竊爲幕下羞之。信長築二條城。以備寇賊。而欲舍徙他所。糶城內粟。以畜金銀。

諸國將士。多貴金賤粟。遺其武備。以爲遜隱之計。皆傲幕下之爲也。信長所納紀綱之僕。無罪奪俸。來乞哀者數。請而不得復。信長無面目以對此輩。且聞下教諸國。徵馬及金。曩白凡百需索。宜囑信長。信長將立辨之。今陰有此教。信長惑焉。信長志欲與幕下協心戮力。撥亂略。以興王政。豈有他哉。願幕下勿信讒言。以保終吉。斥佞進忠。恢弘先業也。至如儒人。最宜親近之。以鑑古今興衰。信長生長兵亂之間。曹於文學。自度處事多違。故典所以常懷愧恥也。妄疏所見。唯幕下留意焉。義昭弗納。遂相嫌隙。

【長尾謙信】即ち上杉謙信なり。東海……遠江の三形原を指す。徳川記に詳なり。【失行】……過失の行爲、ふしだらなる行。【朝参】……参内。【光源公】……義輝なり。光源院と諡す。【天譴立至】……天の責罰が即座に來た。義輝が松永久秀に弑せられしを云ふ。【亡】……無し。【即便】……すなはち。【陽】……あらはに、おもてむきでは。【征課】……征は税なり。連上。【罰】……除く、差し許す。【買】……市なり。【愛】……惜む。【舍】……すつる、廢する也。【糶】……音テウ。米を賣り出す也。【遺】……わたす。【遜隱】……音トイン。世をのがれ隠れる。【爲】……しわざ、行爲。【紀綱之僕】……大小の事務を經理する役人。左傳の僖公二十四年の條に、秦伯、衛を晋に送ること三十人。實に紀綱の僕なりとあり。綱は大事を總へ、紀は細事を理むるなり。【俸】……俸祿。【哀】……あはれむ。【復】……再び任命して元の通りにする。【教】……諭告の詞なり。【凡百需索】……需は須なり。索は求なり。一切の御入用の請品。【撥亂略】……動亂の計を企てる者を拂ひ除く。【保終吉】……未まで幸福を保持す、いつまでも安泰なる様にする。【恢弘】……恢は音クワイ、大なり。大に弘むる。【恢弘先業】……先祖の爲し置かれし事業を今一層大に弘める。【曹】……音ボウ。不明なり。くらし。【故典】……故例。【嫌隙】……音ケンゲキ。仲が悪くなる。【】この時に當りて、長政、義景は、越後の國主なる長尾謙信と、よしみを通じて、以て信長に抵抗した。そして、武田信玄も亦、甲斐、信濃の兵を引き連れて、西の方に討つて出た。信長は、佐久間信盛、平手汎秀を派遣して、徳川氏を援けて、信玄を東海道に於ては防がしめたけれども、勝利を得ずして、汎秀は、討死した。義昭は、其時に、信長と仲が悪かつたので、この時に附け込んで信長を滅ぼさうと企てた。これ

より先に、信長は、義昭に不仕態なる行爲が多いのを心配して、上書して諫めて曰ふには、あなたが京都に入りせられるときに、私信長は、第一番に、あなたに請ふには、朝廷への参内の禮をば、敢て怠つて缺かれるやうなことがあつては成りませぬと申し上げました。すると、あなたは、之を御承諾なされた。然るに、後日に至つて、乃ち、之に違はれました。元來、御兄上なる光源院殿は、王室の事を怠り、臣下たる職分を缺かれましたので、天よりの責罰が、即座に至りました。私は、ひそかに、今日の如き有様では、あなたも亦、此の如くなるに至らるゝことあらんかと、ひそかに、あなたの爲めに、之をいやみ又懼れて居ります。又、忠義の臣は、賞與を得ずして、佞人が官職を得て、以下々の人民をしへたげ苦しめますが、下々の人民には一體何の罪がありまじやうぞ。又、罪ある人にも、金錢を差し出せば、即座に其罪をゆるされ、又、僞つて叡山の税なりと稱へて、以て人民の財物を掠め取られ、或は、表面には運上を督責催促しながら、ひそかに裏面にまはつて、之をさしゆるし、以て私の恩恵を賣り付けて、人望を得やうとせられる。これ等の事は、いづれも皆、あなたの爲さるべきところの事では御座りませぬ。又、朝廷の御評議では、元龜といふ年號を改めたいと思つて居られるのに、かかるに、あなたは、たゞ、改元に要する僅少の費用を惜んで、朝廷の御評議に従ふことを果されなかつた。その爲めに、遠き所の者も、近き所の者も、實下に、悪御所と云ふ紳名をつけたので、私は、ひそかに、あなたの爲めに之を恥づかしく思ひます。又、私は、二條城を築いて、狼藉者の來襲に備へましたが、かかるに、あなたは、之を捨て、他所に徙らうと思はれ、非常の事變の爲めに城内に貯蓄して在る米を賣り出して、金銀を蓄へられたが、諸國の武士が、多くは、金錢を貴び、米穀を賤み、其軍備を怠り忘れ、何でも金錢を貯蓄して、他日隱居する計畫を爲して居ります。これは、皆、あなたの御行爲を真似したので御座ります。私が差し出したところの、大小の事務を取計らふところの御家來たちは、罪科も無くして、俸祿を取り上げられ、度々、私の所に参つて泣き付きます。私は、その爲めに、あなたに御願ひ申し上げましたが、もとに復することが出来ませぬ。私は、此者共に對すべき面目は御座りませぬ。且つ又、聞くところにより、あなたは、命令を諸國に下して、馬と金錢とを御徵集なされると云ふことで御座りますが、さきに、私が申し上げましたには、あなたの一切の御入用の品物は、私に御頼みなされるが宜しう御座ります。さすれば、私は、直に之を辨じまじやうと申し上げましたのに、今や、ひそかに、諸國に此御命令を御下しなされたのは、如何なる譯で御座りますか、私には分り兼ねます。私の志は、あなたとともに心を合はせ力を合はせて、争亂を起さんと企つる者を拂ひ除き取り鎮めて、王政を再興いたしたいと思ひますので、決してその他の考があるのでは御座りませぬ。願はくは、あなたが、讒者の言を信用せらるることなくして、以て、未まで無事安泰を保持することを心掛け、佞人をしりぞけ、忠臣を進め、御先祖の大業を尙ほ一層大に弘められんとを望む次第で御座ります。又、學者の様な者は、最も、之を親み近づけるやうになされて、古今の盛衰の事蹟を手本となされるが、宜しう御座ります。私は、兵亂の間に生長いたしましたので、學問の事には暗く、常に自分で思ひますには、私が事を處置するのは、先例に違へることが多いであらうと思ひます。これは、私が常に自ら恥づかしく思つて居る所で御座ります。安りに、自分の思ひ付いたところの事を個條書きにして申し述べましたが、あなたは、どうぞ、御心に留めて御採用下さるやうに願ひますと曰つた。けれど、義昭は、その言を納れ用ひなかつたので、遂に、互に仲が悪くなるに至つた。

【参考】足利氏記下を參看すべし。

天正元年。義昭潜發使諭信玄及謙信。約夾攻信長。又諭安藝國主毛利

輝元。以爲後據。信長使村井貞勝請和義昭。義昭不聽。二月。義昭自城于石山。堅田以山岡磯貝渡邊等守之。徵發兵食。信長聞之曰。吾終不得不用兵。遣柴田勝家丹羽長秀明智光秀蜂屋賴高渡勢多招石山兵降之。勝家乃留備京師。而長秀等攻堅田拔之。三月。信長自將至大津。細川藤孝荒木村重迎降。乃進入京師。觀兵請和。義昭弗聽。乃圍二條城。義昭窮蹙。使人出言曰。自今後盡聽卿所言。信長拜謝。行成而返。至守山。遣諸將攻六角義弼于鯉江。召丹羽長秀耳語曰。室町氏必再舉。再舉必阻勢多。矢橋汝伐澤山木造兵艦十餘艘。乃歸岐阜。尾張人有梶川某者。喜博奕。爲衆所擯。信長愛其勇。與以善馬。曰。緩急以此樹功。梶川感喜而退。

【天正】…正親町帝の時の年號。【後據】…音コウキョ。據は依なり、援なり。うしろ立。【石山】…近江に在り。【堅田】…近江に在り。【山岡】…中務。【磯貝】…新右衛門。【渡邊】…宮内。【觀兵請和】…觀は示なり。兵を列ね陣を布いて其威の盛んなることを示して、和睦せんことを請ふ。かくの如く堂々たる大軍なれば、きつと自分が勝つべきが故に、和睦せられよと也。【窮蹙】…音キウシュク。ゆきつまる、進退谷まる。【行成】…たひらぎを行ふ、和睦をなす也。【鯉江】…近江に在り。【阻】…はむ、防ぎ止めやうとする。【矢橋】…近江に在り。【梶川某】…彌三郎高盛。博奕…音バクエキ。ばくち。【擯】…しりぞくる、のけ物にされる。【緩急】…緩は帶言、意は急の字に在り。まさかの時には、何事か一大事の起つたときには、【樹】…立つる。

【天正元年】義昭は、ひそかに、使を出發させ、信長及び謙信に説き諭して、東西より夾んで信長を攻めやうと約束し、又、安藝の國主毛利輝元に諭して、うしろ立と爲した。信長は、村井貞勝をして和睦することを義昭に請はしめたけれども、義昭は聞き入れなかつた。二月

に、義昭は、自身に、石山、堅田に城を築き、山岡、磯貝、渡邊等をして之を守らしめて置き、兵糧を四方から徵集した。信長は、此事を聞いて曰ふには、吾は、とうく、兵を用ひないわけには行かぬと曰ひ、柴田勝家、丹羽長秀、明智光秀、蜂屋賴高を派遣して、勢多を渡り、石山の兵を招いて之を降参させ、勝家は、そこで、留まりて京師に備へ、そして、長秀等は、堅田を攻めて、之を攻め落した。三月に、信長は、自身に大將となつて、大津に到着した。すると、細川藤孝、荒木村重は、之を迎へて降参した。そこで、信長は、進んで京師に入り、兵威の盛んなることを示して、和睦することを請うた。けれども、義昭は聞き入れなかつたので、そこで、信長は、二條城を圍み攻めた。すると、義昭は、せつぱつまつて、途方に暮れて、人をして出で、言はしめて曰ふには、今より後は、何事でも、御前の言ふことを聽き入れるであらうと曰つた。信長は、拜謝して和睦をなし、引き返して、守山に至り、諸將を派遣して六角義弼を鯉江に攻めた。又、信長は、丹羽長秀を召し寄せ、耳うちして曰ふには、室町殿(義昭を指す)は、屹度、再び事を擧げて、吾を攻めんとせられるであらう。再び事を擧げられるときは、屹度、勢多、矢橋に於て、我を防ぎ止めやうとせられるであらう。されば、汝は、澤山の木を伐つて、兵船十餘艘を作つて置けよと曰ひ、そこで、岐阜に歸つた。尾張の人に、梶川某と云ふ者があつたが、此者は、ばくちを打つことを好んで居つたので、多くの人々に除け者にせられて居つたけれども、信長は、その勇氣を愛して、之に善い馬を與へて曰ふには、何事か事變のあつたときには、此馬に乗つて、功名を立てよと曰つたので、梶川は感激し喜悅して退いた。

【参考】足利氏記下を参看せよ

七月。義昭再舉兵。留伊勢某。三淵某。與廷臣一名。守二條。而自據橫島。阻宇治川。爲固。報至岐阜。信長即起。直馳至澤山。乘其兵艦。夜濟朝妻渡。日日達坂下。直入京師。縱火呼譟。烟焰漲天。義昭兵拒勢多。矢橋者。返顧而潰。京師人大驚曰。織田公豈飛來邪。信長疾攻二條。陷之。斬三淵。城兵皆降。以爲先鋒。向橫島。自陣柳山。遣稻葉通朝。伊賀範俊等。將二萬人。渡平等院。佐久間信盛。木下秀吉等。將五萬人。渡五箇莊。於是。梶川某騎。信長所賜馬。曉出河岸。大呼自名。亂流而渡。通朝麾兵從之。與信盛。秀吉合擊。奪柵。縱火而入。信長在柳山。左右望烟起。相謂曰。我軍方渡矣。誰先

登者。信長曰。必梶川也。槇島既破。義昭請降。信長令信盛。秀吉處置之。二人乃奉義昭。徙于若江。令細川昭元守槇島。通朝來白曰。臣爲梶川所先。意甚憾焉。然恐其單進致死也。故繼之。信長并賞二人。

【伊勢某】……伊勢守。三淵某……大和守。延臣二名……日野大納言。高倉宰相。【槇島】……山城に在り。【阻】……音シヨ。隔つる。【朝妻渡】……近江に在り。【柳山】……山城に在り。【若江】……河内に在り。【單進】……一騎がけにて進んで、あとより繼ぐ者無き也。

七月に、義昭は再び兵を擧げ、伊勢某、三淵某と公卿二人を語めて、二條を守らせ置き、そして、自身は、槇島に立て籠つて、宇治川をへだて、固めとした。その報知が岐阜に到着すると、信長は、即座に、起ちあがって、直に馳せて澤山に到着し、其兵船に乗つて、夜の間に、朝妻の渡をわたり、明るる日に、坂本に到達し、直ちに京都に討つて入り、火を放つて、大に呼ばり、さわいで、攻め立て、煙や焔が天にみなるばかりであつた。義昭の軍勢の勢多、矢橋を拒いで居つた者共は、あとを振りかへつて見て、大に崩れて仕舞つた。京都の人は、大に驚いて曰ふには、織田殿は飛んで来られたのであらうかと曰つた。かくて、信長は、手きびしく、二條を攻めて、之を攻め落し、三淵を斬ると、城兵は皆降参したので、それを以て先鋒となし、槇島に向ひ、信長自身は、柳山に陣取り、稻葉通朝、伊賀範俊等を派遣して、二萬人の軍勢を引き連れて、平等院に渡らしめ、佐久間信盛、木下秀吉をば、五萬人の軍勢を引き連れて、五箇莊に渡らしめた。こゝに於て、梶川某は、さきに信長が賜はつたところの馬に乗つて、夜明け方に、河の岸に出で、大聲に呼んで自分の名を名乗り上げて、河の流れを横切つて渡つた。すると、通朝は、兵士を指圖して之に従ひ、信盛、秀吉と、一所に攻め立て、木柵を奪ひ、火を放つて、攻め入つた。信長は、其時、柳山に居つたが、左右に侍する者共が、煙の擧るのを見て、語り合つて曰ふには、味方の軍勢が、今も河を渡つたので御座るが、先登した者は誰ぞ御座らうかと語り合つて居ると、信長が曰ふには、屹度、梶川であらうと曰つた。かくて、槇島は、すでに破れて仕舞ひ、義昭は、降参すること川昭元をして、槇島を守らしめた。通朝が来つて申し上げるには、私は、梶川に先登されまして、心中、ひどく残念に思ひましたけれど、梶川と通朝との二人を并せて賞した。

【参考】足利氏記下を参看すべし。

於是織田氏遂代足利氏。出令京師。蠲戶租。免徭役。賑窮民。旌節孝。以村井貞勝爲所司代。收兵而返。遂以兵艦攻拔木戸。田中一城。賜之明智光秀。令秀吉。藤孝攻淀城。斬岩成左通。令荒木村重攻和田惟政于芥川。

城。村重素以雄豪聞。部兵皆驍。義昭之變。首應信長。迎謁于大津。面貌甚偉。會有獻饅頭者。信長拔佩刀。貫饅頭于鋒。以昭村重。村重進開口受之。信長笑曰。好男子。攝津十三郡。任汝剪取之。於是命攻惟政。榜賞格。曰。獲主將者。予萬金。獲編裨者。千金。獲士卒者。百金。村重將中川清秀。熟視之。以墨勾其首條。觀者無測其意。既而惟政曉出城。雜士卒。修守備。清秀伏壕側。跳出斬其首。信長乃賞清秀以萬金。以池田勝政觀望不至。逐之高野。以和田池田氏邑。盡賜村重。

【蠲戶租】……蠲は除く也。さしゆるす也。年貢をゆるす。【免徭役】……徭役は音エウエキ。夫役なり。夫役を免除する。【賑窮民】……賑は瞻なり。困窮せる人民に手當を與へる。【旌節孝】……節義孝順なる者を旌表して褒美を與ふ。旌はあらはす也。表札に掲示して人に知らするなり。【所司代】……侍所の司の代官。將軍義政のとき、京極持清を侍所の司に補せられしとき、多賀豐後、中原高忠を以て代となし、京都に置きしを、初とすと云ふ。但し此頃より、其意義變化して、京都留衛の官名となれり。【收兵而返】……返は一に還に作る。【芥川城】……攝津に在り。【偉】……大なり。【攝津十三郡】……住吉、能勢、東成、西成、島上、島下、豊島、河邊、武庫、兔原、八部、有馬、百濟。【剪取】……音センシユ。切り取る。【榜賞格】……榜は音バウ。標榜、かけ札なり。榜は式例なり。恩賞のきまりをかけ札に示す。【主將】……大將。【編裨】……音ベンヘン。副將。【中川清秀】……瀬兵衛。【勾其首條】……勾は音コウ。かきよりの點即ち「なり。墨にて高札の始めにある箇條即ち「獲首將者予萬金」へかきよりの點をわけしを云ふ。清秀、豫じめ主將の首を獲んとを期せしなり。【壕側】……堀ばた。【觀望】……様子眺めて居ること。

こゝに於て、織田氏は、遂に足利氏に代つて、政權を掌握すること、成り、布令を京都に出し、年貢をさしゆるし、夫役を免除し、貧窮の人民に物を與へ、節義ある者孝順なる者を揭示して褒美を與へ、村井貞勝を以て所司代となし、軍勢を取りまとい、引き返し、遂に、兵船を以て攻めて木戸、田中の二城を攻め落し、之を明智光秀に賜ひ、秀吉と藤孝とをして淀城を攻めしめ、岩成左通を斬り、荒木村重をして、和田惟政を芥川城に攻めしめた。村重は、はじめから、人並ずれて武勇であること云ふので、世間に評判の高い人であつて、其部下の兵士は、いづれも皆、強く逞ましかつたのであるが、義昭の事變のときに、第一番に信長に味方し、出で迎へて、大津に於て信長に謁見したが、その面つき身ぶりが、大層大柄で立派であつた。折しも、信長は、饅頭を献上した者があつたが、信長は、腰に差して居つた刀を抜いて、饅頭を

その刀の切先に衝きさして、村重に食させた。村重は、進み出で、口を開いて其饅頭を受けて食べてしまった。すると、信長は笑つて曰ふには、天晴なる男である。播津全國十三郡は、汝が思ふまゝに切り取りせよ(汝の腕次第にて、切り取つただけは、皆、汝に與へるぞとの意。と曰つた。こゝに於て、信長は、村重に命じて惟政を攻めさせることにし、賞典のきまりを、かけ札に書き付けて曰ふには、大將を討ち取つた者には、萬金を與へやう。副將を討ち取つた者には、千金を與へやう。士卒を討ち取つた者には、百金を與へやうと書き付けた。村重の部下の將なる中川清秀は、此かけ札をつくと視て居つたが、墨を以て、その第一の箇條にかぎりの點をかけた。之を觀て居つた者共は、其の何の意であるかを測り知る者は無かつた。とかくする中に、惟政は、夜明け方に、城を出で、士卒の中に雜つて、守備を整理して居ると、清秀は堀ばたに於て居つたが、いきなり、飛び出して、其首を斬つて仕舞つた。信長は、そこで、清秀に、萬金の褒美を與へた。信長は、池田勝政が、様子を見合はせて居つて、來なかつたので、之を高野に放逐し、和田氏、池田氏の領地をば、残らず皆、村重に賜はつた。

八月。歸岐阜。居三日。淺井氏將阿閉某來降。信長復發。下月瀨城。軍于山田。淺井氏兵守燒尾。朝倉氏兵守大嶽。與山田相持。信長遣勝家。信盛。陣于高月。絶越前援路。朝倉義景聞之。以一萬騎來。軍于田邊。信長又遣稻葉通朝。助勝家。燒尾守將因阿閉納款。以導我兵。我兵遂圍大嶽。夜冒風雨疾攻。守將乃降。信長令信忠守虎姫山。不破光治守大嶽。而進下丁野。遣使高月。戒諸將曰。今夜北軍必走。宜尾擊鑿之。諸將皆莫信。且應曰。謹諾。夜半義景果焚營而遁。信長大呼。起曰。敵走矣。與左右五十騎。馳出。有先馳者。信長誰何之。答曰。利家。成政。其他十餘人皆迭對。信長戲曰。吾欲先登。爲諸君所先。乃聯轡疾馳。及敵于刀根山。斬其編裨二十三人。雜兵二千。金松某執甲首。以謁。跌而蹀血。信長勞之。手取芒鞋一兩。賜之。

日。吾每臨戰。懸之刀櫛。以備闕亡。今而有用矣。

【阿閉某】……阿波守。月瀨城。……近江に在り。【山田】……近江に在り。【燒尾】……近江に在り。【大嶽】……近江に在り。【高月】……近江に在り。【田邊】……近江に在り。【丁野】……近江に在り。【且應】……左様な事は無論有るまいけれど、信長公の仰せなれば、まあへて置けと云ふ態度にて、返事したる也。【誰何】……音スオカ。誰れなるぞと告める也。【刀根山】……越前に在り。【編裨】……音ヘンピ。副將。【金松某】……又四郎。【甲首】……甲を被たる者の首。左傳の桓公六年に見ゆる語。【蹀血】……音ヘンピ。蹀は、ふむ、之を履み渉る也。血の上を踏み通る。【芒鞋】……音マウアイ。芒は、稲藁の芒。わらじ。【一兩】……一足のこと。【刀櫛】……音タウハ。刀柄。刀のつか。

八月、信長は、岐阜に歸り、居ること三日にして、淺井氏の大將阿閉某が、來つて降参したので、信長は、また出發して、月瀨城を攻め落して、山田に陣取つた。淺井氏の軍勢は、燒尾を守り、朝倉氏の軍勢は、大嶽を守つて、山田と對陣して、睨み合つて居つた。信長は、勝家と信盛とを派遣して、高月に陣取つて、越前から加勢に來る路を絶ち切らしめた。朝倉義景は、此事を聞いて、二萬騎の軍勢を引き連れて、田邊に陣取つた。信長は、又、稻葉通朝を派遣して、勝家を助けしめた。燒尾の守將が、阿閉に因つて、内通して、我が織田氏の軍勢を案内したので、我が軍勢は、遂に、大嶽を圍み、夜、風雨のはげしきを冒して、手きびしく攻めたので、大嶽の守將は、そこで、降参した。信長は、信忠をして、虎御前山を守らしめ、不破光治をして、大嶽を守らしめ、そして、進んで丁野を攻め落し、使者を高月に派遣して、諸大將に注意して曰ふには、今夜、北國の軍勢は、屹度、逃げ走るであらうから、追ひ撃つて之を皆殺しにするが宜しいと曰つた。けれども、諸大將は、いづれも皆、其言を信するものは無かつたが、しばらく、應答して曰ふには、謹んで承知いたしましたと曰つた。ところが、夜なかな頭に、義景は、果して、信長の言つた通りに、陣屋を焼き拂つて、逃げ出した。すると、信長は、大聲で呼ばつて、起ち上つて曰ふには、敵が逃げ走つたぞと曰ひ、左右の者五十騎とともに馳せ出でた。すると、信長よりも先に馳せ行く者があつたので、信長は、之に向つて、何者ぞと告げた。すると、其者共が答へて曰ふには、利家で御座ります、成政で御座りますと曰ひ、其外、十餘人の者共は、いづれも皆、かほるゝ返事した。すると、信長は、戲れて曰ふには、吾は、第一番に先登しやうと思つたが、諸君に先を越されて仕舞つたと曰ひ、そこで、轡をならべて、急いで馳せ行きて、敵軍に刀根山に於て追ひつき、其副將二十三人と雜兵二千人とを斬つた。金松某は、かぶとを著たる者の首(即ち大將分の首)を手にして、拜謁したが、素足になつて血にまぶれて居つたので、信長は、之を慰勞し、手づから草鞋一足を取つて之に賜はつて曰ふには、吾は、戰場に臨むごとに、いつでも、此わらじを刀の柄にかけて、缺乏せる時の用に備へたが、只今、始めて用に立てることが出来たと曰つた。

信長兩日下十四城。雷敦賀三日。徵降將質子。進軍龍門寺。義景棄一乘谷。匿大野。勝家通朝等。分兵搜索。平泉僧徒懼。請鄉導。通朝貨土人。得義景所在。誘降其族景鏡。景鏡迫義景使自殺。信長誅黨類。撫降附。爲

政國中使<sub>ニ</sub>人齋義景首<sub>ヲ</sub>梟<sub>シ</sub>之京師。以<sub>テ</sub>降將前波長俊<sub>ヲ</sub>爲<sub>シ</sub>越前假守。明智光秀等監<sub>ス</sub>之。引<sub>テ</sub>兵返<sub>シ</sub>虎姫山。淺井長政與<sub>テ</sub>父久政保守<sub>ス</sub>兩城。信長遣<sub>シ</sub>秀吉登<sub>リ</sub>粒羅岡。絕<sub>シ</sub>兩城之間。使<sub>メ</sub>久政長政自殺<sub>ス</sub>。以其地賜<sub>フ</sub>秀吉。九月遣<sub>シ</sub>勝家攻<sub>メ</sub>鯨江。降<sub>シ</sub>六角義弼。獲<sub>テ</sub>杉谷善住。生<sub>シ</sub>埋<sub>シ</sub>之地。以<sub>テ</sub>竹鋸鋸<sub>リ</sub>其首。十一月入朝。遣<sub>シ</sub>佐久間信盛攻<sub>メ</sub>殺<sub>ス</sub>三好義繼。於是淺井朝倉六角三好皆滅。

【教賀】……越前に在り。【質子】……音チシ。人質。【龍門寺】……越前に在り。【大野】……越前に在り。【搜索】……音サウサク。さがす。【平泉】……平泉寺。越前に在り。【貨】……金錢を興へる。【土人】……土地の人。【監】……目付をする。監督する。【返虎姫山】……返は一に還に作る。【兩城】……小谷と山本と。【杉谷善住】……さきに、六角義賢の爲めに銃を以て信長を狙ひうたせんとせし者。【鋸】……のこぎる。鋸引にする。

【開】信長は、二日の間に、十四城を攻め落し、教賀に滞在すること三日にして、降参した大將どもをして、人質を差し出させ、進んで龍門寺に陣取つた。義景は、一乗谷を棄て、大野に匿れた。勝家、通朝等は、兵を分つて、義景をさがし索めたけれども、なか／＼見つからなかつたが、平泉寺の坊主は、信長の軍勢の盛んなるを見て、懼れて、案内者となりましやうと請ひ、通朝は、土地の人に金錢を興へて、義景の居る所が分つたので、其一族なる景鏡を誘うて降参させた。そこで、景鏡は、義景に迫つて、自殺せしめた。信長は、義景の徒黨同類を誅殺し、降参して附き従つた者を撫でやすじ、國中に政令を布きて人民を安堵せしめ、人をして義景の首を京都に持参して之を京都に於て獄門にかかけさせしめ、降参したる大將前波長俊を以て、越前の假りの守護となし、明智光秀等が之を監督することにし、軍勢を引き連れて、虎御前山に引き返した。淺井長政は、父久政とともに、小谷、山本の二つの城に立て籠つて守つて居つたが、信長は、秀吉を派遣して、粒羅岡に登つて、小谷、山本の二つの城の間を絶ち切りしめ、久政と長政をして自殺せしめ、其土地をば、秀吉に賜はつた。九月に、信長は、勝家を派遣して鯨江を攻め、六角義弼を降参させ、杉谷善住を生捕つたが、善住を、地中に、首だけ出して生き埋めにし、竹鋸を以て其首を鋸引にした。十一月に、信長は京都に入朝し、佐久間信盛を派遣して、三好義繼を攻め殺した。こゝに於て、淺井氏、朝倉氏、六角氏、三好氏は、いづれも皆、滅びて仕舞つた。

### 日本外史講義卷之十三終

### 日本外史講義卷之十四

賴襄子成原著 興文社編輯所講義

德川氏前記

織田氏下

天正二年正月元日。近畿將士盡賀<sub>ニ</sub>正于<sub>ニ</sub>岐阜。信長賜<sub>フ</sub>之酒。酒三行。謂<sub>テ</sub>衆曰。我有<sub>ニ</sub>佳肴。請<sub>フ</sub>侑<sub>シ</sub>飲<sub>ヲ</sub>焉。令<sub>メ</sub>左右取<sub>リ</sub>一函來<sub>シ</sub>。置之坐上。衆囑<sub>リ</sub>目焉。信長觴<sub>シ</sub>柴田勝家。而手開<sub>キ</sub>其蓋。則義景長政首也。塗<sub>リ</sub>以<sub>テ</sub>金粉。諸將皆笑曰。有此好下物。何辭<sub>シ</sub>滿酌<sub>ス</sub>也。信長曰。吾經<sub>テ</sub>略<sub>シ</sub>京畿。爲<sub>シ</sub>一患所礙。數年矣。卿等爲<sub>シ</sub>吾積<sub>シ</sub>勞累<sub>シ</sub>苦。以<sub>テ</sub>得<sub>テ</sub>致<sub>シ</sub>誅斃<sub>ス</sub>。因各賜<sub>フ</sub>刀劍。極<sub>メ</sub>驩<sub>シ</sub>而罷。佐佐成政留<sub>テ</sub>而白曰。臣無<sub>シ</sub>似<sub>シ</sub>從<sub>シ</sub>諸將之後。叨<sub>リ</sub>被<sub>シ</sub>洪恩。不知<sub>ラ</sub>所報。唯願<sub>フ</sub>君不<sub>レ</sub>自<sub>レ</sub>足<sub>レ</sub>焉。遂定<sub>シ</sub>四方也。信長大悅。握<sub>リ</sub>成政手。入<sub>リ</sub>室內。與<sub>テ</sub>談<sub>シ</sub>政治。侍史武井夕菴自<sub>レ</sub>傍贊<sub>シ</sub>之曰。不<sub>レ</sub>圖<sub>シ</sub>成政能<sub>レ</sub>爲<sub>シ</sub>此言。君莫<sub>レ</sub>忽<sub>シ</sub>焉。信長厚賜<sub>シ</sub>一人。

【天正】……正親町帝の時の年號【賀正】……賀は、禮物を以て相慶する也。年始の御慶を申上げる。【岐阜】……織田氏の本城。【酒三行】……酒が三度まはる。【宿飲】……宿は佐ける也。すむと訓ず。酒の肴にするの意。【囁目】……囁は注ぐ也。目をつけて視る。注目する。【觴】……音シヤウ。酒卮の總名なり。さかづきをさすこと。【塗以金粉】……金箔にて塗る。【好下物】……よき肴。好は善なり。下物は酒を下す者。【滿酌】……杯になみく酒をつぐこと。【経略】……経は度る也。略は治むる也。はかり治むる義。左傳の昭公七年の條に、天子経略とあり、その註に、天下を経營して四海を略有す、故に経略と云ふとあり。【二患】……二つの心配になる者。即ち淺井長政と朝倉義景とを指す。【礙】……さふ、止むる也。妨ぐる也。【累】……重なる也。【驢】……音クワン。歡と同じ。よろこび。【無似】……音ブシ。不肖と云ふが如し。ふつ、か。【叨】……みだりに、濫なり。【洪恩】……洪は大なり。大なる御恩。【不自足】……自身にこれ十分であると思はぬこと。【四方】……天下。【侍史】……御側祐筆。【莫忽】……ゆるかせることなれ。何でも無いこと、思うて輕忽に取り扱ふことなれ。【酒宴】……天正二年の正月元日に、畿内近傍の諸の將士どもは、殘らず皆、織田氏の本城なる岐阜に來り、正月元旦の祝を述べた。信長は、此人々に酒宴を賜うたが、酒杯の運ること三度に及んで、信長は、人々に向つて曰ふには、我に佳き肴があるから、それを肴として、もつと飲んでくれよと曰ひ、左右の侍臣をして一つの箱を取り來らしめて、之を座上に置くと、人々は皆、この箱に注目した。そこで、信長は、柴田勝家に杯を指して、そして、手づから其蓋を開くと、中から出たのは、朝倉義景と淺井長政の首であつて、それを金箱が塗つて、奇麗にして有つた。諸將は、皆笑つて曰ふには、此好き御肴が御座ります上は、どうして、杯になみくつがれることを辭退いたしましたしやうぞ（御酒を十分に頂戴いたさぬわけには行かぬとの意。）と曰つた。そこで、信長が曰ふには、吾れ、京都畿内をばかり治めやうと思つて居つたけれども、此二つの厄介物に妨げられて居ること、數年に及んだのであるが、御前等が、吾が爲めに、艱難苦勞を積みかさねて、それでいて、誅戮を加へて之を斃すことが出来たのであると曰ひ、因つて、各將士に刀劍を賜ひ、十分に歡樂を極めて酒宴を罷めた。佐佐成政は、あとに留まつて言上して曰ふには、私は、まことに、ふつ、か者で御座りますのに、諸將の後に從つて、みだりに、洪大なる御恩を蒙りますること故、どうして此御恩に報ゆべきかを知りませぬ。唯だ願はくは、あなたが、御自身にこれ十分であると思ひになり、遂に天下を平定せらるることを望ましく存じますと曰つた。信長は、大に悦んで、長政の手を握つて、一室の内に入り、與に政治の方法を密談した。祐筆なる武井夕庵が、傍に居つて、之を賛成して曰ふには、成政をば、たゞの人では無いとは、兼ねて思つて居りましたけれども、此れ程までの事を言ふことが出来やうとは、誠に思ひがけぬことと御座りました。この事は、皆尤至極の事で御座りますれば、あなたは、決して何でも無い事と思つて輕忽にいたされませうと曰つた。信長は、厚く成政、夕庵の二人に物を賜はつた。

二月。甲斐兵侵東美濃。圍明地城。信長與信忠出拒之。城内有叛者。城陷。乃修高野。遠利二城。令河尻鎮吉。池田信輝守之。時武田信玄既死。長尾謙信猶存。信長與武田氏絶。通好於長尾氏。厚贈之。

【明地城】……美濃に在り。【高野】……美濃に在り。【遠利】……美濃に在り。二月に、甲斐の武田氏の軍勢が、東美濃を侵略して、明地城を圍んだ。信長は、信忠とともに、出かけて之を拒いだ、城内に、織田氏に叛いて敵に内通した者があつたので、城は攻め落された。そこで、信長は、高野、遠利の二城を修復して、河尻鎮吉、池田信輝をして、之を守らしめた。その時分には、武田信玄は、はや死んで仕舞つたが、長尾謙信は、まだ存命であつたので、信長は、武田氏とは絶交して、よしみを長尾氏に通じて、厚く物を贈つて、機嫌を損ぜぬやうにした。

三月。信長入朝。寓于相國寺。詔敕從三位。任參議。以足利義政故事。奏乞東大寺所藏名香。自至多門城。遣使令截香一寸八分。而三分之。自取其一分。賜其二於諸將。四月。還京師。大坂賊出要之。擊破而過。五月。歸岐阜。

【相國寺】……京都の北に在り。【東大寺】……奈良に在り。【名香】……蘭奢待（ランシヤタイ）と名づくる者。聖武帝の時、西蕃より來りたりと云ふ上品の沈香木なり。天皇、大納言資定、中納言雅教をして、在ましめ、故事に從ひ、之を剪ると一寸八分なりと云ふ。【多門城】……大和に在り。【歸岐阜】……歸は一へ還に作る。三月に、信長は、京都に入朝し、相國寺に假り住居した。詔して、從三位に敕し、參議に任ぜられた。信長は、足利義政の故例によりて、朝廷に奏上して、奈良の東大寺に所藏して居る名香を頂戴したいと請ひ、自ら多門城に至り、使者を遣はして、其香一寸八分を截らしめ、そして、之を三つに分けて、自身に、其一つを取り、其二をば諸將に分ち賜はつた。かくて、信長は、四月に、京都に引き返したが、大坂の賊徒が、出で來つて、道に待ち伏せて居つたが、之を撃ち破つて通り過ぎ、かくて、五月に、岐阜に歸つた。

六月。武田勝頼出兵遠江。圍高天神城。徳川氏使使請援。信長。信忠將兵至荒井。會城陷。還至吉田。徳川公來謝曰。藉公餘威。得以保國至此。信長勞之曰。卿爲我守東面。以拒武田氏。使我毋東顧之患。吾得以速定京畿。卿之功也。乃令左右四人擔革囊。盛以黃金。以賜之曰。薄以酬將士之勞。乃還。

【高天神】……遠江に在り。【荒井】……遠江に在り。【吉田】……三河に在り。即ち今の豊橋。【藉】……依る。又、借ると訓ず。【勞】……ねぎらふ。慰勞する。【革囊】……音カクナウ。皮、其毛を去るを、革と云ふ。底あるを囊と云ふ。皮のふくろ。【盛】……もる。【薄】……いさ、か、少。六月、武田勝頼出兵遠江。圍高天神城。徳川氏使使請援。信長。信忠將兵至荒井。會城陷。還至吉田。徳川公來謝曰。藉公餘威。得以保國至此。信長勞之曰。卿爲我守東面。以拒武田氏。使我毋東顧之患。吾得以速定京畿。卿之功也。乃令左右四人擔革囊。盛以黃金。以賜之曰。薄以酬將士之勞。乃還。



許の意なり。【酬】... 購と同じ、むくゆる。  
 六月に、武田勝頼は、兵を遠江に繰り出して、高天神の城を圍んだ。徳川氏は、使者をして加勢を請はしめたので、信長、信忠は、兵士を引き連れて、荒井に到着したが折しも、高天神の城は、落城したので、引き返して、吉田に到着した。徳川公家康が来て、禮を陳べて曰ふに、私は、あなたの餘りたる御威光によりて、それで、國を保つてこれまでに至ることが出来たので御座ると曰つた。すると、信長は、徳川公を慰勞して曰ふには、貴殿は、我が爲めに、東の方面を守つて、武田氏を拒いで、我をして、東の方面を顧みること配なからしめたので、吾が、つぎ来らしめた、即ち二人にて一つの囊を擔いだのである。その中には黄金を一ぱい入れたものであつたが、之を徳川公に賜はつて曰ふには、いさゝか、これを以て將士どもの骨折りに報ゆるのであるから、それゝ宜しきやうに分配して下さいと曰ひ、そこで引き返した。

七月、征長島。信長之滅淺井。朝倉氏。遂攻長島。屠二城。置戍而還。遇雨。賊據險。夾射。林新三郎殿戰死之。信長怒曰。以草賊故。多亡吾良。吾必覆其巢窟。殲其醜類。以弔死者。已而長島應武田氏。信長覺之。益怒。於是與信忠將兵數萬。三道赴討。信雄與瀧川一益。九鬼嘉隆。以舟師會之。行破賊兵。而進。賊入保五城。八月。大鳥居城賊。夜乘風雨遁。柴田勝家等追擊。殲男女二千人。截其耳鼻。盛之一船。送致長島。篠橋城降。九月。長島賊出城。乘船而去。我弓銃手豫伏堤側。擊鑿之。餘衆可八百。突入我中軍。信長叔父信次。庶兄信廣。弟秀成。從弟信成。迎戰死之。賊奔大坂。遂燔殺三城男女二萬人。臭聞數里。乃以長島賜瀧川一益。食北伊勢五郡。

【長島】... 伊勢に在り。一向宗の僧徒立て籠りたり。【二城】... 別府、片岡。【殿戰】... しんがりとなつて戰ふ。【草賊】... 草野に在つて寇賊をなす者、小盗人、即ち一向宗の賊徒を指す。【長】... 長將長士。【覆其巢窟】... 盜賊の住む根據地を攻め落す。【醜類】... 賊は、つくす、皆殺しにする。醜は惡なり。類は衆なり。凶惡なる仲間共を皆殺しにする。【覺】... さとる、感づく。【五城】... 長島、篠橋、大鳥居、矢島、中江、皆伊勢に在り。【可】... ばかり。【燒】... 燒く。【北伊勢五郡】... 桑名、真辨、朝明、三重、鈴鹿。

七月に、信長は、長島を征伐した。はじめ、信長が、淺井氏、朝倉氏を滅ぼしたときに、遂に、長島を攻め、別府、片岡の二城を屠りつくし、守備兵を置いて引き返したが、途中で雨に遇つた。すると、賊徒は、之を好機會として、險阻なる處に立て籠つて、兩方から夾んで矢を射かけた。林新三郎は、しんがりとしてあとに残り、拒ぎ戦つて討死した。すると、信長は大いに怒つて曰ふには、小ぬす人の爲めに、多し我が長き將士を無くなした。吾は、是非とも、ぬす人どもの根據地を攻め落し、その惡者共を殺しつくして、戦死した者の靈を弔はうと曰つた。とかくする中に、長島は、武田氏に味方した。信長は、之を感づいて、ますます怒つた。こゝに於て、信長は、信忠とともに、數萬の軍勢を引き連れ、三道より出かけて行つて、征伐することにし、信雄は、瀧川一益、九鬼嘉隆とともに、舟軍を引き連れて、之に會合することにし、行く行く、賊兵を撃ち破つて進んだ。賊兵は、逃げ込んで、五つの城、即ち長島、篠橋、大鳥居、矢島、中江に立て籠つた。八月に、大鳥居城の賊は、夜の間に、風雨のはげしきに付け込んで、逃げ出した。すると、柴田勝家は、追ひ撃つて、男女二千人を残らず殺して仕舞ひ、その耳と鼻とを截り取つて、之を一つの船に積み載せて、長島に送り届けた。篠橋の城は、降参して、九月に、長島の賊徒は、城を出で、船に乗つて立ち去らうとした。我が弓と鐵砲との隙は、前以て、堤防のそばに居つて、撃つて之を皆殺しにした。その残つて居る者八百人ばかりは死にもの狂ひとなつて、我が本陣に突き入つた。信長の叔父信次、妾腹の兄信廣、弟秀成、いとこ信成は、迎へ戦つて討死した。賊徒は、大坂に逃げ奔つた。かくて、遂に三城の男女二萬人を燒き殺したが、その臭氣は數里の間に聞えた。信長は、そこで、長島を以て、瀧川一益に賜はり、北伊勢の五郡を領地とさせた。

三年。正月。命吏四人。巡近畿諸國。修橋道。關征。三月。信長入朝。檢廷臣采田。其賣於人者。爲償還之。四月。信長聞大坂納長島通逃。又糾合三好氏遺黨。以遙應武田氏也。乃引兵南伐。下新湊。高尾二城而返。

【吏四人】... 篠原八右衛門尉、坂井文助、高野藤藏、山口太郎兵衛尉。【關征】... 征は税なり。關所の税金。【采田】... 音サイデン。領地。【爲償還之】... 賣つた人の爲めに、買つた人に償うて、之を取りかへす。【通逃】... 音ホタウ。通は亡なり。逃げ落ちたる者。【糾合】... 音キウガフ。寄せ集める。【而返】... 返は一に還に作る。【新湊】... 伊勢に在り。【高尾】... 伊勢に在り。  
 天正三年の正月に、信長は、役人四人に言ひ附けて、畿内近傍の諸國を巡回し、橋や道を修復し、關所通行の税金を除き去つて、通行の人を便利を與へた。三月に、信長は、京都に入朝し、公卿たちの領地を檢査して、其の困窮して人に賣却した者は、爲めに償をつぐなうて、之を武田氏に味方して居ると云ふことを聞いたので、そこで、軍勢を引き連れて、南方を征伐し、新湊、高尾の二つの城を攻め落して、引き返

五月。武田勝頼大舉出參河。圍長篠城。德川氏復使使請援。信長。信忠以騎卒五萬赴之。戒其軍曰。人持杙與縵。乃詣熱田祠。祈戰勝。至岡崎。值城將奥平信昌使者曰。城兵日夜望大旆來也。信長慰勞遣歸。而縱反間曰。信長方患京畿北國不能來援。勝頼大喜。分兵備城。築壘于鷺巢山。畱一將守之。而自進二十餘町。濟瀧澤川而陣。信長至。設樂郷令將士議戰。德川氏部將酒井忠次進曰。臣請今夜間道遠出敵背。襲鷺巢壘。縱火敵營。以褫其氣。而大軍乘之。莫不勝矣。信長佯罵曰。咄。田舎兒何知。諸將皆退。信長使人陰招忠次曰。汝計可用。吾恐其漏泄。故佯叱之耳。汝宜速發。顧如毋鄉導何。忠次曰。臣即爲鄉導。請賜監吏。信長乃遣金森長近等四人從之。當是時。信長陣極樂寺。信忠陣新御堂。勒兵爲十五隊。德川公爲右先鋒。居前。佐久間信盛。木下秀吉。瀧川一益。爲左先鋒。少卻。信長下令爲柵于軍前。用杙與縵。立成。乃抽諸隊銃手。得三千。以佐佐成政。前田利家等司之。曰。勝頼恃勇無謀。而其兵喜騎戰。吾沮之以柵。而銃

斃之。彼即馳至。勿遽發銃。及其已逼。每千迭發。

【長篠】……三河に在り。【戒】……注意する也。杙……音ヨク、概、くひ。【縵】……音コウ、大案、オホナハ。【岡崎】……三河に在り。【値】……遇ふ。【奥平信昌】……長篠の城將。望大旆來也。……大旆は音タイハイ、總大將の建つる所の旗。信長の來り援くるを望む也。【反間】……まはしもの。敵の間者を利用して、味方の用をなさしむる也。たとへば、味方實は勇にして而も怯なるを示すときは、敵の間者、還りて此事を報ずるが如きを云ふ。【方】……まさきに。【鷺巢山】……三河に在り。【畱一將守之】……鷺巢の留守は、武田信實なり。【設樂郷】……三河に在り。【令將士議戰】……此時、忠次、勝頼舞（エビスケ）ヒノマヒを爲せりと、德川氏に見ゆ。【褫其氣】……褫は奪ふなり。敵の膽をとりひしむ。【咄】……音トツ。叱する辭。やい。【田舎兒】……いなかのもの。【漏泄】……音ロウセツ。秘密の洩れること。【願】……おもふに。【監吏】……目付の役人。【極樂寺】……三河に在り。【新御堂】……いなかのもの。【抽】……ぬく。抜き出す。【喜】……このむ。【沮】……はむ。妨ぐる也。【即】……まじ。

五月に、武田勝頼は、大軍を引き連れて、三河に討つて出で、長篠城を圍んだ。德川氏は、また、使者をして援兵を請はしめた。すると、信長、信忠は、騎士歩卒五萬人を引き連れて、援けに出かけたが、其時に、信長は、その軍勢に注意して、曰ふには、各人、銘々に、くひ及び大繩を持参せよと曰ひ、そこで、熱田神宮に参詣して、此度の戰爭に勝利を得んことを祈り、かくて、岡崎に到着すると、長篠城の守將奥平信昌の使者に出合つたが、その使者が曰ふには、長篠の城兵は、日となく夜となく、あなたが總大將の旗を建て、御加勢に御出でなされることを望んで居りますと曰つた。信長は、その使者をなぐさめたいはつて、歸してやり、そして、反間をばなつて曰ふには、信長は、今や、京都畿内地方の事及び北國地方の事を心配して居る眞つ最中で、到底來り援けることは出來ないと曰つた。勝頼は、之を聞いて、之を信じて、大に喜び、そこで、軍勢を分けて、城兵の來り撃つに備へ、とりでを鷺巢山に築いて、一人の大將を詰めて之を守らしめ、そして、勝頼自身は、進むこと二十數町にして、瀧澤川をわたつて陣取つた。信長は、設樂郷に到着して、諸將士を集めて合戰の計略を評議せしめた。德川氏の部下の大將なる酒井忠次が進み出で、曰ふには、私は、どうぞ、今夜、裏道からまはつて、敵軍のうしろに出でまして、鷺巢のとりでを不意撃ちし、敵の陣營に火を放つて、そして敵軍の膽を抜きたいと思ひます。そして、大軍が之につけ込んで進撃せられるときは、勝利を得るに相違ありませんまいと曰つた。すると、信長は、此計略を尤もなりと思つたけれども、わざと、罵つて曰ふには、やい、いなかの者が、何を知らうぞと曰つた。かくて、諸將士は、皆退散した。そこで、信長は、人をして、ひそかに忠次を召し寄せしめて曰ふには、汝は、速に出發するが宜しい。けれども、おもふども、吾は、此計が漏れ聞えることを恐れたので、それ故に、わざと、叱り付けたのである。汝は、速に出發するが宜しい。けれども、おもふに、道案内者が無いのは、如何しやうぞと曰つた。忠次が曰ふには、私が、道案内者となりまじやう。どうぞ、目付の役人を差遣はされよと曰つた。信長は、そこで、金森長近等四人を派遣して、忠次に從はしめた。この時に當りて、信長は、極樂寺に陣取り、信忠は、新御堂に陣取り、軍勢を勢揃へして、十五隊となし、德川公が右翼の先鋒となつて、前に居り、佐久間信盛、木下秀吉、瀧川一益が左翼の先鋒となつて、少しあとに引き退いて居つた。そこで、信長は、命令を下して、木柵を軍陣の前につくらしめたが、あらかじめ持参せる杙（クヒ）と大繩を用ひて、即座に出來上つた。信長は、又、諸隊の鐵砲方を抜き出して、三千人を得たが、佐佐成政、前田利家等を以て、之を司らしめることにし、そして曰ふには、勝頼は、勇力を恃みにして謀略の無い人であつて、そして、其軍勢は、馬に乗つて戰ふことを好んで居るから、吾は、木柵を以て之を妨げ、そして、鐵砲を以て之を斃すことにしやう。敵の軍勢が、もし、馳せ至るとも、あはて、鐵砲を打ち出してはならぬ。敵の軍勢がすでに極近い處に逼つてから、始めて、千挺づゝ、かはり番に、打ち出せよと曰つた。

二十一日。味爽。鳶巢火起。敵軍顧而擾動。信長自率司銃五人。出柵十町。發巨銃于敵中。挑戰而退。敵四將更進。逼我右先鋒。轉犯左先鋒。銃丸亂發。敵兵沮靡。敵三將敢死繼進。直犯左先鋒。破柵一層。我銃乃齊發。右先鋒以槍橫擊之。成政馳白信長曰。敵中軍旗幟搖動。信長令先鋒縱兵乘之。敵軍敗走。乃令諸軍鼓譟齊進。敵軍大潰。逐走追北。斬首一萬三千級。擠餘兵於川。獲其宗族將領二十餘人。勝賴僅以身免。參河諸城屬武田氏者。皆解走。信長收軍。不敢窮追。德川公來。謝軍門曰。今日之役。不知所謝。信長曰。卿兵最力戰。以得此捷耳。德川公因請乘勢遂入甲斐。前田利家。木下秀吉。亦以爲言。信長不可曰。我兵疲矣。吾且養力再舉。乃振旅而還。賽熱田。修其祠宇。歸美濃。

【味爽】……夜明け方。【火起】……落城して火の手があらりし也。【司銃】……鐵砲をつかさどる者。【四將】……馬場信房、山縣昌景、内藤昌豊、高坂正宣。【亂發】……むやみに打ち出す。【沮靡】……音リヒ。はみまなびく。元氣が衰へて靡きひらく。【敵三將】……四將の中、高坂正宣を除く。【敢死】……音カンシ。必死になる。生命を無き者とする。【柵一層】……層は重なり。柵一重。【旗幟動搖】……旗の動くは、人心鎮まらずおそれさざれば也。【北】……にぐる。【擠】……おしおとす。つきおとす。【川】……瀧澤川なり。【窮追】……どこまでも追つかける。【不可】……きかず。【賽】……音サイ。御禮参りする。【修】……修復する。

二十一日の夜明け方に、鳶巢のとりでに、火が燃え上つた。敵武田氏の軍勢は、ふりかへつて之を見て、亂れさわいだ。信長は、自身に、鐵砲奉行五人を引き連れて、木柵を出づること十町のところまで、敵の中に向つて、大なる鐵砲を打ち出し、戦を仕かけて退却した。すると、敵の四人の大將は、かはるく進んで、我が右翼の先鋒に近づき逼り、それから、方向を轉じて、左翼の先鋒を犯したが、我が軍の鐵砲の彈丸が、亂れ發するので、敵の軍勢は、元氣を落して開き靡いた。敵の三人の大將は、生命を無きものとして、引きつゞいて進み、直ちに我が左翼の先鋒を犯し、一重の木柵を破つた。我が軍の鐵砲は、そこで、一齊に發し、我が右翼の先鋒は、横合かり之を撃つた。成政は、馳せ至つて信長に申し上げて曰ふには、敵の中軍の旗さし物が動搖して、大分恐れ騒いで居るやうで御座りますと曰つた。すると、信長は、先鋒をして、兵を縱つて之に附け込ました。すると、敵軍は、敗走したので、そこで、諸軍に命令して、攻め太鼓を鳴らし、ときの聲をあけて、一齊に進んだ。敵軍は大に崩れた。そこで、我が軍は、敵の軍勢の逃げ走るを追つかけて、首を斬ること、一萬三千級で、残つて居る軍勢をば、瀧澤川に追ひ込んで、武田氏の一族や將校など二十餘人を討ち取り、勝賴は、やつと、其身を以て免れた。三河の諸城の、これまで武田氏に附いて居つた者は、皆、兵備を解いて逃げ走つた。信長は、軍勢を引きまとめて、敢て何處までも追ひつめやうとはしなかつた。すると、徳川公は、軍門に來つて御禮を述べて曰ふには、今日の合戦は、實に御禮の申し上げやうも御座りませぬと曰つた。信長が曰ふには、貴殿の軍勢が、一番、力と請うた。前田利家、木下秀吉も亦、此事を申し上げた。けれども、信長は、承知せずして曰ふには、我が軍勢は疲勞して居る。されば、吾は、まづ、兵力を養つて再舉を圖ることにしやうと曰ひ、そこで、勢揃へして引き返し、熱田神宮に御禮参りを爲し、その宮居を修復して、美濃に歸つた。

於是。令信忠攻岩村城。越前假守前波長俊失政。朝倉景健等。與一向賊作亂。據龍門。虎杖。木理。火燧。水津。河野諸城。以遙應大坂。八月。信長。信忠。乃統公族諸將兵凡八萬。北伐至敦賀。會大雨。信長潛召木下秀吉曰。敵必不設備。汝潛以舟師取河野浦。擊其不意。遂破龍門。則木理諸城不攻自破矣。乃以明智光秀等助之。夜發敦賀。已而河野。龍門火起。木理諸城顧視之。皆棄守潰走。諸將邀擊大敗之。柴田勝家等。拔鳥羽城。入金森長近等。自德山口入。屠三城。而丹波。若狹將士。以兵艦數千艘來會。縱火沿海。信長乃進踰木理嶺。至龍門。景健斬賊帥下間和泉等。乞降。弗許。誅之。景健從士三人。伏刃殉之。信長恤三人妻孥。分兵索賊黨。斬獲

五萬人。進略加賀。越前。十餘日而定。九月。信長返至北莊。大論戰功。令梁田出羽守檜屋。大聖寺一城。以鎮加賀。分越前三郡。賜前田利家。佐成政。及金森。原。不破。武藤等。以其餘八郡。盡賜柴田勝家。城北莊。足羽。使居焉。身自經畫之。因敕勝家曰。越前。北陸之要扼。而當長尾氏之衝。吾選於諸將。以命汝。汝其勉之。夫守國之道。不當徒恃勇武。當恩威並施。以服民心。乃申條制曰。毋厚賦歛。毋征關市。毋侮士民。毋偏訟獄。毋遺武備。毋喜游田。皇人之邑。爲亂賊所掠者。當據印券還付。國內間地。歸我倉廩者。以待功勞之士。不當徒費。凡我所令有不便者。輒來爭之。我將改焉。因命不破。佐佐。前田等。與勝家相檢察。以爲國政。然後班師岐阜。

【岩村】……美濃に在り。【失政】……政治上に失策が多い。【龍門】……【虎杖】……【水津】……【河野】……並に越前に在り。【敦賀】……越前に在り。【鳥羽】……越前に在り。【徳山】……美濃に在り。【沿海】……音エンカイ。海に沿うたる土地。【賊帥】……音ツクスキ。賊の大將。【三人伏及殉之】……殉は死に從ふ也。三人は、山内源左衛門及び金子新之丞父子。【返】……一に還に作る。【北莊】……越前に在り。【檜屋】……大聖寺。……並に加賀に在り。【原】……彦次郎。【不破】……彦三。【武藤】……宗左衛門。【足羽】……加賀に在り。【經畫】……音ケイワク。經營區畫。城普請の繩張をなし見積りを立てること。【救】……誠む。申し渡し戒める。【要扼】……大切なる防禦の地。【長尾氏】……上杉氏はもと長尾氏と云ふ。【衝】……音ショウ。衝路、打つて出る要路。【恩威】……恩惠威光。【申條制】……簡條書にしたる法度を述べると。【賦歛】……音フレン。取り立てること。【關市】……關所や市場。【遺】……わする。【游田】……田は暇と同じ、獵なり。かりをして遊ぶこと。【皇人】……廷臣、公卿。【印券】……券は契なり、證書の類。【間地】……地主の無き土地。【相檢察】……互に吟味し合ふ。

【班】……かへす。之を機會とし、一向宗の賊徒とともに、争亂を起して、龍門、虎杖、木理、火燧、水津、河野の諸の城に立て籠つて、遂に大坂の一向宗の賊徒に味方した。八月に、信長、信忠は、そこで、一族諸將の軍勢凡て八萬人を統轄して、北の方を征伐し、敦賀に到着したが、折しも大雨が降つたので、信長は、木下秀吉を召し出して曰ふには、こんな大雨降りの時には、敵は、屹度、守備をして居らぬであらうから、汝は、ひそかに、舟軍を以て河野浦を攻め取り、敵の不意を撃つて、遂に龍門を撃ち破つたならば、木理などの諸城は、攻めずとも、自ら破れるであらうと曰ひ、そこで、明智光秀等をして、秀吉を助けしめ、夜の間に、敦賀を出發した。とかくする中に、河野、龍門の諸城に火の手があつた。木理などの諸城は、ふり向いて之を視て、皆、守備を棄て、崩れ亂れて逃げ走つた。諸將は、迎へ撃つて大に之を破つた。柴田勝家等は、鳥羽城を攻め落し、加賀に討つて入り、金森長近等は、徳山口より入り、三つの城を居り殺し、そして、丹波、若狹の將士どもは、兵船數千艘を引連れて、來つて會合し、海邊の村々に火を放つた。信長は、そこで、進んで木理峠を踰えて、龍門に至ると、景健は、賊の大將下間和泉等を斬り殺して、降参せんことを乞うたけれども、信長は、許さずして、景健を誅殺した。景健の郎從三人は、及んで伏して、其主君に殉死した。信長は、その忠節に感じ、この郎從三人の妻子をあはれみ、之を扶助してやつた。信長は、それより、兵を分つて、賊の一味の者をさがし求め、斬り殺したり生捕つたりした者が、五萬人に及び、進んで加賀を切り取つた。かくて、加賀、越中は、わづかに、十餘日にして平定した。九月に、信長は、引き返して、北莊に至り、大に戦功を評議し、梁田出羽をして、檜屋、大聖寺の二つの城を守つて、加賀を鎮撫せしめ、越前の三郡を分つて、前田利家、佐佐成政及び金森原、不破、武藤等に賜はり、其外の八郡をば、残らず柴田勝家に賜はり、北莊と足羽とに城を築きて、ここに居らしめることにし、信長が、自身に、其城の繩張見積をなし、因つて、勝家を戒めて曰ふには、越前は、北陸道の重要な防禦地であつて、長尾氏の衝き來るべき路に當つて居るのである。それ故に、吾は、諸將の中より選んで、此重要な役目を汝に申し附けたのである。されば、汝は、其積りで、しつかりやれよ。一體、國を守るの道は、徒に武勇のみを恃みとして、力を以て推しつけるべき筈のものではなく、恩惠と威光とを並び施して、人民の心を服すべき筈のものであると曰ひ、そこで、簡條書にしたる掟を述べ聞かせ曰ふには、人民から厚く取り立て、民力を弱らせるやうにしては成らぬ。關所や市場から税金を取り立て、人民の迷惑になるやうにしては成らぬ。士民を輕んじ侮つて粗末に待遇しては成らぬ。公事裁判に於て依怙蟲鼠のことがあつては成らぬ。武備をわすれて等閑にしては成らぬ。游獵を好んで己の職分を忘れては成らぬ。朝廷の公卿達の領地の、亂逆の賊徒の爲めに掠め奪はれたる者は、印鑑の捺してある證書に據つて本の主に還し與ふべきである。國內の無所屬地から出づるところの米穀の我が倉庫に入る者は、之を貯へおきて、他日功勞ある人に與へることにして、決してむだに費しては成らぬ。すべて、我が指圖するところの事で、便利ならざることがあつたならば、いつでも直に、來つて之を言ひ争へよ。さすれば、我は之を改め直すであらうと曰ひ、因つて、不破、佐佐、前田等に言ひ附けて、勝家と、互に吟味し合つて、國の政治を爲さしめることにし、然る後に、軍勢を岐阜に引き返した。

十月。入朝。廷臣二名來迎于澤山。詔聽昇殿。超拜右大臣。信長固辭。卽任權大納言。兼右近衛大將。信長從弓部百人。入拜謝。因賜宴於御前。東西



四月。信長入朝。詔使修二條城趾。以爲館焉。數年而成。不敢自館。請獻之皇太子。居焉。

【徙治】…治所を徙す。【董役】…董は、たゞす。工事を監督する。【課】…割りつける。【天主閣】…城郭の一部を爲す建築、櫓の類にして、殊に廣大なるもの、三層又は五層、七層より成る。大抵本丸の中央に造らる。天主とは、帝釋天の義にして、帝釋天は、須彌三十三天の主にして、其絶頂に居る。天主閣は、之に象りたるものなり。天主はまた耶穌教の神の義に用ふれども、天主閣の天主は梵語より出づ。我國に天主閣あるは、耶穌教渡來の以前なるを以て知るべし。【七層】…七階造り。【邸第】…諸士の屋敷。

【附】天正四年の正月に、信長は、治所を近江の安土山に移し、以て長尾氏の來襲に備へやうと思つて、惟住長秀をして工事を監督せしめ、畿内及び尾城、美濃、若狹、越前など十一箇國の大夫に割りつけて、天主閣を築き上げることにした。その天主閣は、七階造りであつて、高さは七丈あつた。諸將士の屋敷を其山の下に、布きならべ、随分宏壯なる構であつた。信忠をして岐阜に居つて、武田氏に備へしめた。この年に、信忠は、從四位下に敘せられ、間もなく、從四位上に進められた。四月に、信長は、京都に入朝した。詔して、二條の城の跡を修復してその旅館にあてしめられたが、數年にして落成した。けれども、信長は、敢て自身に其處に居らざして、天子に請うて、之を皇太子に獻上し、皇太子の御座所とした。

時大坂復叛。與武田。長尾。毛利氏相結。信長遣細川藤孝。荒木村重。惟任光秀。原田直正。筒井順慶。將兵三萬赴討。令佐久間信盛等守天王寺壘。賊壘于木津。難波。舟船往來。信長戒諸將曰。必取木津。直正率降將三好康長。及根來寺兵攻之。難波賊以銃手要之田中。先鋒敗走。直正戰死之。五月。賊遂以萬餘人圍天王寺。信盛與光秀。順慶等固守拒之。梶川彌三郎從在城内。數出力戰。時溝壁未成。乃刺殺牛馬。張其皮代壁。以扞矢石。信長聞急。方浴。浴衣上馬。與百餘騎赴援。至若江。兵衆者三千。分爲

三隊。命先鋒於村重。村重辭。信長曰。然則乃公爲之耳。乃自雜輕卒。指麾而進。敵矢丸如雨。信長傷足。怒而益進。城兵望見其旗。大喜。開門出戰。夾擊破賊兵。賊兵猶布陣不退。信長欲再戰。諸將諫曰。衆寡不可敵。俟我兵盡來。然後戰。信長叱曰。機可失乎。合兵爲二隊。復擊大破之。追北至大坂城門。斬首二千餘級。乃整軍以備敵返襲。築壘十所。以環大坂。凱旋若江。

【天王寺】…攝津に在り。【木津】…難波…並に攝津に在り。【根來寺】…紀伊に在り。【城内】…天王寺城内。【扞】…ふせぐ。【若江】…河内に在り。【乃公】…音ダイコウ。信長自ら稱する也。われ、おのれ、自分、即ち目下の者に對して云ふ辭。【環大坂】…とりでを以て大坂を取り巻く也。

【附】その時に、大坂の一向宗の賊徒は、また信長に叛いて、武田、長尾、毛利の諸氏と相結託した。信長は、細川藤孝、荒木村重、惟任光秀、原田直正、筒井順慶を派遣して、三萬人の軍勢を引き連れて、出かけて行つて征伐せしめ、佐久間信盛等をして、天王寺のとりでを守らしめた。賊軍は、木津と難波とに、とりでを築いて、舟にて互に往來して居つた。信長は、諸將に注意して、曰ふには、是非とも木津を攻め取れよと曰つた。そこで、直正は、降参したる大將三好康長及び根來寺の兵を引き連れて、木津を攻めた。難波の賊徒が、鐵砲隊を以て、之を田の中に待ちうけて、邀撃したので、先鋒は負けて走り、直正は、戦つて討死した。五月に、賊徒は、遂に萬餘人を引き連れて、天王寺を圍んだ。信盛は、その時に、天王寺のとりででは、溝も城壁も未だ出来上つて居らなかつたので、そこで、牛や馬を刺し殺して、其皮を張りつけて、壁の代りとし、以て敵の矢や石をふせいだ。信長は、天王寺のとりでの危急なることを聞いたときには、折しも丁度、入浴中であつたが、浴衣(ユカタ)のまゝで、馬に乗り、わづかに百餘騎とともに出かけて行つて援けた。若江に到着したところに、軍勢の集まること三千人であつた。信長は、それを分つて三隊となし、其先鋒を村重に命じたが、村重は辭退した。すると、信長が曰ふには、さう云ふ譯ならば、乃公が先鋒にならうと曰ひ、そこで、自身に、足輕の中に雜り、諸隊に指圖して進撃した。敵賊徒の矢や鐵砲の丸が雨の降るが如くであつて、信長は、足に傷を受けたが、そこで、怒つてますます進んだ。天王寺の城兵は、信長の旗を望み見て、大に喜んで、城門を開いて、出で戦ひ、夾み撃ちにして、賊兵を破つた。賊兵は、それでも猶ほ陣を布きつらねて退却しなかつた。そこで、信長は、再び戦はうとすると、諸の大將たちが諫めて曰ふには、敵は多勢、味方は小勢、とても叶はぬから、我が軍勢の残らず皆來るを待つて、然る後に戦ひなされよと曰つた。すると、信長は叱り付けて曰ふには、この好き機會をば失ふとが出來やうぞと曰ひ、軍勢を合はせて、二隊となし、ふたたび、撃つて大に賊兵を破り、逃げ走るを追う

て、大坂の城門に至り、首を斬ること二千餘級に及んだ。そこで、軍勢を整頓し、以て敵兵の引き返し襲ふに備へ、とりでを十箇所に築いて、以て大坂の四邊を取り巻くやうにし、そして、かちどきをあげて、若江に還つた。

六月。歸安土。休兵二十日。就役。七月。天主閣成。十一月。入朝。詔進正三位。拜内大臣。固辭。不許。十二月。獵尾張。參河。

六月、信長は、安土に歸り、兵士を休息せると二十日間にして、それから、工事に取れり、七月に、天主閣が落成した。十一月に、信長は、京都に入朝した。詔あつて、正三位に進め、内大臣に拜せられたが、信長は、固く辭退したけれども、許されなかつた。十二月に、信長は、尾張、三河に山獵をした。

五年。正月。入朝。二月。紀伊賊雜賀孫一作亂。應大坂。信長招降賊將雜賀三緘。根來杉房。以爲鄉導。率諸軍南伐。自二道入。拔貝家及中野。三月。孫一降。請攻大坂。自效。許之。置戍于左野。而還。四月。能登。越中賊起。長尾氏不能制。信長聞之。招降能登人長重連等。乘機略地。七月。長尾謙信來攻重連。重連弟連龍來告急。乃遣羽柴秀吉等。助柴田勝家赴救。秀吉不告而返。信長譴不許見。

五年、正月、入朝。二月、紀伊の賊徒なる雜賀孫一が、亂を作して、大坂なる一向宗の賊に味方した。信長は、賊の大將なる雜賀三緘と根來の杉の坊と云ふ坊主とを招き降し、案内者となして、諸軍を引き連れて、南方を征伐し、二つの道から討つて入り、貝塚及び中野を攻め落した。三月に、孫一は降参し、大坂を攻めて其功を以て自分の罪を償はんことを請うたので、之を許し、守備兵を左野に置いて引き返した。四月に、能登、越中に賊徒が起つたけれども、長尾氏は、之を抑へつことが出来なかつた。信長は、此事を聞

いて、能登の人長重連等を招きて降参させ、この好き機會につけ込んで、土地を切り取り取らせた。七月に、長尾謙信が、來つて重連を攻めた。重連の弟なる連龍が、來つて危急なることを告げた。信長は、そこで、羽柴秀吉等を派遣して、柴田勝家を助けて、出かけて行つて援けさせた。すると、秀吉は、盾をなさずして引き返した。信長は、之を譴責して、對面することを許さなかつた。

八月。松永久秀叛。應大坂。初久秀之降也。信長不許。曰。彼智勇有餘。而奸佞無比。飢則伏。飽則起。彼已亂。足利氏亦欲亂我家乎。佐久間信盛曰。彼事暗主。乃能如此。爾得主公駕馭之。何能爲也。宜且撫納之。以示天下廣可也。從之。德川公嘗謁信長。見一老人侍側。問其爲誰。信長笑曰。此松永彈正者也。此夫爲人所難能者。弑公方一也。叛二好氏。一也。燔大佛殿。三也。久秀俯伏流汗。意不自安。久秀有茶鏝。名平蛛。信長欲得之。久秀靳不獻。於是與諸將俱成大坂。遂叛去。據志貴城。信長遣侍史楠友閑。往問其意。久秀弗答。九月。乃令信忠將數萬騎討之。細川藤孝。惟任光秀。筒井順慶等。別攻其屬城片岡。藤孝二子。忠興。興正。猶幼。先登獲首級。諸軍從之。遂拔之。與信忠合圍。志貴。久秀潛遣使與雜賀。大坂。約期夾攻。使者誤入。佐久間信盛營。信盛捕獻之。信忠喜曰。是天授也。乃令死士二百僞雜賀。援兵。夜至城門。門開而入。比及二城。信忠鼓衆齊登。

二百人呼譟應之。信忠遂入。蹙久秀于天主閣。久秀縱火抱所愛茶鑪自燒殺。其子久通以下皆被捕誅。

【飢則伏飽則起】……志を失ひ勢屈するときは降服し、勢を得るときは恩義を忘れて背くこと。曹操、呂布を評して、「譬へば鷹を養ふが如し、飢うれば則ち人に付き、飽けば則ち颯り去る」と曰ひたると、其意同じ。【暗主】……暗昧なる主君。【駕馭】……引きまはしつかふこと。【且】……しばらく。【示天下廣】……度量の廣大なることを天下に示す。【此夫】……此男。【弑公方】……將軍義輝を弑せしを云ふ。【叛三好氏】……三好氏は其主家なり。【大佛殿】……奈良の東大寺に在り。【俯伏】……音フツク。うつぶしになること。【茶鑪】……鑪は音サウ。釜の屬、耳あり、三足あり。茶の湯の釜。【新】……音ナリ。をしむ。【志貴】……河内に在り。【補友閑】……宮内法印。【片岡】……河内に在り。【天授】……天より授けたまひし幸運。【二城】……二の丸。【燈】……攻めつめる。【抱所愛茶鑪自燒殺】……死すとも、その茶釜を信長の手にわたさじとなり。

八月に、松永久秀が、叛いて大坂の一向宗の賊徒に味方した。はじめ、久秀が降参したときに、信長は、その降参を許すまいと思つて曰ふには、彼れ久秀は、智略と勇氣とは、餘る程有るけれども、奸惡佞邪なること比類が無いほどで、飢えて意の如くならざるるときは、人に服従するけれども、飽きて意の満つるときは、起ち上つて背くのである。彼れ久秀は、すでに足利氏を亂して仕舞つたが、我が家をも亂さうとするのであるかと曰つた。佐久間信盛が曰ふには、彼れ久秀は、暗愚なる主君に事へたので、あんな事を仕出來たので、御座りませぬ。あなたが之を引きまはして御使ひなされるならば、何程の事を致すことが出來まじやうぞ。されば、しばらく之を撫でやすんじ降参を御許しなされて、御度量の廣大なることを天下に御示しなされるが、宜しう御座りませぬと曰つたので、信長は、此言に従つて、久秀の降参を許した。徳川公が、あるとき、信長に謁見したが、一人の老人が其側に侍坐して居るのを見て、この老人は誰であるかと、信長に問うた。すると、信長は笑つて曰ふには、此れは松永正と云ふ者で、御座る。この男は、人の能くし難いほどの事を爲し遂げたことが三つある。公方を弑害した事が、その第一である。主人の三好氏に叛いた事が、その第二である。大佛殿を燒き拂つた事が、その第三である。久秀は、うつぎして、仰ぎ見ること能はずし、汗を流し、これが爲めに、その心の中には、安心して居らなかつた。又、久秀は、平駒と名づくる茶釜を持つて居つたが、信長が之を得んことを望んだけれども、久秀は、惜んで献上しなかつた。こゝに於て、久秀は、諸大將と與に大坂を守備して居つたが、とうとう叛きて去り、志貴城に立て籠つた。信長は、祐筆の補友閑を差し遣はして、行きて久秀の心を問はしめたが、久秀は、何とも返答しなかつた。九月に、信長は、そこで、信忠をして數萬騎の軍勢を引き連れて之を征伐せしめた。細川藤孝、惟任光秀、筒井順慶等は、別に、その附屬したる城片岡を攻めた。藤孝の二子忠興、興正は、まだ幼少であつたが、先登して敵の首級を得た。諸軍は、之に従つて、奮戦して、遂に片岡を攻め落し、かくて、信忠と會合して、志貴を圍んだ。久秀は、ひそかに、使者を差し遣はして、雜賀、大坂と、期日を約束して、信忠を夾み攻めやうとした。その使者が、誤つて佐久間信盛の陣屋に入つた。信盛は、之を捕へて差し出した。すると、信忠は喜んで曰ふには、これは、天の授けたまへる幸運である。と曰ひ、そこで、決死の士二百人をして、雜賀よりの援兵であると偽り稱して、夜、志貴の城門に至つた。敵は、之を信じて、城門を開いたので、我が二百人の決死の士は内に入つた。かくて、二の丸に及ぶころに、信忠は、攻め太鼓を鳴らして、衆をばげまして、一齊に城壁に登ると、二百人は、大に呼ばり、之に應じ、信忠は遂に城に入り、久秀を天主閣の内に推しつめ

た。久秀は、火を放つて、城を燒き拂ひ、兼て愛蔵せし茶釜を抱いて、自ら燒け死んで仕舞つた。其子の久通以下、皆、捕へて誅殺せられた。

信忠入朝。廷臣傳詔。叙從二位。任左近衛中將。聽昇殿。信忠稽首曰。天恩隆渥。無物可比。雖然。臣不敢輒受。請告之信長。然後奉受。強之不肯。使者還報。天子動容嘉賞。聽其所言。信長答書曰。久秀老猾。汝一舉斃之。汝功多矣。宜奉詔也。信忠乃入朝拜謝。觀安土而歸。岐阜。是役也。筒井順慶最有功。信長賜之大和。十一月。信長入朝。進從二位。轉右大臣。

【稽首】……音ケイシユ。下拜して首、地に至る也。【隆渥】……音リウワク。厚き也。【動容嘉賞】……かたちをあらためて信忠が孝心深くして功に矜らぬことをほめたまふ。【老猾】……音ラウワク。猾は狡滑なり。年よりて惡がしきこと。俗に古狸と云ふが如し。【觀】……音ケン。下の者が上の人に見ゆること。安土に居る父信長に見ゆる也。

信忠は入朝した。公卿が、天子の御詔を傳へて、信忠を、從三位に叙し、左近衛中將に任じ、昇殿を聽された。信忠は、拜伏して曰ふには、天子様の御恩の手厚きことは、之に比較すべき物は御座りませぬ。けれども、私は、敢て即座に之を御受けすることを致しませぬ。何卒、此事を父信長に告げまして、その後、恩命を拜受いたしましたやうと曰つた。御使の公卿は、これを強ひたけれども、信忠は承知しなかつた。御使の公卿は、還つて此旨を報告すると、天子様は御かたちを改めて、其心がけの立派なることを嘉賞せられ、その言ふまゝになされた。かくて、信長は、信忠に返事して曰ふには、久秀は、年寄りて世事になれたるわがしき男である。汝は、一いゝさにて之を打ち斃したのは、汝の功勞も多しである。されば、御詔を奉じて官爵を受け奉るが宜しいと曰つた。信忠は、そこで、入朝し、天恩の忝きことを拜謝し、安土に往きて父信長を見舞ひ、そして岐阜に歸つた。この合戦には、筒井順慶が、一番手柄があつたので、信長は、之に大和を賜はつた。十一月に信長は、京都に入朝した。從二位に進められ、右大臣に轉せられた。

信長略定畿内。獨大坂未服。毛利氏前納。足利義昭。終與我絶。又援大坂。爲餽糧食。備前浮田氏屬。毛利氏。東窺播磨。播磨人赤松義祐。別所長治。小寺政職。黑田宗圓。皆求援於我。宗圓子孝高爲使者。因羽柴秀吉以通。



信長。信長譴秀吉之敗於北陸也。於是命西征大將。使略山陽。山陰。以償其罪。秀吉感奮。戰播磨有功。十二月。信長獵參河。令菅谷長賴留守安土。以名刀寶器授之。戒曰。秀吉來則與之。既歸而秀吉至。六年正月。饗信忠及秀吉等十二人于茗室。親餽之。終率以登天主閣。曰。所以就此城者。卿等力也。又遣秀吉西征。四月。辭兩職。時長尾謙信已死。信長乃令北陸降將齋藤氏。神保氏。與飛彈國主姉小路氏。并力以定越中。遣惟任光秀。略丹波。細川藤孝略丹後。

【毛利氏】……毛利輝元(醜)……(醜)と同じ、おくる。【浮田氏】……直家(孝高)……如水と號す。【謙】……責むる。秀吉之敗於北陸……さきに、告げずして還りしときの本、本年七月に在り。【感奮】……ありがたく思つて奮發する。【茗室】……茶室、數寄屋。【親餽之】……自身に茶を點する。【就】……成す。【兩職】……右大臣と右近衛大將(齋藤氏)……新十郎(神保氏)……越中守(姉小路氏)……中納言頼綱。信長は、畿内を切り取り平定したが、大坂の一向宗の賊徒だけが、未だ服従しなかつた。毛利氏は、さきに、足利義昭を納れて、之をかまひ、とうとう、我が織田氏と絶交し、又、大坂の一向宗の賊徒を援けて、その爲めに、兵糧を贈つた。備前の浮田氏は、毛利氏に附き従つて居つて、東の方播磨をつけねらひ、其すまに乘じて之を攻めやうとして居つた。そこで、播磨の人赤松義祐、別所長治、小寺政職、黒田宗圓は、いづれも皆、加勢を我が織田氏に求めた。宗圓の子の孝高が、使者となつて、羽柴秀吉に因りて其趣を信長に通じた。信長は、秀吉がさきに北陸道に於て敗北したことを譴責して、對面することを許さず、置いたが、こゝに於て、西方征伐の大將を命じ、山陽道、山陰道を切り取つて以て其罪をあがなはしめることにした。秀吉は、感激奮發し、播磨に戦つて、手柄があつた。十二月に、信長は、三河に游獵したが、それについて、菅谷長賴をして留りて安土城を守らせ、名刀や寶器を預け置き、之に言ひ付けて曰ふには、秀吉が来たならば、之を與へよとつて置いた。信長が、すでに獵を終りて安土に歸つた後に、秀吉は到着した。六年の正月に、信長は、信忠及び秀吉等十二人を茶室に於て饗應し、自身に茶を點じ、つひに、諸人を引きつれて、天主閣に登つて曰ふには、此城を斯の如く成就させたのは、皆、汝等の力である。と曰つた。信長は、又、秀吉を派遣して、西方を征伐せしめた。四月に、信長は、右大臣と右近衛大將との兩職を辭退した。この時に、長尾謙信は已に死んで仕舞つたので、信長は、そこで、北陸道の降参したる大將齋藤氏、神保氏をして、飛彈の國主姉小路氏と、力をあはせて、越中を平定せしめることにし、惟任光秀を派遣して丹波を切り取りしめ、細川藤孝を派遣して丹後を切り取りしめることにした。

五月。毛利輝元發大兵。至熊川。秀吉告急。信長欲自赴援。諸將止之曰。臣等先往。詳其地形險易。然後迎駕。乃令荒木村重赴援。又遣信忠。信雄。信孝。信包。率諸將繼之。六月。京師大水。信長入朝。秀吉來謁。具白軍狀。信長命之曰。敵兵多食足。我軍與之曠日持久。特疲力耳。不若引兵按定播磨。待時進取。秀吉乃去。傳令於諸將。信忠還兵。攻下神吉。志方諸城。令秀吉守之。以攻三木城。三木與大坂海路相通。信長乃命九鬼嘉隆。以大艦數十艘。自伊勢廻紀伊。擊破雜賀賊船。奪三十餘艘。以傳界浦。九月。信長入朝。南巡大坂。獵于阿部野。十月。召嘉隆習水戰。觀之。自是三木大坂援路遂絶。

【熊川】……播磨に在り。【險易】……音ケンイ。險阻なると平坦なると。【具】……つぶさに、一部始終。【軍狀】……いくさの様子。【曠日持久】……久しうつづくして日數を経るまで持ちこたへる。【按定】……按撫して平定する。【鎮定す】……【神吉】……【志方】……【三木】並に播磨に在り。【傳】……到る。【界浦】……和泉に在り。【阿部野】……攝津の住吉と天王寺との間に在り。【五月】……五月に、毛利輝元は、大軍を繰り出して、熊川に到着した。秀吉は、危念なることを信長に報告した。信長は、自身に出かけて援けやうと思つたが、諸大將が之を諫め止めて曰ふには、私共が、先づ往きまして、其土地の形勢の險阻なるかを明細に取りしらへまして、然る後に御出でを願ひましやうと曰つたので、そこで、荒木村重をして赴き援けしめ、又、信忠、信雄、信孝、信包等を派遣して、諸將を引き連れて、村重のあとに繼がしめた。六月に、京都に大水があつたので、信長は入朝した。秀吉は、京都に來つて謁見し、詳しく戰の様子を申し上げた。すると、信長は、之に申し附けて曰ふには、敵は、軍勢も多く、兵糧も十分にあること故、味方の軍勢が、之と對陣して、むなしく時日を送つて久しき間にわたるときは、たゞ力を疲勞させるだけである。それよりは、軍勢を引き上げて、播磨を按撫平定し、時機の至るを待つて進み取るが宜しいと曰つた。秀吉は、そこで、立ち去つて、命令を諸將に傳へた。信忠は、軍勢を引き返し、神吉、志方の諸城を攻め落し、秀吉をして之を守らしめ、それから、三木城を攻めた。三木は、大坂と、海から、互に交通して居つた。信長は、そこで、九鬼嘉隆に申し附け

て、大船數十艘を以て、伊勢から紀伊に廻り、雑賀の賊船を撃ち破り、三十餘艘の船を奪ひ取り、そして、界浦に到着した。九月に、信長は、京都に入朝し、それから、南に行き、大坂を巡廻し、阿部野に於て獵をなし、十月に、嘉隆を召し寄せて、舟いくさを練習させて、之を見物した。これより、三木と大坂との間の、援け合ふ路は、遂に絶えて、各々孤立の姿になつた。

荒木氏士人有難於大坂者。監吏以告曰。村重與大坂有私。信長不信。曰。村重微者也。吾擢以爲攝津守護。何苦而反。母乃訛傳邪。明智光秀嫉村重以新進聲績出己右也。力媒藥之。信長使人詰村重。村重驚愕。欲面陳謝之。家臣皆諫不聽而往。光秀馳書止之於途曰。主公怒弗可犯。足下何自投虎口爲。村重乃還。據伊丹城叛。應毛利氏。欲與三木城夾攻秀吉。十一月。信長自將討村重。信忠以下皆從。至郡山。高槻城主高山友祥。茨木城主中川清秀。皆屬村重。信長聞友祥崇天主教也。召教主伴天連者。使諭友祥。友祥乃降。信長自脫衣衣之。賜芥川郡。清秀聞之。亦降。進至昆陽。屠兵庫。秀吉來說村重改圖。村重弗聽。十二月。圍伊丹。不克。信長恐其損兵。築長圍。令池田信輝。瀧川一益。蒲生氏郷等守之而還。

【釋】音テウ。米を賣ると。【監吏】自付の役人。【有私】秘密なる關係がある。内通して居る。【擢】ぬきんづ。【訛傳】音クワデン。間違つた風聞。【新進】新規に奉公したる者。【聲績】名聲功績。評判と手柄。【力】つとめて。【媒藥】音バイケツ。媒は酔なり。藥は麴なり。その罪を醸し成す。【面】まのあたり。【諫謝】言ひわけける。【投虎口】至つて危きことを云ふ。身を虎口に投ずるときは、噬まる。ことは必然なり。故に、危きところに往くに喩ふ。【伊丹城】攝津に在り。【郡山】高槻。【茨木】並に攝津に在り。【天主教】耶穌教なり。【伴天連】葡萄牙語の轉訛したる者にして、父の義、即ち宣教師の稱號なり。之を人名とした

るは、誤なり。【脱衣衣之】降りたる者を厚く待遇する也。【芥川郡】攝津の島上郡に芥川あれども、芥川郡なし。恐らくは郡の字は衍ならんか、或は城の字の訛ならんか。信長記にも、芥川郡とあれば、こゝに芥川郡としたるは、信長記に據りたるなるべし。又この織田氏記は、多くは信長記に據りたるなるべければ、讀者若し信長記を參看せば、大に益するところあるべし。こゝに附言す。【昆陽】兵庫。【攝津に在り】改圖……心を改める、考へ方を變へる。

荒木氏の侍で、大坂に米を賣り出した者があつた。自付の役人が、此事を信長に報告して曰ふには、荒木村重は、大坂と秘密の關係があるらしう御座りますと曰つた。けれども、信長は、之を信ぜずして曰ふには、村重は、もつと身分の微賤なる者であつたのを、われが、それを抜き出して、攝津の守護となしたのであるから、何を不足に思うて謀叛することが有らうぞ。これは、間違つた風聞であるであらうと曰つた。明智光秀は、村重が新規に奉公したので、評判も功勞も、皆、自分より劣る居るのを、嫉ましく思つて居つたので、力を極めて、其罪の成り立つやうに讒言した。そこで、信長は、人をして村重に此事を責め問はしめた。すると、村重は、大に驚いて、謁見した上で之を言ひわけして御詫びしやうと思つたが、家來どもは、皆、諫め止めたけれども、聞き入れずして出掛けて行つた。すると、光秀は、使を馳せて、手紙を送り、村重を途中に遮り止めて曰ふには、主君(即ち信長)の御怒は、なかく激しくして、犯すことは出来ぬ位で御座る。貴殿は、どうして、自分から虎の口に飛び込むやうなことをなされるかと曰つた。村重は、そこで、引き返して、伊丹の城に立て籠つて、叛旗をひるがへし、毛利氏に味方して、三木城とともに秀吉を夾み攻めやうとした。十一月に、信長は、自身に、大將となつて、村重を征伐し、信忠以下の人々は、皆、之に従つて、郡山に到着した。高槻の城主高山友祥、茨木の城主中川清秀は、いづれも皆、村重に附き従つて居つた。信長は、友祥が天主教を信仰して居るといふ事を聞いたので、教主のバテレンと云ふ者を召し寄せて、この者をして友祥に説き諭さしめた。友祥は、そこで、降参した。すると、信長は、自ら、自分の着て居る衣服を脱いで之に著せ、且つ之に芥川郡を賜はつた。清秀は、此事を聞いて、亦降参した。かくて、我が軍は、進んで昆陽に至り、兵庫を屠りつくした。秀吉は、來つて、村重に、心を入れかへて織田公に事へよと説き勧めたけれども、村重は、承知しなかつた。十二月に、我が軍は、伊丹を圍んだけれども、勝利を得なかつた。信長は、急に攻め立て、は兵士を損ずることと恐れ、長圍を築き立て、池田信輝、瀧川一益、蒲生氏郷等をして之を守らしめて置いて、自分は引き返した。

七年。二月。入朝。三月。與信忠俱如伊丹。慰勞諸將。遊箕尾。八月。大賚于三木。伊丹。天王寺屯戍將士。九月。信長復如伊丹。村重留族人守城而夜逃。如華隈。尼崎。求援於毛利氏。毛利氏辭以海路梗塞。十月。一益密招城兵中西某。諭之曰。而主怯懦。棄若輩去。若爲怯主致死。曷若降織田公。以樹功名哉。中西乃與卒長五人。謀啓我兵。我兵乃入。留守者請釋其孥。

則往説<sup>テ</sup>村重<sup>ニ</sup>使<sup>シ</sup>致<sup>シ</sup>尼崎<sup>ニ</sup>。華隈<sup>一</sup>城也。乃質<sup>シ</sup>其孥<sup>ニ</sup>而遣<sup>ハス</sup>之。一城拒弗<sup>レ</sup>納。乃散走。信長命<sup>シ</sup>磔<sup>シ</sup>其孥<sup>于</sup>尼崎西北。以示<sup>シ</sup>二城兵。十二月。徇<sup>シ</sup>荒木氏族三十餘人于京師。誅<sup>シ</sup>之。以攝津賜<sup>ヒ</sup>池田信輝。令<sup>レ</sup>與<sup>シ</sup>其二子之助。輝政。俱攻<sup>シ</sup>華隈。終拔<sup>シ</sup>之。

【如】……往く。【慰勞】……なぐさめいたはる。【箕尾】……攝津に在り。【質】……賜ふ。與ふ。【屯成】……音トシユ。在して駐守備する。【華隈】……【尼崎】……並に攝津に在り。【海路梗塞】……梗塞は音カウソク、ふさがる。海上の通路がふさがりたまつて通行することが出来ぬこと。織田氏方の兵船が海上を守りしが故なり。【中西某】……新八郎。【而】……なんぢ。【怯恒】……音ケフキヤウ。臆病。【若】……なんぢ。【卒長】……組頭。【啓我兵】……味方の兵を手引きして城中に入れる。【孥】……音ド。妻子。【磔】……音タケ。はりつけにする。【徇】……となふ。宣令なり。徇く衆に示すを云ふ。【之助】……紀伊守と稱す。信輝の庶子。輝政……三左衛門と稱す。信輝の嫡子。

【關】天正七年の二月に、信長は入朝した。三月に、信忠とともに伊丹に往き、諸大將を慰めたりは、それから箕尾に進んだ。八月に、三木、伊丹、天王寺に留まつて守備して居る諸將士に、大に物を賜はつた。九月に、信長は、また、伊丹に往つた。村重は、一族の人々を留めて、城を守らせて置き、そして、自分の間に逃げ出して、華隈、尼崎に往き、加勢せんことを毛利氏に求めたけれども、毛利氏は、海上の通路が塞がって通行が出来ないから、如何ともいたし難いと云つて、断わつた。十一月に、一益は、ひそかに、伊丹の城兵なる中西某を招き寄せて、之に説き諭して曰ふには、汝が主人なる村重は、臆病にして、汝等を棄て、立ち去つて仕舞つた。されば、汝等は、臆病なる主人の爲めに一死を致すよりは、織田公に降参して手柄をたて名聲をあらはす方が、すむれて居ると曰つた。中西は、そこで、足輕の組頭五人と與に、我が織田氏の軍勢を手引きして城内に入れることを巧んだので、我が軍勢は、そこで城内に入つた。伊丹の城に留まり守つて居つた者が請ふには、どうぞ、我々の妻子を御ゆるし下されることならば、出かけて行きて、村重に説き諭して、尼崎、花隈の二城を差し出させましやうと請うたので、そこで、その妻子を人質として、之を差し遣はした。しかるに、尼崎、花隈の二城では、此者共を拒んで寄せつけなかつたので、歸るにも、歸られずして、そこで、ちりくばらぐに逃げ走つた。そこで、信長は、命じて、人質にしたる其妻子を、尼崎の西北に於て、はりつけにし、以て二城の兵に見せつけ、十二月に、荒木氏の一族三十餘人を京師に引きまはして之を誅戮し、攝津を以て、池田信輝に賜はり、其二人の子なる之助、輝政とともに華隈を攻めしめて、とうとう之を攻め落した。

是歲。令<sup>レ</sup>羽柴秀吉<sup>分</sup>兵。助<sup>ケ</sup>惟任光秀<sup>攻</sup>丹波。招<sup>キ</sup>降國主秦秀治。秀治不肯<sup>レ</sup>降。光秀送<sup>リ</sup>母爲<sup>ス</sup>質。秀治乃降。光秀誘<sup>テ</sup>執<sup>シ</sup>之。押送<sup>シ</sup>安土。磔<sup>シ</sup>殺<sup>ス</sup>之。丹波人聞<sup>ク</sup>之。磔<sup>ス</sup>光秀母。信長以<sup>テ</sup>丹波賜<sup>ヒ</sup>光秀。居<sup>シ</sup>龜山城。

【押送】……音アフサウ。牢奥に入れ送る。【關】この歳に、信長は、羽柴秀吉をして、軍勢を分つて、惟任光秀を助けて、丹波を攻めしめ、國主秦秀治を招き降参させやうとしたが、秀治は、降参することを承知しなかつたので、光秀は、母を送つて人質とした。秀治は、そこで、降参した。すると、光秀は、おびき寄せて秀治を執へ、牢奥に入れて安土に送つて、之をはりつけにして殺した。丹波の人は、此事を聞いて、怒つて、光秀の母をはりつけにした。信長は、丹波を以て光秀に賜ひ、龜山城を以て其居城となさしめた。

八年。正月。三木城將別所長治致<sup>シ</sup>城自殺。信長以<sup>テ</sup>三木加<sup>シ</sup>賜<sup>ヒ</sup>於<sup>テ</sup>中川清秀。以<sup>テ</sup>女妻<sup>シ</sup>其子。令<sup>レ</sup>秀吉攻<sup>メ</sup>但馬。降<sup>シ</sup>其國主山名宗仙。浮田氏既降。與<sup>シ</sup>毛利氏相<sup>シ</sup>拒<sup>リ</sup>兒島。

【其子】……秀政。【兒島】……備前に在り。【山名宗仙】……右衛門督祐豐。【關】天正八年の正月に、三木の城將なる別所長治は、城を差し出して、自殺した。信長は三木を中川清秀に加増し、娘を以て其子秀政に妻はせた。信長は、又、秀吉をして、但馬を攻めしめ、其國主山名宗仙を降参させた。浮田氏は、すでに織田氏に降服して、毛利氏と、兒島に於て、拒ぎ合つて居つた。

大坂連失<sup>シ</sup>強援。勢力日衰。天子遣<sup>ハシ</sup>廷臣三輩。就諭<sup>シ</sup>降<sup>シ</sup>之。信長亦使<sup>シ</sup>楠友閑往<sup>ル</sup>焉。於是。僧光佐聚<sup>シ</sup>徒屬議<sup>シ</sup>之。其老下間刑部等。皆贊<sup>シ</sup>其降。曰。我有<sup>リ</sup>宜<sup>キ</sup>降者四。我與<sup>シ</sup>織田氏交<sup>ル</sup>兵十一歲矣。諸國門徒竝<sup>シ</sup>起<sup>リ</sup>應<sup>シ</sup>我。而皆被<sup>シ</sup>誅殺。不<sup>レ</sup>知其幾千萬也。可不<sup>レ</sup>憫<sup>ム</sup>乎。一宜<sup>キ</sup>降也。本城諸將久在<sup>リ</sup>圍中。粉骨齏身。藉<sup>シ</sup>不能<sup>レ</sup>賞<sup>ス</sup>之。猶息<sup>シ</sup>其肩。二宜<sup>キ</sup>降也。織田氏用<sup>ル</sup>武。所當者破。所擊者服。若<sup>シ</sup>別

所。荒木。秦氏。莫不絶其根。殲其類。我雖因地利。憑人和。以至於今日。而竟亦如此矣。是非自絶滅我教乎。三宜降也。天子之詔。不可不奉。四宜降矣。且夫天下英雄豪傑。抗衡織田氏者。孰若我耐久乎。我武多矣。誰得嘍我。光佐從之。請盟。信長使青山虎莅焉。賜光佐以下金。有差。四月。光佐散遣其衆。自遜于紀伊鷺森。留子光壽。以七月致城。信長使矢部善七受之。門徒陰說光壽曰。信長爲人詐而忍。我一旦失據。恐陷其計矣。光壽乃再修守備。光佐懼。使人止之。弗肯。信長聞之。怒曰。我終不得。不剪滅之。遣兵陷勝曼。尼崎一壘。光壽惶恐謝罪。信長曰。我徐圖之耳。乃肯之。七月。光壽致大坂而去。

【連】……しきりに、つげまに。延臣三輩……前關白前久。中納言晴豊。一名未だ詳ならず。僧光佐……本願寺願如上人。【徒屬】……門徒等。【老】……家老。【粉骨齏身】……音フンコツセイシン。齏は一音サイ、碎く也。骨を粉にし身を碎く。艱苦を嘗むるを云ふ。【藉】……借と同じ。たひ。地利……大坂城を云ふ。【人和】……人々の一致すること。門徒等が宗教の信仰によりて一致したりしを云ふ。【絶滅我教】……我が一向宗を絶やす。【抗衡】……抵抗する。敵對する。【耐久】……久しい間持ちこたへる。【青山虎】……與物。【莅】……のぞむ、立ち合ふ。【遜】……のがれる。引き退くこと。【光壽】……本願寺教如上人。【忍】……殘忍。肯之……肯は一に宥に作る。【開關】大坂の一向宗の徒は、つげまに、強大なる援助を失つたので、その勢力は、日増しに衰へた。天子様は、公卿三名を差し遣はし、其處に往つて、懇に諭して、降参せしめられた。信長も亦、補友閑をして往かした。こゝに於て、僧光佐は、門徒どもを寄せ集めて、この事を評議した。すると、其家老なる下間刑部等は、いづれも皆、降参することを賛成して曰ふには、此方には、降参するが宜しい理由が四つありまう。我は、織田氏と兵を交へて戦闘すること、十一年の久しきにわたり、諸國に居る門徒は、相並んで起つて、我に一味し、をして、皆、誅殺せられまう。幾千萬人であるか分りませぬ。宗門の爲めとは言ひながら、實に憫れむべきことで御座ります。戦闘を繼續するときは、同じく多數の人を死なせねばなりません。これが、降参すべき理由の第一箇條で御座ります。此城（即ち大坂城）の諸大將は、久しく關の中に

居つて、骨を粉にし身體を微塵にし、實に千辛萬苦を嘗めまう。今降参するときは、たとひ、之を賞與することが、出來ずとも、せめては、其肩を息めさせて、安居せしめることが出來まう。これが、降参すべき理由の第二箇條で御座ります。織田氏が武力を用ふるや、當るところの者は破り、撃つところの者は服従いたします。別所、荒木、秦の諸氏の如きは、皆、其根本を絶ち滅ぼし、其遺類を殺し盡されぬものは無い。我は、地の利に因り人の和合一致にたよつて、以て今日まで持ちこたへたけれども、つまりは、亦、あんな事に成るで御座りまう。これは、自分から我が宗門を絶ち滅ぼして仕舞ふのでは御座りませぬか。これが、降参すべき理由の第三箇條で御座ります。又、天子様の御詔をば、奉戴せねばならぬ。これが、降参すべき理由の第四箇條で御座ります。其上に、一體、天下の英雄豪傑の、織田氏に抵抗した者で、誰か我のやうに久しき間持ちこたへた者があらずやうぞ。されば、我が武力は、すでに十分えらゐるに足るわけで、たとひ降参したとて、誰か我を笑ふことが出來まうやうぞと曰つた。光佐は、此言に従ひ、いよく和睦することに決して、盟をなさんと請うた。そこで、信長は、青山虎をして其場に立ち會はしめ、そして、光佐以下の人々に、金を賜ふこと、それと等級があつた。四月に、光佐は、部下の衆を解散して立ち去らしめ、自分は、紀伊の鷺森に退隱し、子光壽を留めて、七月を以て、城を差し出すことにした。信長は、矢部善七をして城を受け取らせることにした。すると、門徒が、ひそかに光壽に説いて曰ふには、信長の人となりは、詐を言ひて、をして、殘忍であります。我もし一旦據り所を失ひましたならば、恐らくは信長の計略に陥るでありまうやうと曰つた。光壽は、そこで、再び守備を整理した。すると、光佐は、懼れて、人をして之を止めしめたけれども、光壽は、承知しなかつた。信長は、之を聞いて、怒つて曰ふには、我は、終に、之を剪りつゝして滅亡させないわけには行かぬと曰ひ、兵を派遣して、勝曼、尼崎の二つのとりでを攻め落した。光壽は、あはておそれ、罪を謝した。すると、信長が曰ふには、我は、ゆつくりと、之を滅ぼすことにしやうと曰ひ、そこで、之を承知した。かくて、七月に、光壽は、城を引き渡して立ち去つた。

八月。信長入朝。自宇治舟行。至大坂。巡視城郭。以書數佐久間信盛。其子正勝曰。汝父子成天王寺五年。翫寇殖利。不事進取。夫羽柴秀吉以二歲定三國。惟任光秀定丹波。池田信輝二兒。以幼齡拔華隈。柴田勝家聞此數人樹功。自愧不如也。力戰以定加賀。獨汝父子無尺寸功。不養士卒。而蓄金錢。不論賞罰。而品茗飲。是胡爲也。前朝倉之敗也。汝懈不肯追。吾以麾下獨進。汝乃曰。雖爾懈矣。若信盛者。焉可復得。審如所言。則五歲之戍。何不戰。自吾執弓箭。未嘗敗也。前使汝援家康。以拒信玄。家

康有所指教。汝不肯從。乃餒平手於敵。貽吾羞辱。何顏返見吾乎。吾以四方未平。含忍至今。汝終不悛。日累罪戾。吾不復能用汝。汝猶悔過引咎。欲立功自贖乎。不則宜削髮而去。吾不忍置汝於法也。使人齎書往視之。曰。吾所言非。則直爭之。信盛正勝弗能答。削髮遁于高野。部將皆散。獨山口重政從之。初水野信元爲信盛所讒殺。至是得白。信長乃召信元弟忠重。復其邑。信長自大坂至京師。乃流林通勝。伊賀範俊。以通勝嘗謀逆。範俊嘗謀叛也。後二歲。信盛死于高野。信長憐之。召正勝。祿之。使仕信忠。

【數】……責むる也。其子正勝……其の字の上に一に及の字あり。【成】……守る。【翫寇】……翫は弄ぶ也。寇賊を玩弄物(オモチャ)の様に思ふ。攻むべき敵を攻めずして、空しく在陣し居るを云ふ。【殖利】……財利をふやすとをいはる。【進取】……進み戦つて敵地を略取する。【三國】……攝津、播磨、但馬。【信輝二兄】……之助、輝政。上に見ゆ。【品茗飲】……茗は音メイ、茶なり。茶を品評す、茶の湯を好むを云ふ。【善】……定なり、諦(アキラカ)なり。あきらかにと訓ず。又、「よし」と訓ずることあり。【指教】……指圖して教へる。【餒平手於敵】……餓は音キ、飼ふ也。すてころしにするの意。三形原の役に、平手汎秀が、武田信玄に殺されたるを云ふ。【貽】……遺なり、のこす。【含忍】……含は包なり、容なり。忍は堪忍なり。じつとして忍びこらへる。【至今】……今の上の一の字の字あり。【俊】……改む。【部將】……部下の將。【得白】……白は明なり。冤をあかすことを得たり。

八月に、信長は、京都に入朝し、それから、宇治より舟に乗りて大坂に至り、城郭をめぐり視て、又、書面を以て佐久間信盛及びその子正勝を誹責して曰ふに、汝親子は、天王寺のとりでを守ること、已に五年であるが、その間、敵をおもひや同様に心得て、攻むべき敵を攻めずして、空しく在陣して居り、財利をふやすことを謀つて居つて、進んで敵地を略取することをしなかつた。夫れ、羽柴秀吉は、二年の短き間を以て、攝津、播磨、但馬の三國を平定し、惟任光秀は、丹波を平定し、池田信輝の二人の子供は、幼年の身を以て、華隈を攻め落した。柴田勝家は、この數人の者が手柄を立てたとを聞いて、自ら彼等に及ばないことを恥づかし思つて、力を盡して戦つて、加賀を平定した。唯だ汝親子だけは少しばかりの手柄無く、士卒を養ふことをつとめずして、金錢を蓄へることをつとめ、賞罰を論定することなくして、茶の湯

を好んで居るが、これは、一體、如何なるわけであるか。さきに、朝倉氏が敗走したときに、汝は、なまけて、追撃することを承知しなかつたので、吾は、旗もとの者共を引き連れて、ひとり進んで之を追撃した。汝は、そこで、減らず口をたいて曰ふには、こんなになまけて居りますけれども、私信盛の様な者は、どうして、二度と再び得られませうぞと曰つた。若し實際に汝の言ふ通りであるならば、五年の守備の間、どうして、一たびの戦争をも致さなかつたのであるか。吾、弓箭を取りて天下に立ちしより以來、未だかつて負けたことは無いのである。しかるに、さきに、汝をして、家康を援けて信玄の軍を三形原に拒がしめたときに、家康は、汝に指圖するところがあったのに、汝は之に従ふことを承知せず、そこで、平手を敵に棄て殺しに、以て吾が恥辱を殘した。その時に、汝は、何の面目があつて、還り來つて、吾に面會したのか。吾は、天下が未だ平定しなかつたので、今日まで、口にも出さず、ぢつと堪へ忍んで居つたのである。しかるに、汝は、とうとう之を改めず、日に、罪科をつみかさねて居る。吾は、はや、ふた、び汝を用ふることは出來ないのである。汝は、それでも猶ほ、過を悔い改め、咎を自身に引き受け、手柄を立て、自ら其罪をあらはうと思ふか。左様でないならば、髪を剃つて坊主妾になつて立ち去るが宜しい。吾は、汝をとらへて國法に處するには忍びぬのであると曰ひ、人をして、此書面を持參して、往いて之を信盛父子に視せしめて、且つ曰ふには、吾が言ふところの事が悪いと思ふならば、直に之を議論せよ。さすれば、吾は之を改めるであらうと曰つた。信盛、正勝は、返答することが出來ずして、髪を剃つて、高野山中に隱遁した。そこで、部下の大將共は、皆、解散して去つたが、たゞ山口重政だけは、之に従つた。はじめ、水野信元は、信盛に讒言されて殺されたが、こゝに至つて、冤罪であつたことを明白にすることが出來た。信長は、そこで、信元の弟忠重を召し出して、其領地をもとの様に與へてやつた。信長は、大坂より京都に到着し、そこで、林通勝、伊賀範俊を流罪に處した。これは、通勝は嘗て逆謀を企て、信長を殺して弟信行を立てやうとし、範俊は嘗て叛を謀つて敵に通じたことがあるからである。其後二年にして、信盛は高野に於て死んだ。信長は、之を可哀相に思ひ、正勝を召し出して、之に俸祿を與へ、信忠に仕へしめた。

九年。二月。信長率諸子入朝。二月。柴田勝家以謙信既死。北陸稍定。乃來謁。獻金銀及土物。信長褒其成功。親饗之。初織田氏有傳家茶釜。名媛口。勝家嘗請之。信長曰。先君臨終。授之我曰。愛護勿失。必得有勳勞者。予之汝勉之。至是。勝家請曰。臣藉君威靈。定越前。加賀。不足稱勳勞。雖然。四方漸平。臣等莫復可以樹功也。願以是時。得前所請者。信長欣然。出而賜之。

【土物】……土地の産物。

天正九年の二月に、信長は、子供等を引き連れて、入朝した。二月に、柴田勝家は、謙信はすでに死んで仕舞ひ北陸道はや、平定したので、そこで、來り謁見して、金銀及び土地の産物を献上した。信長は、其成功をほめて、親ら之を饗應した。はじめ織田氏に、代々家に傳はつて居つたところの茶釜があつて、姥口と名づけられて居つたが、勝家は、かつて、之を賜はりたいと請うた。すると、信長が曰ふには、父上が御臨終のときに、この茶釜を我に御譲りになつて、仰せられるには、大切に、無くしては成らぬぞ。是非とも、大なる手柄のある者を待つて、之を與へよと仰せられたのであるから、未だ人に與へることは出来ぬ。汝若し之を得たいと思ふならば、勉強して大なる手柄を立てよと曰つた。こゝに至つて、勝家が請うて曰ふには、私は、あなたの御威光によりまして、越前と加賀とを平定いたしました。これは、格別、手柄と申すには足りませぬけれども、天下四方の國々は、だんくんに、平定いたしました。私共は、もはや、手柄を立てることの出来るところは御座りませぬ。どうぞ、此時を以て、さきに御願ひいたしました者を賜はりたいと思ひますと曰つた。すると、信長は、欣然として喜ばしげに、かの茶釜を取り出して、賜はつた。

是月。信長大閱馬京師。爲埒于皇宮東。請天子莅視焉。四方將士皆會。會長尾景勝窺虛侵越中。至于小出。而加賀賊起應之。是時。越中守將佐佐成政。與降將神保某。來在安土。信長得警報。令成政等馳還拒之。柴田勝家。義兒佐久間盛政。在加賀尾山。擊賊殲之。走景勝。成政至則事已平。乃進悉定越中。信長以越中賜成政。

【閱馬】…閱は簡なり、しるべえらぶ也。軍馬を檢閲すること。【埒】…音ラチ。馬埒、馬場のかこひ。埒とは、低き垣を作つて外邊を繞らすを云ふ。【窺虚】…諸將士の不在なるをわけぬらふ。【神保某】…越中守。警報…事變の報知。【義兒】…子分。この月に、信長は、大に軍馬を檢閲し、馬場を皇居の東に作り、天子に請願して、其場に臨んで御覽になるやうにし、四方の諸國の將士どもは、皆、來り會合した。折しも、長尾景勝が、其空虛なるにつけ込んで、越中に侵入して、小出に至り、そして、加賀の賊徒が、起つて之に味方した。この時に、越中の守將なる佐佐成政は、降参したる大將神保某とともに、來つて安土城に居つた。信長は、事變の報告を受けるに、成政等をして馳せ還つて之を拒がしめることにした。柴田勝家の子分の佐久間盛政は、加賀の尾山に居つたが、賊徒を撃つて、殘らず之を殺し、景勝を走らした。成政が到着したときには、事はもはや平定して居つた。そこで、成政は、進んで、殘らず、越中を平定した。信長は、越中を成政に賜はつた。

先是。前田利家定能登。以能登加賀增賜之。於是。細川藤孝定丹後。誘殺其國主一色義定。以丹後賜之。八月。使信雄與筒井順慶定伊賀。分賜伊賀于信雄。信包乃令秀吉大舉以伐毛利氏。十月。拔鳥取城。定因幡。織田氏既代足利氏。定近畿二十餘國。法令嚴峻。雖竊一錢者。處斬。奸盜屏息。路不拾遺。行旅委橐而睡。

【鳥取城】…因幡に在り。嚴峻…極めてきびしきこと。【屏息】…音ヘイソク。息をつめておそれること。【路不拾遺】…道路に落ちたる者があつても、之を拾ひ取りぬ。【行旅】…旅人。【委橐而睡】…委は棄て置く也。橐は、音タク。底なきふくろ。うちがへ。うちがへ袋を其處に投げ出して置いて睡るとも、誰も取る人なし。上の路不拾遺と共に盜賊の患なきを云ふ。時に以て亂世の一奇となすと云ふ。これより先に、前田利家は、能登を平定したので、能登、加賀の二國を、利家に増賜して賜はつた。こゝに於て、細川藤孝は、丹後を平定して、其國主一色義定をおびき寄せて殺したので、丹後を藤孝に賜はつた。八月に、信長は、信雄をして、筒井順慶とともに、伊賀を平定せしめ、伊賀を信雄と信包とに分ち賜はつた。信長は、そこで、秀吉をして、大軍を引き連れて以て毛利氏を征伐せしめ、十月に、鳥取城を攻め落し、因幡を平定した。織田氏は、すでに、足利氏に代つて天下の政權を取り、畿内近傍二十餘國を平定したが、その法律は、極めてきびしくして、一錢を盗み取つた者でも、斬罪に處すると云ふほどであつたので、盜賊は、大いに恐れて、息をつめて閉口し、路に落ちて居る物があつても、誰も之を拾ひ取る者は無く、旅人も、うちがへ袋を其處に投げ出して置いて睡るほどであつた。

當是時。大坂以下強賊已屬攘除。而西有毛利氏。東有長尾。武田二氏。與我接壤。未服從也。德川氏數攻武田氏。克之。北條氏以關東八州求內屬。東北豪傑皆使使獻方物。武田勝頼大懼。是歲。十一月。勝頼送致勝長。勝長。信長季子。質於甲斐者也。信濃人木曾義昌。因美濃人苗木某。言於信忠曰。臣不勝勝頼誅求。願爲前導。以伐甲斐。信忠告之。信長曰。

吾欲伐甲斐。未有釁可乘。今得此報。我事成矣。雖然。吾聞木曾地險隘。人心不可測。宜徵其質子。然後踐其地。信忠乃徵義昌任子。十二月。輸粟二萬石于吉良。誠德川氏曰。明春將有事於甲斐。

【義昌】……音ジャウシヨ。拂ひのぞく。【接境】……國の境がつゞいて居る。隣りあはせの國なるを云ふ。【方物】……その地の産物。【木曾義昌】……勝頼の妹婿。【苗木某】……久兵衛。【誅求】……軍役兵糧などを責め出すこと。嚴しく責め立てる。春秋左氏傳杜註に、誅は責むる也とあり。【釁】……音キン。すさま。【險隘】……音ケンアイ。險阻にして道幅が狭い。【任子】……人質。【輸】……運送する。【吉良】……三河に在り。

この時に當りて、大坂以下の手強い賊徒は、もはや、拂ひ除かれて仕舞つたが、けれど、西の方には毛利氏があり、東の方には長尾氏と武田氏があつて、我が織田氏と、國境が密接して居つて、未だ服従して居らなかつたのである。德川氏は、たゞ、武田氏を攻めて、之に勝つた。北條氏は、關東八州を所有して居りながら、我が織田氏に附き従はんことを求め、東北地方の豪傑は、皆、使者を遣はして、その地の産物を献上せしめた。そこで、武田勝頼は、大に懼れた。この歳十一月に、勝頼は、勝長を送り返した。勝長といふは、信長の末子で、甲斐の武田氏に人質となつて居つた者である。信濃の人木曾義昌は、美濃の人苗木某にたよりにて、信忠に申し込んで曰ふには、私は、勝頼から軍役兵糧などをむやみに責められて、遣りきれませぬから、願はくは御案内を致して、甲斐を征伐したいと思ひますと曰つた。信忠は、此事を信長に申し上げた。すると、信長が曰ふには、われは、甲斐を征伐しやうと思つて居つたけれど、未だ附け込んで攻め入るべき隙間が無かつたのである。今や此報告を得た上は、我が事は必ず成就するに相違ない。けれど、吾聞くに、木曾の土地は、險阻にして道が狭いと云ふことであるし、又、人の心は測り知ることが出来ないものであるから、先づ人質を差し出させて然る後に其土地に入るが宜しいと曰つた。信忠は、そこで、義昌から人質を差し出させた。十二月に、米二萬石を三河の吉良に運輸せしめ、德川氏に注意して曰ふには、來年の春、將に甲斐の武田氏を征伐しやうと思ふから、その積りで居られよと曰つた。

十年。二月。信忠既收義昌任子。將五萬騎。入木曾。信長自將步騎七萬。繼之。德川氏以三萬餘騎。自駿河。北條氏以三萬騎。自相模。金森長近以三千騎。自飛驒。並進應之。信忠以瀧川一益。川尻鎮吉爲先鋒。入伊奈。伊奈人降。導鎮吉兵納之。我兵進陷松尾。飯田。小山三城。木曾義昌擊破甲

斐前軍于鳥居嶺。獻捷於信忠。信忠遣兵五千助之。自進陣桔梗原。復進陣飯田。陷大島城。甲斐。信濃士民。素苦勝頼弊政。爭先來降。信忠留兵守大島。而進陣飯島。勝頼在諏訪。走歸甲斐。信忠乃圍高遠城。城當衝要。守將仁科信盛。小山田昌辰等力戰。不可下。三月。信忠使諸將攻其前。而自攻其後。凌城而登。獲信盛。昌辰以下將領十七人。斬首二千餘級。齎信盛首。獻信長于呂久川。梟之路左。信忠進陷高島。深志二城。遂入甲斐。勝頼以下已逃匿山谷。信忠陣古府。誅其留者。遣弟勝長。及森可成子長可。徇上野。下之。聞勝頼在天目山。遣瀧川一益圍之。獲勝頼。及其子信勝。齎首獻信長于波合。信長大喜曰。出師二十日。乃定四國。獲其巨魁。此兒真大奇也。以信秀所傳佩刀賜之。使人梟勝頼首于京師。曰。乃父一生以入京爲志。吾使豎子繼其志也。

【伊奈】……松尾。【飯田】……小山。信濃に在り。【鳥居嶺】……信濃に在り。【桔梗原】……信濃に在り。【大島】……信濃に在り。【弊政】……惡政。【飯島】……諏訪。信濃に在り。【高遠城】……信濃に在り。【衝要】……敵の衝き進むべき重要な場所。【凌城】……危險を物ともせずして城を攀ぎ登る。【呂久川】……信濃に在り。【路左】……路の左側。【高島】……深志。信濃に在り。【古府】……甲斐に在り。今の甲府なり。【天目山】……甲斐に在り。【波合】……信濃に在り。【四國】……甲斐、信濃、上野、駿河。【巨魁】……音キョクワイ。かしら。首領。【此兒真大奇】……此子は、ほんとうに、甚だ奇妙である。信忠の幼名は奇妙なり、故にかく云ふ。【乃父】……なんぢの父、信玄を指す。【豎子】……音ジュンシ、小野郎。





信長は、信孝に命じて、織田信澄、丹羽長秀、蜂屋頼隆等とともに、南方を征伐せしめ、そして曰ふには、すつかり落著して仕舞つたならば、汝等に、四國を分けて與へるであらうと曰つた。四月に、信孝等は、大坂に陣取つた。信澄は信行の子である。

十五日、德川公與、穴山信良入謝。信長待之甚渥。令惟任光秀饗之。日日得羽柴秀吉書。曰。秀吉圍高松城。吉川元春。小早川隆景。擁毛利輝元。將數萬騎來救。請得援軍。信長曰。彼舉其巢穴而來。是自速覆滅也。吾自往掃殄之。梶元春。隆景首。乘勢遂定九州耳。乃遣堀秀政。馳誠秀吉曰。汝與之相持。勿使歸入。於是。大徵兵。命池田信輝。細川忠興。高山友祥。中川清秀。爲先鋒。先發。光秀亦與焉。

【入謝】……新封の御禮を云ひしなり。【待】……待遇する。【渥】……あつし。手厚きこと。【舉其巢穴】……本國の一族の人々大舉して來りしを云ふ。【掃殄】……音サウテン。拂ひ絶やす。

十五日に、德川公は、穴山信良とともに、安土に來つて、御禮を申し上げた。信長は、之を待遇すること、大層手厚くして、惟任光秀をして之を饗應せしめることにした。明るる日に、羽柴秀吉からの手紙が到着したが、其手紙に曰つてあるには、私秀吉は高松城を圍んで居ります。吉川元春、小早川隆景が、毛利輝元を擁して、數萬騎の軍勢を引き連れて、來り救はんとして居ります。何卒援軍を賜はりたいと思ひますと曰つてあつた。すると、信長が曰ふには、彼れ毛利氏は、その本國の一族残らずを擧げて來たのは、これ自分から家をくつがへし身を滅ぼすの災厄を早めるのである。吾れ、自身に、出かけて行つて、之を掃ひ除き滅ぼし絶やして仕舞つて、元春、隆景の首を獻門にかけさらし、勢に乗じて進んで、遂に九州を平定するばかりであるといひ、そこで、堀秀政を派遣して、馳せて、秀吉に注意させて曰ふには、汝は、毛利氏と對陣して睨み合つて居つて、彼れをして本國に歸り入りしめぬやうにせよといひ、こゝに於て、大に軍勢を徵集し、池田信輝、細川忠興、高山友祥、中川清秀に命じて、先鋒となし、先づ出發せしめた。光秀も亦其の派遣される人數の内であつた。

初光秀以土岐氏疏屬流寓諸國。無所遇。終于信長。信長擢爲坂下城主。終賜丹波。信長待將士不設禮節。嘲謔慢罵以爲常。而光秀爲人文深。喜

自修飾。以材藝自高。先是。稻葉通朝家臣齋藤。那須有罪。去仕光秀。通朝訴之信長。信長令光秀還致那須。賜齋藤死。光秀不奉命。信長怒。召光秀。罵詈之。嘗飲將士酒。光秀逃酒。信長親追。捉而伏之。騎其項。拔刀擬曰。不飲酒則飲此。光秀素不勝飲。強嚼一觥。信長乃掖光秀。手擊其頭曰。好禿顛。可以代鼓。光秀慚憤。自揣。信長欲殺己。故形於言動。信長寵森蘭丸。嘗陳珍翫。謂之曰。汝所欲得。吾輒予之。蘭丸曰。臣所欲得。不在於此。近江志賀郡。先臣可成舊領也。願得還賜。幸甚。非所敢望也。信長曰。暫俟之。三歲後當充汝願。光秀在屏後。聞之。自疑曰。志賀今屬我。我之被誅。其在三歲後乎。既而信長命光秀。以蘭丸爲女壻。欲令予之。志賀也。光秀復不奉命。至是。受命饗德川氏。盛治帳具。周旋甚勤。俄而有出征之命。他人來代之。光秀大恚曰。使我徒勞。悉投其具於湖中而去。於是遂有反心。而信長不之覺也。乃令津田益信。及蒲生賢秀等守安土。而自以近臣百餘人入京師。館于本能寺。信忠與弟勝長等。館于妙覺寺。

【疏屬】……遠き一族。【流寓】……あちらこちらにさまよひ假り住居する。【無所遇】……何處に行きても主取ることが出来ぬ。【予】……求む。【待】……待遇する。あしらふ。【禮節】……禮儀作法のきまり。【嘲謔】……音テウギヤク。嘲は反言相調るなり、謔は戲言なり。あざけ

り戲言をいふなり。【嬖寵】……音マンバ。嬖は潔淨なり、罵は悪言を以て詈るなり。恥をか、せ悪口を言ふ也。【文深】……文法深刻。物事に念を入れると。【喜】……このんで。【修飾】……あやんと行儀をくづさずして外見をつくるふ。【自高】……自分でえらいと思つて居る。【齋藤】……内藏助。那須……和泉守。須は波の誤ならんか。【逃酒】……酒盛の席をばつして逃げる。【項】……音コウ。頭後、首筋、うなじ。【擬】……さしつける。【不勝酒】……生れつき下戸にて酒を飲むことが出来ぬ。【強嘸一觥】……強は光秀自ら強ふるなり。嘸は蘭と通ず。觥は音クワウ、もと兕角にて作りし大杯なれども、こゝにては、たゞ、大杯を云ふ也。飲めぬところを無理に大杯にて一杯飲んだ。【掖】……掖と通ず。挾持なり。わきばさむ、小脇にかいこむ。【好禿顛】……禿は音トク。髪無き也。顛は音、頭顛なり。よきはげあたま。【揣】……量なり、はかる。【形於言動】……言語舉動にあらはれる。【珍説】……珍しき品物。【非所敢望】……是非とも云つて、たつて御願するわけではない。【治帳具】……帷幕を張り膳具を治める。諸道具などの用意をする。【出征之命】……毛利氏征伐の命令。【徒勞】……無益に骨折る。【湖中】……琵琶湖の中。

【譯】はじめ、光秀は、土岐氏の疏遠なる一族であつて、諸國にさまよひ流浪して居つたが、主君とたのむべき人に出合はず、最後に、美濃に來つて、信長に仕へんことを求めると、信長は、之を引き上げて、坂下の城主となし、終に丹波を賜はつた。しかし、信長は、將士を待遇するに、禮儀作法の節度を設けずして、人を嘲り笑つて戲言を言つたり、恥をか、せ悪口を言つたりすることが、平常の事であつた。そして、光秀は、その人となり、萬事に念を入れ、好んで自ら行儀をくづさず外見をつくらうて居り、材能技藝に達して居るといふので、自らえらいと思つて居つた。これより先に、稻葉通朝の家來の齋藤、那須が罪があつたので、逃げ去つて、光秀に奉公した。通朝は、不平に思つて、之を信長に訴へ出でた。すると、信長は、光秀をして那須をば通朝に還し渡さしめ、齋藤には切腹させよと云つたけれども、光秀は、信長の命令を奉じなかつたので、信長は、大に怒つて、光秀を召し寄せて、之をのしりばつかしめた。又あるとき、信長は、將士を集めて、宴會をしたが、その時に、光秀は、酒席をばつして逃げ出したので、信長は、自身に追つかけて行き、つかまへて之を推し伏せ、其首筋に馬乗りになり、刀を抜いてさしつけて曰ふには、酒を飲まないならば、之を飲めと曰つた。光秀は、平生、酒を好まないもので、飲むに堪へないのであるが、無理に、一杯の大杯を傾けた。信長は、そこで、光秀を腋(ワキ)に挟んで、手を以て光秀の頭をた、いて曰ふには、好いけ頭だ。これは鼓の代りになると曰つた。光秀は、恥ぢ且つ憤つて、自ら量り考へるには、信長は自分を殺さうと思つて居られるので、それ故に、其言葉や動作にも顯はれるのであらうと考へた。又、信長は、森蘭丸を寵愛して居つたが、あるとき、珍しい品物をならべ置きて、蘭丸に向つて曰ふには、汝が得たいと思ふところの品物は、何なりとも、吾は、すべしと與へやうと曰つた。すると、蘭丸が曰ふには、私が欲しいと思ひます者は、此中には御座りませぬ。近江の志賀郡は、私の父可成のものと領地を御座りますが、願はくは還し賜はることが出来るならば、まことに有りがたいと思ひます。しかし、此事は、たつて御願いたすと云ふわけでは御座りませぬと曰つた。信長が曰ふには、暫くの間待つて居れよ。今から三年の後は、汝の願を叶へてやるであらうと曰つた。光秀は、その時に、屏風のうしろに在つて、此事を聞いて、自ら疑ひ念つて曰ふには、志賀は今や我に附屬して居る所である。その志賀を三年の後に蘭丸に與へやうとの事ならば、我が誅殺せられるのは、三年の後に在るのであらうかと思つた。とかくする中に、信長は、光秀に命令して、蘭丸を以て光秀の娘の婿として、之に志賀を與へさせやうとしたが、光秀は、また其命令に従はなかつた。こゝに至りて、光秀は、信長の命令を受けて德川氏を響應することに成つて居つたので、盛に諸道具を整理して、出来るだけ勤めて周旋奔走したが、俄に、毛利征伐に出掛けよとの命令が下つて、德川氏を響應することには、他の人が來つて代ることになつたので、光秀は、大に悲つて曰ふには、我に無駄骨折をさせたと曰ひ、悉く、其諸道具を琵琶湖の中に投げ棄て、立ち去つた。光秀は、こゝに於て、遂に、謀叛の志を起した。然るに、信長は、之を感付かなかつたので、そこで、津田益信、及び蒲生賢秀等をして安土を守らしめ

て置き、そして、自身は、近侍の臣百餘人を引き連れて、京都に入り、本能寺を旅館として居つた。信忠は、弟勝長等とともに、妙覺寺を旅館として居つた。

光秀之發安土也。治行于坂下。遂入丹波。詣愛宕山祠。拈鬮再三。夜宿祠下。寢而不寐。數有嘆聲。從者問何故嘆。光秀叱曰。非汝輩所知也。其明會于西坊。爲連歌。或供粽焉。光秀不脫苞而食。卒然問傍人曰。本能寺隍深幾尺。衆異之。既罷。歸龜山。六月朔。光秀召從子光春。及其將齋藤利三等五人。謂之曰。汝等能爲我死乎。則有一事可與議。議苟不合。則速斫吾頭。五人相目不能答。光春曰。臣等業已委質矣。詎必問也。抑所議者何事。光秀曰。吾殆爲右府所殺者數矣。因具語以故。曰。今事已迫矣。吾將先發之。五人欲諫止之。視光秀意色。既決不可諫。乃贊成其謀。光秀使五人納誓效質。於是悉丹波兵。卽發。宣言奉命西援。秀吉夜度大江山。至老坂。右折則走備中道也。光秀乃左馬首而馳。士卒驚異。既涉桂川。光秀乃舉鞭東指。颺言曰。吾敵在本能寺矣。衆始知其反也。

【治行】……出陣の支度をする事。【愛宕山祠】……京都の西北に在り。【拈鬮】……みぐしを取る。鬮は音キウ、みくじ也。【寢而不寐】……いねてねいらず。寢は臥すること。寐は目を閉じて睡眠すること。横になつて臥したけれども、すやくと眠りに入らなかつた。【連歌】……音レンガ。つらねうた。三十一字の和歌を、二人して、應答して作るもの。光秀、この時、騷人紹巴等を召して連歌を爲すと云ふ。【粽】……

音ソウ。ちまき。【苞】……音ハウ。ちまきのつと、ちまきの上包。光秀、つとのま、にして粽を食ふは、心こ、にあらざればなり。【卒然】……急遽の貌。だしぬけに。【障】……濠。【異】……あやしむ。【従子】……甥（ヲヒ）。【相目】……相互に目を見合はす。【業已】……すでに。【委實】……實は音シ。贊と通ず。臣となる初めに、贊を執りて見ゆる故に、委實と云ふなり。【詎】……なんぞ。【右府】……信長を云ふ。右大臣たり、故にかく云ふ。【納誓】……誓文を差し出す。【效實】……效は、いたす。實は音ナ、人質。人質を差し出す。【大江山】……丹波に在り。【老坂】……山城と丹波との界に在り。【走備中】……走は趣く。向つて行くの義。【桂川】……京都の西に在り。【鷹言】……音ヤウゲン。聲高く呼ばる。【開】光秀が、安土を出發して、西方征伐の途に上つたときに、坂下に於て、出陣の支度をなし、それより、遂に丹波に入り、愛宕山の神社に参詣して、鬮を取つて見る事、兩三度に及び、夜、神社の下に投宿したが、心中に苦慮するところあつたと見えて、横になつて寝ても寐つかれず、たび／＼嘆息する聲が聞えた。そこで、従者は、何故に嘆息せらる、やと問うた。すると、光秀は叱りつけて曰ふには、汝等の知つた事では無いと曰つた。其明くる日に、愛宕山の西の坊に集會して、連歌をなした。その時に、ある人が、粽（チマキ）を供へると、光秀は、その上包を取らずして、粽を食へ、だしぬけに、傍の人に問うて曰ふには、本能寺の外堀の深さは、幾尺あらうかと問うた。そこで、皆々は、之を驚き怪んだ。すでに、連歌の會も終つて、光秀は龜山城に歸つた。六月の朔に、光秀は、甥の光春及び其將齋藤利三等五人の者を召し寄せて、之に向つて曰ふには、汝等は、我が爲めに死んでくれることが出来るか。若し死んでくれることが出来るならば、一つの相談したい大事がある。其相談が荷くも汝の心と合はないならば、速に吾が頭を斬つて仕舞つてくれよと曰つた。五人の者は、互に目を見合はせて居つて、返答することが出来なかつた。そのうちに、光春が曰ふには、私共は、すでに贊を執りて、あなたの家來となつて、身をあなたに任せられた上は、何も必ずしも改めて問はれるまでも無いことと御座ります。一體、御相談なされやうと云ふのは、何事と御座りますかと曰つた。すると、光秀が曰ふには、吾は、ほとんど、右大臣殿、信長を指すの爲めに殺されやうとした事が、度々であると曰ひ、因つて、詳しく、今日までの成行を語つて、さて曰ふには、今や、事が已に切迫して、明日をも知らぬやうになつて居るから、吾は、將に先づ我より手出しをして、其事を決定しやうと思ふのであると曰つた。五人の者は、諫めて之を止めやうとは思はれども、光秀の意志顔色共に、すでに決心して居る様子で、諫め止めることの出来ないことを見て取つたので、そこで、其企を賛成した。光秀は、五人の者をして誓文を差し出し、人質を差し出さしめることにした。光秀は、こゝに於て、丹波の兵を残らず引き連れて、即時に出發し、そして、言ひふらすには、われは、命令に従つて、西方に向ひ、秀吉を援けるのであると言ひふらし、夜の間に、大江山を越えて、老坂に至つた。この老坂から右に折れると、備中に向つて行く道である。しかるに、光秀は、そこで、馬の首を左の方に向はしめて、駈け出したので、士卒は、驚き怪んだ。かくて、すでに桂川を渉つて仕舞つてから、光秀は、そこで、鞭を擧げて、東の方を指さして、大聲に呼ばはつて曰ふには、吾が敵は本能寺に在るのであると曰つた。皆々は、始めて、光秀が謀叛するのだと云ふ事を知つたのである。

【参考】左に日本樂府の一篇を録して以て参考に資す。

本能寺

本能寺。溝淺尺。我就大事。在今夕。突綜在。手併。突食。四簷。椽雨。天如。墨。老坂。西去。備中道。揚。鞭東指。天猶早。吾敵正在。本能寺。敵在備中。汝能備。

味爽。圍本能寺。呼譟而入。弓銃交發。信長在臥內。驚起曰。反者誰。令蘭丸

出視其旗幟。反報曰。惟任光秀也。信長曰。豎子敢爾。乃手弓而出。蘭丸以下宿直者。皆肉薄拒戰。信長親射斃數人。弦絕。執槍而鬪。傷右肱。乃走入。揮姬妾。使逃去。縱火自殺。年四十九。蘭丸及二弟坊丸。力丸。及金森長則。高橋寅松。矢代勝介。伴正林等。百餘人皆力戰死之。光秀索信長首。不得。意甚懼。齋藤利三得其衣焦爛者。示之。光秀猶不安。大索之。

【味爽】……音マイサウ。夜明け方。【臥内】……寢所の内。【肉薄】……音ニクハク。身を以つて敵に逼り近づく也。【弦】……音ゲン。弓のつる。【揮】……指揮する、指圖する。【意甚懼】……取りにがしたかと思つて、おそる、也。【焦爛】……音セウラン。焼けこげる。

【開】かくて、光秀は、夜明け方に、本能寺を圍み、大いに呼ばはりてさわいで、寺内に攻め入り、弓や鐵砲をかはる／＼發射した。その時に、信長は、臥室内に居つたが、驚き起ちあがつて曰ふには、謀叛人は誰であるかと曰ひ、蘭丸をして出で、其旗差し物を見させた。蘭丸は、引き返して報告して曰ふには、惟任光秀が御座りませと曰つた。信長が曰ふには、野郎奴、よくもまあこんな不敵なる事を企てたと曰ひ、そこで、弓を手に持つて出でた。蘭丸以下、宿直して居つた者共、皆、敵に近づき逼つて拒ぎ戦つた。信長は、自身に、射て數人を斃したが、弓のつるが切れた。そこで、槍を執つて鬪つたが、右の肱（ヒジ）を傷つけた。そこで、走つて内に入つて、腰元共に指圖して逃げ走りしめ、火を放つて自殺して仕舞つた。年は四十九歳であつた。蘭丸及び二人の弟坊丸、力丸、及び金森長則、高橋寅松、矢代勝介、伴正林など、百餘人の者どもは、いづれも、力を盡して戦つて、そこで、討死した。光秀は、信長の首をさがし索めたけれども、見つからなかつたので、光秀は、信長を取り逃がしたのではないかと思つて、心の中に、大層、懼れて居つた。齋藤利三が、信長の著物の焼け焦げたものをさがし出して、之を見せたけれども、光秀は、それでも猶ほ、安心せずして、大に之をさがし索めた。

【参考】左に太閤記の一章を抄録して以て参考に資す。

織田右大臣御生害

其食を喰ふ者は其器を毀たす、其櫛に墜する者は其杖を折らざる、其器を害ひ其杖を折るは、自ら禍を需るなり、此時光秀本能寺に迫つて、信長公を苦しめ奉り、早く御首を見んと、將士に令して責討らしは、是將に己が身を攻討つに異ならず、安田作兵衛眞先に進んで門内に駈入り、仕黒む味方を横様に押通り、信長公の御首を賜らんと馳行くに、此時寺中合戦眞最中と見えて、一進一退離散集合し、或は討ち或は討たれ、寄手は大軍入替へく戦へども、御所方に續く新事もあらばこそ、御勢大牛討死し、今は纒に百四五十騎に討ちなされ、重手勝手負はざる者なく、剩へ素肌なれば袖を切捨て裸に成り、堅甲利兵の大軍を防ぎ戦ひ、流る、汗と涌出る血沙は、唐紅に水くぐる龍田の川のみかぢ葉の、ひちて流る、如くなり、此時御所方の勇士高橋虎松と名乗り、三尺九寸の大太刀を打振て、臺所口より踊出で、群る寄手を五段三段に切

開き、勇を奮て血戦す、安田作兵衛此體を見ると雖も、信長公に近付寄り、一鎗參らせんと思ひければ、知らぬふりにて進行く、山本三右衛門は、安田、箕浦等と一所に門へ入らんとせしが、味方の勢に隔られ、たやすく進み得ず、斯ては人に功を奪はるべしと、大門を七八間南の方へ退き、溝際に立寄り、そこに立つたる足輕の肩に手をかけ、其儘に能く立つてたゞよと、鎗を力杖につき、ゑいと一はね高擧に飛上る、着たる具足は小櫻織、大袖小袖草摺のひらりりときらめくは、蝶鳥などの戯れ遊ぶ如くにて、げに一興の見物やと、賞讃の聲、暫しは鳴りも止まざりけり、されば寄手三千人、安田、山本が功名に双ぶ者こそなかりけれ、扱擧より早く飛下り、是も信長公に馳合せんと進み入るに、彼の信長公の近臣高橋虎松、大太刀を真向にかざし、人なき所を行く如く切立て薙立て来る所に、山本三右衛門と端なく行合ひ、互に名乗て切結ぶ、虎松剛勇の壯者なれど、數刻の戦、手疵數多負ひぬれば、働く事心に任せず、終に山本に討れければ、弓矢投捨て、大音にて、鎗を召す、はつといちへて奥殿より、辻が花の衣着たる三十許の女房、鎌十文字の鎗を取て、信長公に奉る、信長公是を御覽じ、長谷川宗仁やあると召さる、に、やがて御前に參じ命を待つ、信長公仰せけるは、汝は武士に非ざれば、敵も亦是を殺さじ、女原を悉く召連れ、今の間に早く落ちゆくべし、信長が最後に女を連れたりといはれんも、此上の無念なり、早とく下知し給ひ、かの女房が持來りし十文字の鎗をおつ取り、自ら寄せ来る敵に向ひ、十六歳の昔より鍛練有りし鋒先に、また、く内に十五六騎はたばた突き貫かれ、敢て近寄る者もなし、時に最前に御鎗を捧げし女房は、於能の方とて女に稀なる勇婦なりしが、俱に冥途の御供せんと、二重の鉢巻絞にて結び流し、花田色の玉襷をり、しく引きしめ、白柄の長刀掻い込んで、廣庭に走り出で、當る敵を嫌ひなくとひ倒し薙ぎ落し、暫く挑み戦ひしが、山本三右衛門に渡り合ひ、腰の番ひを突通され、終に討死したりけり、右大臣信長公は、御勢盛に喚き叫んで戦ひ給ふに、餘り強き當り給ひ、左の臂した、かに突かせ、御働も自由ならず、既に危く見えさせ給ふ、蘭丸は惟任方の勇士四天王箕浦等と戦ひながら、大音にて、千金の誓は鷹鼠の爲に發せず、手づからの御戦は勿體なくこそ候へ、早々御入有るべしと呼はり捨て、向ふ敵を迫り捲り、御生害の妨を防がんと惡戦する事、諸人の耳目を驚かせり、信長公は蘭丸が諫に隨ひ、御生害をや期せられけん、奥の間さして引給ふを、最前より透を見合せ、伺ひ居たる安田作兵衛、信長公返させ給へと聲をかけ、鎗を上げて追奉る、蘭丸是を聞て、こは口惜しき事哉、御生害の際心元なしと、當の敵を打捨て、苦しげにおつと喚んで走寄り、安田作兵衛止れと聲かけたり、此時信長公は戰を好み給はず、聞捨てて一間に入らせ給ひ、早く障子を引立給ふに、此時猶殘燈消えずして、信長公の御影ありくと移りたり、安田影を自當に、鐵壁も通れと障子越に突通せば、何かはしらず手答し、鎗先動くに中りたりと思ひ、障子蹴破りかけ入る所を、後より雷の落ちかゝるごとく、森蘭丸を見知りたるかと、鎗を上げて突く所を、安田作兵衛足踏直し、心得たりと鎗打合せて戦うたり、安田は明智が股肱の勇士、蘭丸は織田の逸物、龍と踊り虎と駈り、上中下段透間なく飛達うて戦ひしは、烈しかりける有様なり、蘭丸其日の出立は、緋梅に鶴の丸を白に染殘したる素袍を着、太刀計を帯びたり、時に生年廿二歳、安田は思ひ掛けし軍なれば、黒皮の具足に肩草摺を白絲にて織したるを着たりけり、安田作兵衛も聞ゆる剛勇の若者なれど、蘭丸が必死の戦に始終叶ふべくも覺えざれば、心中に是を感じ、右に流し左に拂ひ、少し進んで大に退き、軍になれたる場數の功者、次第く、に椽側まで引き行くを、蘭丸奇つて只一突と大喝一聲喚いて突くを、作兵衛心得、後飛に大庭に飛んだりしが、誤つて切石を疊み上げたる雨垂落の溝の中へ、鎗持ちながら眞仰向にぞ倒れたる、蘭丸得たり賢しと、椽端に走り出で、下突に突通す、安田溝の中に身屈まり、草摺の間より陽根を半突切り、兩股骨へかけ、鎗先ぬけて敷石にかつしと當る、安田其柄をしっかりと取り、上より引く勢に引起され、其儘佩刀を引抜て片手なぐりに拂ひければ、素肌の蘭丸兩足を切り落され、哀むべし大剛の勇士、枯木を倒す如くどうと轉ぶを、四天王又兵衛走寄て首を取たり、信長公は奥深く入らせ給ひ、殿中に火を放ち、其中にて御生害ましくける、御年四十九歳なり、嗚呼悲かな、今日はいかなる悪日ぞや、いにし天文年中より今天正十年ま

で、四海の内に横行し、武威をもて天下の兵亂を切り鎮め、民を塗炭の中に救ひ、四方の敵國、其英名を鬼神のごとく恐れ振ひ、正二位右大臣に昇進し、大業既に成就せしを、逆臣惟任が爲に弑せられ給ひしこそ、口惜かりし次第なれ。(下略)

信忠聞變大愕。馳赴之。途望見本能寺烟起。村井貞勝來跪路左。報曰。右府已遇弑矣。君宜急保二條第。信忠從之。使貞勝徙皇太子于禁内。而入保之。衆或議曰。及賊未來。馳歸安土。建我旗鼓。則數萬騎立至矣。討賊復仇。一舉可辨。信忠曰。彼既謀此大事。豈有不置兵塞路者乎。與其暴尸於路。寧自裁于此。衆以爲然。日中。賊合二萬餘騎來圍。吾兵僅二三百人。連鋒奮擊。相逐于庭。猪子兵介。小澤六郎。在于逆旅。聞警赴之。主人止之。弗聽而入。梶原松千代亦欲入援。其家僕又右衛門止之。而代入。信忠褒之。賜長刀。斃數十人而死。賊患我兵力戰。乃遣弓銃手。登近衛第屋上。瞰而亂發。我兵死傷略盡。信忠乃割腹而死。毛利秀高。福富貞次。菅谷正頼。齋藤新五。皆死之。其餘從兵無一人逃者。初安藤範俊家臣松野平助。有材名。範俊敗。信長祿之。於是宿于八幡祠。不及於難。齋藤利三。素與之善。以書招之。平助伴應。欲窺隙刺光秀。光秀覺其意。不敢親近。平助乃自殺。光秀大索織田氏臣僚在京師者。殺之。獨前田玄以帶信忠遺命。逃

至岐阜抱信忠子三法師走入清洲

【皇太子】...時に二條城に在す。故に之を禁内に徙し奉るなり。【禁内】...禁裡の内、御所の内。【建我旗鼓】...旗を建て、本城となすなり。鼓は帶言なり。【暴】...さらす。【自裁】...自殺する。【逆旅】...宿屋。逆は迎ふる也。宿屋は、館舎を設けて以て客を迎ふ、故にかく云ふ。【歌】...うかふ、見おろす也。【略】...ほとんど、は、大略。【八幡祠】...山城の男山。前田玄以...徳善院。
信忠は、この事變を聞いて、大に驚き、馳せて出かけたが、途中に於て、本能寺に煙が起ちあがるのを望み見て居ると、村井貞勝が、來つて、路の左側にひざまづいて、報告して曰ふには、右大臣殿は、もはや弑害せられたから、あなたも急いで二條の屋敷に御立て籠りなされるが、宜しう御座りますと曰つた。信忠は、此言に従ふとにして、貞勝をして、これまで二條の屋敷に居らせられたる皇太子を御所の内に御徙りなされるやうになさしめ、そして、自分は、其處に入つて立て籠つた。人々の中には、評議して曰ふには、賊兵が未だ攻め寄せないうちに、馳せて安土に歸つて、味方の旗や太鼓を建て、兵士を募るときは、數萬騎の兵士は、たちちに到着するで御座りませう。さうするときは、賊を征伐し、仇をかへすことは、一戦争にて埒が明くで御座りませうと曰ふものが有つたけれども、信忠が曰ふには、彼れ光秀は、すでに此大事を企てた以上は、どうして、兵士を置いて通路を塞がぬ道理があらうぞ。されば、逃げる途中に於て討死して、屍骸をさらすよりは、いつその事、此處に於て自殺する方が善いと曰つた。人々は、此言を尤至極と思つた。日中に至つて、賊軍は、二萬餘騎を合はせて、來つて攻め圍んだ。吾が軍勢は、わづかに二三百人であつたが、切先をつらねそろへて、奮撃し、賊兵と、庭内に於て、追ひつ追はれつして戦つた。猪子兵介、小澤六郎は、宿屋に止宿して居つたが、非常の報知を聞くと、出かけて行かうとすると、宿屋の主人が、之を止めなければ、聞き入れずして、二條の屋敷に入つた。梶原松千代も亦、屋敷に入つて援けやうとしたが、其部下の又右衛門が、之をとめて、自分が松千代に代つて屋敷に入つた。信忠は、之を褒めて、長刀を賜はつたが、又右衛門は、奮ひ闘つて、數十人の敵兵を斃して、討死した。賊軍は、我が軍勢が少數ながら力を盡して戦ふのを厄介に思ひ、そこで、弓方と鐵砲方とを派遣して、近衛の屋敷の上に登つて、見おろして、矢鏢に射かけたので、我が兵は、死んだり傷つけられかりして、大略無くなつて仕舞つた。毛利秀高、福富貞次、菅谷正頼、齋藤新五など、皆、討死した。其餘の從兵にも、一人も逃げ去つた者は無かつた。はじめ、安藤範俊の家來の松野平助は、材能が人にすぐれて居ると云ふ評判があつたが、範俊が失敗した後は、信長が之に俸祿を與へて居つた。平助は、此時に、八幡宮に止宿して居つて、騒動の間に合はなかつた。齋藤利三は、平助と仲が善かつたので、手紙を遣つて之を招いた。すると、平助は、いつはつて承知して、隙間をうかつて光秀を刺し殺さうと思つたが、光秀は、平助の心を感じて、敢て親み近づけなかつたので、平助は、そこで、自殺して仕舞つた。光秀は、織田氏の家來で、京都に居る者を、大にさがし求めて、之を殺した。たゞ前田玄以だけは、信忠の遺言の命令にしたがつて、逃げて岐阜に至り、信忠の子の三法師を抱いて、走つて清洲城中に入り込んだ。

信長起尾張常以平定四方爲志。不喜虛美。廷臣或勸爲征夷大將軍。信長曰。吾何遽襲室町故號爲。然將士有功。輒急賞之。獎用公廉。政無偏私。獄內贖金。悉以爲修橋道之資。尤憎浮圖氏。嘗有一僧。自稱得神通。愚民景附。信長召見詰問。使人捉其兩手。而親擧刀斫其頭。曰。猶得神通乎。柴田勝家獻一向賊首級。信長有喜色。楠友閑在側。諫曰。誰非天下之民乎。因極論仁暴是非。信長嘉納之。然時承室町氏媮惰之後。以刑殺立威。所得之地。必誅其主。以予家臣。性亦猜忍。追咎諸將舊惡。若光秀者。皆不自安。所以不終其志也。

【四方】...天下を云ふ。【虛美】...虚飾にして華美。實質なくして外觀の美なること。【故號】...その稱號。即ち征夷大將軍を云ふ。【獎用】...獎は音シヤウ。勸勉なり。勸誘して引き上げて用ふる。【公廉】...公平にして廉潔なること。【浮圖氏】...佛者。【神通】...音シツウ。神通力。景附...音エイフ。景は影と同じ。影の形に附くが如く隨ふこと。【媮惰】...音トウダ。苟安怠惰。安を偷み政に怠ること。【猜忍】...疑深くして殘忍なること。【追咎】...音ツキキウ。あとからとがめる。【不終其志】...天下を平定せんと志を成就すること能はずして、つひに弑に遇ひしを云ふ。
信長は、尾張から起つて、平生、四方の諸國を平定し天下を統一することを以て、其志望となして居つて、虚飾華美なることを好まなかつた。公卿のあるものは、征夷大將軍となれと勧めたけれども、信長が曰ふには、吾は何も遷に室町の足利氏が稱へて居つたものと名號を繼ぐには及ばぬと曰つた。けれども、部下の將士どもが、功勞があるときは、いつでも、直に、急いで之に褒美を與へ、公平にして清廉なる者を引き立て、用ひ、政治には、かたよつた事や自分勝手な事は無く、獄内より出づる贖罪金(罰金)をば、悉く、橋や道路を修繕する費用となした。信長は、又、すぐれて、佛者を憎んで居つた。あるとき、一人の坊主があつて、自ら、神通力を得て、自由自在な事が出来ると曰つて居り、愚昧なる人民共が、影の形に従ふが如く、この坊主に歸依隨喜した。信長は、この坊主を召し寄せて會見して、之を詰問し、人をして其坊主の兩手をつかまへしめて、そして、自身に刀をふりあげて、其頭を斬り落して曰ふには、これでも猶ほ、神通が出来るかといつた。又、柴田勝家が、一向宗の賊徒の首級を獻上した。すると、信長は、喜ばしげなる顔色があつた。楠友閑は、其時に、信長の側に居つたので、諫言して曰ふには、誰でも天下の民でない者がありませんやうか。皆、天下の民でありませう。然るに、其死んだのを見て、御喜びになるのは、如何なる譯で御座いますかと曰ひ、因つて、仁慈なる政治と暴虐なる政治との是非善惡を、口を極めて論述した。すると、信長は、成程尤至極であるといひ、その言葉を聽き納れた。然れども、この時は、室町の足利將軍時代の、好い加減にして投げ遣りにして置いて、なまけ怠つた後をついだので、刑罰を嚴しく誅殺を思ふ存分にして、以て威勢を立て、居つたのであつて、得たところの土地は、必ず其舊の領主を誅殺して、それを以て、自分の家來に與へ、又、その生れ附きも亦、疑ひ深く、殘忍であつて、諸々の大將どもの舊い惡事を、あとから咎め立て

た。こんな有様であつたから、光秀などの如き者は、皆、自ら安心して居ることが出来なかつた。これは、信長が、其の天下を統一せんとの志望を成就することの出来なかつた譯である。

拜織田右府塑像一歌

日出處日墜地。鯨鯨食人飛生翅。扶桑大樹安在哉。紫垣縱橫萬路甃。祖宗有靈生英雄。手挽狂瀾扶瑞穗。大業垂成身顛蹶。遺像空留北郭寺。老利陰々古木青。吾來肅謁弔英靈。粉墨劍落龍深閣。機過聲寒日冥。欲歸雲陰忽解駭。面髮可窺稍陰躍。雙眉中追見性急。兩頰下殺知福薄。唯見隆鼻洞睛爛。嚴電精爽襲人難。仰看金閣寺等持院。曾識奕世將軍面。豈有一箇堪敵戰。嗚呼不如此。何以定禍亂。想見群雄盡膝行。狼顧脅息懼醜烹。畜狗反噬奴復仇。恩威之報兩分明。君不見後霸匡國誰不師。君者。王國藩屏皆部下。唯見猴耶侍其左。願情塑工盡貌其餘。豐頤大耳森列坐。

光秀既定京師。欲取安土。即日馳至瀨田。遺書於城主山岡景隆。景隆斬使者。燒橋而逃。光秀發卒修橋。初安土城中聞變。未得確報。物情恟然。日暮有數騎馳歸自京師。士民要路問之。騎曰。兩公薨矣。城中大擾。蒲生賢秀欲鎖衆拒守。衆一夜四五驚。諸將士多逃亡者。賢秀乃令其子氏郷具輿馬數百。迎夫人以下。逃於其邑日野。姬人或勸賢秀取天主貨寶而火之。毋以予賊也。賢秀曰。先君所盡心經營。不忍燒也。光秀其或燒之。即取焉以自殖。豈能久乎。今吾取其貨。人謂之何。使木村某守之而去。保守日野。

【瀨田】……近江に在り。勢多なり。【確報】……たしかなる報知。【物情恟然】……人の心がびくびくとおそれて落ち付かぬこと。恟は音キヨウ。【要路】……路に待ち受ける。【兩公】……信長、信忠。【日野】……近江に在り。【天主貨寶】……天主閣の中に貯へおきたる財貨寶物。

【火】……焼く。【即】……もし。【自殖】……自分の資産をふやす。【木村某】……三郎左衛門。

光秀は、すでに京都を平定したので、安土を攻め取らうと思つて、其日に直に、馳せて瀨田に至り、手紙を城主山岡景隆におくつて、味方に附かせやうとした。すると、景隆は、光秀の使者を斬り、橋を焼き拂つて逃げた。光秀は、兵卒を繰り出して、橋を修復した。はじめ、安土の城中では、騒動のあつたと云ふことを聞いたけれども、未だたしかなる報知が来なかつたので、人の心は、びくびくと懼れて、落ち着かなかつた。日の暮れ頃に、數人の騎士があつて、馳せて京都より歸り來つたので、士民は、途中に待ち受けて、此事を問うた。すると、騎士が曰ふには、信長公も信忠公も薨去せられたと曰つた。そこで、城中は、大にさわぎ亂れた。蒲生賢秀は、城中の人々をしづめて拒守することにしようと思つたが、人々は、一夜のうち、四五回もびくびくして驚き騒いで、諸の將士の中に、逃げ去る者が多かつた。賢秀は、そこで、其子氏郷をして、輿(カゴ)と馬とを用意せしめ、信長の夫人以下の人々を迎へて、自分の領地なる日野に逃げ去らせやうにした。腰元の或る者は、賢秀に、天主閣に貯へてある貨財寶物を取り出して、其後城中に火を懸けて焼き拂つて、賊に取られぬやうになさいと勸めたが、賢秀が曰ふには、先般様が、心を盡してはかりいとなまれたところの城を、焼くには忍びませぬ。光秀が、或は焼くかも知れませぬ。若し又光秀が之を取つて自分の財産をふやすやうな事を致したとて、逆賊たる彼は、どうして、永持をいたすことが出来ませぬやうぞ。今、私が、其財貨を取りましたならば、人は、之を何と申すで御座りませぬやうかと曰ひ、そこで、木村某をして之を守らしめて置いて、立ち去り、そして、日野に立て籠つた。

光秀至。與其將士分取貨寶。會天使來勞之。光秀意益驕。遣使招其女婿細川忠興。忠興逐其使者。招其友人筒井順慶。順慶不至。光秀乃懼。入京師。務行惠政。以收人心。復適安土。欲攻賢秀。賢秀遣使伊賀。求援於信雄。信雄危疑不發。賢秀乃送質爲信。信雄乃出。次椎山。光秀不敢動。會伊賀盜起。信雄以故不能進。信孝初在大坂。奉信長密旨。宣言脩艦於紀伊。因急襲鷺森。幾殺光佐。而變報至。信孝與信澄。長秀議。解圍而退。至大坂。信澄亦光秀婿也。叛應光秀。據其子城。信孝。長秀迫之。使自殺。欲遂誅光秀。而兵潰不可收。會羽柴秀吉以數萬騎至。自備中。信孝大喜。乃

會議于尼崎。諸將爭先不決。乃因信長在時之法。次以城邑前後。高山友祥爲先鋒。中川清秀次之。池田信輝。丹羽長秀又次之。信孝自將四千人。在其後。秀吉爲後拒。討光秀于山崎。大破之。光秀伏誅。明智光春守安土。聞敗燒城。走坂下。殺其妻子。自殺。齋藤利三等皆被捕誅。清秀俗字瀨兵衛。山崎之役戰最力。信孝下馬。握其手曰。吾子力戰。吾不忘德。秀吉自輿中呼曰。瀨兵衛勞矣。清秀曰。筑前守氣貌已吞天下矣。

【天使】……勅使。【行憲政】……仁惠ある政治を行ふ。葦下の戸税を除きし類を云ふ也。【收】……とり込む。【適】……往く。【稚山】……近江に在り。【鷲森】……紀伊に在り。【幾】……ほとんど。【子城】……内小城、である。枝城。光秀の屬城なり。【信澄自殺】……太閤記には、力士をして殺さしむと云ふ。在時……在世の時。【次以城邑前後】……城邑の敵地に近き者を先とし、遠き者を後となす也。【後拒】……拒は方陣なり。後詰、あとぞなへ。【山崎】……山城に在り。【光秀伏誅】……小栗栖に於て、土兵起り、林中より竹槍を以て光秀の肋を刺す。馬より墜ちて死す。秀吉、首を京師に徇へ、本能寺に梟す。豊臣記に詳なり。【光春自殺】……時に年三十二。【俗字】……通稱。【吾子】……貴公、御前。【勞矣】……御苦勞であつた。骨折であつた。【氣貌】……氣宇容貌、様子。

かて、光秀は、安土城に到着して、部下の將士とともに、城中に貯へられたる貨財寶物を分け取つた。折しも、勅使が來つて光秀を慰勞せられたので、光秀の心は、ますますおごり高ぶつた。そこで、光秀は、使者を派遣して、その娘の婿なる細川忠興を招き寄せやうとしたけれども、忠興は、其使者を逐ひ拂つた。光秀は、又、かねて懇意なる友人なる筒井順慶を招いたけれども、順慶も來なかつたので、光秀は、そこで、懼れて、京都に入り、出来るだけ、仁惠ある政治を施し行つて、以て人の心を取り込もうとし、ふた、び、安土に往きて、賢秀を攻めやうとした。賢秀は、使者を伊賀に派遣して、援兵を信雄に求めたけれども、信雄は、あやぶみ疑つて、出發しなかつた。賢秀は、そこで、人質を送つて、證據となした。信雄は、そこで、出發して、稚山に止まり宿つた。光秀は、むざとは動かうとしなかつた。折しも、伊賀に盜賊が起つたので、信雄は、それ故に、進むことが出来なかつた。信孝は、はじめ、大坂に居つて、信長の秘密なる指圖を受けて、紀伊に於て兵船を修復するのであると言ひふらして、因つて、急に鷲森を圍み攻めて、ほとんど光佐を殺さうとした。さうすると、變亂の報が到着したので、信孝は、信澄、長秀と相談し、鷲森の圍を解いて退却して大坂に至つた。信澄も亦、光秀の婿であつたので、叛いて光秀に味方して、その出丸に立て籠つた。そこで、信孝、長秀は、信澄に迫つて、自殺して其過失を謝せしめ、かて、遂に光秀を誅戮しやうと思つたけれども、部下の兵士が、ちりんに成つて、之を寄せ集め取りまとめることが出来なかつた。折しも、羽柴秀吉が、數萬騎の軍勢を引き連れて、備中より到着したので、信孝は、大に喜んで、尼崎に諸將を會合して、評議した。諸將は、自分が其先鋒となりたうと云つて争うて、なかく、決定しなかつた。

た。そこで、信長の在世の時の進軍の法に因つて、其順序を定むるに、城邑の前後遠近を以てし、高山友祥が先鋒となり、中川清秀が之に次ぎ、池田信輝、丹羽長秀が又之に次ぎ、信孝は、自身に、四千人の軍勢を引き連れて、其後に居り、秀吉が後備へとなり、かて、光秀を山崎に於て討つて、大に之を破り、光秀は遂に誅せられた。明智光春は、安土を守つて居つたが、光秀が敗軍したといふ事を聞いて、城を焼き拂ひ、坂下に走り、其妻子を殺して、自殺した。齋藤利三等は、いづれも皆、捕へられて誅殺せられた。清秀は、通稱を瀨兵衛といつたが、山崎の合戦に於て、最も力を盡して奮闘した。そこで、信孝は、馬から下りて、清秀の手を握つて曰ふには、御前が今日力を盡して戦つてくれたこと、吾は、決して其恩を忘れることは無いと曰つた。しかるに、秀吉は、輿の中から呼んで曰ふには、瀨兵衛御苦勞であつたと曰つた。清秀が曰ふには、筑前守殿(即ち秀吉)の様子は、已に天下を一呑みにして居られると曰つた。

信輝。秀吉等。收信長尸于本能寺。葬之。遂之清洲。謁三法師。柴田勝家。佐佐成政。與長尾景勝。相持越中。拔魚津。聞變收兵。入討光秀。至柳瀨。得捷聞。直之。清洲。瀧川一益在厩橋城。是月七日。得變聞。部下將士說曰。變故之際。人心不測。且秘之。更取諸客將質。然後託事西上。一益曰。是豈可終秘乎。不若自我發之。乃急傳令。召諸客將。告變事曰。事已至此。吾在此地。與否。在諸君所計。吾且還。諸君質。客將皆相謂曰。管領推誠遇我輩。我輩誓不相負。乃請重納質。一益謝而遣歸之。明日。變報四至。北條氏直欲乘變擊一益。一益乃率部下八千人。軍于鉦川。諸客將以萬騎來援。擊走敵一將。氏直以全軍繼至。一益使言於客將曰。諸君惠然一戰。可以休矣。一益請代進。乃進戰。不利。其將篠岡某等二百人止死。一益歸厩橋。盡返質子。徑信濃而西。遣使告沿道城主。真田昌幸。木曾義昌。皆送

質出兵護送達於尾張

【質】「收信長尸于本能寺葬之」……實は舟岡山に葬るといふ。【魚津】……越中に在り。【柳瀬】……近江に在り。【捷開】……勝利の報知。【既橋】……上野に在り。今の前橋なり。【變開】……變亂の報知。【變故之際】……變亂事故ありし折柄。【且】……しばらく。【客將】……客分の大将。【豈可終秘乎】……どうして隠しきれぬものではないか。【管領】……一益を云ふ。信長、さきに、一益を以て關東管領となす。【負】……そむく。【鉤川】……上野に在り。【蕙然】……音ケイゼン。順ふ貌。こゝろよく。詩經の却風に、蕙然肯來とあり、毛傳に、時有順心也とあり。【篠岡某】……平右衛門。【沿道】……道すぢ。

【調】信輝、秀吉等は、信長の屍骸を本能寺に取り收めて、之を葬り、それより、遂に清洲に往きて、三法師に謁見した。柴田勝家、佐佐成政は、長尾景勝と、越中に對陣して居つて、魚津を攻め落した。事變を聞くと、軍勢を引きまゝとめて、京都に入つて、光秀を征伐しやうと思つて、柳瀬に至ると、勝利の報告を得たので、直ちに清洲に往つた。瀧川一益は、既橋城に居つたが、この月の七日に、事變の報告を得たので、部下の將士は、一益に説き勸めて曰ふには、變亂事故のありし折柄なれば、人の心は測り知られませぬから、しばらく此事をば秘密にして置いて、更に客分の大将どもの人質を取り、そして後に、何か事にかこつけて、西の方に上つて行くが、宜しいと曰つた。すると、一益は、流石に信長が關東管領の重任を負はせたほどの非凡な人であるから、部下の將士の説を用ひずして曰ふには、これは、どうして、仕舞まで秘密に隠しおぼせることが出来やうぞ。されば、これを秘密にして置くよりは、我より之を打ち明けて仕舞ふ方が、善いと曰ひ、そこで、急に、命令を傳へて、諸の客分の大将たちを召し寄せて、凶變の事實を告げて、さて曰ふには、すでに、こんな事になつた以上は、吾が此の地に居ると居らぬとは、諸君の御考次第である。されば、吾は、しばらく諸君から預つて居る人質を還しましやうと曰つた。すると、客將達は、皆、相互に話し合つて曰ふには、管領殿（即ち一益を指す）は、誠心を推して我々を待遇せられるのであるから、我々は、天地神明に誓つて、相そむくことを致さぬと曰ひ、そこで、重ねて人質を差し出さうと請うた。けれども、一益は、それには及ばぬと、斷つて、人質を歸せるとにした。明くる日に、變報が四方から到著した。北條氏直は、この凶變につけ込んで一益を撃たうとした。一益は、そこで、部下の軍勢八千人を引き連れて、鉤川に陣取つた。諸の客將たちは、一萬騎の軍勢を引き連れて、來り援け、撃つて、敵の一人の大将を敗走させたが、氏直は、全軍を引き連れて、引きつゞいて到着し、進んで一益を撃たうとした。すると、一益は、人をして客將たちに言はしめて曰ふには、諸君は、こゝろよく、私の爲めに一戦争をして下さつたから、もう休息して下さい。私が諸君に代つて進むことに致しましやうと曰ひ、そこで、進んで戦つたけれども、勝利を得なかつた。一益の部下の大将篠岡某等二百人の者どもが、止まり戦つて討死した。かくて、一益は、既橋に歸り、預つて置いた人質を、返して仕舞ひ、信濃を通過して、西に向つて行き、使者を遣つて、道筋の城主たちに、その由を告げ知らせると、眞田昌幸、木曾義昌は、いづれも皆、人質を差し出し、兵を出して、一益を護送してくれ、かくて、一益は尾張國に到着した。

河尻鎮吉。在甲斐。甲斐亂。會德川氏使者至。鎮吉疑其有異。殺之。鎮吉亦爲國人所殺。森長可在信濃。挾諸質子。馳入美濃。盡斬之。前田利家定能登。丹羽長秀定。若狹。皆收兵。與秀吉。會議于清洲。以二法師爲信長嫡長孫。立爲嗣。更名秀信。居安土。奉以近江二十萬石。其餘分領之。以俟秀信長。信雄領尾張。信孝領美濃。勝家領長濱。長秀素有若狹。并領志賀。高島。信輝并領兵庫。尼崎。而秀吉領播磨。丹波。但馬。因幡。秀吉與勝家。長秀。信輝。更置吏於京師。已而專決於秀吉。

【挾諸質子】……多くの人質を引き連れる。【嫡長孫】……嫡子の嫡子。總領孫。【志賀】……高島……並に近江に在り。【兵庫】……尼崎……並に攝津に在り。【更】……かはる。【折しも】……徳川氏の使者が到着したが、鎮吉は、其の異心あることを疑つて、之れを殺して仕舞つた。鎮吉も亦、甲斐の國の人の爲めに殺された。森長可は、信濃に居つたが、多くの人質どもを引き連れ、馳せて美濃に入り、殘らず之を斬つて仕舞つた。前田利家は、能登を平定し、丹羽長秀は、若狹を平定し、皆、軍勢を引きまゝとめて、秀吉と、清洲に會合し評議して、三法師が信長の物領孫であるので、之を立て、後嗣となし、名を秀信と改め、安土に居らしめ、近江の三十萬石を奉り、其餘の國々は、諸將が之を分ち領し、以て秀信の成長するのを待つことにした。即ち、信雄は、尾張を領し、信孝は美濃を領し、勝家は長濱を領し、長秀は、はじめから若狹を有して居つたが、志賀、高島を併せ領することにし、信輝は兵庫、尼崎を併せ領し、そして、秀吉は、播磨、丹波、但馬、因幡を領することにした。かくて、秀吉は、勝家、長秀、信輝とともに、かはる。役人を京都に置いて、種々の事を司らせたが、とかくする中に、京都の萬事は、専ら秀吉の一手にて決定することにした。

秀吉國最富。兵最強。矜貴自持。而秀信幼孩。信雄暗弱。皆不能制馭之。信孝有英氣。曰。我家遭遇變故。而我家奴輩舍長立幼。以爭攫遺地。且吾與信雄同年生。特以月日少後。故有兄弟之名耳。吾有復讐之功。秀吉乃攘而沒之。其篡竊之勢已成矣。不速誅之。後不復可制。乃與勝家。一益。謀



討<sup>ツ</sup>秀吉<sup>ヲ</sup>。又使<sup>ム</sup>人<sup>ヲ</sup>説<sup>カ</sup>長秀<sup>ヲ</sup>。長秀不肯<sup>セ</sup>。秀吉聞<sup>キ</sup>之<sup>ヲ</sup>。乃結<sup>ヒ</sup>信雄<sup>ヲ</sup>。急發<sup>シ</sup>兵<sup>ヲ</sup>。攻<sup>ム</sup>信孝<sup>ヲ</sup>于<sup>ニ</sup>岐阜<sup>ニ</sup>。岐阜兵寡<sup>シ</sup>。長秀勸<sup>メ</sup>信孝<sup>ヲ</sup>出<sup>シ</sup>其母及乳母<sup>ヲ</sup>爲<sup>シ</sup>質<sup>ト</sup>。和<sup>ス</sup>之<sup>ヲ</sup>。十一年正月。信雄攻<sup>ム</sup>信孝<sup>ヲ</sup>。黨北畠具親<sup>ヲ</sup>于<sup>ニ</sup>篠山<sup>ニ</sup>。陷<sup>レ</sup>之<sup>ヲ</sup>。遂與<sup>リ</sup>秀吉<sup>ト</sup>俱攻<sup>ム</sup>一益<sup>ヲ</sup>于<sup>ニ</sup>長島<sup>ニ</sup>。二月。勝家出<sup>ス</sup>軍<sup>ヲ</sup>于<sup>ニ</sup>柳瀬<sup>ニ</sup>。秀吉自<sup>ラ</sup>赴<sup>リ</sup>當<sup>ル</sup>之<sup>ヲ</sup>。四月。信孝復起<sup>シ</sup>兵<sup>ヲ</sup>。應<sup>ズ</sup>於<sup>テ</sup>勝家<sup>ニ</sup>。一益<sup>ヲ</sup>。秀吉殺<sup>ス</sup>信孝<sup>ヲ</sup>。母于<sup>ニ</sup>安土城<sup>ニ</sup>下<sup>ニ</sup>。乳母有<sup>リ</sup>子<sup>ヲ</sup>幸田某<sup>ヲ</sup>。在<sup>リ</sup>岐阜<sup>ニ</sup>。母遺<sup>シ</sup>之<sup>ヲ</sup>書<sup>ヲ</sup>曰<sup>ク</sup>。臣致<sup>シ</sup>身<sup>ヲ</sup>於<sup>テ</sup>君<sup>ニ</sup>。大義也<sup>ナリ</sup>。親先<sup>ニ</sup>子<sup>ヲ</sup>死<sup>ス</sup>。常道也<sup>ナリ</sup>。汝事<sup>ス</sup>二七君<sup>ヲ</sup>。行<sup>ヒ</sup>其大義<sup>ヲ</sup>。以<sup>テ</sup>常道<sup>ヲ</sup>自<sup>ラ</sup>釋<sup>ス</sup>。勿<sup>レ</sup>以<sup>テ</sup>我<sup>ノ</sup>故<sup>ヲ</sup>懷<sup>ク</sup>貳心<sup>ヲ</sup>也<sup>ナリ</sup>。秀吉招<sup>キ</sup>幸田<sup>ヲ</sup>。不<sup>レ</sup>至<sup>リ</sup>。乃磔<sup>シ</sup>殺<sup>ス</sup>乳母<sup>ヲ</sup>。秀吉遂圍<sup>ム</sup>岐阜<sup>ヲ</sup>。信孝戰敗<sup>リ</sup>。幸田兄弟力<sup>ヲ</sup>戰<sup>シ</sup>死<sup>ス</sup>之<sup>ヲ</sup>。

【吟貴自持】……吟は音はキヨウ、おごる也。自ら尊大にするを云ふ。高くかまへておごりたかぶる。【幼孩】……音エウガイ。幼少なること。【暗弱】……暗愚懦弱。制取。……音セイギヨ。抑へ付け引きまはす。英氣。……人並ならず勝れたる氣象。【遭遇變故】……遭遇は音サウグウ。遇ふなり。信長が統率にあひしを云ふ。【奴輩】……下郎ども。【擧遺地】……擧は撮む也。遺りし土地をつかみ取る。【兄弟之名】……信雄を兄とし、信孝を弟とす。【攘】……ぬすむ。其の自ら来るに因つて之を取るを攘と云ふ。【篡竊】……音ザンセツ。うばひぬすむ。逆にし奪ひ取るを篡と云ふ。竊は盗なり。【篠山】……伊勢に在り。【長島】……伊勢に在り。【幸田某】……彦右衛門。【先子死】……死の字の上につて居る汝の母たる吾は、敵の爲めに殺されるであらう。たとひ、われが敵に殺されても、親が子よりも先だつて死ぬることは、世間の通例であると思つて、自ら思ひわけて、われが死んだとを残念に思ふとなかれとの意。【勿以我故懷貳心也】……我がとらはれとなしを以て、それに引かされて二心を持つことなかれとの意。

【調】秀吉は、其領國が最も富みてゆたかに、其部下の軍勢が最も勇強であつて、自ら高く尊大にかまへて、おごり高ぶつて居つた。そして、秀吉は幼稚であるし、信雄は暗愚柔弱であつて、いづれも皆秀吉をおさへつけ引きまはすことが出来なかつた。信孝は、人並にすぐれたる氣象があつて、曰ふには、我が織田家は、凶變事故に出合つたので、我が家の下郎どもは、年長者をおいて、幼稚なる者を立て、後嗣となし、そこで、先を争うて、父君の遺しておかれた地をつかみ取つた。其上に、吾は、信雄と同じ年に生れたのであるが、吾が生れた月日が少

し後れて居つたので、それ故に、信雄を兄とし、吾を弟とするばかりの事である。吾は、父君の仇をむくいた功勞があるのに、秀吉は、其功勞をぬすみ取つて、之を没却して仕舞つた。秀吉が、我が家を奪ひぬすまんとする形勢は、すでに出来あがつて居る。速に之を誅戮せぬときは、後に至りて、再び制御することは出来ぬやうになるであらうと曰ひ、そこで、ひそかに、勝家、一益と、秀吉を征伐することを相談し、又、人をして長秀に説き勧めしめたいけれど、長秀は、承知しなかつた。秀吉は、此事を聞き及んで、そこで、信雄と申し合はせ、急いで、軍勢を繰り出して、信孝を岐阜に攻めた。岐阜の軍勢は少かつたので、長秀は、信孝に勧め、其母及び乳母を出して、人質となし、和睦を結んだ。天正十一年の正月に、信雄は、信孝の一味の者なる北畠具親を篠山に攻め落し、それから、遂に、秀吉とともに、一益を長島に攻めた。二月に、勝家は、軍勢を柳瀬に繰り出した。秀吉は、自身に出かけて行つて、之に當つた。四月に、信孝は、ふたたび、兵を起して、勝家、一益に味方した。すると、秀吉は、人質として預つて居る信孝の實母を安土城の下に於て殺した。信孝の乳母には、子があつて、幸田彦右衛門と云つたが、岐阜に居つた。其母は、秀吉の方に人質となつて居つたが、其子彦右衛門に手紙をおくつて曰ふには、臣下たる者が、身命を主君に差し出すのは、大義である。親が子よりも先だつて死ぬるの、當り前の常道である。されば、汝は、三七殿（即ち信孝の幼名）に事へて、その大義を行へよ。その爲めに、たとひ私が敵に殺されるやうな事があつても、親が子に先だつて死ぬるの常道であると思つて、自ら其恨を釋くことにし、私の爲めに故の主君に對して二心を持つやうなことがあつては成らぬと曰つた。秀吉は、幸田を招いて、味方に付けやうと思つたけれども、幸田は來なかつたので、そこで、秀吉は、信孝の乳母即ち幸田の母をはりつけにして殺した。かくて、秀吉は、遂に進んで、岐阜を圍んだが、信孝は負けて、幸田彦右衛門兄弟は、力を盡して戦つて、討死した。

當<sup>リ</sup>是時<sup>ニ</sup>。長秀以下諸將皆屬<sup>シ</sup>秀吉<sup>ニ</sup>。爲<sup>シ</sup>之<sup>ヲ</sup>拒<sup>ツ</sup>勝家<sup>ヲ</sup>。勝家令<sup>リ</sup>佐久間盛政<sup>ヲ</sup>襲<sup>フ</sup>殺<sup>ス</sup>中川清秀<sup>ヲ</sup>。收<sup>メ</sup>兵<sup>ヲ</sup>速歸<sup>リ</sup>。盛政<sup>ハ</sup>徃<sup>リ</sup>勝不歸<sup>リ</sup>。秀吉令<sup>リ</sup>堀尾吉晴<sup>ヲ</sup>及降將稻葉通朝<sup>ヲ</sup>。氏家行廣等備<sup>ヘ</sup>信孝<sup>ヲ</sup>。而馳擊<sup>シ</sup>盛政<sup>ヲ</sup>。擒<sup>メ</sup>之<sup>ヲ</sup>。勝家曰<sup>ク</sup>。盛政不用<sup>シ</sup>我言<sup>ヲ</sup>。果取<sup>ル</sup>此敗<sup>ヲ</sup>。吾自<sup>ラ</sup>往決戰<sup>ス</sup>。乃檢<sup>ム</sup>其兵<sup>ヲ</sup>。兵已逃亡<sup>シ</sup>。在者僅<sup>ニ</sup>二千<sup>ニ</sup>。諸將皆勸<sup>メ</sup>退<sup>ル</sup>。勝家曰<sup>ク</sup>。吾嘗<sup>テ</sup>以<sup>テ</sup>少擊<sup>シ</sup>衆<sup>ヲ</sup>。獲<sup>ル</sup>勝者數<sup>ニ</sup>。諸君何扼<sup>レ</sup>我也<sup>ナリ</sup>。家臣毛受勝介曰<sup>ク</sup>。往時君所將<sup>シ</sup>。皆濃尾驍卒<sup>ナリ</sup>。今領<sup>ム</sup>北兵<sup>ヲ</sup>。非<sup>ズ</sup>素拊循<sup>ス</sup>。所以逃亡<sup>ス</sup>。摧敗之餘<sup>ニ</sup>。何堪<sup>シ</sup>折衝<sup>ス</sup>。臣請假<sup>シ</sup>君背<sup>ヲ</sup>。幟<sup>ヲ</sup>。僞稱<sup>シ</sup>君死<sup>ス</sup>。君逃入<sup>リ</sup>北莊<sup>ニ</sup>。徐自爲<sup>シ</sup>計<sup>ヲ</sup>。勝家從<sup>フ</sup>之<sup>ヲ</sup>。秀吉縱<sup>シ</sup>兵<sup>ヲ</sup>追擊<sup>ス</sup>。遇<sup>フ</sup>其背<sup>ヲ</sup>。

幟大驚。急整隊圍之。勝介大呼曰。柴田勝家死于此。與其兄皆力戰死。勝家得間走。過府中。入見前田利家。曰。子爲我出力。不知所謝。吾命窮至此。復何言也。吾飢矣。請供飯焉。利家供之。勝家食畢。借善馬而出。利家欲從之。勝家揮之曰。子與秀吉善。母以我爲也。終歸北莊。諭其將領與敵有姻者。皆遣之。願留者九人。秀吉至。圍城數重。勝家夜宴將士于天主閣。慷慨曰。吾欲報先君之恩。終爲猴面藤吉所困。豈非天哉。其妻信長之妹也。勝家使之逃去。妻泣曰。妾自去秋出岐阜。業已委身於良人矣。今日之事。固期於心。何必逃也。於是夫妻訣飲徹曉。終伏刃。駢死。侍臣文荷者。縱火于閣。殉之。

【襲殺中川清秀】……賊が嶽の戦争。研……なれる。【扱】……しらべる。【扼】……とむる。無理に引きとめる。【素拊循】……拊循は音フジユン。拊は撫に同じ。慰撫する義。はじめから附き従ふ。【摧敗】……音サイハイ。くだけやぶれる。【折衝】……音セツシヨウ。敵兵の衝き来るを折くこと。敵の鋒先を打ちひしむ。【背職】……音ハイシ。さしもの。【北莊】……越前に在り。勝家の治所。【府中】……越前に在り。【命】……運命。揮之……其人に向つて。止めよと。手を振ること。【母以我爲也】……我が事を氣にかけぬ。【先君】……信長を指す。【猴面藤吉】……猿のやうな面の藤吉。秀吉の面は猿に肖たり。始め藤吉と稱す。【其妻信長妹也】……小谷の方と稱す。夫婦訣飲のとき。杜鵑の聲を聞き。歌を詠ず。さらぬだにうらぬるほど。夏の夜の夢路をさそふほと。ぎすかな。勝家も亦。夏の夜の夢路はかなき跡の名を雲居にあげよ。山ほと。ぎす。【文荷齋】亦次で。おもふと打ち連れつ。行く路のしるべや。死出の山ほと。ぎす。【良人】……妻の夫を稱する辭。【期於心】……心に覺悟して居る。【訣飲】……最後の酒宴。【徹曉】……夜通し。【駢死】……駢は。ならぶ。首をならべて死ぬる。【文荷】……中村氏。

この時に當りて、長秀以下の諸大將は、皆、秀吉に附き従ひ、秀吉の爲めに、勝家を拒いた。勝家は、佐久間盛政をして、中川清秀を不意撃して殺し、それから、軍勢を引きまゝとめて、速に歸らしめやうとしたが、盛政は、戦勝になれて、心おこりて、歸らなかつた。秀吉は、堀尾吉晴及び降参した大將稻葉通朝、氏家行廣等をして、信孝に備へしめて置いて、そして、自分は、馳せて盛政を撃つて之を生け捕りにした。すると、勝家が曰ふには、盛政は、わが言葉を用ひなかつたので、案の通り、此失敗を取つた。吾は自身に出かけて往きて決戦しやうと曰ひ、そこで、其兵をしらべて見ると、兵士は、すでに逃げ去つて、殘つて居る者は、わづかに三千人であつた。そこで、諸將は、皆、退軍することを勧めた。すると、勝家が曰ふには、吾は、かつて、少數の軍勢を以て多數の軍勢を撃つて、勝利を得たことが、度々であつた。諸君は、どうして我を引き止められるので御座るか。と曰つた。すると、家來の毛受勝介が曰ふには、さきにあなたが、引き連れて居られた軍勢は、いづれも皆、美濃、尾張の驍勇なる士卒でありました。しかるに、今や、あなたは、北陸地方の兵士を引き連れて居られますが、これは、初めから撫育して手なづけて置かれたものでは御座りませぬから、逃げ去つて仕舞つたので御座ります。すでに敵に打ち砕かれ敗北した後は、どうして、敵兵の鋭い勢を受け止めつきづづかすことが出来まじやうぞ。されば、私、願はくは、あなたのさし物を拜借して、偽つて、あなたであるとして、討死いたしましやう。あなたは、その間に、逃げて、北莊に入り、ゆつくりと、最後の計を定めなされよと曰つた。勝家は、此言葉に従つた。秀吉は、兵を縱つて追ひ撃つたが、勝家のさし物に出合つたので、秀吉は、大に驚いて、急に隊伍を整へ直して、之を取り圍んだ。すると、勝介は、大に呼ばつて曰ふには、柴田勝家は、こゝに討死するのであると曰ひ、その兄とともに、いづれも皆、力を盡して戦つて、討死した。勝家は、隙間を得て、逃げ走り、府中を通り過ぎ、城中に入つて前田利家に面會して曰ふには、貴殿は、拙者が爲めに、軍勢を繰り出して助けてくれたが、何とも御禮の申しやうも無い。けれど、拙者の運命は窮まりて、こんな事に立ち至つた。もはや、何も言ふことは御座らぬ。しかし、拙者は、腹が減つて居るから、どうぞ飯を食へさせてくださいと曰つたので、利家は之を供へた。勝家は、飯を食ひ終つて、善く走る馬を借り受けて、出發した。利家は、勝家に従つて走らうとした。すると、勝家は、利家に向つて、手を振つて、斷つて曰ふには、貴殿は、秀吉と仲が善いことであるから、秀吉が決して悪くは取り計らふまい。拙者の事を念頭に懸けられるなど曰ひ、かくて、勝家は、とうとう、北莊に歸り、部下の將校で、敵と縁類である者共に説き諭して、皆之を立ち去らしめた。留まることを願ふものが、九人あつた。やがて、秀吉が到着して、幾重にも城を取り圍んだ。勝家は、夜將士を寄せて天主閣に於て酒宴を開き、慷慨悲憤して曰ふには、吾は、先殿様の御恩を報いやうと思つて、とうとう、猿面冠者の藤吉の爲めに、もろくも失敗して、斯く困しめられることに成つた。これは、天命ではあるまいかと曰つた。勝家の妻は、信長の妹であつたが、勝家は、之をして逃げ去らしめやうとした。すると、妻は泣いて曰ふには、私は、昨年の秋に岐阜を出で、からずで、此身をあなたに御任せ申し上げたので御座います。今日の事は、もとより私の心に覺悟して居つたことで御座います。どうして、今更逃げ出すに及びまじやうぞと曰つた。こゝに於て、勝家夫婦は、夜とほし最期の酒宴をなし、とうとう、及に伏して、首をならべて死んだ。侍臣の中村文荷と云ふ者が、火をつけて天主閣を焼き拂つて、そこで殉死した。

勝家切腹之事

廿三日午前、攻勢などを止め、よばはりて曰、昨日廿二日の夜、山中にて御子息權六殿並に支藩殿を生捕つて参り候、あな痛はしき御事に候と呼はりぬ、是より城中ひそまりて音もせず、其後は請け取りし門々を防ぎ守るばかりにて、しかく鐵炮も打たず、夜に入るとひとしく、殿守の上にも下にも、廣間其外橋々などにも酒宴始まりけり、勝家益に向ひつ、一族他家の人々をよび並べ、申されけるは、あの藤吉郎猿くわじやが爲めにかく成り果つる事、無念の次第、とうかう云ふに及ばれず、所詮酒呑んで、明日はうき世の隙をあけばの、雲と消えなると、文荷齋をれくと有りしかば、名酒の樽共あまた置きならべ、種々の肴を出しつ、酒宴こそ始められ、彌右衛門尉に申し付

け、何れの橋にも酒を呑み候へど、樽着給はりしかば、何方も酒宴の聲を聞えり、小谷の御方へ勝家さし給へば、一二酌んで又返し侍りけるに、匠作も數盃をかたづけ、文荷齋にさし給ふ、小島若狭守は、酒宴の半にも四方を見廻しつ、其品露心に忘れざりしかば、心を安んじゆるやかに酒を愛しける、盃も度々廻りければ、漸く終りなるとす、勝家、小谷の御方に申されけるは、御身は信長公の御妹なれば、出でさせ給へ、つゝがもおはしますまじきと有りければ、小谷の御方涙ぐませ給うて、去秋の終、岐阜より参り、かくまひえぬる事も、前世の宿業、今更驚くべきに非ず、爰を出で去らん事思ひもよらず候、しかばあれど、三人の息女をば出し侍れよ、父の菩提をも問はせ、又自ら跡をも弔はれん爲めだかしの給へば、いと安き事なりとて、其由姫君に申させ給ふ、姉君、いやとよ、母上共に同じ道にゆかん物をとなき悲み給ふを、文荷齋、其譯も聞き入れず、御手を取り引き立て三人出し奉りぬ、夜半の鐘聲殿守に至りしかば、御二所深閑に入りぬ、彼の四面楚歌の夜の夢、楚王虞氏が深き恨もかくやと思ひ出でにけり、何れも橋々へ引き入りまどろまんと思はば、はや郭公雲井に音づれ、別れを催し侍るに、

さらぬだにうちぬる程も夏の夜の別を誘ふ時鳥かな  
夏の夜の夢路はかなき跡の名を雲井にあげよ山時鳥  
節義に當りて不戀者なれば同じ道に侍らん、  
契あれやすゝしき道に伴ひて後の世迄も事へ仕へん

小谷御方 勝家

文荷齋

となん詠めりければ、匠作猛々心もそれならず見えて、更に袖をば濡されける、小谷の御方、其外數々の女房達、念誦稱名の聲、哀をとめけり、若狭守、文荷齋、殿守の下に込草をつみ置き、兼ての用意残る處もなく沙汰し置きしかば、心静に火をかけ、半燃え出づるに及んで、雜人原をば出し、さて勝家のおはしましける五重の上り、下はかく仕まひ申候、御心静に沙汰し給へと申上げしかば、流石最期はよかりけり、男女三十餘人同じ煙と立ち上りぬ、勝家の氣象常にしも違ふ事、それぐに感なきは、卯月廿四日申の刻にぞ終りにけり、

當是時。信雄圍岐阜。城兵潰。信孝出奔内海。信雄使人迫之自殺。五月。秀吉斬佐久間盛政。柴田權六于京師。盛政素虓武。每戰用鐵楯。躬自陷陣。人呼曰鬼盛政。臨刑言曰。我悔不聽修理言。苟聽修理言。則使秀吉如我也。修理勝家也。六月。一益降秀吉。秀吉放之近江。使信雄取其地。以長秀助己。使之取柴田氏地。池田堀森氏。皆有分地。

【内海】……尾張に在り。【信孝自殺】……時に年二十六なり。【虓武】……音カウブ。虓は、虎の怒り鳴くこと。虎の怒り鳴くが如く勇武なるを。【楯】……音ボウ。楯に同じ。【修理言】……勝家、修理亮たり。殿岳の役に、盛政をして、中川清秀を襲ひ殺し、速に歸らしむるの語を指す。【其地】……一益の領地、伊勢の長島を指す。【柴田氏地】……越前の北莊。

この時に當りて、信雄は、岐阜を圍み攻めたが、城兵は、負けて、ちり／＼になつて逃げたので、信孝は、出で、内海に逃げ奔つた。するに、虎の怒號するが如く猛烈であつて、戦ふごとに、鐵楯を用ひ、之をふりまはして、自身に、敵陣を陥れるので、人は、鬼盛政と呼んで居つた。盛政が刑せられやうとするときに、曰ふには、我は、柴田修理の言葉を聞き入れなかつたことを後悔する。もしも、修理の言葉を聞き入れたならば、秀吉をして我が如くならしめたであらうと曰つた。修理と云ふのは、勝家のことである。六月に、一益は、秀吉に降参した。秀吉は之を近江に放逐し、信雄をして一益の領地を取らしめ、又、丹羽長秀が自分を助けたので、長秀をして柴田氏の領地を取らしめることにした。池田氏、堀森氏は、いづれも皆、それ／＼土地を分け與へられた。

既而秀吉欲激信雄。除之。設飛語曰。羽柴將不利北畠氏。十二年。正月。諸將賀正於安土。皆過見信雄。獨秀吉至大津。而不入。信雄怒。諸將和解之。盟于三井寺。信雄將岡田重善。津川義冬。淺井多宮。瀧川雄利。皆驍勇。秀吉先盟招四人。誘以厚利。三人聽之。獨雄利佯聽。臨盟告信雄。信雄驚。馳歸長島。遂議討秀吉。三人以爲不可。信雄曰。吾誅猴奴。易易耳。汝輩何得沮我。三人稱疾不出。二月。信雄伏甲。召三人誅之。分攻其邑。拔松島。予之雄利。求援於德川公。德川公之來安土也。信長令之游界府。聞信長遭害。走歸其國。於是發兵助信雄。信雄又招池田信輝。及其二婿森長可。堀秀政。秀吉亦誘信輝。信輝子輝政質于長島。信雄還之曰。先考待卿最厚。卿必不負我。我持其質。是疑卿也。信輝已收其質。乃應秀

吉。詭瀧川一益亦應秀吉。聚兵據木造。以復舊封。織田信包。蒲生氏郷。關萬徹皆應一益。攻嶺城。城將佐久間正勝。與部將山口重政等。固守拒之。敵聞援兵至。解圍去。正勝乃還長島。又守蟹江。

【激】……先方の氣にさかりて怒らせること。【飛語】……根なし言。其の來る所を知らざる也。【北島氏】……信雄を指す。信雄は、北島氏を指す。【猴奴】……音コウド。猿面冠者。秀吉を云ふ。【易易】……音イイ。たやすくして何でも無きこと。【分攻其邑】……攻は一に收に作る。【松島】……伊勢に在り。義冬の邑。【先考】……亡父を考と云ひ、亡母を妣と云ふ。信長を云ふ。【詭】……音テウ。相呼び誘ふ。そのかす。【木造】……伊勢に在り。【舊封】……もとの領地。【關萬徹】……盛信入道。【嶺城】……伊勢に在り。信雄に屬す。【蟹江】……尾張に在り。【關】……伊勢に在り。秀吉は、わざと信雄の氣にさかりて怒らせて其れをきつかけにして信雄を除き去つて仕舞はうと思つて、わざと、根無し言をつくつて曰ふには、羽柴氏は、將に北島氏に不利なることをしやうとして居ると曰つた。天正十二年の正月に、諸大將は、安土の秀吉に年始を申し上げ、其歸りがけに、皆、信雄の處へ立ち寄つたが、たゞ秀吉だけは、大津に至つたけれども、入城して信雄に遇はなかつた。そこで、信雄は怒つた。諸將は、其間に入りて仲裁し、三井寺に會して盟ふことにした。信雄の大將なる岡田重善、津川義冬、淺井多宮、瀧川雄利は、いづれも皆、勇武であつた。秀吉は、盟約の日より數日以前に、この四人の者を招き寄せ、利益を以て之を誘つた。すると、三人の者は、之を承知した。たゞ雄利だけは、伴つて承知して置いて、盟約のときに臨んで、信雄に申し上げた。すると、信雄は、驚いて、馳せて長島に歸り、それより、遂に、秀吉を征伐することを評議した。三人の者は、それは宜しくありませぬと曰つた。信雄が曰ふには、わが、猿面冠者の秀吉を誅戮することは、いと容易いことである。汝等、どうして我をば、止めることが出来やうぞと曰つた。三人の者は、病氣であると申し立て、出仕しなかつた。三月に、信雄は、兵士を伏せ置きて、三人の者を召し寄せ、之を誅殺し、兵を分つて其領地を攻め、松島を攻め落して、之を雄利に與へることにし、加勢することを徳川公(即ち家康)に求めた。徳川公が、さきに、安土に來つたときに、信長は、徳川公をして和泉の界に遊ばしめたが、信長が弑害せられたといふことを聞いて、走つて本國に歸つた。こゝに於て、徳川公は、軍勢を繰り出して、信雄を助けた。信雄は、又、池田信輝及びその二人の婿なる森長可と堀秀政とを招いた。秀吉も亦、信輝を誘つた。信輝の子は、長島の信雄のところに人質となつて居つたが、信雄は、之を還して曰ふには、亡父(信長)を云ふが御前を待遇することは、最も手厚かつたのであるから、御前は、屹度、我にそむくことはあるまい。しかるに、わが、御前の人質を留め置くのは、これは、御前を疑ふことになるから、之を還すのであると曰つた。信輝は、すでに其人質を受け取ると、そこで秀吉に味方し、瀧川一益をそやし立て、亦、秀吉に味方せしめ、兵を寄せ集めて、木造に立て籠つて、以て、もとの領地を取りかへさしめた。織田信包、蒲生氏郷、關萬徹は、いづれも皆、一益に味方して、嶺城を攻めた。城將佐久間正勝は、部下の大將山口重政等とともに、固く守つて之を拒いだ。敵軍(即ち秀吉の方の軍)は、我が援兵が來ると云ふことを聞いて、圍を解いて立ち去つた。正勝は、そこで、長島に還り、又、蟹江を守つた。

信雄在清洲。與徳川公。合兵二萬。軍于小牧。秀吉以十二萬人軍犬山。

四月。秀吉令信輝。長可襲參河。信雄與徳川公邀擊。獲二將。秀吉亦令筒井定次。九鬼嘉隆攻松島。月餘。雄利與徳川氏將服部正成。固守拒之。以定次講和。致城而卻。秀吉拔嶺。神戸。利井。竹鼻數城。退軍于大垣。六月。信雄使正勝城。萱生。一益乃誘降蟹江留守前田種利。種利二子。長種。定利。守前田。下市。二壘。山口重政守大野壘。二子皆降。遂招重政曰。汝母在蟹江。不聽則殺之。重政答曰。吾知受命守城。不知其他。豈做公等人面獸行乎。一益與嘉隆。迫以兵艦。重政投炬。燒而走之。敵轉赴下市。又擊走之。信雄與徳川公來援。拔前田。下市。走長種。斬定利。大賞重政。遂圍蟹江。七月。一益斬種利以降。信雄宥其死。乃走歸木造。城將富田知信疑而弗納。一益乃走京師。後死於北陸。八月。秀吉又入尾張。令萬徹。氏郷攻伊勢諸城。佐佐成政起兵于外山。以遙應信雄。攻前田利家。不克。

【清洲】……【小牧】……【犬山】……並に尾張に在り。【二將】……池田信輝、森長可。【嶺】……【神戸】……並に伊勢に在り。【利井】……美濃に在り。加賀野井の誤なるべし。【竹鼻】……美濃に在り。【大垣】……美濃に在り。【萱生】……美濃に在り。【前田】……【下市】……尾張に在り。【大野】……尾張に在り。【人面獸行】……主に背き敵に降るを云ふ。【外山】……越中にあり。【關】……信雄は、清洲に居つたが、徳川公と、兵士二萬人を合はせて、小牧に陣取つた。秀吉は、兵士十二萬人を引き連れて、犬山に陣取つた。四月に、秀吉は、信輝と長可をして三河を不意撃せしめた。信輝は、徳川公とともに、迎へ撃つて、信輝、長可の二將を討ち取つた。秀吉は、亦、筒井定次、九鬼嘉隆をして、松島を攻めしめること、二箇月餘に及んだが、雄利は、徳川氏の大將服部正成とともに、固く守つて之を拒いだ。

しかし、定次が和睦したので、それ故に、雄利は、城を明け渡して退却した。秀吉は、嶺、神戸、利井、竹鼻などの數城を攻め落し、退いて大垣に陣取つた。六月に、信雄は、正勝をして、萱生に城を築かしめた。一益は、そこで、蟹江の留守の將前田種利を誘うて降参させた。種利の二人の子なる長種、定利は、前田、下市の二つのとりでを守つて居つた。山口重政は、大野のとりでを守つて居つた。種利の二人の子は、いづれも皆敵に降服したので、一益は、遂に重政を招いて、そして、曰ふには、汝が母親は、蟹江に居られる。若し我が言葉聞き入れぬならば、之を殺して仕舞ふぞと曰つた。重政が答へて曰ふには、拙者は、主君の命令を受けてこの城を守ること承知して居るだけで御座る、其他の事は、一切知らないで御座る。どうして、貴公等の眞似をして、人間の皮をかぶりながら、獸類の行爲を致しませうぞと曰つた。すると、一益は、嘉隆とともに、兵船を以て攻め立てると、重政は、たいまつを投げ付けて、焼いて之を走らせた。すると、敵は、方向をかへて下市に赴いたが、又、撃つて之を敗走させた。信雄は、徳川公とともに、來り援けて、前田、下市を攻め落し、長種を敗走させ、定利を斬り、大に重政の功勞を賞し、それから、遂に蟹江を圍んだ。七月に、一益は、種利を斬つて、降参した。信雄は、其死を宥したので、そこで、一益は走つて木造に歸つたけれども、城將富田知信は、疑つて城内に入れなかつた。一益は、そこで京都に走り、後に北陸道に於て死んだ。八月に、秀吉は、又、尾張に討つて入り、萬徹と氏郷をして伊勢の諸城を攻めしめた。佐佐成政は、兵を外山に起して、以て遂に信雄に味方して、前田利家を攻めたけれども、勝利を得なかつた。

十一月。秀吉以八萬人入伊勢。信雄出而對陣。秀吉使人請和。信雄許之。盟于桑名城下。秀吉陽尊信雄。執臣禮如故。信雄大喜。成政未之知也。欲就徳川公協謀以圖秀吉。乃稱疾屏居。潛與壯士百餘人。冒雪入信濃。留侍臣於外山。餽食稟啓如常。誠之曰。度我往還。不過二十日。利家必不能覺。即覺治兵。則我已歸至矣。於是乘橈兼行。所經皆山谷。絕無人烟。得一樵家。入之。樵父大愕。以爲鬼物。從者曰。吾輩自越中赴深志者。汝爲鄉導。吾重賞汝。樵父乃燒柴燎之。導至下諏訪。使健步告徳川氏。徳川氏乃遣人馬迎之。十二月。至遠江。説曰。願公舉五國兵。吾亦舉

越中兩雄戮力。鼓行而西。必禽秀吉。徳川氏以其言爲倨。且知北地不便。出援乃辭之。成政遂適尾張。勸信雄再舉兵。信雄不肯。成政失意而歸。

【桑名城下】…矢田河原を指すか。秀吉諸武徳編年集成等には、矢田河原に作る。【屏居】…音ヘイキヨ。引きこもる。【饋食稟啓】…音キシヨクランケイ。稟は命を受ける也。啓は事を白すなり。食膳の持ち運びや事を伺ひ出でたり、申し立てたりすること。【覺】…さとする。感づく。【即】…し。【治兵】…出兵の用意をする。【橈】…音ケウ。そり。板を以て之をつくり、形箕の如く、雪の上を行く用ふる者。【鬼物】…ばけもの、怪物。【深志】…信濃に在り。【樵】…炙る也。あぶりあた、める。【下諏訪】…信濃に在り。【健步】…善く走る者。【五國】…三河、遠江、駿河、甲斐、信濃。【鼓行】…太鼓を打ち鳴らして攻め行く。【禽】…とりこにする。【倨】…音キヨ。おごる、不遜なり。【乃辭之】…逸史に云はく、徳川氏、成政に對へて曰く、寡人、秀吉、宿怨あるに非ず、前日の事、織田氏に因るのみ、今已に平く、何ぞ妄に動くべけんや、且つ、寡人、秀吉を撃たんと欲せば、力能く之を辨せん、必ずしも子の衆を煩はさず、異日、秀吉、越に事あらば、乃ち兵を出し應援し、來意に耐いんと。酒井忠次言ひて曰く、成政は庸材、本と織田氏の家奴なり、乃ち傲然として君を以て自ら比し、稱して兩雄となす、言辭不遜なり、請ふ之を絶たんと。徳川氏、又、人をして越後を見しむ。曰く、山谷阻隘、加ふるに三時は深雪、行く可からずと。乃ち使者をして應援を辭せしむ。【適】…ゆ。

十一月に、秀吉は、八萬人の軍勢を引き連れて、伊勢に討つて入つた。信雄は、出で、對陣した。秀吉は、人をして和睦せんことを請はしめると、信雄は、之を許して、桑名の城下に於て、盟つた。秀吉は、うはべには、信雄を尊び敬つて、臣下たるの禮儀を取ること、もとの通りであつたので、信雄は、大に喜んだ。然るに、成政は、未だ此事を知らなかつたので、徳川公の處へ行つて、謀をあはせて、秀吉を除き去ることを圖らうと思つて、そこで、病氣であるを稱へて引き籠り、ひそかに、壯士百餘人とともに、積雪を冒して、信濃に入らうとして、侍臣を城外山に残しおきて、三度の食膳の持ち運びや、事を伺ひ出でたり、又事を申し上げたりすること、平常の通りをさせることにし、之に注意して曰ふには、わが往復の日數をはかるに、二十日より多くは懸るまいと思ふ。其間には、利家は、わが不在であることを感づくことは、必ず有るまい。若し又利家が此事を感じて出兵の用意をするとしても、其時には、われは已に歸つて來るであらうと曰ひ、こゝに於て、橈に乗つて、大急ぎで、二日の路を一日に行きやうにして馳せ、其の通り過ぎるところは、皆、山や谷で、人間が住んで居つて烟の立ち登つて居る所は、絶えて無いほどであつたが、やつと、一軒の木こりの小屋を見付けて、其中に入ると、木こりは、大に驚いて、ばけ物であると思つた。從者が曰ふには、吾々は、越中から深志に行く者であるが、汝、道案内をいたしてくれ。すれば、吾は、厚く汝に褒美を與へるであらうと曰つた。そこで、木こりは、柴を焼いて之をあつめ、案内して、下諏訪まで到着した。そこで、飛脚をして徳川氏に告げしめると、徳川氏は、そこへ、人馬を遣して之を迎へしめた。十二月に、成政は、遠江に至り、徳川氏に説き勸めて曰ふには、どうか貴殿、領内五箇國の軍勢を残らず繰り出されよ。吾も亦、越中の軍勢を残らず繰り出さしやう。貴殿と吾との二人の英雄が、力を合はせ、攻め太鼓を打ち鳴らして、西に向つて進み行かば、必ず秀吉を生捕りにすることが出来るで御座らうと曰つた。徳川氏は、一益の言葉を以て、はなはだ横柄であると思ひ、且つ

又、北國の土地は援兵を繰り出すのに都合が悪いことを知つて居つたので、そこで、之を断つた。成政は、それから、遂に尾張に往きて、信雄に、再び兵を擧げることゝ勧めたけれども、信雄は、承知しなかつたので、成政は、思はくががらりとほづれたので、しばらくとして、國に歸つた。

信雄叙從三位。任參議。十三年。進正三位。遷大納言。初丹羽長秀以秀吉爲有忠功也。任意助之。於是視其勢出。織田氏上。則大悔恨。託疾自殺。其子長重猶弱。舊臣相共謀。欲舉兵繼長秀志。謀頗漏。八月。秀吉北攻。成政。成政逆戰。不克降。秀吉乃予越中于前田利家。予越前于堀秀政。返長重以若狹。十五年。秀吉以長重犯軍法。奪若狹。擯爲松任城主。給五萬石。家臣成田某憤懣。謂其同僚曰。吾欲舉事。誰與我者。衆莫敢答。成田罵曰。皆非人也。秀吉聞之。使人殺成田。是歲。秀吉予成政以肥後。肥後盜起。秀吉怒。明年。閏五月。成政自赴大坂。謝之。秀吉使人迎之。尼崎。賜死。

【枉意】…枉は、まぐる也。心をまげて、いや／＼ながら。「託疾自殺」…丹羽長秀は、人となり質直、秀吉が寒微より起りて猝に己が上に出づると雖も、其の大膽を復せるを重んじ、意を屈して之に従ふ。其の信雄を擯け、自ら盟主となるに及び、積んで平かなること能はず、窃に之を除き以て織田氏を興さんと欲すれども、其力辨する能はざるを病へ、居常快々。夙に痼疾あり、晩節、殆んど自ら支へず、毎に言はく、痼塊我を殺さんと欲す、此も亦吾が仇なりと。卒に刀を引き肚を割き、塊物を剔出して死せり。塊物鬼形にして、鷹鷲なり、刀柄背に在り、一時傳へて之を奇とす。秀吉、醫員竹中法員に命じて、之を藏めしむと云へり。【弱】…若年なること。わかし。【擯】…しりぞける。【松任】…加賀に在り。【成田某】…助九郎。【憤懣】…音フンモン、又はフンマン。憤りもだゆる。【信雄】…信雄は、從三位に叙せられ、參議に任ぜられ、天正十三年に、正三位に進み、大納言に遷された。はじめ、丹羽長秀は、秀吉を以て、主君

の仇を討ち、忠義にして大功あるものと思つたので、我が意志をまげて、いや／＼ながら、秀吉を助けたのであるが、こゝに於て、秀吉の勢力が織田氏よりもすくなく居るのを見て、そこで、大に後悔し、残念に思つて、病氣にかこつけて、自殺して仕舞つた。その子の長重は、まだ幼少であつたが、舊臣どもが、相共に相談し、兵を擧げて長秀の志願を繼いで秀吉を討たうとしたが、その謀が、餘程漏れた。八月に、秀吉は、北行して、成政を攻めた。成政は、出で、迎へ戦つたけれども、勝利を得ずして、降参した。秀吉は、そこで、越中をば前田利家に與へ、越前をば堀秀政に與へ、長重には若狹を返して與へた。天正十五年に、秀吉は、長重が軍律を犯したといふわけを以て、若狹を取りあげ、しりぞけて、松任の城主となして、五萬石を給與した。家來の成田某は、憤りもだえて、其同僚共に向つて曰ふには、吾は、大事を執行しやうと思ふが、誰か我とともに此事を執行する者はないかと曰つたけれども、人々の中に、敢て答へるものは、誰も無かつたので、成田は、罵つて曰ふには、諸君は皆人間では無いと曰つた。秀吉は、此事を聞き及んで、人をして成田を殺さしめた。この歳に、秀吉は、左佐成政に、肥後を與へたが、其後、肥後の國內に、盜賊が起つたので、秀吉は、怒つた。明年の閏五月に、成政は、自ら大坂に出かけて行き、此事を御説びしやうとしたが、秀吉は、人をして成政を尼崎に迎へしめて、同所に於て、死を賜はつた。

信雄陞從二位内大臣。秀吉以其據咽喉地。欲徙之。未果。十八年。秀吉伐北條氏。信雄以兵一萬五千助之。攻葦山。及事平。秀吉封徳川氏于關東八州。欲以其舊國五州。致於信雄。信雄辭曰。尾張。伊勢。吾故地也。得仍居焉足矣。敢膺大封。秀吉怒。其不屑受。已封也。乃奪二州。予之已甥秀次。逐信雄于出羽秋田。明年。徙之伊豫。山口重政等。皆事徳川氏。文祿元年。秀吉召信雄。至大坂。予其子秀雄。以大野五萬石。信雄退居伏見。削髮稱常眞。常眞之弟次丸。自信長在時。爲秀吉所養。更名秀勝。封之丹波。爲左近衛少將。四年。秀勝卒。無嗣。國除。

【咽喉之地】…咽喉は食道、喉は氣道。以て要地に喩ふ。天下の咽喉とも云ふべき重要な土地。【葦山】…伊豆に在り。【關東八州】…相模、武藏、上總、下總、安房、常陸、上野、下野。其舊國五州。…家康のものと領地五箇國。即ち、三河、遠江、駿河、甲斐、信濃。【得仍居焉】…

…これまで通りに此處に居ることが出来るならば、敢て大領地を受けることは致さぬ。「不届」…いさぎよしとせず、快しとなさず。『文祿』…後陽成帝の時の年號。『大野』…越前に在り。『國除』…除は除去する也。國を取り上げられると。信雄は、從三位内大臣に昇進した。秀吉は、信雄が、咽喉とも云ふべき重要な土地即ち尾張、伊勢を領地として居るので、之を他に徙さうと思つて居つたけれども、未だ好い機會がなくして、其儘にして置いた。天正十八年に、秀吉は、北條氏を征伐したが、その時に、信雄は、兵士一萬五千人を引き連れて、之を助けて、葦山を攻めた。かくて、事が平定するに及んで、秀吉は、徳川氏を關東八州に封じ、徳川氏のもの領地五箇國を以て信雄に與へやうとした。すると、信雄は辭退して曰ふには、尾張と伊勢とは、吾が昔からの領地であるから、これまでの通りに、此處に居ることが出来れば、それで、十分で御座る。格別廣大なる領地を貰ひ受けずとも、宜しう御座ると曰つた。すると秀吉は、信雄が自分の與へんとする領地を受け取ることをいさぎよしとしないのを怒つたので、そこで、尾張、伊勢の二國を取り上げて、之を自分の甥なる秀次に與へ、信雄を出羽の秋田に放逐し、明くる年に、之を伊豫に徙した。山口重政等は、皆、徳川氏に事へた。文祿元年に、秀吉は、信雄を召し寄せて、大坂に至らしめ、その子秀雄に、大野五萬石を與へた。信雄は、隱居して伏見に居り、髪を剃つて坊主姿となつて、常眞と稱した。常眞の弟の次丸は、信長の存命中から、秀吉の養子となつて、名を秀勝と改め、之を丹波に封じ、左近衛少將となつた。文祿四年に、秀勝は死んで、後繼がなかつたので、領國は取り上げられて仕舞つた。

是歲。蒲生氏郷卒。氏郷幼英敏。信長識拔之。予十餘萬石。以女妻之。秀吉又任以方面。累加封至百萬石。鎮會津。已而悔之。石田三成因譖其有異心。毒之。疾作。不起。孤子秀行嗣。秀吉聞其寡婦織田氏美。欲取之。織田氏不肯。秀吉脅之。家臣交勸其往。織田氏削髮。以死自矢。秀吉怒。慶長三年。託事削其八十二萬石。徙之宇都宮。

【英敏】…人並ずれて敏捷なること。【識拔】…その人物を見知つて引き上げる。【方面】…一方一面に當るなり。能く一方の敵に當るを云ふ。【累】…しきりに。【會津】…今の岩代に在り。【語】…音シン。譏言する。【脅】…おびやかす、おどす。【以死自矢】…矢は誓ふ也。死すとも秀吉へ往かじと、命をかけて貞操を守ること心に誓ふ也。【慶長】…後陽成帝の時の年號。【宇都宮】…下野に在り。【關】この歳に、蒲生氏郷は死んだ。氏郷は、幼少の時から、人並にすぐれて明敏であつたが、信長が、其人物を見知つて引き上げ、十餘萬石を與へ、その娘を以て之に妻はした。其後、秀吉は、又、氏郷を、一方の大將頭となし、だんぐに、領地を増加して、百萬石に至り、會津の地を鎮撫せしめた。とかくする中に、秀吉は、氏郷に任じ過ぎたことを後悔した。石田三成は、それに付け込んで、氏郷に謀叛心があると讒言して、之に毒を飲ませたので、氏郷は、病氣が起つて、死んで仕舞つた。今日存在して居る氏郷の病牀日記の様なものによつて見ると、其病氣

の容體は、毒を飲まされた爲めに起つたものでは無いと云ふことである。その孤子(ミナシゴ)の秀行が相續した。秀吉は、氏郷の後家なる織田氏の容貌が美しいと云ふことを聞き及んで、之を取らうとしたけれども、織田氏は、承知しなかつた。秀吉は之をおどかし、家來どもは、かはるく、往くことを勧めたけれども、織田氏は、どうしても承知せず、遂に髪を剃つて、死んでも操を破らぬと自ら心に誓つた。秀吉は、怒つて、慶長三年に、事にかこつけ、其八十二萬石を削りへらし、十八萬石とし、之を宇都宮に徙し封じた。

當是時。秀信年已長。爲中納言。秀吉徙之岐阜。食邑如故。秀吉薨。子秀頼嗣。德川公攝天下政。上杉景勝與石田三成謀除公。五年。六月。德川公率諸將攻上杉氏。秀信供遊奢侈。國用窮竭。以故不能從軍。七月。石田三成舉兵關西。追躡德川公。使人脅秀信曰。岐阜當東下之衝。不從則壘粉矣。秀信疑懼。欲附三成。老臣木造具康諫曰。公以右府嫡孫。顧役於豐臣氏家奴乎。秀信猶豫不決。具康等請謀之於前田玄以。玄以是時爲京師所司代。秀信乃遣之。玄以曰。速東嚮。具康馳還。未至。近習爭勸其應西軍。三成又遺黃金百枚。昭以大封。秀信終與三成盟于澤山。具康至。嘆恨。因又請誘殺三成。弗聽。終爲西軍守岐阜。尾張。美濃諸城。因是多屬西軍。既而東軍還至清洲。秀信出兵拒木曾川。具康曰。我兵寡。請堅壁待後援。弗聽。東軍濟川來戰。追北傅城。秀信分兵守外城。具康曰。寡兵不可分。請專守內城。又弗聽。城遂陷。具康力戰被創。秀信降。逃于高野。數歲卒。東

將福島正則使人勞問具康。既而前田氏欲聘之。延以厚祿。辭曰。福島公已知臣矣。遂就正則爲其國老。

【伏遊】……伏は音イツ、逸と通ず、安逸にして勞せざる也。なまけ遊ぶこと。窮端……端は音ケツ、盡くる也。きはまりつくる。【追蹕】……音ツキセフ。追つかける。衝……音シヨウ。衝路、つき進むべき路。【壘粉】……音サイフン。粉微塵に打ち砕く。【右府】……織田信長。かつて右大臣となれり。故にかく云ふ。願……かへつて。猶豫……ぐくする。【黄金百枚】……當時の幣は、金銀を以て板となす。大さ今の大阪金の如くにして方なり。便に隨ひ、割き切つて之を用ふ。又別に錠銀碎銀等、並び行はる。然れども枚を以て數ふるものは、大方板の幣を云ふ。【誘殺】……おびき寄せて殺す。【木曾川】……美濃、尾張の界を流る。【傳】……せまる、つく。【勞問】……慰勞する。

この時に當りて、秀信は、年ずでに成長して、中納言となつた。秀吉は、之を岐阜に徙し封じ、其領地は、やはり、もとの如く、三十萬石であつた。その後、秀吉が薨去して、その子秀頼が、跡を嗣ぎ、徳川公が天下の政治をかりに執り行つて居ると、上杉景勝と石田三成とが、徳川公を除き去らうと企てた。慶長五年の六月に、徳川公は、諸大將を引き連れて、上杉氏を攻めたが、秀信は、なまけ遊んで、おごりを恣ま、に居つて、國家の用度、盡き果て、仕舞つたので、軍に従ふことが出来なかつた。七月に、石田三成は、關西に於て兵を擧げ、徳川公を追かけ、人をして秀信をおどかさしめて曰ふには、岐阜は、東の方に攻め下るべき切所に當つて居るから、若し、あなたが、味方に附かないならば、忽ち粉微塵に打ち砕きますぞと曰つた。秀信は、疑ひ懼れて、三成に附かうと思つた。すると、家老の木造具康が諫めて曰ふには、あなたは、右大臣殿の嫡孫たる御身であるのに、かへつて、豊臣氏の家來にこき使はれなされまつかと曰つたので、秀信は、ぐくして決定しなかつた。そこで、具康等は、此事を前田玄以に相談せんことを請うた。玄以は、此時に、京都の所司代であつた。秀信は、そこで、具康を遣はして、玄以に相談させた。玄以が曰ふには、速かに東方に向つて徳川氏に味方することを勧め、三成は、又、黄金百枚を贈り、秀信に、馳せて還つたが、まだ到着しないうちに、近習の者共は、争うて、西軍(三成の方)に味方することを勧め、三成は、又、黄金百枚を贈り、秀信に、馳せて還つたが、大國の領地を興ふると云ふとを以てしたので、秀信は、とうく、三成と、澤山に於て盟つた。そのうちに、具康は到着したが、已に三成に味方するに決したと聞いて、嘆息して残念に思ひ、因つて又、三成をおびき寄せて殺して仕舞ひたいと請うたけれども、秀信は聞き入れずして、とうく、西軍の爲めに、岐阜を守つた。尾張、美濃の諸城は、これに因つて、西軍に附いた者が多くあつた。すでにして、東軍(徳川氏の方)軍が、引き返して、清洲に到着すると、秀信は、軍勢を繰り出して、木曾川に拒いだ。すると、具康が曰ふには、我が軍勢は少數で御座りますから、城壁を堅くして、立て籠つて、援兵の到着するのを待ちましやうと曰つたけれども、秀信は、聞き入れなかつた。すると、東軍は、木曾川をわたりて、來つて戦ひ、我が軍の逃げ走るを追つかけて、城下に攻め寄せた。秀信は、兵を分けて、外部を守らせた。すると、具康が曰ふには、味方の軍勢は少御座りますから、之を分けてはいけません。どうぞ、軍勢を一旦とめて、専ら、本丸を守ることと致したう御座りますと曰つたけれども、秀信は、又、聞き入れなかつた。かくて、城は、とうく、落城して仕舞つた。具康は、力を盡して戦つて、負傷した。秀信は、降参して、高野山に逃れ、數年の後に死んだ。東軍の將なる福島正則は、人をして具康のもとに至つて慰勞せしめた。すでにして、前田氏が、具康を招聘しやうと思つて、厚き俸祿を以て招いたが、具康は、辭退して曰ふには、福島殿が、すでに、私を知られて居りますと曰ひ、とうく、正則の所に往つて、其家老となつた。

信雄在伏見。徳川公之東征。秀雄以疾不從。三成詭信雄。信雄辭以無兵。乃約給金千枚以募兵。曰。事成復封尾張。信雄乃應之。請金。乃予銀千枚。信雄曰。尾張可知矣。召秀雄謀之。秀雄力諫而止。秀雄卒。無嗣。徳川氏收其封。而不問信雄。信雄徙居京師。遂徙大坂。以與秀頼母有中表之親也。初信長妹適淺井長政。生三女。再適柴田勝家。勝家臨死。使人匿三女子。一乘谷。秀吉收而育之。皆有容色。秀吉自取其長女。次女嫁京極高次。三女嫁少將秀勝。秀勝卒。更爲徳川氏婦。長女專秀吉寵。生秀頼。母子共居大坂。乃迎信雄居天滿第。

【詭】……音ケウ。そのかし誘ふ。【尾張可知】……金を興ふべしと約束しながら、銀を給せし位なれば、尾張に封ずるといふ事も、虚言なること知るべしとの意。【收其封】……收は沒收するなり。【中表之親】……父の姉妹の子を内兄弟となし、母の兄弟の子を表兄弟となす。之を中表の屬となす。いとこの關係なり。故に、信雄より云へば、秀頼の母は外親なり、秀頼の母より云へば、信雄は内親なり。【適】……ゆく、とつと、女が人に嫁するを云ふ。【一乘谷】……越前に在り。【徳川氏婦】……徳川秀忠の夫人なり。

信雄は、伏見に居つた。徳川公が、東方を征伐するときに、秀雄は、病氣の爲めに従はなかつた。三成は、信雄を、そのかして味方に引き寄せやうとした。すると、信雄は、手勢が無いからと云つて断つた。そこで、三成は、黄金千枚を送ることを約束して、兵を募らしめ、そして曰ふには、若し事が成功したならば、ふた、び尾張に封じましやうと曰つた。信雄は、そこで、三成に味方して、約束の黄金を興へよと請うた。三成は、そこで、銀千枚を興へた。信雄が曰ふには、黄金をくれる筈であつたのに、銀をくれた。これに由つて觀るときは、尾張に封じてくれると云ふ事も、其の虚言なることは、知れ切つて居ると曰ひ、そこで、秀雄を召し寄せて此事を相談すると、秀雄は、力を入れて諫言して、西軍に屬することを止めさせた。秀雄は、死んで、跡嗣が無かつたので、徳川氏は、其領地を取り上げて、そして、信雄の事は、一向咎めなかつた。信雄は、徙つて京都に居り、それから、遂に大坂に徙つた。これは、秀頼の母(即ち淀君)と、いとこの同士の關係があつたからである。はじめ、信長の妹は、淺井長政に嫁ぎ、三人の女子を生み、再び柴田勝家にとつた。勝家が死なうとするときに、人をして、かの三人の女子を一乘谷に匿さしめた。その後、秀吉が、三人の女子を引き上げて養育した。三人は、皆容貌が美しかつた。秀吉は、自身に、其長女を取



り、二番目の娘は、京極高政にとつき、三番目の娘は、少將秀勝にとつたが、秀勝が死んでから更に、徳川氏の嫁君となつた。長女(即ち淀君)は、秀吉の寵愛を専らにして、秀頼を生んだ。秀頼母子は、共に大坂に居つたので、そこで、信雄を迎へて、天満の屋敷に居らしめた。

十九年。秀頼傳片桐且元使關東而歸。或譖之於淺井氏。淺井氏乃延信雄。使人說之曰。且元與關東通謀。圖我母子。吾將待其歸。伏甲誅之。遂舉兵也。内兄爲我將。信雄驚曰。是大事也。且彼叛狀未見。請熟思之。淺井氏聞之。弗懌。曰。再請不從。當先除此翁。以防漏泄。一侍女與信雄有故。捧茗而出。附其耳告之。淺井氏使再請。信雄佯諾曰。事已至此。吾豈固辭。吾之少也。亦將一萬指揮之方。固所慣熟。今雖老矣。猶能得當方面。淺井氏大喜。使歸俟報。信雄歸第。謂其下曰。吾豈可再背徳川之德哉。乃走京師。使人馳要且元警之。且元以故得免。

【傳】……音フ。師傳、より役【譖】……一に讒に作る。【淺井氏】……秀頼の母、即ち淀君。【延】……招き寄する也。【内兄】……母方のいとこ。【叛狀】……謀叛の様子。【弗懌】……よろこばず、不機嫌である。【此翁】……信雄を指す。【若】……茶。【慣熟】……慣は習なり。熟は精審なり。ならうてくはし、度々の事に熟練して居る。【方面】……一方の敵。【吾豈可再背】……さきに三成に應ず、故に再と云ふ。【要且元】……且元が關東より歸るを待ち受ける也。

慶長十九年に、秀頼の守役なる片桐且元は、關東の徳川氏に使に行つて歸らうとした。ある人が、且元を淺井氏(即ち淀君)に讒言した。淺井氏は、之を信じて、そこで、信雄を招き寄せて、人をして信雄に説かして曰ふには、且元は、關東と謀を通じて我等親子を除き去らうとして居るさうだから、吾は、將に且元が歸り来るを待つて、兵士を伏せ置きて、且元を誅殺し、それから遂に兵を擧げやうとするのであります。が、どうぞ、あなた、私の爲めに大將となつて下されと曰つた。すると、信雄は驚いて曰ふには、これは、重大事件で御座る。其上に、彼れ且元の謀叛の様子が、未だはつきりと見えませぬこと故、どうぞ、篤と考へて御覽なさいと曰つた。淺井氏は、信雄が自分の頼みを承知せ

ぬと云ふことを聞いて、不機嫌であつて、そして曰ふには、若し今一度頼んでも承知しないならば、先づ此老翁(信雄を指す)を殺して謀の漏れないやうにすべきであるといつた。一人の腰元は、信雄と、ふるき縁故のあるものであつたが、此者が、茶を捧げて出で、信雄の耳に口をあて、之を告げた。淺井氏は、人をして、信雄に、大將たらんとを再び請はせた。すると、信雄は、伴つて承知して曰ふには、最早こんな事に成つた以上は、われは、どうして、たつて辭致しませぬ。吾の年少の時に、これでも亦、一萬人の軍勢の大將となつたことが有り、指揮の方法は、もとより、度々経験のあることで熟練して居ります。今や年寄りなりましたけれども、それでも猶ほ、一方面を引き受けることは出来ましやうと曰つた。淺井氏は、大に喜んで、家歸つて報知を待たしめることにした。信雄は、其屋敷に歸つて、其下の者に向つて曰ふには、吾は、どうして、再び徳川氏の恩徳にそむくことが出来やうぞと曰ひ、そこで、京都に走り、人をして馳せ行きて、且元が關東から還つて来るのを待ち受け、之に注意させた。且元は、それ故に、難を免るゝことが出来たのである。

信長弟長益。屬秀吉。食大和二萬石。爲從四位下侍從。削髮稱有樂。以淺井氏外叔在大坂。與大野治長等。竝輔秀頼。以拒東軍。城中倚頼焉。及和議起。先納質於東。勸淺井氏成和。和成。長益乃赴駿府。請曰。僕在圍中。欲拔歸東軍。而和適成。以得有今日。僕無復所願。獨願於京師。界府之間。得一隙地。以爲終老之計。徳川公優旨慰藉。元和元年。兵再起。長益與少子尙長。出奔京師。遂赴關東。遇徳川公子尾張。悉告城中虛實。其長子長正稱雲生寺。猶在大坂。請爲元帥。衆不許之。長正曰。吾信長從子。而秀頼從父也。乃爲元帥。何爲不可。今如此。復何望哉。亦出奔京師。及事平。徳川氏分長益地。賜芝村于長正。柳本于尙長。無幾何。長益卒。賜信雄以大和宇多郡五萬石。卒于寛永七年。第五子信友嗣。第四子信良。及兄秀

雄國除。召至關東。賜上野小幡。食二萬石。信友之後有故削二萬石。徙于丹波柏原。信良之後有故削一萬石。徙于出羽高島。此四家竝立以至於今。位不過從四位下。然豐臣氏既亡。而織田氏之祀。永與德川氏俱存。識者以爲其流澤遠出。重盛之忠孝。近由信長之功德也。

【外叔】……母方の叔父。【隙地】……間隙の地所。明き地。【終老】……隱居する。【優旨慰藉】……優は遅き也。慰は安んずる也。藉は音シヤ。含蓄包容の意。手あつき懇命を以てなぐさめ落ちつかせる。【元和】……後水尾帝の時の年號。信長從子而秀頼從父也。……從子は、をひ也。從父は、叔父なり。標註に云はく、長正は淀君の從母兄弟にして、秀頼の從父に非ず、從の上に疑ふらくは再の字を脱すと。系譜によれば、長正は、淀君の從父兄弟にして、秀頼とは、從祖兄弟なり。これ恐らくは、誤りならんか。【今如此】……元帥たるを請うて許されざるを云ふ。【芝村】……大和に在り。【柳本】……大和に在り。【寛永】……後水尾帝の時の年號。【有故削】……山縣大貳の事に坐せしなりと云ふ。【此四家】……長正、尙長、信友、信良。【流澤】……先祖より傳はりたる恩澤。

信長の弟の長益は、秀吉に附き從つて、大和の二萬石を領地として居り、從四位下侍從となり、髪を剃つて坊主妻となつて、有樂と稱して居つたが、淺井氏(即ち淀君の母方の叔父たる故)を以て、大坂に居つて、大野治長等とともに、相並んで、秀頼を輔佐して、以て關東の軍勢を拒いだので、城中の者共が、大に頼みとして居つた。和睦の相談が起るに及んで、長益は、先づ人質を關東に差出し、淺井氏に勸めて、和睦を成り立たせた。和睦が成り立つと、長益は、そこで、駿府に出かけて行つて請うて曰ふには、私は、園みの中に居りましたときに、拔出して關東の軍勢に附かうと思つて居りましたが、未だ其志を果すに及ばずして、折しも、和睦が成り立ちましたので、今日あるを得ました。私は、格別願ひ望むところは御座りませぬが、願はくは、京都と堺との間に於て、一つの明き地を貰ひ受けて、其處に隱居いたしたいと思ひますと曰つた。徳川公は、懇篤優渥なる旨を以て、之を慰め、氣を落ちつけさせるやうにした。元和元年に、戦争が再び始まらうとする、長益は、末子尙長とともに、京都に出奔し、それより、遂に關東に赴き、徳川公に尾張に於て面會し、城中の様子を知らせた。長益の長男の長正は、雲生寺と稱して居つたが、この人は、まだ大坂の城中に居つて、總大將となりたかといつた。けれども、皆々は、之を許さなかつた。すると、長正が曰ふには、吾は、信長の甥にして、そして、秀頼の叔父であるから、今、總大將になつたとしても、何も不可なることは無い。然るに、今や此の如き待遇にあへば、もはや、何も望むところは無いと曰ひ、長正も亦京都に出奔した。その後、事が平定するに及んで、徳川氏は、長益の領地を分けて、芝村をば長正に賜ひ、柳本をば尙長に賜ひた。いづれも無くして、長益は死んだ。徳川氏は、又、信雄に、大和の宇多郡五萬石を賜ひたが、信雄は寛永七年に死んで、第五番目の子信友が、跡を嗣いだ。信雄の第四番目の子信良は、兄秀雄の領地が取り上げられるに及び、召し出されて關東に至り、上野の小幡を賜ひ、二萬石を領した。信友の子孫は、事故があつて、二萬石を削られ、丹波の柏原に徙された。信良の子孫は、事故があつて、一萬石を削りへらされて、出羽の高島に徙された。この長正、尙長、信友、信良の四家は、並に立つて、今日までも残つて居るが、その位階は從四位下に過ぎない。けれども、豊臣氏は、既に亡びうせたのに、しかるに、織田氏の祀

は、永く徳川氏とともに存在して居る。(子孫の引きつゞいて絶えざるを云ふ。)世の識見ある人々が曰ふには、織田氏が連綿として絶えず居るは、其祖先より流れ來れる恩澤が、遠くは重盛の誠忠至孝から出で、近くは信長の功勞徳義に由るので、偶然の事では決して無いと云つて居るのである。

外史氏曰。往時平安故老。有及觀元龜間事。言其時宮闕隳廢。群兒入頽垣中。搏土爲戲。及織田公來。始有可觀云。夫應仁以還。海內分裂。輦轂之下。每爲兵馬馳逐之場。非右府誰能闢除草萊。以再造王室哉。及其朝廷。其功擬以征夷之拜。則辭不受。蓋將家與王室。俱極衰頽。名重實輕。不猶所謂大將軍告身僅直一醉者耶。右府志在混同海宇。不欲遽冒虛名。爾視之彼假關東管領。以誇鄰國者。其器量固有間焉。抑朝廷名器不足輕重天下豪傑。至於如此。挾焉以令天下。天下未必聳動也。而右府爲之扶植經紀。勲勳不置。是其高義。雖謂凌齊桓而駕晉文可也。

【往時】……さきに。【平安故老】……京都の老人。蓋し江村專齋を指す。その著はすところの老人雜話に、此事見ゆ。【元龜】……正親町天皇の時の年號。足利義昭の頃。【宮闕】……皇居。【隳廢】……音グハク。廢は壞なり。くづれ破れる。【頽垣】……音タイエン。頽は壞なり。くづれたる築地。【搏土】……搏は音タン。手を以て土を圍くする也。搏は一に搏に作る。搏は音ハク。投げける也。【應仁】……後土御門帝の時の年號。山名、細川二氏の京都に戦ひし大亂あり。【輦轂之下】……京都を謂ふ。天子の御ひざもと。【闢除草萊】……闢除は音ヘキチヨ。闢は開く也。草萊は、音サウライ。草穢なり。くさから。以て世の亂れたるに譬ふ。闢除草萊とは、亂れ茂りたる草むらを開き除き去るが如く、世の亂を平定すること。【再造】……再興する。【器量】……むくゆ。【擬】……あてがふ。【大將軍告身僅直一醉】……通鑑によるに、唐制に、受官の符を告身と云ふ。肅宗の時、府庫空虚、功を賞するに金帛を以てすること能はず、乃ち専ら官爵を以てす。故に、諸將の出征に、皆、空名の告身を授け、臨時に名を注し之を給することを聽すに至る。是れより官爵輕くして貨重く、大將軍の告身一通紙に一醉に易

ふ。名器の濫、是に至つて極まると云ふ。大將軍に任命するとの辭令は、僅かに一度に飲むべき酒の價だけの價値しか無い。〔海宇〕……全  
國。〔混同〕……一統する。〔視〕……くらぶる。比較する。彼假關東管領以誇鄰國者……上杉謙信を指す。長尾謙信、上杉氏より職號を受け、  
以て姓上杉を冒し關東管領となる。〔有間〕……間隔あり、餘程の相違ありとの意。〔名器〕……官爵車服。〔聲動〕……音シヨウドウ。驚く。〔挾  
焉以令天下未嘗動也〕……虚名に過ぎざる官爵をこたてにして天下に命令するとも、天下は、必ずしも、耳を聳て身を動かして恐れ  
て命令を聽くことなしとの意。〔經紀〕……始末する、筋道をつける。〔勲勳〕……音ケンケン。誠實なる貌、まめやかに。〔齊桓〕……齊の桓公。  
名は小白、襄公の子なり。管仲を相とし、諸侯の盟主となる。是時に當りて、周室衰微し、諸侯朝覲せず。桓公、天子を挾んで、諸侯に令す。五  
霸の一なり。〔晋文〕……晋の文公。名は重耳、献公の子なり。驪姫の亂を避けて出奔し、十九年にして晋に歸り、諸侯の盟主となり、天子を挾  
んで諸侯に令す。五霸の一なり。二公の事は、春秋左氏傳に詳なり。

關東 外史氏論じて曰く、むかし、京都の老人に、元龜年間の事實を親しく觀たものがあつたが、その人の言ふところによれば、其時代には、天  
子様の御所は、ぐれ破れて、實に見る影も無き有様で、多くの兒童等は、ぐれたる築地の中に入り、土をまろめて團子となし、互に之を投  
げ合つたりなどして、遊び戯れて居つたが、織田公が京都に来るに及んで、官閣の修理をなしたので、やつと、見られるやうになつたと云ふ  
ことである。一體、應仁年間以來、我が日本全國は、四分五裂し、天子の御膝元なる京都の内は、いつでも、兵や馬が馳せまはり追つかけ合つ  
て、戰爭する場所となつて居つたので、右大臣信長でなければ、誰が草原を切り開くが如く世の亂を平定して、衰へたる王室を再興するこ  
とが出来やうぞ。かくて、朝廷に於て信長の功勞に報ゆるに及びて、信長を征夷大將軍に拜命しやうとされたが、その時に、信長は、辭退し  
て、受けなかつた。蓋し、將家は、王室とともに、衰微の極に達して、天子と云ふ名や將軍と云ふ名は誠に重くは聞ゆるけれども、其實權實力  
は、誠に軽く、あれども無きが如き有様であつた。ちやうど、唐代に謂はゆる、大將軍に任命するとの辭令書は、わづかに一杯の酒を傾けて  
一醉を食はる位の價値しか無いと云ふが如くであつた。右大臣信長の志望は、天下を統一しやうといふのであつて、俄に實權實力の無い虚  
名を肩すことを欲しなかつたのである。之を彼の關東管領と云ふ名を借りて、鄰國の人々に誇りちらした者(即ち上杉謙信を指す)に比較  
して見れば、其器字度量の大小は、餘程の相違があることである。そゞく、朝廷の官爵が、天下の英雄豪傑を重くすることも輕くすること  
も出来ないことは、此の如き有様に立ち至つた。此の如き時代において、朝廷より賜はる官爵をたのみとして、天下に號令したところ、  
天下は、必ずしも驚き起つと云ふわけでは無いのである。然るに、右大臣信長は、朝廷の爲めに、衰廢せるを扶け起し、紛亂せる物事に筋道  
を立て、まめやかに、勤めはたらきて、しばらくも棄て置かなかつた。されば右大臣信長の道義の高きことは、齊の桓公よりも勝れ、晋の文  
公よりも勝れて居ると云つても、宜しいのである。

當是之時。群雄之割據方隅者。環視傍觀。而莫能出於此。其日夜所務以  
代眠食者。曰戰而已矣。而所謂戰。徒較勝負於銖兩之間。拏攫搏鬪。以  
爭尋常。如武田。上杉。北條。毛利。概無不然。獨右府以超世之材。籠蓋而

取之。其視武田。上杉。猶我藩籬。使其相持不決。日費其財賦。月斂其甲  
兵。適足以隔闕我東面。而我得以專力經略畿甸。畿甸已定。西面以臨毛  
利氏。如拉枯摧朽耳。於是。我疆土益大。兵力益強。以強大之我。加費敵  
之敵。上杉。武田固不能支我。而北條氏孤立矣。則東國皆可圖也。是其成  
算。夙定於胸中。奚必較區區勝敗哉。猶夫奕碁也。天下群雄。方守角依  
傍。而右府獨以全局制其勝。可不謂之超世之才歟。

【方隅】……片隅。【銖兩】……音シュリヤウ。十黍を糸となし、十黍を銖となし、八銖を兩となし、二十四兩を兩となす。細小なる事を云  
ふ。【拏攫】……音ダクワク。拏は、相持搏する也。攫は持つ也。ひきつかむ。【搏鬪】……音ハクケツ。打ち合ひ噛み合ふ。拏攫搏鬪とは、彼の戰  
争の名義なきを禽獸の争に譬へたるなり。【尋常】……八尺を尋となし、一丈六尺を常となす。狭小なる土地に譬ふ。【超世之材】……はるか  
に世間並にすぐれたる材能。籠蓋……音ロウガイ。引ききるめる、一まとめにする。藩籬……音ハンリ。かきね。【隔闕】……音カクケイ。  
隔は礙なり、外閉なり。へだて閉ぢ塞ふ。信支、氏政等が、駿遠の間に戦ひ、尾張に入ることを能はざりしを云ふ。【畿甸】……音キテン。畿内近  
傍。【拉枯摧朽】……拉は、くじく。摧は、くだく。史記に見ゆる語。力を費さずして勝を得ること。【成算】……音ケイサン。【夙】……つとに、はや  
く。【奕碁】……音エキキ。圍碁。【守角依傍】……すみを守り、片側による。武田、上杉、北條氏などを指す。【全局】……碁盤面全體。  
關東 この時に當りて、多くの英雄豪傑の、片隅の地に割據して居る者共は、王室の此の如く衰微を極めて居るのを、周圍から眺め、傍から視  
て居つたばかりで、誰れ一人として、信長の爲したやうな事を爲す者は無かつた。彼等が、夜となく晝となく、務めとして睡眠にも飲食に  
も代へるほどの者は、戰爭の一事であつたが、そして、彼等の戰爭なる者は、たゞ些細なる處で勝ち負けを比較し、互につかみ合ひ、むし  
り合ひ、又うち合ひ、かみ合つて、以て少しばかりの土地を争うて居つた。武田氏、上杉氏、北條氏、毛利氏の如きは、大抵然らざるはなかつ  
た。たゞ右大臣信長は、遠く世間並に立ち超えたる材能を以て、籠にて蓋うてねこをけ取り去るが如く、引ききるめて取り込んで仕舞ふの  
で、右大臣が、武田、上杉を視るとは、ちやうど、我が家を取り圍んで居る垣根のやうに心得て居つて、二氏をして相對陣して睨み合つて居  
つて、勝負何れと決せず、日々にその財産租税を費し、月々に其鎧や兵器をつかひやぶらしめ、其他の地方には手出しをすとの出来ない  
やうにしたが、これは、たゞ、我が東の方面の敵を隔て塞がしめるに足り、そして、我は、是を好機會として、力を專にして、畿内近傍を  
切り取ることが出来たのであつて、かくて、畿内近傍が既に平定して仕舞つたので、西の方に向つて、毛利氏に臨んだが、其の攻め破るの  
容易なることは、枯れたる木をくじき、朽ちたる木をくだくやうであつた。こゝに於て、我が領地は益々廣大になり、我が兵力はますます強

盛になるので、その強大なる我を以て、財産租税を費し、甲兵をつかひやぶつたる敵に向ふのであるから、さしもの上杉、武田も、固より我が兵を支へ止むることは出来ぬ、さうすると、北條氏は、孤立して、之を援ける者は無くなつて仕舞ふ、そこで、東方の國々は皆、取ることが出来るのであると云ふので、かゝる目論見は、信長の胸中には、早くから定まつて居つたのであるから、どうして、必ずしも、つまらぬ勝ち負けを引き較べて争ふことをしやうぞ。たとへば、碁を打つ様なもので、彼の天下の多くの英雄は、其時に丁度、碁盤の片隅を大切さうに守り、又右側や左傍に依つて居つたのに、右大臣のみは、盤面全體の上で其勝を制して、大利を收めやうと志して居る。之を世間並に飛び超えたる大才能と謂はないで居られやうぞ。

然定數百年分裂之世。如治盤根錯節。必以鋤斃斬斷見功。其間必有大矯拂人心者。而取之甚難者。持之必太急。待將帥御臣民。不能無猜忍刻厲之病。所以中道遭禍。亦勢之必至。不足深咎也。

【盤根錯節】……音バンコンサクセツ。盤は蟻と通ず。わだかまりたる根、入り亂れたる節(フシ)。樹根の盤互し木節の交錯せるを治むるには、必ず鋭利なる器物を以て鋤斃斬斷して而る後に其功を見るに譬ふる也。【鋤斃】……音シヨケツ。すきを入れて掘りかへして之を抜きたふす。【斬斷】……切り斷つ。【矯拂】……音ケウフツ。さからひもとの也。【猜忍】……音サイニン。猜疑殘忍。【刻厲】……音ケツリ。苛酷嚴厲。【中道遭禍】……光秀に弑せられたるを云ふ。

【語釋】しかれども、數百年來四分五裂して居る亂世を平定することは、たとへば、わだかまりくねつたる木の根や、入りみだれたる節を、うまく治めやうとするには、必ず鋸かへして之を抜きたふし、斧や鉞の類を以て之を斷ち切つて、始めて成功を見るやうなもので、自分にそむく者や服従せざる者などをば、片つ端から斬り棄て殺し盡して、其志を遂げることを得るのであるから、其の間には、必ず、大に人の感情に逆らひもとの事もある。そして、又、之を取るのに甚だ困難であつた者は、之を所持するにも、必ず甚だ嚴重であるので、將帥を待遇したり、臣民を制御する際に於ても、猜疑殘忍苛酷嚴厲の缺點の無いわけには行かぬのである。これが、右大臣が、半途にして禍に遇つて不幸なる死を遂げられた譯であつて、これも亦、必然の勢で、深く咎めるべきほどの事では無いのである。

昔周世宗以英明之資。而抱混一之志。不牽衆言。厲精進取。雖半途而沒。而能開趙宋之業。右府之迹。蓋似之矣。而豐臣氏以右府將校。繼其成緒。能就其志。而至於尊王之義。經營四方之略。無一不師右府者。即德川

氏之興。亦不能不因此。以致王室將家。並見今日之盛。佐成大業。藩屏四方者。概係右府所置焉。則謂之右府之業。亦何不可。譬之築室。治其蕪穢。鏟其高卑。而又爲之鳩其材木。使後人加之繩墨斧斤。成而居之。嗚呼。其勞寧可沒也。

【周世宗】……五代の周なり。名は榮、太祖の妻の兄柴守禮の子なり。太祖、子なし、故に之を養つて子となす。北漢主、太祖の喪に乗じ、周を攻む。世宗、自ら之を禦く。馮道等皆諫むれども聽かず、自ら矢石を犯して督戦し、後、屢々出で、攻伐せり。故に、不牽衆言、厲精進取と云ふ。【混一】……天下を統一する。【不牽】……ひかれず、惑はされぬ。【趙宋之業】……宋の太祖、姓は趙、名は匡胤、周の世宗の時、軍政を掌り、數々大功を立つ。後、遂に周の禪を受け、天下を有てり。趙宋と云ふは、以て劉宋に分つなり。【成緒】……音セイチヨ。出來上りか、りたる緒口。【就】……成す、成就す。【佐成】……たすけなす。【大業】……徳川氏が天下を一統せし大業。【藩屏】……音ハンベイ。垣根と屏。守する者を云ふ。【治其蕪穢】……蕪穢は、音ブクワイ。草木の繁茂したる也。草木の茂生したる荒地を切り開く。【鏟其高卑】……音セン。鏟は音サシ。刻と同じ、削り平る也。その土地の高き所をけり取り、その卑き所をうづめ平らげる。【鳩】……聚める。【繩墨】……音シヨウボク。すみなは、斧斤。【音フキン】をの、まさかり。【寧可沒也】……どうして埋没して無いものにして仕舞ふことが出来やうぞ。

【語釋】昔、支那の五代の周の世宗は、人にすゝめられて明敏なる天資(ウマレツキ)を以て、天下を混同統一するの志望を抱き、多くの臣下の言を所に心をひかれず、精力をばげまして、進み取ることをなし、不幸にして、半途にして死なれたが、けれども、その爲めに、宋の趙氏が天下を一統するの大業を開かれたのである。我が右大臣信長の事迹は、大體、これに類似して居る。豊臣氏は、右大臣信長の將校より身を起し、出來かゝりたる事業の緒口をうけついで、能く右大臣信長の志願を成就せしめたので、王室を尊敬するの大義と、四方の諸國を經營するの謀略とに至つては、一つとして右大臣信長の爲せし所を師として學ばないところは無いのである。されば、徳川氏が興つたのも、亦、此れに因らなわけには行かず、それで、王室も將家も共に今日の隆盛を見るやうに成つたのであつて、又、徳川氏が佐けて此大業を成就させ、諸侯となつて四方の國々のふせぎ守りとなつて居る者は、大體、右大臣信長が置いたところの者である。して見れば、徳川氏の大業も、之を右大臣信長の事業であるとして、差支へはあらずまい。これを譬ふれば、家を新築するに、其むさくるしく繁茂せる草原を抜き取り除き去り、其土地の高い所をけり取り、卑い所をうづめ平らげて、そして、又、これが爲めに、建築に用ふべき木材を集めて、新築するばかりの準備をととのへ置きて、後の人をして、墨なはや、斧、まさかりを用ひて、これを整へて、家を造り上げて、之に住居せしむるやうなものである。(土地を整へ材料を集めて置いたのは、織田氏で、之を造り上げて住居したるは、豊臣氏と徳川氏とである。)あゝ、右大臣信長の功勞は、どうして、之を埋没して、無きものとして仕舞ふことが出来やうぞ、實にく偉大なる功勞である。

# 日本外史講義卷之十四 終

吉法師 (日本樂府)

吉法師。無所師。墮地披鎧。不披繻。心悟不參古兵法。爰劉群豪。開九  
遠。擊日荆榛底。再挂扶桑枝。袞帶倒輝妙法旗。莫恨盤根錯節利劍  
折。後霸盡師吉法師。

桶子 峽 (同上)

士銜枚。馬結舌。桶峽如桶雷。擊裂。騎龍喪元。敗鱗飛。撲面腥風雨耶  
血。一戰始開撥亂機。萬古海道戰氣滅。唯見血痕紅絞纒。

# 日本外史講義卷之十五

賴襄子成原著 興文社編輯所講義

德川氏前記

豐臣氏上

豐臣氏。出於尾張。尾張愛智郡有中邑。邑多銀杏樹。因或呼銀杏村。享祿  
天文之際。村民有彌助者焉。彌助無子。與其妻祈之於天。妻夢日輪入  
其懷。已而有身。天文五年正月朔。生一男兒。因名曰日吉。日吉生而英異。  
八歲失父。其母挈日吉轉寄食邑人。邑人患之。同閭有筑阿彌者。為國主  
織田信秀之僕。以疾歸耕。邑人為議。納為繼父。生一男一女。乃託日吉于  
邑傍光明寺。欲使為僧。日吉機敏而不曉誦梵。每聞人談武事。輒傾聽  
之。慨然歎曰。僧乞丐徒耳。大丈夫生於亂世。安學乞丐為。於是游嬉任  
意。與人爭。輒毆擊之。欲使僧厭苦己。僧遂議逐歸其家。日吉恐繼父怒。

己也。大言曰。果逐我。我且焚寺。悉擊殺群僧。僧頗懼。乃託事辭謝。予衣物。禮而歸之。

【銀杏】「杏を「ナン」と讀むは、支那音の轉せるものなり。銀杏樹は公孫樹(イテフ)なり。【享祿】……【天文】……並に後奈良帝の時の年號。【身】……はらむ。【英異】……氣象の人並にすぐれて居ること。【聖】……ひつさふ、たづさふ、引き連れる。【同聞】……音ドカリヨ。同じ村。【歸耕】……村へ歸つて農業をする。【一男】……後に秀長と名づく。【一女】……後に佐治日向に嫁ぎ、再び徳川家康に嫁ぐ。【機敏】……機巧敏捷。氣が利いて居つて素早きこと。【曉】……了なり、さる、記憶する。【誦梵】……誦は讀誦なり。梵は音ボン、佛經なり。御經を讀むこと。【傾聽】……小首を傾けて注意して聽く。【乞丐】……音キツカイ。乞食。【遊嬉】……遊びうかれること。【毆擊】……音アウダキ。うつ、たたく。【厭苦】……音エンク。いやがつて厄介に思ふ。

【豐臣氏】尾張から出たものである。尾張の愛智郡に中村と云ふ村があつて、其村には、銀杏の樹が多かつたので、或は、銀杏村とも呼んで居つた。享祿、天文の頃に、村の人に彌助と云ふ者があつたが、彌助には、子が無かつたので、其妻とともに、子を生むことを、天に祈ると、妻は、あるとき、日輪が自分の懐の中に入つたと云ふ夢を見たが、とかくする中に、妊娠して、天文五年の正月の元日に、一人の男の子を生んだ。かく、日輪の夢を見て出来たのであるから、日吉と名づけた。日吉は、生れて、その氣性、人なみにすぐれて餘程かはつて居つたが、八歳のときに、父に死なれたので、其母が、日吉を引き連れて、あちこちと、村の人々の處に厄介になつて居つたが、村の人民は、之を面倒に思つて居つた。同じ村に、筑阿彌と云ふ者があつて、此者は、尾張の國主織田信秀の下部であつたが、病氣の爲めに、郷里に歸つて農業を營んで居つた。村の人々は、爲めに相談して、此者を引き入れて入智となし、日吉の繼父となし、一人の男子と一人の女子とを生んだ。そこで、日吉をば、村の近傍なる光明寺に預けて、坊主にならせやうとした。日吉は、素早くして氣が利いて居つたが、御經を讀むことを覺えず、人が武事を談じて居るのを聞く度ごとくに、いつでも、耳を傾けて注意して之を聽き、慨然として嘆息して曰ふには、坊主は、乞食の仲間たるに過ぎない。男子たる者が、よの戦亂の世に生れて、どうして乞食の眞似を致さうぞと曰ひ、こゝに於て、勝手氣まゝに遊び戯れ、人と喧嘩をすれば、いつでも、之をなぐりつけなどして、どうかして、坊主をして自分を嫌つて厄介に思はせるやうにしやうとした。かくて、坊主共は、とうとう、日吉を其家に逐ひ歸さうとした。すると、日吉は、繼父が自分の事を怒ることを恐れて、大言して曰ふには、その通りを我を放逐するならば、我は寺を焼き拂ひ、坊主共をば殘らず殺して仕舞ふぞと曰つたので、坊主共は、餘程懼れて、そこで、他の事にかこつけて、之を寺に置くことを斷わり、著物や物品を與へて、丁寧に挨拶して之を其家に歸した。

日吉時甫十歲。父素貧。不能共存。復遣爲人奴。所至皆數月而去。轉徙於尾張。美濃間。比二十歲。遂如遠江。爲土豪松下之綱家奴。之綱愛其才幹。每事使之。命名與助。之綱一日從容問曰。汝尾張人也。知織田氏所用鎧

何樣耶。與助對曰。天下之鎧皆桶皮。尾張獨用胴圓。施膝右肋。屈伸如意。之綱曰。吾欲得胴圓一領。汝爲吾往買來。即附黃金六兩遣之。與助行自計曰。吾攘此金以資仕進。苟得意。他日償之易耳。小節不足拘也。乃入尾張。就其叔父謀焉。叔父可之。因勸仕織田氏。當是時。信秀既沒。信長嗣立。攻略四疆。與助亦以爲非。信長無足與成功名者。於是。用其金辨刀劍衣服。自造姓名。曰木下藤吉。矚信長出。跪謁道側。曰。臣父筑阿彌。嘗爲君先公奴。臣幼流寓他方。不能自達君門。願君復收臣爲奴。信長熟視笑曰。汝面類猴。其心必捷矣。乃收爲奴。常穿鞋以從。以其筑阿彌子也。呼曰小筑。藤吉奉仕甚勤。依託近臣。給其使令。信長嘗侵晨獨出。從者未屬。而藤吉輒從之。如斯者數。信長寢親近之。

【不能共存】……親子一つ所に居つて生活することが出来ぬ。【松下之綱】……嘉兵衛。【才幹】……幹は用なり。氣はたらし。【桶皮】……鎧の一種。桶皮胴は、鐵の打ちのべにて桶の如く、袖、草摺等なく、胴ばかりなるものを云ふ。後世は、袖、草摺等を付けて、鎧に拵へて桶皮胴の鎧と云ふ。【胴圓】……胴丸、又、筒丸に作る。鎧の一種。胴を圍みたる體丸く、竹の筒の如く作りしを云ふ。右の脇にて合せ、脇板、障子板、走、梅檀板、鳩尾板等なく、わたがみの上に、相引の緒を覆ふ物を、杏葉の形にして付け、袖あり、草摺は前後合せて八枚、小札、毛引、其他は鎧に同じ、但し札の一段くをあがきにす。中古の桂甲變じて鎧となり、鎧變じて胴丸となりしなり。其名始めて源平盛衰記に見ゆ。【膝膝料とする。辨】……買ひとのへる。【矚】……うかがふ、すきを見るの意。【穿鞋】……穿は、とる、もつ。鞋は音アイ、履なり。草履をとる。【依託】……すがりたのむ。【給其使令】……近臣の言ひ付けを間に合はす也。【寢親】……やうやく。

日吉は、この時に、やつと、十歳であつたが、繼父は、もとより貧乏であつて、一處に暮らして行くことは出来なかつたので、ふたたび、之を遣して、人の奉公人としたが、どこに往つても、數月にして立ち去り、尾張、美濃の間に、あちらこちらと、うろついて居つた。かくて、日吉は、二十歳の頃に、遂に遠江に往つて、土地の豪族なる松下之綱の部下となつた。之綱は、日吉の氣はたらきあるを愛して、事あるごとに之を使い、與助と名を付けた。ある日、之綱は、ゆつくりとして、與助に問うて曰ふには、汝は、尾張の者であるが、尾張の織田氏の用ひて居る鎧は如何なる者であるかと云ふとを知つて居るかと問うた。與助が答へて曰ふには、天下の鎧は、皆、桶皮で御座りますが、尾張だけは、胴丸を用ひて居ります。胴丸は、とち紐を右の脇に附けてあつて、身體を屈めたり伸ばしたりするに、思ふままに自由になりますと曰つた。之綱が曰ふには、吾は、胴丸の鎧を一領欲しいと思ふから、汝、吾が爲めに尾張に行きて買つて来てくれと曰ひ、即座に、黄金六兩を預けて、之を遣した。すると、與助は、途すがら自ら考へるには、吾、此金をぬすんで、奉公の支度料としやう。それで、思ふ様になつたならば、後日に至つて之を辨償するのは、いと容易なるものである。小さな節義は、拘泥するに及ばぬのであると考へ、そこで、尾張に入り、其叔父の處へ往つて、此事を相談した。叔父は、之を宜しいとし、因つて、織田氏に奉行することを勧めた。この時に當りて、信秀は、すでに死んで仕舞つて、信長が嗣いで立ち、四方の鄰國を攻めて、土地を切り取り、大分盛んになりかけて居つた。與助も亦、信長でなくば、ともに功名を成すに足る者はないと思つて、こゝに於て、其黄金を以て、刀劔や衣服を買ひと、のへ、自分で姓名を造つて、木下藤吉と曰ひ、信長が外出するのを伺つて、道の傍に跪いて拜謁して曰ふには、私の父の筑阿彌は、嘗て、先殿様(即ち信秀)の部下となつて居りました。私は、幼少の時から、他國に、あちらこちらと、流浪して居りました。貴方の御門に參上するとが出来ませんでした。どうぞ、あなた、又、私を引き上げて居るであらうと曰ひ、そこで、取り用ひて、下部となし、常に、草履取りをして従つたが、藤吉が筑阿彌の子であると云ふので、小筑と呼んで居つた。藤吉は、大層勤めて奉公し、近侍の臣に頼み込んで、用事を聞いて立ち働いて居つた。信長が、あるとき、朝極めて早く、ひとり出掛けしたが、従者は未だ續かなかつたのに、藤吉は、すぐに、之に従つた。斯の如きことが、度々あつたので、信長は、だんくりに、之を親み近づけるやうになつた。

其明年。信長所居清洲城。壁壞可百步。命吏發卒補之。彌月不成。藤吉從過城下。仰視而嘆曰。嘻。危矣。因獨語久之。信長微聞之。呼藤吉。面詰曰。小筑。汝欲何言。藤吉畏憚左右。不敢答。信長佯怒。拉其手近之。藤吉乃曰。方今君國東有今川。武田。西有齋藤。淺井。六角。日窺我隙。然而弛備如此。有司爲君謀不忠。信長默然。既而歸舍。召藤吉曰。使汝司工事。則汝能

速竣之乎。藤吉曰。能。信長曰。吾今日命汝司工事矣。藤吉拜謝。徑詣吏告曰。主公命僕司工事。願諭徒屬。使聽僕令。吏意憎之。曰。子好爲之。吾不復管也。藤吉乃盡會役徒。以君命賜之酒食。乃分爲十隊。以一隊充十步。身自獎厲督促之。兩日而成。信長適獵歸。見而大驚曰。猴奴乃能如此。因加俸。升爲吏。是歲永祿二年也。

【清洲】……尾張に在り。【可】……ばかり。【補】……修復する。彌月……月をわたる、月を越す。【嘻】……あゝ。【面詰】……音メンキツ。面會して詰り問ふ。【拉】……音ラフ。とる、無理に引き寄せる。【東有今川武田云云】……今川義元は駿河に在り。武田信玄は甲斐に在り。齋藤龍興は美濃に在り。淺井長政、六角義賢は近江に在り。【有司】……役人。【竣】……をはる、事を畢る、成就する。【徑】……たゞちに。【徒屬】……人夫共を云ふ。【獎勵督促】……すゝめばげまし、指圖して催促する。【俸】……俸給。【升】……登なり。昇進させる。【永祿】……正親町帝の時の年號。

その明くる年に、信長が居る所の清洲の城は、城壁が、百歩ばかり崩れたので、役人に申し附け、人夫を繰り出して、之を修復したが、一箇月以上もかゝつたけれども、出来上らなかつた。藤吉は、信長に従つて、城下を通り過ぎて、仰ぎ視て嘆息して曰ふには、あゝ、危険なることであると曰ひ、因つて、獨り言をいつて居ること、やゝしばらうであつた。信長は、かすかに、之を聞いて、藤吉を呼び寄せて、まのあたり、詰問して曰ふには、小筑、汝は何を言はうとして居つたかと曰つた。藤吉は、左右の近侍の臣に氣兼ねして、むざとは答へなかつた。すると、信長は怒つたふりをして、藤吉の手を無理に引き寄せて、之を近づけた。藤吉は、そこで、曰ふには、只今、あなたの御領地の東には、今川氏、武田氏が居ります。西には、齋藤氏、淺井氏、六角氏が居ります。日に日に我がすまを近づけねらつて居ります。然るに今や備をゆるめて置くこと此の如くであります。御役人衆は、あなたの爲に謀ることが誠忠でないの御座りますと曰つた。すると、信長は、黙つて、何にも言はなかつたが、すでにして、家に歸つて、藤吉を召し寄せて曰ふには、汝に此工事を司らせなれば、汝は、速に之を落成させることが出来るかと曰つた。すると、藤吉は、出来ませんと曰つた。信長が曰ふには、吾、今日、汝に命じて工事を司らせることにすると曰つた。藤吉は、御禮を申し上げて、たゞちに、役人の處へ行きて、告げて曰ふには、殿様は、私に命じて、工事を司らせることに致されました。どうぞ、人夫どもに諭し聞かせて、私の命令を聽くやうにして下さいと曰つた。役人は、心の中に、之を憎んで、そこで曰ふには、貴殿が、善い様に御取り計らひなされ。私は、もはや構ひませぬと曰つた。藤吉は、そこで、人夫共を寄せ集め、殿様の御言ひ附けであると曰つて、之に酒食の御馳走をなし、そこで、人夫を分けて、十組となし、一組の人夫に十歩を割り當て、藤吉、自身に、之をすゝめばげまし、監督し急がせ、二日に出来上つて仕舞つた。信長は、折しも、獵して歸つて、之を見て、大に驚いて曰ふには、猿めは、能くもこんな出来したなと曰ひ、因つて、俸祿を増し、昇進させて役人となした。この歳は、永祿二年であつた。

三年。藤吉又上言曰。清洲城乏水。徙小牧便。信長已欲之。而憚勞費。未果。且惡人知乏水也。乃叱曰。猴奴何知。敢進妄言。罪當死。凡藤吉言事。輒見叱斥。衆目笑之曰。彼面皮何厚也。藤吉不以爲意。獨欲深結於信長。信長之士。前田利家。淺野長勝。與藤吉善。淺野養中。邑人杉原某。二女。利家悅其長女。欲娶之。女不肯。強之不已。淺野患之。藤吉權謂利家曰。子舍諸。吾已通之矣。利家笑曰。吾未之知也。苟然。子盍速婚媾。吾爲子媒焉。藤吉亦不甚辭。遂因柴田勝家。請信長。見允。藤吉家貧。成婚之夕。夫妻布藁于簀而坐。以瓦缸敗盞相酬。妻知其非常人也。事之甚謹。後淺野養近。江人安井長政者。爲子。妻以其少女。於是淺野加藤。福島。小出諸人。皆以外戚屬秀吉。

刑に行ふぞと曰つた。凡そ、藤吉が、事を申し上げると、いつても、叱り退けられた。人々は、之を見て、目を見合はせ笑つて曰ふには、ほんとうに、面の皮の厚い男だと言つた。けれども、藤吉は、それを心に懸けず、何とも思はずして、たゞ、深く信長に取り入り、思つて居つたわけである。信長の侍なる前田利家、浅野長勝は、藤吉と仲が善かつた。浅野は、中村の人杉原某の二人の娘を養つて居つたが、利家は、その長女が氣に入つて、之を娶らうと思つたけれども、女が承知しなかつたので、之を強ひて止まなかつた。浅野は、之を心配して居つた。すると、藤吉は、一時の計策として、利家に向つて曰ふには、貴公、それは止めるが善い。實は、吾が、已に、彼の女に約束して居るのだと曰つた。利家は笑つて曰ふには、吾は未だ其事を知らなかつた。若し左様ならば、貴公は早速婚禮したる善かろう。吾、貴公の爲めに、媒酌致さうと曰つた。藤吉も、亦ひどく辭退せず、それから、遂に柴田勝家によつて、信長に願ひ出で、許可せられた。藤吉の家は、甚だ貧乏であつたので、かくて、婚禮の晩に、藤吉夫妻は、すのこの上にも敷いて坐つて、焼く物の徳利と、かけた盃とを以て、三々九度の盃を爲した。けれども、妻は、藤吉が、普通の人では無いと云ふことを承知して居つたので、甚だ謹んで藤吉に事へた。其後に、浅野は、近江の人安井長政と云ふ者を養子となし、之に若し方の娘を妻はした。こゝに於て、浅野、加藤、福島、小出などの人々は、皆、妻の里方の親類であるので、藤吉に附き従つた。

【参考】左に太閤記の一章を抄録して以て参考に資す。

藤吉郎娶藤井又左衛門女

信長卿の足輕頭藤井又左衛門、一女あり、名を八重と呼べり、元より家富み榮えける中に出生せし女なれば、萬の業に拙からず、加之、容貌艶美、紅粉の色を借らずして、おのづからの國色、此郷中に唱へ高し、爰に信長卿の小姓頭に前田犬千代といへる若者あり、この八重を戀ひ慕ひ、媒介をもて又左衛門に女を乞ふ、又左衛門大に喜び、先づ豫め約諾をなし、女八重に此事を語る、いかゞ思ひけん、此女、犬千代に嫁がらんことを嫌ひ、父の相忽に約せし事を恨む、爰に於て、又左衛門、藤吉郎を招き、この次第を物語り、犬千代に断を告げて、婚姻異變の儀を計らばしむ、藤吉郎承して、犬千代が許に至り、對面して様々すかし説けども、元來犬千代、強勇の壯士なれば、曾て以て承引せず、婚姻異變の趣意を聞き、其後に返答すべしといふ、藤吉郎、計策を構へ、偽りて云く、又左衛門の女八重は、某と兼ねて夫婦の契約あり、父又左衛門、此事を知らず、貴殿に婚姻を許しぬれども、とて、此事成就すまじ、足下、俠氣を以て某が罪を免し、此婚儀異變なし給はらば、大悦少からずといふ、犬千代甚だ驚きけるが、是は藤吉郎が頓計にて、彼女には外に約せし男あるべし、いかにぞや藤吉如き猿面冠者に、かくまで深く馴れ合ふべきと察しければ、態と面を和らげ、某曾て足下にかゝる契約ある事を知らず、不覺にも申し出し、多罪免るゝ方これなし、今より我が婚姻を相止め、足下の媒約となりて必らず此事を成就ならしむべしといふ、藤吉郎、犬千代が心根を知りぬれば、甚だ迷惑し、色々に断れども、犬千代、ますます、意地強く、信長卿へ申上げ、事既に決定す、藤吉郎大に困り、是非なく、又左衛門夫婦にこの事を告ぐ、又左衛門も詮方なく、女八重に此事を語れば、此女、藤吉郎が醜面を嫌はず、悦びてこれを諾す、又左衛門夫婦大に悦び、又藤吉郎を招きて、此由を物語るに、藤吉郎愈々難澁し、此一件我一時の計策にて、かくならんと思ひもよらず、いかにして事を延し、重ねて計議あるべしといへど、又左衛門更に承引せず、事既に爰に至れり、いかんとも成し難し、且つ娘足下に嫁がんとすを希ふ、殊更君の御聞に達しぬれば、いづれ異變なりがたしとして、終に吉日を選び、則ち犬千代を媒約として、八重と藤吉郎とを夫婦とす、犬千代ひそかに兩人が容體を伺ふに、更に隔つるけしきもなく、八重が藤吉郎を敬ふ事、臣の君に仕ふるごとし、理なるかな、藤吉郎天下掌握の時、北の政所と稱し、後に高臺院と號し奉るは、此御方の事なりけり。



六年。夏。信長閱兵河洲。戲以藤吉爲將。藤吉部勒指麾之。如老兵法者。其九月。信長出舍洲股。近臣福富某。失其刀筭。意藤吉。藤吉急赴津島市。密懸金購之。有一卒來粥刀筭。藤吉驗之。乃盜刀筭者也。即執縛之。候信長還。携卒要謁。俯伏垂泣。信長問故。藤吉具對曰。臣唯貧。故爲人所意。信長憫之。爲償其懸金。遂賜以百貫。信長方行。儉富國。患薪炭費多。命藤吉司之。費省十七。因試之數事。皆効。然未使將兵也。秀吉私制一旗。集少年自從。信長觀之。怒其妄。命斫其旗。秀吉意色自如。

【閣兵】……兵士の人数をしらべる。【部勒】……音ブロク。部は、組を定むる也。勒は、そろへる也。手分けして取りしめる。【老】……老練。【洲股】……美濃に在り。【福富某】……平左衛門。【刀筭】……音タウケイ。刀のかがい。【意】……猶疑の如し。【津島】……尾張に在り。【購之】……金を出して之をさがす。【粥】……ひきく。賣る也。【驗】……證據を以てしらべる。【要謁】……待ち受けて謁見する。太閤記に云はく、信長卿の家臣に、福富平左衛門と云ふものあり、佐矢川の陣中にて、細龍を影のせる黄金の筭を失ひ、さまじく詮議せども、更に知る者なし、人あり、平左衛門に告げて言ふ、中村藤吉郎、盗み取りて匿せりと、爰に於て、平左衛門、藤吉を疑ふこと甚し、藤吉郎大に迷惑し、我貧賤なるを以て、かゝる悪名を蒙るこそ口惜しけれ、所詮此盜賊を捜し出さずんば、悪名をそゝぐことを得じと、密に津島の町に行き、堀田孫左衛門と云へる豪富なる町人の家に至り、主に逢うて、事の次第を物語り、金龍の筭を以て買物に入るものあらば、其者を捕へ置き、直に知らせ給はるべし、此盜賊相知れば、黄金十兩を以て是を賞すべし、猶他家へ持ち行へば、賣るまじきものにあらずとて、右の趣を津島の町内へ觸れさせ置き、孫左衛門方に滞留して、音信をこそ待ちにけれ、果して藤吉郎が推察に違はず、足輕體のもの一人、孫左衛門が宅に來り、金龍の筭を以て錢五百文を借りんと言ふ、藤吉郎喜び、直に堀め捕りて、信長卿の御前へ引かせ、始終のこと言上及びけり云々と。本文に、懸金購之とは、この黄金十兩云々を指すなり。【妄】……未だ將とならずして、將の眞似をなせしを云ふ。【自如】……平氣で居ること。

【關】永祿六年の夏に、信長は、河の洲に於て、兵士の人数を取り調べ、たはむれに、藤吉を以て大將とした。すると、藤吉は、兵士を手分けして取りしめり指圖すること、兵法に老練なる者の様であつた。其年の九月に、信長は、出で、洲股に宿つた。そのときに、信長の近侍の臣なる福富某は、その刀にさしたる筭を紛失したので、これは藤吉が盗み取つたのであらうと疑つた。すると、藤吉は、無實の嫌疑を受けたことを

残念に思つて、急いで、津島の町に往き、ひそかに、懸賞として金を與へることにして、之をさがした。すると一人の足輕があつて、津島の町に來つて、刀の筭を賣らうとしたので、藤吉は、證據を以て吟味すると、それが、刀の筭を盗んだ者であつたから、即座に之を執へて縛り上げて、信長の還るのをうかがつて、その足輕を引き連れて、待ち受けて謁見し、うつむいて涙を流した。信長は、其故を問うた。藤吉は、詳しく其事の始末を答へて曰ふには、私はたゞ貧乏で御座りますので、それ故に人に疑はれたので、まことに残念で御座りますと曰つた。信長は、之をあはれに思ひ、藤吉の爲めに、其懸賞金をつくのひ返し、遂に百貫の領地を賜はつた。信長は、丁度其頃、儉約を行つて、國を富まさうとして居つたので、薪炭の費用が餘りに多いのを心配して、藤吉に命じて、薪炭の事を司らしめた。すると、其費用が、十分の七を減ずることになつた。そこで、信長は、藤吉を、様々の事に試み使つて見ると、皆、好結果であつた。けれども、信長は、未だ兵に將たらしめることをば致さなかつた。然るに、藤吉は、自分勝手に一本の旗を造り、少年共を集めて、自分の從者として居ると、信長は、之を見て、その出鱈目なる振舞を怒つて、命じて其旗を切り捨てさせたが、藤吉は、一向に平氣なる様子であつた。

信長已克今川氏。定尾張。西攻齋藤氏於美濃。踰洲股河。用兵數不得志。因會諸將。謀築壘于河西。以一將守之。諸將人人自危。莫敢當者。信長密謀之。藤吉對曰。孤壘斗入敵地。我兵必不欲往。即往。不諳其地形。險易。一敗莫復往者。不若因其土人用之。臣嘗寓美濃。與其豪俠大盜相識。宜誘爲我用。因屈指舉其姓名。得蜂須賀小六。稻田大炊。梶原隼人。青山新七以下六十餘人。其黨屬千二百人。信長曰。吾亦聞有此輩矣。誰將此者。曰。臣願當之。信長許之。九年。九月。發卒築壘。敵將守近邑者。以八千人出而沮之。我兵且戰且築。數日而成。於是授藤吉以甲士五百。戒而遣之。藤吉乃招聚所識者。壘兵凡可三千。敵欲誘出而陷之。以輕卒

挑戰。藤吉不肯出。即夜。聚其衆。議曰。敵必疲矣。且以我爲怯。不復設備。可襲而破也。乃令小六等以數十人襲敵城。戒曰。莫使敵尾入我壘。大炊曰。公勿憂。開門可容三三人以待之。臣請殿焉。藤吉曰。前言以主公意爾。不行危道。莫以爲大功。自固而棄士。吾所不爲也。公等勉之。衆踊躍而出。頃之。邑中火起。大罵藤吉又遣兵援之。衆大獲而至。乃效首虜於信長。信長賜藤吉一旗。就壘傍賜三千貫。命名曰秀吉。

【信長已克今川氏】…今川義元、尾張を伐たんとして、桶狭間に至る。信長、襲ひ撃つて之を殺せり。【斗入】…斗は絶なり。斗(マス)の隅の如く、深く屈曲して敵の境に入り込むを云ふ。【臣嘗美濃】…上文に、轉徙於尾張美濃と云ふもの、これなり。轉徙すること三十八軒なりと云ふ。【豪俠】…勢力ある俠客。【蜂須賀小六】…正勝。【黨屬】…仲間。【尾入】…あとを付けて入り込む。【開門可容三三人】…微く門を開くを云ふ。【危道】…危険なる仕方。【踊躍】…音ユウヤク。をどりあがる。【頃之】…しばらくありて。【大罵】…大にかまびすし、大に騒ぐこと。【大獲】…澤山なる獲物。【效】…いたす、差し出す。

【信長は、すでに、今川氏に勝ちおぼはせて、尾張を平定し、西の方齋藤氏を美濃に攻めて、洲股河を踰えて兵を用ひたけれども、度々、思ふやうに成らなかつたので、因つて、諸將を寄せ集めて、とりに河の西に築いて、一人の大將をして之を守らしめやうと相談したけれども、諸大將は、めい、危険に思つて、其任に當らうとする者はなかつた。そこで、信長は、ひそかに、此事を藤吉に相談した。すると、藤吉が答へて曰ふには、一つの孤立したとりで、深く敵の境内に突入り居るので御座りますから、我が軍勢は、必ず、往くことを好まぬので、御座りませう。もし、往きましたとところで、其土地の形勢の險阻なるか平坦なるかを十分承知して居らぬと故、一度敗北しましたならば、ふた、び往く者は無いで御座りませう。されば、其土地の人の中から、擇んで之を用ふるが、一番宜しう御座ります。私は、かつて、美濃に寄寓して居りましたので、其土地の勢力ある俠客、大盜賊などと、知り合つて居りますから、此等の者共を誘ひ寄せて味方の用に立てるが宜しう御座りますと曰ひ、因つて、指を折つて、その名を數へ舉げ、蜂須賀小六、稻田大炊、梶原隼人、青山新七以下六十餘人を得、其仲間が千二百人あつた。信長が曰ふには、吾も亦、此手合のあることを聞いて居る。しかし、誰を此者共の大將にしたら善からうかと曰つた。藤吉が曰ふには、どうか、私が大將の任に當りたいと思ひますと曰ひ、信長は之を許した。永祿九年の九月に、信長は、人夫を繰り出して、とりにを築かうとした。敵の大將の、近傍の村を守つて居つた者が、八千人の兵士を引き連れて、出で、之を邪虜したが、我が兵は、戦ひながら築いて、數日にして、とりにでは出来上つた。こゝに於て、信長は、兵士五百人を藤吉に授け、よく注意して之を遣はした。藤吉は、そ

こで、自分の知り合ひの者共を招き集めたので、とりにの兵士は、凡そ三千人ばかりであつた。敵は、之をおびき出して陪れやうと思つて、身輕に出で立ちたる兵士を以て、戦を仕かけた。藤吉は、なかく出でなかつた。其夜に、藤吉は、其部下の人々を集めて評議して曰ふには、敵は必ず疲れて居るであらうし、其上に、我をば臆病であると思つて、もはや備を設けて居らぬであらうから、不意撃ちして破ることが出来るであらうと曰ひ、そこで、小六等をして、數十人を引き連れて、敵の城を不意撃せしめるとし、注意して曰ふには、敵をして、我が軍のあとを付けて、とりに入り込ませるやうなことをしては成らぬと曰つた。大炊が曰ふには、それは、あなた、御心配なされませぬ。二三人づつはいられる位に、少しばかり、門を明けて、待つて居つて下さい。私が、しんがりいたしましたしやう。と曰つた。すると、藤吉が曰ふには、前に申述べた言葉は、殿様(信長)の思召を以て言つただけである。實を云へば、危険なる仕方をいたさねば、大なる手柄を立てることは出来ぬのである。自分だけ用心堅固にして、士を棄てるのは、吾が爲さる所で、吾は、貴公等とともに生死を同じうするものであるから、貴公等、しつかりやつてくれよと曰つた。衆の人々は、小をとりして勇喜んで、出かけた。しばらくすると、村の中に火が燃えあがつて、大に騒がしかつた。そこで、藤吉は、又、兵を派遣して之を援けたので、人々は、澤山の獲物をして歸つて来た。そこで、斬り取つた首級と生捕とを信長に差し出した。信長は、藤吉に一本の旗を賜はり、とりにの近傍に於て、三千貫の領他を賜はり、名を付けて秀吉と曰ふことにした。

美濃豪傑大澤某。據宇留間城。爲信長所患。秀吉以計降之。携謁信長。信長大喜。其夜。密召秀吉曰。大澤叛服不可必。不若速殺之。對曰。叛則誅之耳。今而殺之。無復來者。不聽。秀吉歸舍。不佩刀。而召大澤曰。吾於子之身。有所不安。子第速囚。吾爲子留爲質。大澤即亡去。諸豪傑聞之。多願屬秀吉。竹中重治者。好奇計。從齋藤氏。不見遇。亦來屬焉。

【大澤某】…二郎左衛門。【宇留間】…美濃に在り。【叛服】…そむくか服従するか。【第】…たゞ。【囚】…逃げる。【即亡去】…即ち、一に乃に作る。【竹中重治】…半兵衛。【奇計】…不思議なる計略。

【美濃の豪傑大澤某は、宇留間城に立て籠つて居つて、信長に厄介がられて居つたが、秀吉は、計略を以て之を降参させ、引き連れて、信長に謁見した。信長は大に喜んだが、その夜、ひそかに、秀吉を召し寄せて曰ふには、かの大澤は、叛くか服従するか、あてにならない男である。速に殺して仕舞ふが宜しいと曰つた。秀吉が答へて曰ふには、もし叛きましたならば、その時に、之を誅殺するばかりで御座ります。今、之を殺しましたならば、再び味方に来り附く者は無くなるで御座りませうと曰つた。けれども、信長は、聞き入れなかつた。そこで、秀吉は、宿に歸つて、刀を帯びずして、大澤を召し出して曰ふには、吾は、貴公の一身に於て、心配でならないところの事があるから、貴公は、何でも善いから、早く此處を逃げ出せよ。吾は、貴公の爲めに、留まつて人質とならうと曰つたので、大澤は、直ちに、逃げ去つた。諸の豪傑と

は、此事を聞いて、秀吉に附き従はんことを願ふ者が多くあつた。竹中重治といふ者は、人の氣のつかぬ不思議なる計略を好んで居る人であつて、齋藤氏に從つて居つたが、好遇せられなかつたので、この人も亦、來つて秀吉に附き従つた。

十一年。從信長擊六角義賢爲先鋒。與諸將攻箕作城。拔之。信長擁立將軍足利義昭于京師。三好氏兵屢犯之。十二年。義昭謂信長曰。爲吾置一將智勇兼備者。以鎮京師。信長曰。諾。將擇以進。衆意擬柴田勝家。丹羽長秀。佐久間信盛三人。至命發。則木下藤吉也。衆大驚。秀吉既拜命。即日詣足利氏。面謁義昭。裁決京師事。無不立辨。三好氏不敢犯。衆妬之。譖其自用太過。信長斥不納。尋修大内。以秀吉及村井貞勝監工焉。八月。從擊伊勢。攻淺香城。先登。

【箕作城】……近江に在り。【三好氏兵】……康長等の徒黨。【裁決】……取りさばく。【衆】……織田氏の家臣。【譖】……音シン。讒言する。

【大内】……御所。從擊伊勢……北畠氏を撃つなり。  
【論】永祿十一年に、秀吉は、信長に從つて、六角義賢を撃ち、先鋒となり、諸將とともに、箕作城を攻めて、之を攻め落した。信長は、足利義昭を京師に於てより立て、將軍となる様にしたが、三好氏の兵が、度々、之を犯した。十二年に、義昭は、信長に向つて曰ふには、吾が爲めに、智謀勇氣兼備はつて居る大將一人を置いて、以て京師を鎮めるやうにしてくれよと曰つた。信長は、承知いたしましたと曰ひ、將に人選して進めやうとした。多くの人々の心の中では、柴田勝家、丹羽長秀、佐久間信盛の三人の中であらうと思つて居つたが、やがて、命令が下つて見ると、木下藤吉であつたので、人々は、大に驚いた。秀吉は、すでに命令を拜し、其日に直に、足利氏に至り、義昭に面あたり謁見し、京師の事を取りさばくに、即座に埒の明かぬことは無く、三好氏は、むざと來り犯さうとしなかつた。衆の人は、之を嫉妬し、事を執るに專斷なることがあまりに過ると云つて、讒言したけれども、信長は、讒言を斥けて採り用ひなかつた。それから、間もなく、信長は、御所を修理したが、秀吉と村井貞勝とを以て、工事を監督させた。八月に、秀吉は、信長に從つて、伊勢の北畠氏を撃ち、淺香の城を攻めるときに、先登した。

元龜元年。四月。從擊朝倉義景于越前。爲先鋒。拔手筒城。會淺井長政發兵斷後。信長欲班軍。恐義景尾擊。曰。誰留拒義景者。衆不敢答。秀吉進曰。願命臣。乃以三千人留。當義景。義景不肯出。遂引兵而西。參河國主徳川公。以客將殿信長軍。秀吉與之合兵。行擊土寇。達于京師。以功食愛智川三萬石。木村。生駒。前野諸人屬之。六月。從擊淺井。朝倉二氏于姉川。因守横山。九月。淺井長政。朝倉義景合兵。圍信長于大津。秀吉赴援。圍解而歸。二年。五月。淺井長政發兵。攻鎌羽城。城距横山頗遠。秀吉以輕兵馳遶山背。立旗於城後。敵驚潰走。八月。從攻淺井氏山本城。二年。七月。又攻之。朝倉義景來救。逆擊破之。

【元龜】……正親町帝の時の年號。【班】……かへす。【尾擊】……追擊。【客將】……客分の大将。【愛智川】……近江に在り。【木村】……単人正。【生駒】……雅樂頭。【前野】……但馬守。【姉川】……近江に在り。【横山】……近江に在り。【鎌羽】……近江に在り。【山本城】……近江に在り。

【關】元龜元年の四月に、秀吉は、信長に從つて、朝倉義景を越前に撃つて、先鋒となり、手筒城を攻め落した。折しも、淺井長政が、軍勢を繰り出して、信長の軍勢の後を斷ち切つたので、信長は、軍勢を引きかへさうとしたが、義景があとから追つかけて撃つことを恐れて、曰ふには、誰か留まつて義景を拒ぐ者は無いかと曰つた。衆の人は、敢て答へやうとしなかつたが、秀吉が進み出で、曰ふには、どうぞ、私に御申し附け下さいと曰つた。そこで、秀吉は、三千人の兵士を引き連れて、留まつて、義景に當ることになつたが、義景は、出て來なかつたので、秀吉は、遂に兵を引き上げて、西に向つた。參河の國主徳川公(即ち家康)は、客分の大将であつて、信長の軍のしんがりとなつて居つた。秀吉は、徳川公と、兵を合はせて、道すがら、土地の百姓一揆を撃ち、京都に到着した。秀吉は、その功勞を以て、愛智川の三萬石を領地とすることになつた。木村、生駒、前野などの人々が、之に附き従つた。六月に、秀吉は、信長に從つて、淺井、朝倉の二氏を姉川に撃ち、因つて横山を守つて居つた。九月に、淺井長政、朝倉義景は、兵を合はせて信長を大津に圍み攻めた。秀吉は出かけて行つて援けたので、圍が解けて、

歸つた。二年の五月に、淺井長政は、兵を繰り出して、鎌羽城を攻めた。この城は、横山を去ること、餘程遠かつたが、秀吉は、身輕に出で立ちたる兵を以て、馳せて山のうしろから逸つて、旗を城の後に立てた。すると、敵は驚いて、ありふらに崩れ亂れて、逃げ走つた。八月に、秀吉は、信長に従つて、淺井氏の山本城を攻めた。三年の七月に、又、之を攻めた。朝倉義景が、來つて救ひ助けたが、迎へ撃つて、之を破つた。

天正元年。以信長命。廢將軍義昭。徙之若江。淀城爲義昭守不下。往說降之。八月。朝倉氏滅。秀吉攻拔小谷。獲淺井長政父子。秀吉拒二氏有年。使信長無北顧之憂。得以經營畿内。以功食淺井氏故地十八萬石。明年。城于長濱。居焉。三年。五月。信長援徳川氏。與武田勝頼。戰于長篠。秀吉爲左先鋒。有功。八月。朝倉餘黨大起。越前。信長攻之。至敦賀。秀吉受命。以舟師。遶出敵後。上岸毀舟。襲河野。取之。遂拔龍門。諸城皆潰。是歲除筑前守。更氏羽柴。

【天正】……正親町帝の時の年號。【若江】……河内に在り。【淀】……山城に在り。【小谷】……近江に在り。【長篠】……三河に在り。【敦賀】……河野に在り。【龍門】……並に越前に在り。

秀吉は、出かけて行つて説諭して、之を降服させた。八月に、朝倉氏は滅亡した。秀吉は、小谷を攻め落して、淺井長政親子を討ち取つた。秀吉は、數年の間、淺井、朝倉二氏を拒いで居つて、信長をして北の方を顧みるの心配なくして、畿内を經營することを得させた。その手柄を以て、秀吉は、淺井氏のもの領地十八萬石を領地とする事になり、明くる年に、城を長濱に築いて、こゝに住まつた。三年の五月に、信長が、徳川氏を援けて、勝田勝頼と、長篠に於て戰つたときに、秀吉は、左翼の先鋒となつて、手柄があつた。八月に、朝倉の殘黨が、大に越前に起つたので、信長は、之を攻めて、敦賀に至つた。その時に、秀吉は、信長の命令を受けて、舟軍を引き連れて、遶つて敵軍のうしろに出でやうとして、上陸する舟を破壊して、敵を破らざれば、ついに、信長の決心を示し、河野を不意撃つて之を取り、それから、遂に龍門を攻め落した。すると、諸城の賊兵は、皆、ちりぢりに成つて逃げた。この歳に、秀吉は、筑前守に叙せられ、氏を羽柴と改めた。

秀吉以桐爲號。以金瓠爲馬表。每一捷加一瓠。曰。吾必積至千矣。因稱

千瓠。織田氏之出軍也。桐號瓠表。敵望而避之。前後加封。總二十一萬石。秀吉私與其謀臣議曰。主公外優裕而内猜吝。吾受大封。必不能保終。因從容白信長曰。臣敢請養二郎爲子。讓之以臣祿。信長喜。因問曰。汝祿如何。曰。君命臣西征者。西國二三州。可指日而取。取輒獻君。臣請其餘耳。信長乃以其少子秀勝爲秀吉義子。

【號】……紋所。【金瓠】……音キンコ。金箔を置きたる瓢箪。一に金瓢に作る。瓢は瓠瓜の總名。瓠は其別なり。故に金瓠と云ふも、金瓢と云ふも、同意なり。【馬表】……馬じるし。【千瓠】……千なり瓢箪。諸將馬表圖並に古實者の説に據れば、終始一瓢なりしとも云ふ。【優裕】……優は和なり、裕は寛なり。ゆつたりとして大量なること。【猜吝】……猜は嫌なり、吝は鄙吝なり。疑ぶかくして吝嗇なること。【保終】……一生を無事に終る。【次郎】……次丸。【指日】……日を指定する、日限を定むる。【秀勝】……後に、丹波少將と云ふ。

秀吉は、桐を以て紋所となし、金箔を塗つたる瓢箪を以て馬じるしとなし、一度勝利を得るごとに、一つの瓢箪を増すことにして、曰ふには、吾は、是非とも、だんくんに、瓢箪の數を増して、千にしやうと曰ひ、よつて、千成瓢箪と云つた。織田氏が軍勢を繰り出すときに、桐の紋所に千成瓢箪の馬じるしと云ふと、敵は、望み見て、之を避けた程であつた。かくて、秀吉は、しばしば、功勞があつたので、前後、領地を増せられて、すべて二十二萬石となつた。あるとき、秀吉は、ひそかに其參謀の臣下と相談して曰ふには、殿様即ち信長は、うはべは、ゆつたりとして寛大のやうに見ゆるけれども、内心は、邪推深くして且つ吝嗇である。今や吾は大なる領地を貰ひ受けて居ることなれば、これでは、屹度、一生を無事に終ることは出来まいと思ひますと曰つた。信長は、喜んで、因つて問うて曰ふには、私に、何卒、次丸殿を養子といたしまして、私の俸祿を讓ることには致したいと思ひますと曰つた。信長は、喜んで、因つて問うて曰ふには、汝の祿高は何程あるかと曰つた。すると、秀吉が曰ふには、あなたに、私に、西方の毛利征伐を御申し附け下されることならば、西國の二三箇國は、日限を指定して攻め取ることが出来ます。そこで、取りましたならば、すぐに、貴方に獻上いたしませう。そして、私は、其殘りを拜領したいと思ふので御座りますと曰つた。此時に、毛利氏は十三州を領して居つたのであるから、二三州を除くとするも、猶ほ十州を餘すのである。信長は、そこで、其末子の秀勝を、秀吉の養子とした。

當是時。毛利輝元割據山陽山陰十餘州。浮田直家以備前。美作附之。播磨人赤松義祐。別所長治。小寺政職等。恐被其兵。送欵於織田氏。政職使

者黑田孝高有器略。因秀吉說毛利氏可擊狀。曰。臣請爲之鄉導。秀吉具語之。信長終決意西征。五年。以秀吉爲征西大將。使取播磨以自封。十月。秀吉入辭。信長授以記幟。曰。功成。則舉中國予汝。汝遂進取九州。若其援師。當依請遣之。秀吉拜而對曰。君不以臣鄙陋。舍勳舊諸將。而命大任於臣。臣敢不竭力。臣辱記幟之。是君使臣得專制也。討叛撫服。臨機制變。以定中國。在臣度內耳。君之近臣。森。矢部。福富諸人。積功累勞。未有所報。中國已定。願以封此輩。臣則直進乘勢。遂下九州。九州下。則願賜其一歲之入。蓄糧仗。造舟艦。濟海入朝鮮。君欲賞臣功。願以朝鮮爲一。是臣之宿志也。信長笑曰。秀吉又復大言乎。遂許便宜從事。

【被兵】…攻伐せらるること。【黑田孝高】…如水と號す。【器略】…器量策略。【自封】…自分の領地とする。【辭】…暇乞する。【記幟】…音キシ。信長の紋所のついである旗。【中國】…山陽道、山陰道。【鄙陋】…音ヒロウ。身分いやしきこと。【勳舊】…勳功ある舊臣。【大任】…西征の大將たるを云ふ。【竭】…盡くす。【賜物】…度内。計中、胸中。【森】…河内守。【矢部】…善七。【福富】…平左衛門。【報】…報賞。【一歳之入】…一年間の取り高。一年間の歳入。【糧仗】…兵糧、武器。【威靈】…御威光。【席卷】…席を巻くが如く、容易に、一隅より攻め取るを云ふ。【三國】…日本、朝鮮、明。【宿志】…兼ねてよりの志望。【便宜從事】…便利時宜を見計らひて勝手に處置せよと也。事ごとに伺ひ出づるに及ばずとの意。

【圖】この時に當りて、毛利輝元は、山陽、山陰兩道の十餘國に割據し、浮田直家は、備前と美作とを以て、輝元に附いて居つた。播磨の人赤松義祐、別所長治、小寺政職などは、毛利氏に攻伐せられることを恐れて、織田氏に内通した。政職の使者なる黒田孝高は、器量策略のすべ

たる人であつたが、この人は、秀吉に因つて、毛利氏を攻め撃つことの出来る様子を説いて、そして曰ふには、私は、どうか、御案内をいたしましやうと曰つた。秀吉は、その一部始終を信長に語つた。信長は、そこで、とうとう、決心して、西の方毛利氏を征伐することにした。五年に、信長は、秀吉を以て、西方征伐の大將となし、播磨を攻め取つて自分の領地となさしめることにした。十月に、秀吉は、入つて御暇乞をした。すると、信長は、自分の紋所のついでたる旗を授けて曰ふには、この事が成就したならば、中國殘らずに汝に與へるであらう。それから、汝は、遂に進んで九州を攻め取ることによせよ。そして、その援兵などの類は、汝が申し越すにたがつて差遣はすであらうと曰つた。すると、秀吉は、拜して答へて曰ふには、あなたは、私が身分賤しく材能乏しきをまかまはず、勳功ある故參の諸大將をすて置いて、そして、この西方征伐の大なる任務を、私に御申し附けになりました。私は、どうして、力を盡さず居ることを致しませうぞ。其上に、私は、あなたの御紋所のついでたる御旗の賜物をも拜領いたしました。これは、あなたが、私に專制の權を與へられたので御座ります。そむく者を征伐し、服従する者を撫でやすんじ、其時機に臨んで、非常の事變を處置し、そして、中國を平定するとは、私の胸中に在ること御座ります。して又、あなたの近侍の御家來の森、矢部、福富などの人々を、手柄と骨折とを積みかさねながら、未だ之に報ゆるの恩賞を頂戴いたして居りませぬ。就いては、中國が平定して仕舞ひましたならば、どうぞ、中國を以て此人々を封じて下さい。私は、そこで、直に進んで、勝つた勢に乗じて、それから、遂に九州を攻め下しませう。そして、九州が下りましたならば、その時には、どうぞ、九州の一年の上り高を頂戴いたしたう御座ります。さすれば、兵糧と兵器とを蓄へ、舟を造りまして、海をわたつて、朝鮮に攻め入りませう。あなたが、私の手柄を賞して下さうとするならば、朝鮮を頂戴いたすことを御願ひいたします。私は、そこで、朝鮮の軍勢を用ひて、明に攻め入りませう。冀はくは、あなたの御威光をたよりとして、明國を片端から攻め取り、日本、朝鮮及び明國の三國を合はせて、一つに致したいもので御座ります。これが、私の年來の志望で御座りますと曰つた。すると、信長は笑つて曰ふには、秀吉は、又しても大きな事を言ふのかと曰ひ、かくて、遂に、萬事其時々の都合の宜しきやうに處分することを差し許し、一々伺ひ出でなくとも宜しいことにした。

於是。秀吉將兵數千。入播磨。至于御著。政職中悔。走歸毛利氏。黑田孝高。與其父宗圓。居姫路。迎說秀吉曰。臣所居形勝之地也。君宜據爲根本。西面以圖毛利氏。秀吉從之。予孝高以宍粟郡。十一月。秀吉將兵。攻佐用。拔之。進取上月。浮田直家在岡山。發兵來援。孝高逆戰。秀吉赴援。令隊將堀尾吉晴進擊。我兵少卻。秀吉自後呼曰。今日始與中國兒戰。勿貽濃尾之羞。我兵奮前。擊走直家兵。遂拔上月而還。已而直家襲而復之。六

年。六月。秀吉大城。姫路。故出雲國主。尼子勝久。以兵來屬。取上月。以乏糧退還。城復爲直家有。二月。秀吉赴攻。盡焚殺其兵。以城予勝久。

【御著】…播磨に在り。【宗園】…美濃守入道。【姫路】…播磨に在り。【形勝之地】…形勢すべからざる土地。【実栗郡】…播磨に在り。【佐用】…播磨に在り。【上月】…播磨に在り。【岡山】…備前に在り。【中國兒】…中國の小僧共と云ふが如し。輕蔑したる語。【貽】…のこす。【羞】…恥辱。【尼子勝久】…四郎。

こ、に於て、秀吉は、數千人の兵を引き連れて、播磨に入り、御著に到着した。政職は、中途にして、信長に従つたことを後悔し、走つて毛利氏にたより込んだ。黒田孝高は、その父宗園とともに、姫路に居つたが、出で迎へて秀吉に説いて曰ふには、私が居りますところは、形勢のすべからざる土地で御座ります。あなたはその處に立て籠つて、根據地とし、そして、西に向つて、毛利氏を亡ぼすことを謀るが宜しう御座ります。と曰つた。秀吉は、此言に従ひ、孝高に、実栗郡を與へた。十一月に、秀吉は、軍勢を引き連れて、佐用を攻めて、之を攻め落し、それから、進んで上月を攻め取つた。浮田直家は、岡山に居つたが、軍勢を繰り出して、來つて上月を援けた。すると、孝高は、直家の兵を迎へ撃つた。秀吉は、出かけて行つて援け、堀尾吉晴をして進撃せしめた。その時に、味方の軍勢が少し退却しかけたが、秀吉は、後から、大聲で呼ば、つて曰ふには、我々は、今日、はじめて、中國の小僧どもと戦ふのであるから、美濃、尾張の恥辱をのこしては成らぬぞと曰つたので、我が軍勢は、奮ひ進んで、撃つて、直家の軍勢を敗走させ、かくて、とうとう、上月を攻め落して、引き返した。とかくする中に、直家は、不意撃して、上月を取りかへした。天正六年の六月に、秀吉は、大に姫路に城を築いた。もとの出雲の國主なる尼子勝久が、軍勢を引き連れて、來り附き、上月を攻め取つたが、兵糧が乏しかつたので、退き還つた。上月の城は、ふたたび、直家のものとなつた。二月に、秀吉は、出かけて行きて攻め、其兵を殘らず焼殺し、その城を勝久に與へた。

三月。別所長治叛。附毛利氏。聚族黨八千。據三木城。城甚險。而野口。志方。神吉。櫛橋等諸寨。皆應之。秀吉按地圖。議曰。彼欲俟我攻三木。而襲其後也。吾當反其計。以制勝矣。乃攻野口。下之。四月。毛利氏族將。吉川元春。小早川隆景。與直家合兵七萬。攻上月。秀吉留兵備三木。而自赴援之。陣于高倉山。信長使攝津守荒木村重等來助。五月。更遣其二子信忠。

信雄。信孝來援。相持不戰。秀吉以爲敵兵衆食足。未可勝。即勝。非吾功也。乃請信長班師。陣于書寫山。攻拔神吉。志方。八月。秀吉將二萬人。攻三木。直家知秀吉終不可抗。欲送款焉。會界港藥商子小西彌九郎者。養於岡山賈人。其生父老於京師。秀吉微時。數館其家。與彌九郎親善。直家因用充使者。赴三木。秀吉爲請信長。許之。伯耆國主南條元續亦以國降。而荒木村重爲明智光秀所讒。得罪。叛應毛利氏。

【三木城】…播磨に在り。【野口】…【志方】…【神吉】…【櫛橋】…並に播磨に在り。【高倉山】…播磨に在り。【班師】…師は一に軍に作る。【書寫山】…播磨に在り。【抗】…抵抗する。争ふ。【界港】…和泉に在り。【小西彌九郎】…後、攝津守行長。【生父】…實に軍を作る。【叛應毛利氏】…叛の字、一に上の句に屬す。

三月に、別所長治は、叛いて、毛利氏に味方し、一族徒黨八千人を寄せ集めて、三木城に立て籠つた。この城は、甚だ險阻であつた。そして、野口、志方、神吉、櫛橋などの諸のとりでは、皆、之に味方した。秀吉は、地圖を繰り開いて、評議して曰ふには、彼れ敵は、我が三木を攻めるのを待つて、そして後を不意撃しやうとするのである。されば、吾は、其計略を反對にして勝利を得るやうにしやうと曰ひ、そこで、野口を攻めて、之を攻め落した。四月に、毛利氏の一族にして大將なる吉川元春、小早川隆景は、直家と、兵七萬人を合はせ、上月を攻めた。秀吉は、兵を留めて三木に備へて置き、そして、自身に、出掛けて行つて、上月を援け、高倉山に陣取つた。信長は、攝津守荒木村重等をして來り助けしめ、五月に、更に、その三人の子なる信忠、信雄、信孝を派遣して、來り援けしめ、對陣して、戦はなかつた。秀吉が考へるには、敵には、軍勢は多く兵糧は十分であるから、戦つたとしても、未だ勝利を得ることは出來まい。若し勝つたとしても、かく援兵が多く居つては、吾が手柄とはならないのであると考へたので、そこで、信長に願つて、軍勢を引きさかへして、書寫山に陣取り、神吉、志方を攻め落した。八月に、秀吉は、二萬人の軍勢を引き連れて、三木を攻めた。直家は、秀吉には逆も抵抗することが出來ぬことを知つたので、内通しやうと思つた。折しも、界港の藥屋の子なる小西彌九郎と云ふ者が、岡山の商賈人の養子となつて居つたが、彌九郎の實父は、京部に隱居して居つて、秀吉が微賤なりしときに、たびたび、其家に宿つたことがあつて、彌九郎と仲が善かつたので、直家は、因つて、彌九郎を用ひて、秀吉へ内通の使者に充て、三木に出かけて行つて、其旨を申し込ませた。秀吉は、爲めに信長に請うたが、信長は、直家の降參を許した。伯耆の國主なる南條元續も亦、國を以て降參した。そして、荒木村重は、明智光秀に讒言せられて、罪を得たので、をむいて、毛利氏に味方した。

十一月。信長自將討村重。秀吉往見信長曰。臣識村重非叛者也。是必有故。臣請說降之。乃輕裝赴伊丹。面諭村重。村重謝曰。織田公豈終釋然於我哉。秀吉泣。別而出。伊丹人請殺之。村重曰。彼肯輕身來此。殺之不義。秀吉更遣黑田孝高說之。村重囚之。孝高不屈。秀吉乃歸三木。休戰。築長圍困之。長治與村重通。自間道潛出。城于淡河。丹生互爲應援。七年正月。長治出襲秀吉。秀吉與異父弟秀長逆擊大破之。斬其銳兵八百。二月。秀吉以風雨夜襲取丹生。使秀長以五百騎攻淡河。不利。守將亦收入三木。乃命加藤光泰築寨以絕其糧道。九月。村重棄伊丹。走保華隈。孝高乃得歸。先是。竹中重治死。孝高獨爲謀主。村重與長治皆告急於毛利氏。毛利氏不能援。獨送糧食。襲破平田寨。長治引兵出取其糧。秀吉以麾下邀擊于大村。近士脇坂安治斬敵驍將魚住源吾。秀吉因大破之。獲別所氏族十人。徙壘逼城。八年春。遂陷之。使長治自殺。以免城兵。於是盡定播磨。乃令浮田直家以備前。美作兵西圖毛利氏。城于兒島。小早川隆景數攻之。乃遣淺野長政。率舟師赴援。擊走之。

【釋然】……消散する貌、さつぱりと解け忘る、を云ふ。〔淡河〕……播磨に在り。〔丹生〕……攝津に在り。〔秀長〕……後に大和納言。〔華隈〕……攝津に在り。〔平田〕……播磨に在り。〔大村〕……播磨に在り。〔兒島〕……備前に在り。

十一月に、信長は、自身に大將となつて、村重を征伐した。秀吉は、行きて信長に謁見して曰ふには、私は、村重が謀叛する者で無いことを、よく知つて居ります。これには、吃度、譯のあることで御座りませう。私、どうぞ、村重を説き諭して降参させたいと思ひます。曰ひ、そこで、身輕き支度をなして、伊丹に出かけて行き、村重に面會して説き諭した。すると、村重は、斷つて曰ふには、織田殿は、どうして、我に對して、仕舞まで打ち解けられやうぞ。降参して、駿目で御座ると曰つた。秀吉は、泣いて別れて、伊丹を出た。伊丹の人は、秀吉を殺しませうと、村重に請うたけれども、村重が曰ふには、彼れ秀吉は、我が爲めを思つて、身命を輕んじて、此處に來たのである。それを殺すのは不義である。曰つた。秀吉は、更に、黒田孝高を派遣して、村重に説かせた。村重は、孝高を押し込めたけれども、孝高は、屈しなかつた。秀吉は、そこで、三木に歸り、戦をやめて、土屏を築いて城の周圍を取り巻いて、之を苦しめた。長治は、村重と通じ、裏道から、ひそかに出でて、淡河と丹生とに城を築き、三木と互に援け合ふこととした。天正七年の正月に、長治は、城を出て、秀吉を襲うたが、秀吉は、異父弟の秀長とともに、途中に迎へ撃つて、大に之を破り、其勇銳なる兵士八百人を斬つた。二月に、秀吉は、風雨の夜に乘じて、不意撃して、丹生を攻め落し、秀長をして、五百騎の兵を引き連れて、淡河を攻めしめたけれども、負けた。しかし、淡河の守將も亦、兵を引きまゝとめて、三木に入つた。そこで、秀吉は、加藤光泰に命じて、とりでを築いて、其糧運搬の道を絶ち切らせた。九月に、村重は、伊丹を棄てて、逃げて華隈に立て籠つた。伊丹に押し込められて居つた孝高は、そこで、遁れて歸ることが出来た。これより以前に、竹中重治は死んで仕舞つたので、たゞ孝高だけが、秀吉の參謀官となつて居つた。かくて、村重と長治とは、いづれも皆、危急なることを毛利氏に告げたけれども、毛利氏は援兵を送ることが出来ず、たゞ兵糧だけを送つた。やがて、我が兵は、不意撃して、平田のとりでを破つた。長治は、兵を引き連れて、城を出て、毛利氏から送つて來た兵糧を取らうとした。すると、秀吉は、旗をもつて、大村に迎へ撃つた。近侍の土脇坂安治が、敵の武勇なる大將魚住源吾を斬つた。秀吉は、因つて大に之を破り、別所氏の一族の者十人を討ち取り、とりでを移して、城の附近に押し寄せ、八年の春に、とうとう、之を攻め落し、長治をして自殺せしめて、そして、城兵を赦した。こゝに於て、秀吉は、播磨を殘らず平定した。秀吉は、そこで、浮田直家をして、備前、美作の兵を以て、西の方毛利氏を圖らしめ、兒島に城を築いた。すると、小早川隆景が、たびたび之を攻めた。そこで、秀吉は、淺野長政を派遣して、舟いさを引き連れて、赴き援けしめ、撃つて降参を走らした。

時山名氏據但馬。因幡屬毛利氏。於是秀吉自將擊山名祐豐于但馬。攻竹田城。四月。擊山名豐國于因幡。因幡質子在鹿野城。秀吉攻而取之。七月。再入但馬。拔諸城。山名祐豐以出石城降。遂定但馬。再入因幡。至鳥取城。縛所取質子於城外。諭降之。豐國乃出降。而城兵未下。乃引兵還。

九年春。令海賈齋金數千兩。赴因幡。索粟。倍價糶之。因幡人大喜。爭糶。七月。秀吉乃以兵五萬攻鳥取。使秀長攻丸山。二城食乏。我牙兵加藤清正等。日夜攻擊。清正。杉原氏戚屬也。襁褓喪父母。秀吉妻取育之。是役。甫十八。與城兵戰。多獲首級。十月。吉川元春發兵來救。未至而城陷。秀吉進入伯耆。助南條元續軍于鵠山。與元春相持。天已寒。定因幡。使降將宮部繼潤守之而還。

【質子】……音チシ。人質。豊國の子等なり。鹿野城……因幡に在り。蓋し毛利氏の屬城ならん。【出石】……但馬に在り。【鳥取城】……因幡に在り。【海賈】……舟に乗る商人。糶……音テキ。入米なり。米を買ひ入る。【糶】……音テウ。出来なり。米を賣り出すこと。敵をして兵糧の買収に窮せしめんが爲に、價を高くして買ひ入れしなり。【丸山】……因幡に在り。【牙兵】……音ガヘイ。旗もとの兵。【戚屬】……親類。【襁褓】……音キヤウハウ。襁は、縋を織りて之を爲り、以て小兒を背に約するもの。褓は、小兒の被なり。轉じて、幼稚の時を云ふ。【秀吉妻取育之】……清正は尾張の愛智郡中村の人にして、秀吉の母は清正の母と從姉妹たり、故に之を育す。【宮部繼潤】……善祥坊と稱す。

この時に、山名氏は、但馬、因幡に立て籠つて、毛利氏に附き従つて居つた。是に於て、秀吉は、自身に大將となつて、山名祐豐を但馬に撃つて、竹田城を攻め、四月に、山名豊國を因幡に撃つた。因幡即ち豊國を云ふ。より毛利氏に差し出した人質は、鹿野城に居つたが、秀吉は、鹿野城を攻めて、其人質を取り、七月に、再び但馬に討つて入り、諸の城を攻め落した。山名祐豐は、出石城を以て降参した。秀吉は、かくて、遂に但馬を平定し、再び因幡に討つて入り、鳥取城に到着し、さきに鹿野城に於て取つたところの人質を城外に縛りつけて、之を見せつけて、諭して降参せしめると、豊國は、そこで、出で、降参した。けれども、鳥取の城兵は、未だ降参しなかつたので、そこで、秀吉は、兵を引きあげて引き還した。天正九年の春に、秀吉は、舟乗り商人をして、金數千兩を持参して、因幡に行きて、米を求め、價を倍にして買ひ入れしめた。すると、因幡の人は、價高く賣れるといふので、大に喜んで、先を争うて米を賣り出した。七月に、秀吉は、そこで、兵五萬人を引き連れて、鳥取を攻め、秀長をして丸山を攻めしめた。鳥取、丸山の二城は、兵糧が乏しかつた。我が旗もとの兵なる加藤清正などが、日となく、夜となく、城を攻撃した。清正は、杉原氏の親類であつて、二三歳とときに、父母を無くしたので、秀吉の妻が引き取つて之を養育したのであるが、この合戦には、その年はやつと十八歳であつたが、城兵と戦つて、澤山の首級を討ち取つた。十月に、吉川元春が、軍勢を繰り出して、來り救はうとしたが、未だ到着しないうちに、城は攻め落された。秀吉は、進んで、伯耆に討つて入り、南條元續を助けて、鵠山に陣取つて、元春と對陣して、睨み合つて居つた。この時に、氣候がはや寒くなつたので、秀吉は、因幡を平定し、降参したる大將宮部繼潤をして、之を守らしめて置いて、引き還した。

秀吉以五歲定五國。十二月。赴安土。即夜。謁信長。信長呼而前之。撫其面曰。汝面目非復昔日藤吉。明日。我且以客禮饗汝矣。日日。秀吉獻寶刀一。鞍馬百。土物五千。布旅蔽地。信長自城樓視之。欣然謂左右曰。此大膽藤吉所獻者乎。饗而遣之。十年。正月。直家病卒。秀吉爲請立其子秀家。

【五國】……丹波、但馬、因幡、播磨、攝津。【前】……すむ。【土物】……土地の産物。【布旅】……旅は陳なり。しきつらぬる、陳列する。【秀家】……後に中納言たり。

秀吉は、わづかに五年の間に、五箇國を平定し、此年の十二月に、安土に往き、到着した其夜に、信長に謁見した。信長は、呼んで之をすませ、其顔を撫で、曰ふには、汝が様子は、もはや、昔の藤吉では無い。明日、我は、賓客の禮を以て汝を饗應しやうと曰つた。明るる日に、秀吉は、寶刀一振、鞍を置きし馬百匹、土地の産物五千種を獻上し、陳列して土地を蔽ふほどであつた。信長は、城樓より之を視て、欣然と喜ばしげに、左右の者に向つて曰ふには、これは、あの大胆なる藤吉が獻上したものであるかと曰ひ、饗應して、之を遣した。天正十年の正月に、浮田直家は、病氣で死んだ。秀吉は、爲めに請うて、其子秀家を立て、後繼とした。

宮部繼潤使人來告。吉川元春欲攻鳥取。秀吉曰。彼攻之於北。吾將救之於南也。乃引兵入淡路。二十日定之。四月。將六萬人入備中。攻宮地下之。遂攻冠山。加藤清正先登。浮田氏兵繼之。冠山兵盡走。高松城。秀吉隨圍城。城傍平田多池沼。而甲部河在其西。秀吉登山。熟視曰。是可灌也。五月。自移營于蛙鼻岡。築巨防於城南。引河水灌之。使淺野某以舟載大礮。擊碎城樓。於是。吉川元春乃舍因幡。而來救。與小早川隆景。合兵陣。



于廂山輝元在其後。秀吉分二萬人當之。益築防使峻。城兵結櫛而坐。元春隆景數挑戰。秀吉固壘不出。因謀曰。吾連取數國。今又舉毛利氏。則功大而身危。不若請主公於此而爲之先鋒。乃馳使白信長曰。城陷在旦夕。而毛利大舉來援。請出大旆。分軍爲二。一以當城。一以擊援師。不出。一歲而中國可舉。信長大喜。使堀秀政先往。乃命明智光秀。筒井順慶。池田信輝。中川清秀。高山友祥等。率兵二萬五千。援秀吉。而自以百餘人入京師。館于本能寺。將親繼之也。

〔彼攻之於北吾將救之於南也〕……敵が北方に於て鳥取を攻めらば、吾は、わざと南方を討つて、敵の氣を南方に向はせるやうにして、自然に北方の我が城を救ふやうにしやう。〔淡路〕……〔備中〕……共に毛利氏の屬地。〔宮地〕……〔冠山〕……並に備中に在り。〔高松城〕……備中に在り。〔甲部河〕……又、河邊川に作る。〔瀧〕……そ、水をそ、水攻めにする。〔巨防〕……大なる堤防。〔淺野某〕……彌兵衛長政。〔大礮〕……音タイハウ。大砲。〔廂山〕……備中に在り。〔峻〕……高なり、高くすること。〔結標〕……標は音サウ、木の枝の上に架を設けて、鳥の櫓に集うて櫓むが如きを云ふ。〔連取〕……つ、まに攻め取る。〔大旆〕……音タイハイ。總大將の旗。〔援師〕……援軍。〔筒井順慶〕……伊賀入道。〔池田信輝〕……勝三郎。〔高山友祥〕……右近。

官部繼潤は、人をして來つて、吉川元春が鳥取を攻めやうとして居りますと告げしめた。すると、秀吉が曰ふには、彼れ敵が、北方に於て鳥取を攻めらば、吾は、南方に於て之を救ふことに致さうと曰ひ、そこで、軍勢を引き連れて、淡路に討つて入り、二十日間にして之を平定した。四月に、秀吉は、六萬人の軍勢を引き連れて備中に入り、宮地を攻めて之を攻め落し、それから、遂に冠山を攻めた。その時に、加藤清正が先登し、浮田氏の軍勢が之に繼いで押し寄せたので、冠山の軍勢は、残らず、高松城に逃げ込んだ。秀吉は、隨つて、高松城を圍んだ。城の近傍は、平田にして、池や沼が多く、そして甲部川が其西に流れて居つた。秀吉は、山に登つて、つ、其の様子を見て曰ふには、これは、水攻めにすることが出来る。と曰ひ、五月に、自身に、陣營を蛙鼻岡に移し、大なる堤防を城の南に築き立て、河の水を引いて、注ぎ込み、又、淺野某をして舟を以て大砲を載せて城の高殿を撃ち砕かした。こ、に於て、吉川元春は、因幡をすて、來り救ひ、小早川隆景と、兵を合はせ、廂山に陣取り、輝元は其うしろに居つた。秀吉は、二萬人の軍勢を分つて、之に當らせて置き、ます、堤防を高く築き立てた。城兵は、床板がすでに水に浸されたので、家に居ることが出来ず、木の枝の上に架、タナを作つて坐つて居つた。元春、隆景は、たび、戰を

仕かけたけれども、秀吉は、とりでを固く守つて出でなかつた。因つて、秀吉は謀つて曰ふには、吾、つ、けさまに、數國を攻め取り、今又毛利氏を攻め亡ぼしたならば、手柄は大きとして、身は危くなるであらう。殿様(即ち信長)に此處に御出でになることを御願ひ申して、其鋒となるが、一番宜しいと曰ひ、そこで、使者を馳せて、信長に申し上げて曰ふには、この高松城が落城いたしますことは、まことに間近のことです。御座りますか、しかるに、毛利氏が、大軍を引き連れて、來つて援けましたから、何卒、あなたが御旗を進めて、御出馬に成り、軍を二つに分ち、一軍は城に當り、一軍は毛利氏の援軍を撃つことに致すときは、一年もかゝらずして、中國を、残らず取ることが出来ましやうと曰つた。信長は、大に喜んで、堀秀政をして先づ出かけて往かしめ、そこで、明智光秀、筒井順慶、池田信輝、中川清秀、高山友祥等に申し附けて、三萬五千の軍勢を引き連れて、秀吉を援けさせることにし、そして、信長自身は、百餘人を引き連れて、京都に入り、本能寺に泊つて居つた。これは、自身に先發の軍勢に引きつゝ、出て出かけやうとするためであつた。

初光秀以事怨望。至是亦不欲往。信長迫而遣之。使歸丹波治兵而西。當是時。高松城不漸水數尺。東西之軍相去可百步。毛利氏聞東軍大舉且至。遂使使議和。秀吉未之許也。六月。有人稱京師使者。馳入軍門。秀吉覽之。所知宗仁者變報也。曰。光秀反。以丹波兵攻右府于本能寺。弒之。右府者。信長也。秀吉大驚。而未宣言。明日。率數十騎。巡視堤防。是日。城陷。城將自殺。而毛利氏猶張軍不去。明日。遣使者來治前議。秀吉却之曰。當俟明日議之。明日。使者復至。秀吉自度事終泄。不若自我發之。乃具告使者。以變故。使返報曰。事已至此。公等猶與我和乎。若欲擊我。則莫今日若也。公等徐計之。使者返報。

〔怨望〕……望も亦怨む也。〔漸〕……ひたす、浸染なり、水にひたしつかされること。〔宗仁〕……長谷川氏、京都の人、秀吉の爲めに間諜を

なす者【變報】……事變を報告する。【右府】……右大臣信長。【宣言】……發表する。【城將】……清水宗治。【治前議】……前日申し込み和睦の相談を定めんと欲する也。【却】……しりぞく。【變故】……變亂の事故、信長が弑害せられしを云ふ。  
 之を遣はすことにし、その領地丹波に歸つて出陣の用意をして西の方に向つて進ましめるとした。この時に當りて、高松の城は、水にひたされざること、わづかに五六尺にして、まさに落城しやうとして居り、東西の兩軍は、相去ること、わづかに百歩ばかりであった。毛利氏は、東軍が大兵を引き連れて到着せんとして居るといふ事を聞き、遂に使者をして和睦することを相談せしめた。けれども、秀吉は、未だこの和睦の事を許さなかつた。六月に、京都からの使者と稱する人があつて、馳せて秀吉の軍門に入つたので、秀吉は、之を見て、兼ねて知り合ひであつた宗仁と云ふ者が、京都の變亂の報告をするのであつた。其者が曰ふには、光秀が謀叛して、丹波の兵を引き連れて、右大臣殿即ち信長を本能寺に攻めて、弑害いたしましたと言つた。右大臣殿と云ふのは、信長のことである。秀吉は、之を聞いて、大に驚いた。けれども、未だ發表しなかつた。明日、秀吉は、數十騎を引き連れて、堤防を見めぐつた。この日に、城は落城して、城の守將は自殺した。しかるに、毛利氏は、それでも猶ほ陣を張つて立ち去らず、明くる日に、使者を遣はして、前日申し込んだ和睦の相談をいよいよ取り極めたいと申し越した。すると、秀吉は、之を却けて曰ふには、明日、此事を相談することにしやうと曰つた。其明くる日に、毛利氏の使者が、ふたゝび來つた。秀吉は、自分で考へるには、この事は仕舞には泄れるに相違ないから、此方から此事變を發表する方が宜しいと考へ、そこで、詳しく事變の次第を使者に告げて、引き返して報告させることにし、そして曰ふには、すでに此様の事に立ち至つたので、御座るが、貴殿等は、それでも猶ほ、我と和睦せられるか。若し我を撃たうと思はれるならば、今日に越したことは御座らぬだらう。貴殿等、ゆつくりと、考へて御覽なされと曰つた。毛利氏の使者は、引き返して此事を報告した。

輝元大喜。謀於諸將。諸將皆曰。我與信長和。非與秀吉和。今信長死。彼軍情沮廢。危疑萌起。我乘是時。掩擊之。必獲秀吉。是天幸我家也。不可失矣。隆景曰。吾所見異於此。信長之死。非天幸我家。乃幸於秀吉也。何則。應仁以來。七道分離。爭亂相踵。至今日而極矣。天將生一豪傑。以掃蕩天下。吾視秀吉舉動。得非是乎。信長既死。其子弟將佐。孰出秀吉右者。夫和議發於外。而變故起於內。使常人處之。必深秘其事。速成前議。今正

告不隱。任吾從違。其量豈可測哉。吾使人候視其陣。不異平日。今與之戰。我曲彼直。讎我必深。敢死來戰。能保必獲之乎。苟不獲之。使其脫歸。異日雲蒸龍變。我無遺類矣。以吾計之。莫如從前約。彼遭際禍難。多我不違約。必厚遇我。功名富貴。將與我共。是我與彼同慶幸也。輝元然之。乃送質成和。且弔之。於是秀吉欲還討光秀。因乞毛利氏。假弓銃各五百。旗三十。騎士一隊。輝元如其言。

【軍情沮廢】……軍中の士氣がくじけ衰へること。【萌起】……草木の芽を出す如く、きざし起る。【掩擊】……音エンゲキ。おそひうつ。【不可失】……此機會を失ふべからざるを云ふ。【應仁如來】……後土御門帝の應仁年間、細川勝元、山名持豊京師に戦ひし以來。【分離】分れ分れになる。【相踵】……あひつゞ。引き續く。【掃蕩】……音サウタウ。掃は除なり、蕩は平易なり。拂ひ清めてたひらかにする。【子弟】……信雄、信孝、長益等。【將佐】……柴田、丹羽、瀧川等。【正告】……ありのまゝ、に事實を告げて少しも隠さぬこと。【前約に従つて和睦する】……前約に従つて攻撃するとも、此方の勝手にさせる。【候視】……窺ひ見る。【異日】……後日。【雲蒸龍變】……雲蒸し起つて龍變美の辭、有りがたく思ふ。【慶幸】……幸福。  
 【輝元】輝元は、之を聞いて、大に喜んで、諸將に相談した。すると、諸將は、皆曰ふには、我は、信長と和睦しやうとしたので、秀吉と和睦しやうとしたのではない。今や、信長は死んで仕舞つて、彼れ秀吉の軍中の人々の元氣はくじけ衰へて居つて、互に危険に思ひ疑ひ合ふ心が、萌し起つて居るに相違ない。我はこの時に附け込んで、之を不意撃したならば、必ず秀吉を討ち取ることが出来るであらう。この度の敵の出來事は、これ天が我が毛利家に幸したのであるから、此好機會をば失つては成らぬと曰つた。しかるに、隆景が曰ふには、私の見るところは、違つて居る。信長が死んだのは、天が我が毛利家に幸したのでは無くして、取りも直さず、秀吉に幸したのである。何となれば、應仁年間以來、我が日本全國七道は分れくになつて居つて、戰爭動亂が引き續いて居つて、今日に至つて其極點に達して居る。されば、天は、一人の豪傑を生じて、天下を掃ひ清めて平定しやうとして居られるであらう。私は、彼の秀吉の振舞を、つくづく見るに、どうも、天下を掃ひ清める爲めに生れた豪傑では無いかと思ふ。信長がすでに死んで仕舞つて、信長の子弟や部下の大將どもの中で、誰か秀吉より勝れて居るものが有らうか。一體、和睦の相談は、敵たる者の方から言ひ出されて居つて、之を取り極めるのに都合よく、そして事變は内から起つたので、隠せば随分隠すことが出来るであらう。されば、若し普通の人をして之を處置せしめるときは、屹度、其變亂の事をば秘密にして置い

て、速に、前日より和睦の相談を取り極めるであらう。然るに、今や、秀吉は、ありのまゝに、事變の起つたことを告げて、少しも隠さうとせずして、此方に向つて、前日の相談に従ふとも違ふとも、勝手にせよと曰つて居る。其度量の大きいことは、測り知ることが出来ない。又、私は、人をして、秀吉の陣營を窺ひ見させたのに、平生の様子と少しも變らぬと云ふことである。今、若し之と戦ふときは、道理の上から言へば、我は曲で、彼れは直であつて、我を讐とする心が必ず深くして、死を決して來り戦ふことであらうから、どうして、屹度秀吉を討ち取るといふことを保證することが出来やうぞ。若し秀吉を討ち取ることが出来ずして、秀吉をして身を脱して歸らしめたるならば、後日、秀吉が、雲が蒸し起つて龍が變化して天に上るが如き勢で、盛大になつたときには、我は、遣るものなく、すつかり殺し盡されて仕舞ふかも知れぬ。それ故に、私の考によれば、前日の約束に従つて和睦するのが、一番宜しいと思ふ。さうするときは、彼れ秀吉は、今日、災禍困難に出合つた折柄なれば、我が前日の約束に違はなかつたことを有難がりて、屹度、手厚く、我を待遇して、功名富貴を我とともにするであらう。さうしたならば、これ、我は、彼れと同じく幸福を受けるのであると曰つた。輝元は、隆景の言を尤至極と思つて、そこで、人質を送つて和睦をなし、其上に、哀悼の意を表した。こゝに於て、秀吉は、引き返して光秀を征伐しやうと思つて、因つて、毛利氏に請うて、弓五百張、鐵砲五百挺、旗三十本、騎士一隊を借りやうとしたが、輝元は、其申込の如く、是等の者を貸し與へた。

秀吉會諸將士垂泣。謂之曰。吾受右府之恩。無物可比。汝輩所知也。今日致死復仇。非吾而誰。天下之事。在此一舉。汝輩其爲我勉之。乃引兵上途。兼程疾行。至於尼崎。當是時。光秀既弒信長及信忠。遂進陷安土。收其寶貨而西。屯于京師。施行政令。復引兵適安土。織田氏公族將帥皆觀望相伏。莫敢先發。秀吉既至尼崎。發哀斷髮毀形。使人周告諸將曰。明智光秀蔑棄浩恩。敢行大逆。天地所不容。人神所共憤也。秀吉義不與光秀共戴天。悉發領國之兵。自將至此。願與諸公俱一戰。必梟豎子。以弔先君之靈。於是諸將帥盡會尼崎。

【垂泣】……なみだを垂る。【天下之事在此一舉】……天下分け目のいくさは、此一つの戦である。【兼程】……程は路程なり。二日に往くべき里程を一日に行くこと。【尼崎】……攝津に在り。【觀望相伏】……相伏は一に相伏に作る。様子成行を見合はせて互にすがり合つて居る。【發哀】……喪を發す。死去のことを發表する。【斷髮毀形】……髪を剃り形をかへて坊主姿となる。老人雜話に云ふ、尼崎の寺に入り法體となる。素衣白馬の心なり。素衣白馬は、漢の高祖が項羽を討ちし故事なり。【周】……あまねく。【梟豎】……音ベツキ。ないがしろにしつる。【浩恩】……浩は大なり。大恩。【不與光秀共戴天】……不俱戴天の語は、禮記に出づ。逆臣光秀と一處にこの世に生きては居らぬ。【秀吉は、こゝに於て、諸將士を寄せ集めて、涙を流して、之に向つて曰ふには、吾が右大臣殿（即ち信長）の御恩を受けて居ることは、如何なる物にも比べるとは出来ぬほどである。それは、汝等の知つて居るところの事である。されば、今日、死ぬる覺悟で、右大臣殿の仇をかへすことは、是非とも吾の爲さねばならぬことである。天下の分け目は、このいゝきに在るのである。汝等、我が爲めに、しつかりやつてくれよと曰ひ、そこで、軍勢を引き連れて、出發し、二日に行くべき路程を一日に行くほどにして、大急ぎに急いで、尼崎に到着した。この時に當りて、光秀は、すでに信長及び信忠を弒して、それから、遂に進んで安土を攻め落し、城中に貯へられたる寶物財貨を收め取つて、西に向ひ、京都に屯營し、政治法令を施行し、ふた、び、兵を引き連れて、安土に行つた。しかるに、織田氏の一族大將たちは、いづれも皆、形勢成り形を變へ、坊主の姿となり、使者を遣して、あまねく諸大將に告げしめて曰ふには、明智光秀は、浩大なる恩義をないがしろにし棄て、敢て大逆罪を行つたが、これは、天地のともに容れざるところ、人々神々共に憤怒するところである。われ秀吉は、義として、光秀とともに、此世に生きて居ることは出来ぬのである。そこで、我が領國の軍勢を残りず繰り出し、自身に之を引き連れて此處に到着したのである。願はくは、諸君とともに一たび戦争して、是非とも、彼の小野郎を獄門にかけさせし、以て先殿様の靈魂を弔ひ奉りたいと思ふのであると曰つた。こゝに於て、諸の大將たちは、殘らず、尼崎に會合した。

初光秀之發難也。與其衆謀曰。方今柴田勝家當上杉氏。瀧川一益當北條氏。羽柴秀吉當毛利氏。而丹羽長秀佐信孝。將赴四國。我出空虛之地。得以成大事。天下不足圖也。至是。聞秀吉在攝津。大驚。使其從子光春守安土。而自至洞嶺。十二日。遂入淀城。秀吉遣使告光秀曰。明日會戰于山崎。光秀諾之。乃聚將士。其將齋藤利三。在洞嶺。諫曰。秀吉大衆新來。其鋒甚銳。戰必無利。不如且避之。退入坂下。以爲後圖。光秀怒曰。天下

視右府如鬼神。而吾一擊獲之。天下誰能敵我。汝速來戰。何畏藤吉也。利三不得已來會。遂以見兵一萬六千。分爲六隊。夜半冒雨渡桂川。至山崎。筒井順慶舉大和兵萬人。軍洞嶺。爲其後援。

【出空虛之地】……諸將の征行したる不在のところへ出かける。【成大事】……信長を弑することを云ふ。【安土】……近江に在り。【洞嶺】……河内に在り。【淀城】……山城に在り。【山崎】……山城に在り。【見兵】……音ゲンヘイ。現在有り合はせたる兵士。【桂川】……京都の西に在り。

【開】はじめ、光秀が騒動を起さうとするときに、その部下の人々と相談して曰ふには、只今、柴田勝家は、上杉氏に當り、澁川一益は、北條氏に當り、羽柴秀吉は、毛利氏に當りて居り、そして、丹羽長秀は、信孝を輔佐して、將に四國に出かけて行かうとして居る。されば、我、敵の大將どもが不在なる處へ出掛けて、大事を成就することが出来らば、天下を取るのには、まことに造作も無いことであらうと曰つた。こゝに至つて、光秀は、秀吉が攝津に居ると云ふことを聞いたので、大に驚き、その勇なる光春をして、安土城を守らせて置き、そして、自分、洞嶺に至り、それから、十二日に、遂に京都に入つた。秀吉は、使者を派遣して、光秀に告げしめて曰ふには、明日、山崎に於て出合つて戦しやうと曰つた。光秀は、之を承諾し、そこで、諸將士を寄せ集めた。その部下の將齋藤利三は、洞嶺に居つたが、此人が諫めて曰ふには、秀吉の大軍は、新に來つた者で、其鋒先は甚だ鋭く、之と戦へば必ず勝利を得るとは出来ぬ。御座りましやう。されば、しばらく之を避けて退却して坂本に入り後日の企をなすが、一番宜しう御座りますと曰つた。すると、光秀は怒つて曰ふには、天下の凡ての人は、右大臣殿（即ち信長）を鬼神の如くに思つて居つたが、しかるに、吾は、一たび撃つて之を討ち取つて仕舞つたほどで、誰か我に敵對することの出来るものがあらうぞ。汝、速に來つて戦ふことにせよ。藤吉を畏れるには及ばぬと曰つた。利三は、そこで、己むを得ずして、來り會合した。かくて、光秀は、遂に、現在有り合はせたる兵一萬六千人をば、分つて六隊となし、夜半に、雨の降る中を冒して、桂川を渡り、山崎に到着した。筒井順慶は、大和の軍勢一萬人を擧げて、洞嶺に陣取り、その後援をなした。

黎明。秀吉統諸將而至。高山友祥爲先鋒。中川清秀。池田信輝。丹羽長秀。織田信孝。以次相屬。兵各數千。秀吉自將騎卒二萬。居其後。已而兩軍皆陣。秀吉北瞻天王山。指謂左右曰。今日之戰。使敵先獲此。非吾利也。言未畢。賊旗幟登焉。乃命堀尾吉晴往奪之。吉晴應聲而起。單騎馳赴之。則賊

兵先上者已千餘人矣。吉晴顧其兵。能屬者十五六騎。弓銃手二十人。進躡其後。賊弓銃在前。不可用。吉晴全兵與堀秀政皆至。大呼奮擊。賊兵遂棄山走。吉晴等代陣焉。友祥爲先鋒。關山崎南門。不聽他隊先進。聞天王山軍聲起。乃開門而進。與賊左陣大戰。殺傷相當。清秀踰坂而進。賊左陣不能進。信輝亦濟川。衝其右陣。合擊大破之。斬其二將。洞嶺軍觀望勝敗。不戰而走。秀吉追北。直逼光秀。光秀怒。欲親戰。比田某叩其馬曰。敵鋒不可犯。請且入勝龍城。光秀惶惑曰。勝龍安在。比田騎而前導。我兵充塞前後。比田等戰且走。纔得達城。上閣而望。則我兵已圍城數重。城兵稍稍散。所餘僅百人。即夜。光秀與十餘騎潰圍北出。馳向坂下。至于小栗棲。土兵四起。自林中。以槍刺其肋。墜馬死。秀吉既破光秀軍。收信長屍于灰燼中。殞之。進陣于園城寺。聞光秀子光慶在龜山。遣兵攻之。斬光慶。又聞從子光春在安土。令堀秀政將萬人伐之。會光春于大津。擊破之。光春騎渡湖水。入坂下。手刃光秀妻孥。火城自殺。齋藤利三亦被捕伏。誅而光秀首至。秀吉乃奏捷朝廷。徇光秀首京師。梟于本能寺。去信長薨日。

十有三日矣。遂留幕于山崎寶寺。誅支黨。納降附。

【黎明】……音レイメイ。しの、めの頃【以次相屬】……順序を以て之につづく。次は城邑の前後を以てすと云ふ。城邑の敵地に近き者を先とし、遠き者を後となす也。【瞻】……みる、望む也、見上げる。【獲此】……此は天王山を指す。【關山崎南門】……關は閉づる也。南門は、南の入口。味方の兵士といへども、拔懸の功名はさせぬと也。【比田某】……帶刀殿。【勝龍城】……山城に在り。國史略には、青龍城に作る。【充塞】……音ジャウソク。みぢふさがる。【閣】……やぐら。【坂下】……近江に在り。【小栗樓】……山城に在り。【墜馬死】……太閤記に云ふ、光秀、最後に鎧の引き合はせよした、う紙に辭世の句を書きたるを取り出して、其臣溝尾庄兵衛に托す。【順逆無二門】。大道徹。心源。五十五年夢。覺來歸一元。【一】。【殞】……音ヒン。殞殞なり、かりもがり、假埋葬する。【關城寺】……近江に在り。【龜山】……丹波に在り。【大津】……近江に在り。【寶寺】……山城に在り。【支黨】……枝葉の殘黨。

し、めの頃、秀吉は、諸大將を統轄して、山崎に到着した。高山友祥が、先鋒であつて、中川清秀、池田信輝、丹羽長秀、織田信孝が、順序を以て、引きつゞき、軍勢は、各々、數千人あつて、そして、秀吉は、自身に、騎兵歩卒二萬人を引連れて、その後居つた。とかくする中に、兩軍は、いづれも皆、陣取つた。そこで、秀吉は、北に向つて天王山を見上げて、指して左右の者共に向つて曰ふには、今日の戦に於て、敵をして先だつて此山を手に入れしめたならば、味方の利益では無いのであると曰つた。その言葉が未だ終らないうちに、賊の旗さし物が、山に登つた。そこで、秀吉は、堀尾吉晴に、往つてそれを奪ひ取れと命じた。すると、吉晴は、その命令を聞くと、早速、起ち上つて、たゞ一騎で、馳せて赴いた。その時には、賊の軍勢の先だつて上つて居つた者、已に千餘人もあつた。吉晴は、ふりかへつて、部下の兵を見るに、自分につゞくことの出来た者は、わづかに騎士十五六人、弓方と鐵砲方とが二十人ばかり、進んで賊の後から攻めかけやうとした。けれども、賊の弓方鐵砲方が前に居つたので、之を用ふる事が出来なかつた。さうするうちに、吉晴の全軍と堀秀政と皆到着し、大聲に呼ばり奮撃したので、賊兵は、とうとう山を棄て、逃げ走つた。そこで、吉晴等が、敵兵に代つて此山に陣取つた。高山友祥は、先鋒であつて、山崎の南の入口を閉ぢて仕舞つて、他の隊が自分より先だつて進むことを許さなかつたが、天王山に於て戦争の聲が起つたのを聞いて、そこで、門を開いて進み、賊の左の陣と大に戦つて、戦死者負傷者の數は、敵も味方も大抵同じ位であつたが、清秀が坂を踏んで進んだので、賊の左の陣は進んで來ることが出来なかつた。そのうちに、信輝も亦、川をわたつて、賊の右の陣を衝いたので、合はせ撃つて、大に之を破つて、賊の大將三人を斬つた。洞峠に居つた筒井順慶の軍勢は、勝負の様子を見合はせて居つたが、そこで、戦争せずして逃げ走つた。かくて、秀吉は、敵兵の逃ぐるを追つかけて直に光秀に逼つた。光秀は、怒つて、自身に出で、戦はうとしたが、比田某が、光秀の馬を引留めて、諫めて曰ふには、敵の鋒先はなかく鋭くして、とて犯すことは出来ませぬから、どうぞ、しばらく勝龍城に入られよと曰つた。光秀は、おそれあはて、曰ふには、勝龍城は何處に在るかといつた。そこで、比田は、道案内をした。けれども、我が軍勢が、前後に充ちふさがつて居つて、なかく通行することが出来なかつたので、比田等は、戦ひながら逃げ走り、やつと、勝龍城に達することを得た。そこで、やぐらに上つて四方を見渡すと、我が軍勢が已に幾重にも城を圍んで居り、又、城兵は、つゞくとだんぐに、散りくになつて逃亡し、殘つて居るのは、わづかに百人ばかりであつた。任方がないので、其夜に、光秀は、騎士十餘人とともに、圍をつきくづして、北に向つて出で、馳せて坂下に向はうとして、小栗樓に到着すると、土地の農兵が、四方から起つて、林の中から、槍を以て光秀の脇腹を刺したので、光秀は、馬から落ちて、死んで仕舞つた。かくて、秀吉は、既に光秀の軍勢を撃ち破りて、信長の屍骸を灰になつた燃えさしの中から取り上げて、之を假埋葬し、進んで圍城寺に陣取つた。そこで、秀吉は、光秀の子の光慶が龜山に居ると云ふ事を聞いて、兵士を派遣して之を攻め、光慶を斬つた。秀吉

は、又、光秀の甥の光春が安土に居るといふ事を聞いたので、堀秀政をして一萬人の兵を引連れて、之を征伐せしめたが、秀政は、光春に大津に於て出合つて、之を撃ち破つた。光春は、馬に乗つて、琵琶湖を渡り、坂下の城に入り、手づから光秀の妻子を殺し、城を焼き拂つて自殺した。齋藤利三も亦捕へられて誅戮せられた。そして、光秀の首が到着したので、秀吉は、そこで、勝利の旨を朝廷に奏上し、光秀の首を京都に引きまはし、本能寺に於て獄門にかけてさらした。これは、信長の遺去した日を去ること、わづかに十三日であつた。そこで、秀吉は、留まつて山崎の寶寺に陣取り、枝葉の賊黨を誅戮し、降参し附き従つた者を納れり。

當是時。秀吉威震畿内。四方兵士。來聚山崎者。凡六七萬人。天子嘉其功。詔叙從四位下。任右近衛中將。秀吉辭不敢拜。秀吉以信長繼嗣未定。與諸將領會于清洲。議事。八月。瀧川一益。柴田勝家。皆引兵會焉。議。信雄冒北畠氏。信孝冒神戸氏。皆信長庶子。不宜立。乃以信忠遺命。立其長子秀信爲嗣。居安土焉。而信雄攝之。柴田。丹羽。池田氏。與羽柴氏。更置吏于京師。信雄以下。各分遺地領之。秀吉自略定播磨。但馬。因幡。丹波諸州。至是。皆爲其有。則不復受分地。諸將乃使浮田秀家。及丹後國主細川藤孝附庸之。長濱爲秀吉舊領。勝家以其南出便地奪之。勝家威望最於諸將。號曰鬼柴田。是日。踞而飲酒。以謾言挑秀吉。長秀附秀吉耳。語曰。子欲定國家。卽斬勝家。秀吉晒而不答。諸將視耳目非是。促罷其宴。信雄歸近江。信孝歸美濃。勝家歸越前。一益歸伊勢。長秀歸若狹。秀吉與池田

信輝歸攝津。勝家聞秀吉在長濱。不敢北。秀吉乃遣義子秀勝爲質。勝家拉而北行。尋而還之。初秀吉自長濱徙姫路。未移其家。本能寺之變。阿閉長之。京極高次。欲取長濱。應光秀。家皆亡匿。於伊吹山。長之取其貲財。從光秀戰山崎。敗走而死。於是秀吉族長之。降高次。而歸山崎。

【清洲】…尾張に在り「秀信」…三法師と稱す。後ち岐阜中納言「附庸」…音フヨウ。大諸侯に付屬するを云ふ。猶ほ屬城などと云ふが如し。【踞】…うづくまる。踞居なり。以謔言挑…失禮なる事を言つて喧嘩をしかける。【晒】…わらふ。微笑なり。【耳目非是】…耳語目注の間に穩ならず者ある也。心中に怒りて顔色舉動の宜しからざるを云ふ。【義子秀勝】…義子は養子。秀勝は信長の子なり。【拉】…音ラツ。人を邀へて同行すること。引き連れる。【其家】…妻子を云ふ。【伊吹山】…近江、美濃の界に在り。【族】…族誅、一族殘らず誅戮する。

關原の時に當りて、秀吉の勢威は畿内に震ひ、四方の兵士の、山崎に來り集まる者、凡そ六七萬人あつた。天子様は、秀吉の功勞を嘉賞して、詔ありて從四位下に叙し、右近衛中將に任じやうとせられたけれども、秀吉は、辭退して、敢て拜命しなかつた。秀吉は、信長の後繼が未だ定まらないので、諸大將と清洲に集會して、其事を相談しやうとし、八月に、瀧川一益、柴田勝家は、いづれも皆、軍勢を引き連れて、來り會したので、そこで評議するには、信雄は北島氏を名乗り、信孝は神戸氏を名乗り、この二人は、いづれも皆、信長の妾腹の子であるから、後繼となるべきではないといふので、そこで、信忠の遺言の命令に従つて、信忠の長子秀信を立て、後繼となし、安土に居らしめ、そして、信雄が之を後見し、柴田、丹羽、池田の三氏は、羽柴氏とともに、かはり番に、役人を京都に置いて、京都の諸事を處置するに、信雄以下は、各々、遣つて居る土地を分けて、之を領地とすることにした。秀吉は、自身に、播磨、但馬、因幡、丹波の諸國を切り取り平定したが、こゝに至つて、皆、秀吉の所有となつたので、格別、土地の分配を受けなかつた。諸大將は、そこで、浮田秀家、及び丹後の國主細川藤孝をして秀吉に附屬せしめることにした。長濱は、秀吉の領地であつたが、勝家は、長濱が南方に向つて出づべき便利の土地であるので、之を奪ひ取つた。勝家の威勢人望は、諸大將の中の第一番であつて、鬼柴田と諱名されて居つたが、この日に、あぐらをかいて酒を飲み、失禮なる言葉を以つて秀吉に喧嘩をしかけた。長秀は、秀吉の耳に口を當て、さ、やいて曰ふには、貴公、若し國家を平定しやうと思ふならば、即座に勝家を斬つて仕舞ふが善いと曰つた。けれども、秀吉は、微笑して居つて、何とも答へなかつた。諸大將は、その座の模様を甚だ穩でないのを見て取つたので、催促して宴會を罷めた。やがて、信雄は、近江に歸り、信孝は美濃に歸り、勝家は越前に歸り、一益は伊勢に歸り、長秀は若狹に歸り、秀吉と池田信輝とは、攝津に歸るとにしたが、勝家は、秀吉が長濱に居るといふ事を聞いたので、敢て北に向つて歸らなかつた。秀吉は、そこで、養子の秀勝を遣して、人質となした。勝家は、秀勝を引き連れて、北に向つて行つたが、間もなく、之をかへした。はじめ、秀吉は、長濱より姫路に徙つたけれども、未だその家族を移さなかつたが、本能寺の事變に、阿閉長之と京極高次とが、長濱を取つて、光秀に味方しやうとしたので、秀吉の家族は皆逃げて伊吹山にかくれ、長之は、その財産を奪ひ取つて、光秀に従ひ、山崎に戦ひ、敗戦して逃げ走つて死んだ。こゝに於て、秀吉は、長之の一族を誅殺し、高次を降参させ、そして、自身は山崎に歸つた。

十月。詔叙從五位下。任左近衛少將。秀吉拜命。因請追贈信長爵位。告公族諸將。葬于大德寺。無來會者。秀吉自爲喪主。使弟秀長率卒萬人監護之。既而三氏皆罷其吏。一決於秀吉。秀吉又與信雄協心。以佐秀信。勝家嫉忌之。信孝亦與信雄爭權相惡。於是信孝遂與勝家。一益及佐佐成政。氏家行廣。稻葉通朝等。俱圖秀吉。及信雄。約期竝起。信雄謀之。秀吉。秀吉曰。越前多雪。彼今未能出兵。請及此時伐美濃。乃與池田。丹羽。筒井。細川諸將。合五萬人。攻岐阜。行廣。通朝皆降。信孝佯請和。丹羽長秀贊之和。成。秀吉乃取其質子。歸山崎。勝家欲出援之。阻雪不能出。視冰雪。輒憤怒。乃遣人說長秀。連兵西向。長秀不肯。一益以書教勝家曰。不若佯和。及來歲雪解。出其不意。夾攻之。勝家然之。使前田利家等五輩來山崎。請釋憾。協心。共輔幼主。秀吉許之。使者返報。勝家兵備稍懈。秀吉既遣使者。謂左右曰。彼欲怠我而來襲焉。爾。吾且破其膽。十一月。引兵至長濱。勝家義子勝豐守焉。勝豐素與勝家有隙。秀吉招降之。復取長濱。益築城。

堡。備其糧仗。以拒越前衝路。十二月。還。獻遺秀信及諸將。遇勝家所親在京畿者。故仇視之。

【追贈信長爵位】……從一位太政大臣を贈らる。【大徳寺】……京都の北に在り。【三氏】……柴田、丹羽、池田氏。【一】……つばら。【伐美濃】……岐阜なる信孝を伐つなり。【阻雪】……雪にへたてりる。雪の爲めに妨げらる。【解憾】……從來の遺恨を忘れる。【使者返報】……返は一に還に作る。【勝豊】……伊賀守。獻遺秀信及諸將……獻遺は互文。秀信に獻じ諸將に還る也。【故】……ことさらに、わざと。【議】十月に、詔ありて、秀吉を從五位下に叙し、左近衛少將に任ぜられんと、秀吉は命を拜し、因つて、朝廷に請うて、信長に爵位を追贈せらるるやうにし、信長の一族及び諸將に告げて、信長の葬儀を大徳寺に於て行つたが、來り會する者は無かつた。そこで、秀吉は、自身に、喪主となり、弟秀長をして、歩卒一萬人を引き連れて、之を見張つて護衛せしめた。すでにして、柴田、丹羽、池田の三氏は、いづれも皆、役人を京都に置くことを罷めて仕舞つて、京都の諸事は、すべて、秀吉によつて決定することになつた。秀吉は、又、信雄と、心をあはせて、秀信を輔佐したが、勝家は、之を嫉んで忌み嫌つた。信孝も亦、信雄と、權勢を争うて、互に仲が悪かつた。こゝに於て、信孝は、とうく、勝家、一益及び佐佐成政、氏家行廣、稻葉通朝等とともに、秀吉及び信雄を滅ぼさうと巧み、期日を約束して、相並んで旗擧げすることにした。信雄は、此事を秀吉に相談した。すると、秀吉が曰ふには、越前には、雪が澤山に積もつて居るので、彼れ勝家は、軍勢を繰り出すことが出来ませぬから、どうぞ、此時に及んで美濃を征伐いたしましやうと曰ひ、そこで、池田、丹羽、筒井、細川の諸大將とともに、軍勢五萬人を合はせて、信孝を岐阜に攻めた。すると、行廣、通朝は、皆、降参した。信孝は、いつはつて、和睦を請ふと、丹羽長秀が之を賛成したので、和睦が出来、秀吉は、そこで、信孝の人質を取つて、山崎に歸つた。勝家は、出かけて行つて信孝を援けやうと思つたが、雪の爲めに妨げられて、出でるとが出来ず、水や雪を見さへすれば、いつでも憤り怒るほどであつたけれども、如何することも出来なかつた。勝家は、そこで、人を遣して、長秀に説き勧め、兵を連合して西に向はうとしたけれども、長秀は、承知しなかつた。一益は、手紙を以て勝家に教へて曰ふには、伴つて和睦して、來年の春に雪が解ける頃に、秀吉の不意を以て、之を夾み攻めるが、一番宜しいと曰つた。勝家は、之を尤至極と思つて、前田利家等五人をして、山崎に來らしめて、これまでの遺恨を忘れて仕舞つて、心を合はせて、相共に幼少なる主君(即ち秀信)を輔佐することにしやうと請はしめた。秀吉は、之を許した。使者は、引き返して、此事を報告したので、勝家の兵備は、や、怠つた。秀吉は、すでに、勝家よりの使者を遣したのち、左右の者に向つて曰ふには、彼れ勝家は、我を慮らせて置いて、來つて不意撃ちしやうと思ふのである。吾は、其膽玉を取りひしんでくれやうと曰つた。十一月に、秀吉は、軍勢を引き連れて長濱に至つた。長濱をば、勝家の養子の勝豊が、守つて居つた。この勝豊は、平素から、勝家と仲が悪かつたので、秀吉は、勝豊を招きて降服させ、長濱を取り戻し、ますく、城やとりでを築き、その兵糧や武器を備へ、以て越前から打つて出づる路を拒ぐことにし、十一月に、還つて、秀信及び諸將に品物を贈つたが、勝家が親しくして居つて京都に居る者に遇ふと、わざと、之を仇敵の如く取り扱つた。

十一年。正月朔。歸姫路。撫循士民。頒賞賜。酺七日。入朝京師。遂至安土。

議及雪未解取一益及雪已解圖勝家乃徵内外將士會于草津部兵七萬爲三隊三道入伊勢一益在長島分拒諸城秀吉留兵備之而進至桑名縱火城下退而爲營誠其衆曰瀧川亦老於兵者今夜必來一益謂其下曰我已分兵在者甚寡以寡擊衆不如夜襲即夜潛兵赴秀吉陣視其有備乃去閏月秀吉攻下龜山納之信雄令蒲生氏郷關萬鐵攻嶺城嶺城未下勝家聞之發兵南出二月令佐久間盛政將步騎二萬出陣柳瀨前田利長爲先鋒縱火關原而退陣于木本秀吉乃留氏郷以下七將以當一益而自引諸軍赴柳瀨自與老兵十餘騎上山望北軍曰是不可以速戰勝也乃勒兵爲十三隊據湖山形勢築連珠砦而自屯長濱

【賜酺】……酺は音ホ、酒を飲んで楽しむなり。酒食を賜ふこと。【及雪未解取一益及雪已解圖勝家】……雪のとけぬ内に一益を討ち取らんとするは、北國は雪深くして應援に便ならざるが故なり。雪とけてから勝家を撃たんとするは、通路の便なるが爲めなり。互に相援けざらしめて撃ち取らんとする也。【草津】……近江に在り。【長島】……伊勢に在り。【桑名】……伊勢に在り。【龜山】……伊勢に在り。【關萬鐵】……鐵は一に徹に作る。【嶺城】……伊勢に在り。【柳瀨】……近江に在り。【關原】……美濃に在り。【木本】……近江に在り。【湖】……余吾湖。【連珠砦】……音レンジュサイ。數多く砦を排列して、珠を連ねたる如くしたるなり。【釋】天正十一年の正月元日に、秀吉は姫路に歸り、士民を撫で安んじ、褒美を分ち與へ、酒食を賜はつた。七日に、秀吉は、京都に入朝し、それから、遂に安土に至り、北國の雪が未だ解けないうちに、一益を討ち取り、雪が解けて仕舞つてから、勝家を攻め亡ぼさうと評議し、そこで、内外の將士を召し集め、草津に會合し、兵七萬人を分けて、三隊となし、三道から伊勢に討ち入つた。一益は、長島に居つたが、手分けして諸

城を拒ぐことにした。秀吉は、兵を留めて之に備へて置き、そして、進んで桑名に至り、火を城下に放つて、退軍して陣營をなし、部下の人々に注意して曰ふには、瀧川一益亦、兵を用ふることに老練なる人であるから、今夜、必ず攻め寄せらるであらうと曰つた。一益は、其部下の者共に向つて曰ふには、我は已に兵を手分けして、諸城を守ることとしたので、此處に残つて居る軍勢は、はなはだ少数である。少数の兵を以て、多数の兵を撃つには、夜に乗じて不意撃するが、一番宜しいのであると曰ひ、其夜に、兵をひそめて、秀吉の陣營に出掛けて行つたが、秀吉の陣營には十分の備があつたので、そこで、立ち去つた。閏月に、秀吉は龜山を攻め落し、これを信雄に與へ、蒲生氏郷と關萬鐵とをして、嶺城を攻めしめたが、嶺城は未だ落城しなかつた。勝家は、此事を聞いて、兵を繰り出して、南に向つて打つて出で、二月に、佐久間盛政をして、歩卒騎兵合せて二萬人を引き連れて、出で、柳瀬に陣取らしめ、前田利長が先鋒であつて、關原に火を放つて、退いて、木本に陣取つた。秀吉は、そこで、兵郷以下の七人の大將を留めて、以て一益に當らせて置き、そして、自身は、諸軍を引き連れて、柳瀬に赴き、自身に、老練なる兵士十餘騎とともに、山に上りて、北軍の様子を望み見て曰ふには、これは、急に戦つたとしても、勝つことが出来ないのであると曰ひ、そこで、兵を整へて、十三隊に分ち、湖水と山との形勢の便利なる處に據つて、連珠砦を築き、そして、自身は、長濱に屯營した。

三月。勝家悉引兵至柳瀬。我兵堅壁不出。丹羽長秀來而助之。四月。信孝復舉兵。應於勝家。一益其十七日。秀吉以其軍南攻信孝。至大垣。盛政欲進擊諸壘。勝家不許。是時。柴田勝豐養疾在京師。其部下山路將監者。叛降北軍。在盛政營。衆中謂盛政曰。聞神戸君舉兵應我。而秀吉往擊之。子豈得不赴援哉。盛政曰。固也。道路阻絕。敵充塞其間。我將如之何。將監進附其耳。語曰。敵諸壘皆固。獨中川清秀之壘。在賤岳之麓。去我尤遠。而其備不固。吾潛兵趨之。出其不意。必獲志矣。秀吉在大垣。不能速來。子急擊勿失。盛政大悅。十九日。往告勝家。勝家曰。可也。吾與利家。留當諸壘。汝則往擊。擊而勝。速還。慎勿留也。盛政乃與從弟勝政將萬人。乘夜至余

吾湖東。循湖而馳。比曉至岳麓。中川氏卒。方飲馬于湖。盛政先鋒執斬之。其一人逃返告急。清秀與高山友祥。以數千人出戰。盛政謂其部將曰。長篠之戰。火為巢而捷。是可倣也。遣人燒其壘下營。我軍顧而敗。友祥走依秀長。秀長等惶急。不敢援。清秀苦戰。終死。盛政既勝。因留不還。勝家召還之。盛政答以日傾兵疲。當俟明還。勝家曰。直路不過一里。何不亟還。盛政笑曰。老怯過慮。何足為意。使者五反。而日已暮矣。

【大垣】……美濃に在り。【勝豐養疾在京師】……病氣療養に託して京都に滞在す。勝豐は勝家と不和なれば也。【神戸君】……信孝を指す。【固也】……もとよりなり。當然なり。言ふまでも無いことである。【賤岳】……近江に在り。【余吾湖】……近江に在り。【飲馬】……馬に水かふ。馬に水を飲ます也。【捷】……勝つ。【倣】……ならふ。真似する。【惶急】……あはておそれる。【過慮】……心配し過ぎる。三月に、勝家は、軍勢を残りず引き連れて、柳瀬に到着した。我が羽柴氏の兵は、城壁を固く守つて出でず、丹羽長秀が、來つて之を助け、四月に、信孝は、ふた、び、兵を擧げて、勝家と一益とに味方した。其十七日に、秀吉は、その軍勢を引き連れて、南に向つて、信孝を攻めて、大垣に至つた。盛政は、秀吉の不在に乗じて、進んで諸の壘を撃たうと思つたけれども、勝家は許さなかつた。この時に、柴田勝豊は、病氣の養生をして、京都に居つたが、その部下なる山路將監と云ふ者は、勝豊にそむいて、北軍(勝家の軍)に降参して、盛政の陣屋に在つた。將監は、大勢の人の中で、盛政に向つて曰ふには、聞くところにより、神戶殿は兵を擧げて我に味方され、そして、秀吉は出かけて行つて、神戸君を撃つと云ふと、御座りますが、貴殿は、出かけて行つて神戶殿を援けなわけには行きませぬと曰つた。盛政が曰ふには、それは勿論の事で御座る。けれども、何分にも、道路が除根懸け離れて居つて、その上に、敵軍が、其間に充ち塞がつて居るので、我は、之をどうすることも出来ない。と曰つた。すると、將監は、進み出で、盛政の耳に口を附けて、さ、やいて曰ふには、敵の諸所の壘で、は、いづれも皆、堅固で御座るが、だ、中川清秀の壘とだけ、賤岳の麓に在つて、我を去ること、甚だ遠う御座りますけれども、これは、其守備が堅固では御座りませぬ。されば、吾、兵をひそめて之に走り趨き、その不意に出でましたらば、屹度、勝利を得ませぬと曰つた。其上に、秀吉は、大垣に居りますから、早速來ることは出来ませぬ。貴殿、急に之を撃つて、此好機會を失つてはなれませぬと曰つた。盛政は、之を聞いて大に悦んだ。そこで、十九日に、盛政は、出かけて行つて、此事を勝家に告げた。すると、勝家が曰ふには、それは宜しい。吾は、利家とともに留まつて、他の諸所の壘に當ることにはやう。汝は、出かけて行つて、之を撃つことにせよ。そして、之を撃つて勝利を得たらば、速に引き返せよ。慎んで、其處に留まつて居つてはならぬぞと曰つた。盛政は、そこで、從弟(イトコ)の勝政とともに一萬人の軍勢を



引き連れて、夜に乗じて、余吾湖の東に至り、湖水の岸に沿うて、馳せ進んで、夜明け頃に、賤岳の麓に到着した。中川氏の歩卒は、折しも、湖水に於て、馬に水を飲ませて居つたが、盛政の先鋒が、捕へて之を斬つた。其歩卒の一人が逃げ返つて、この事變を告げたので、清秀は、高山友祥とともに、數千人を引き連れて、出で、戦つた。盛政は、其部下の大將に向つて曰ふには、先年、長篠の戦には、萬葉に火を放つたので、勝利を得た。その眞似をすべきであるといひ、人を遣はして、其とりでの下の陣營を焼いたので、我が軍は、ふりかへつて見て、敗戦したので、友祥は、秀長の處に逃げ込んだが、秀長等は、あはておそれ、敢て援けやうとしなかつたので、清秀は、苦戦して、とうとう討死した。盛政は、すでに勝つたので、因つて、其處に留まつて引き返さなかつた。勝家は、之を召し返した。すると、盛政は、日が暮れか、つて兵士は疲れましたので、明朝歸りましやうと答へた。勝家が曰ふには、眞直な道で、一里に足りないほどであるのに、どうして、速に還らぬのかと曰つた。すると、盛政は笑つて曰ふには、御年を取つて臆病になられて御心配が過ぎるのであるが、決して心配する程の事は無いと曰つて、如何しても勝家の命令に従はなかつた。かくて、使者が五たび往復して居るうちに、日は已に暮れて仕舞つた。

當是時。秀吉欲攻岐阜。會大雨。呂久河漲。未濟。午時報至。秀吉方食。問使者曰。盛政退未。曰未。秀吉乃投箸而起。拔刀踴躍曰。吾得大勝矣。即命駛卒五十人。先往募沿道民曰。吾將赴賤岳。炬火導我。酒食餉我。遂令堀尾吉晴留當岐阜。而自提輕兵一萬五千。舉鞭疾馳。及藤川而昏黑。山谷皆炬。餉者爭至。兵皆立食。秀吉行且呼曰。記其里閭。吾將凱旋賞之。北軍相驚曰。濃路諸山。多炬火。秀吉來矣。盛政大駭。將乘暗拔軍而北。適月已出。我軍覩之。進躡其後。盛政留銃隊殿之。引兵上岳北陣。勝政在麓。欲與之合。而金瓠馬表。已在岳南。銃丸亂發。勝政兵立死者二百餘人。其陣稍亂。秀吉顧左右。縱兵乘之。加藤清正。福島正則。加藤嘉明。平野長

泰。脇坂安治。糟谷武則。片桐且元。爭先奮擊。多所斬獲。諸軍從進。遂大破之。擒勝政。進盛。盛政又大破之。斬首五千級。遂進赴勝家。

【呂久河】美濃に在り。【駒卒】音シソツ。疾足の者、善く走る者を云ふ。【餉】音シヤウ。饋る也、食物を贈ること。【藤川】近江に在り。【記其里閭】松明を點じ酒食を餉りし村里の名を書き留めて置けよ。【金瓠】音キンコ。一に金瓠に作る。【岳南】賤岳の南。【清正則嘉明長泰安治武則且元】謂はゆる賤岳の七本槍なり。【蹙】音シマ。せまる、追ひつめる。

この時に當りて、秀吉は、岐阜を攻めやうとして居つたが、折しも大雨が降つて、呂久河の水が漲つて居つたので、未だ河をわたらなかつた。正午の頃に、賤岳の敗戦の報知が到着した。秀吉は、その時に丁度、飯を食へて居つたが、使者に問うて曰ふには、盛政は、はやく退却したか、未だであるかといつた。使者が曰ふには、未だ退却いたしませぬといつた。すると、秀吉は、箸を投げて、起ち上つて、刀を抜いて、小をどりして曰ふには、吾は大勝利を得たぞといひ、即座に、足早の者五十人に命令して、先づ出かけて往き、道筋の民を募集して曰はせるには、吾は、これから賤岳に出かけて行かうとするのであるから、夜になつたら、松明を點つて、我が軍勢を案内し、酒食を我が軍勢に振舞へよといはせた。秀吉は、それから、遂に堀尾吉晴をして岐阜に當らしめて置き、そして、自身は、身輕に出で立ちたる兵士一萬五千人を引き連れて、鞭を擧げて、疾く馳せて行つた。かくて、藤川に至ると、日が暮れて仕舞つたが、山も谷も皆松明がついて居つて明るく、酒食を振舞はうとする者が、先を争うて至つた。我が兵士は皆立ちながら之を食つた。秀吉は、行きながら呼ば、つて曰ふには、その村の名を書きとめて置けよ。吾は、凱旋してから之に褒美を與へるであらうといつた。北軍は、相驚いて曰ふには、美濃路の山々は、松明が澤山について居る。これは、秀吉が来たのであらうといつた。盛政は、大に驚いて、暗闇に乗じて軍勢を引き上げて北に向つて引き返さうとしたが、折しも月が昇つたので、我が軍勢は、之を見て、進んで、其あとを附けたので、盛政は、鐵砲方を留めて、しんがりとなし、軍勢を引き連れて、賤岳の北に上つて陣取つた。勝政は、麓に居つたが、盛政の軍と一處にならうとした。しかるに秀吉の金の飄箆の馬じるしが、已に賤岳の南に在つて、鐵砲の丸が亂れ發し、勝政の兵士は、立ちどころに死する者が二百餘人に及び、其陣立がや、亂れた。秀吉は左右を顧みて、兵を縱つて、奮撃し、討ち取つたり生け捕つたりした者が多く、諸軍は、之に従つて進み、遂に大に之を破り、勝政を生け捕り、それから進んで、盛政を追ひつめ、又、大に之を破り、討ち取つた首は、五千級に及び、それから、遂に進んで勝家の處に押し寄せた。

勝家在核山。聞賤岳軍大囂。危之。已而敗卒交至。勝家曰。盛政果敗。我事矣。遂北走。過見前田利家于府中。請其馬。馳入北莊。秀吉追走。至府中。單騎打城門。連呼利家俗字曰。又左。又左。利家乃出迎之。以其兵從。諸城

望風解走。日日。秀吉至北莊。自上其後山。令堀秀政縱火乘烟迫城。或縛盛政及勝家義子權六。獻麾下。秀吉視之城中。勝家遂自燒殺。秀吉見城中火起。則引兵北徇加賀。能登盡下之。信孝出走自殺。一益降。於是秀吉還軍坂下。六月。叙從四位下。任參議。七月。大賞戰功。予北莊于丹羽長秀。大垣于池田信輝。澤山于堀秀政。金山于森長可。賜近臣七人秩各五千石。世呼曰賤岳七槍。於是近畿粗定。山陽山陰將士來。尋去歲之盟。上杉氏。德川氏。皆使使賀戰捷。

【核山】……近江に在り。府中……越前に在り。利家の治所なり。【北莊】……越前に在り。勝家の治所。【俗字】……通稱。【澤山】……近江に在り。今の彦根なり。【金山】……美濃に在り。【秩】……音チツ。祿。【盟】……尋は重ぬる也。温むる也。前盟已に寒ゆ、更に之を温めて熱からしむるの義なり。

勝家は、核山に居つたが、賤岳の軍が大變に騒がしいのを聞いて、之を不安に思つて居つた。とかくする中に、敗北したる兵卒が、どしどし逃げて来た。そこで、勝家が曰ふには、盛政は、案の通り、我が事を敗つて仕舞つたと曰ひ、遂に北に向つて逃げ走り、越前の府中なる前田利家の處へ立ち寄つて面會し、利家の馬を請ひ受けて、之に乗つて馳せて、北莊に入つた。秀吉は、勝家の逃ぐるを追つかけて、府中に至り、一騎にて、府中の城門を叩いて、利家の通稱をつげさまに呼んで、又左、又左と曰つた。利家は、そこで、出で、之を迎へ、その軍勢を引き連れて従つた。諸の城は、其威風を望んで、守備を解いて逃げ走つた。明るる日に、秀吉は、北莊に到着し、自身に、その後の山に上り、堀秀政をして、火を放ち、烟に乗じて、城に攻め寄りしめた。ある人が、盛政及び勝家の養子なる權六を捕縛して、秀吉の旗もとに差し出した。そこで、秀吉は、之を城中に見せつけた。すると、勝家は、遂に自ら、城に火を放つて死んで仕舞つた。秀吉は、城中に火が燃え上つたのを見、降参した。こゝに於て、秀吉は、引き返して、坂下に陣取つた。六月に、從四位下に叙し、參議に任ぜられた。七月に、秀吉は、大に、戰爭の手柄を賞し、北莊を丹羽長秀に與へ、金山を森長可に與へ、近侍の家來七人即ち清正、正則、嘉明、長泰、安治、武則、且元)に、各々俸祿五千石づつを賜はつた。世に之を賤岳の七本槍と呼んで居る。こゝに於て、畿内近傍は、大略平定した。山陽道、山陰道の將士は、來つて、去年の盟約を温め、上杉氏、德川氏は、皆、使者を遣はして、戰爭の勝利を得たることを賀せしめた。

秀吉有霸天下之志。謂京師狹迫。不便漕運。且無列邸第之地。大坂北帶大河。西控海水。地勢宏壯。可以管攝七道。十一月。遂起十餘州卒。城大坂。成而徙焉。

【霸】……音ハ。諸侯の旗頭。諸侯の長にして王者の政教を把持する者。【漕運】……舟の運送。【宏壯】宏廣にして壯大。【管攝】……音クワシセツ。しめく、り引き寄せる。つかさどりかねる。

信雄視秀吉威權日隆。心不能平。其下有二驍將。秀吉厚遇之。信雄疑其有私。十二年。二月。殺三將。與秀吉絕。乞援於德川氏。池田信輝。森長可。堀秀政。皆爲秀吉拒。信雄將瀧川雄利。初送質於秀吉。秀吉屬之脇坂安治。於是雄利詐奪還之。據其邑上野。安治怒。以從者二十人入伊賀。夜募土兵。襲上野城。拔之。走雄利。秀吉令安治留定伊賀。信輝。長可拔犬山守之。秀吉遣尾藤知定。監一人軍。曰。彼必負勇浪戰。汝往制之。遂欲親將而東。會南海盜起。乃令中村一氏等當南面。浮田秀家當西面。丹羽長秀。前田利家當北面。而自將東下。至犬山。德川氏。北畠氏。合兵陣小

牧對壘未戰。秀吉遺書請戰。德川氏不肯。

【三驍將】…三人の武勇なる大將。即ち、岡田重善、津川義冬、淺井多宮なり。織田記を參看せよ。【上野】…伊賀に在り。【犬山】…と信雄の支城。【浪戦】…浪は放の如し。むだなる戦争。【南面】…紀伊、四國方面。【西面】…山陽道、西海道方面。【北面】…北陸道方面。

信雄は、秀吉の勢威権力が日にまし盛んになるのを、つくづく見て、心中、不平であつた。信雄の部下に、三人の武勇なる大將があつたが、秀吉が、手厚く之を待遇したので、信雄は、三人の大將が秀吉と秘密なる關係がありはせぬかと疑ひ、天正十二年の三月に、この三人の大將を殺し、秀吉と絶交して、加勢を德川氏に乞うた。池田信輝、森長可、堀秀政は、いづれも皆、秀吉の爲めに、信雄を拒いだ。信雄の大將なる瀧川雄利は、はじめ、人質を秀吉に送つて置いたが、秀吉は、この人質を脇坂安治に預けて置いた。こゝに於て、雄利は、許つて、この人質を奪つて取り返し、その領地の上野に立て籠つた。安治は大に怒つて、從者二十人を引き連れて、伊賀に入り、夜、土地の農兵を募集し、上野城を不意撃して之を攻め落し、雄利を逃げ走らした。秀吉は、安治をして、留まつて伊賀を平定せしめた。信輝、長可も亦、犬山を攻め落して、之を守つて居つた。秀吉は、尾藤知定を派遣して、信輝、長可の二人の軍を監督せしめて曰ふには、彼れ二人は、屹度、自分等の勇氣をたのみとして、無駄な戦争をするであらうから、汝、往きて之を取りしまれと曰ひ、それから、遂に、自身に大將として東に向つて進まうと思つた。折しも、南海道に、一揆が起つたので、そこで、秀吉は、中村一氏等をして南の方面に當らしめ、浮田秀家と前田利家をして西の方面に當らしめ、丹羽長秀と前田利家をして北の方面に當らしめ、そして、自身に大將となつて、東に下り、犬山に到着した。德川氏と北島氏（即ち信雄を指す）とは、兵を合はせて、小牧に陣取り、とりでを相對して、未だ戦はなかつた。秀吉は、手紙を送つて、戦を申し込ませたけれども、德川氏は、承知しなかつた。

四月。信輝自請間道擣參河。秀吉不答。明日復請。乃許之。信輝率二壻秀政。長可以往。曰。親戚赴軍。無他證左。秀吉乃令三好秀次助之。秀次秀吉妹子也。臨發誠信輝曰。宜寨于篠木。柏井。募土兵。縱火東參河。勿侮敵輕進。恃勝不備。既遣之。自徙陣樂田。信輝。長可進拔岩崎。或走告德川公。公與信雄伺其懈。襲擊于長湫。殺之。其將佐曰。秀吉敏軍機。今必來矣。乃收兵退。秀吉得敗聞。奮袂起曰。敵亂次而來。吾迎而疾擊。可以鑿

之。急抽精兵二萬。自將赴長湫。聞敵退入小幡。欲隨攻之。稻葉通朝諫以日暮兵疲。乃止。下令曰。日日攻擒一帥。參河將士爭請襲秀吉陣。德川公不肯。曰。秀吉勇略不世出。其可狃而輕之乎。夜退還小牧。秀吉亦還樂田。五月。留諸將守樂田。引兵攻拔利井。嶺。神戸。松島。竹鼻諸城。六月。以竹鼻予一柳直末。令森長可弟忠政襲兄邑。封蒲生氏郷于松島。食十二萬石。統攝傍近諸城。秀吉自陣大垣。往來伊勢。尾張間。修諸城砦。遣脇坂安治。徇志摩。移大和國主筒井定次于伊賀。以大和賜弟秀長。以志摩賜九鬼嘉隆。

【橋】…衝く。【二壻秀政長可】…河越本の標記に云はく、按ずるに、諸書、秀次、長可、並に信輝の壻たり、秀政を以て監となす。故に、秀政、長可を以て壻となし、秀次を以て監となすは、誤なりと。【親戚赴軍無他證左】…左も亦證なり。老子に左契の語あり。證左とは、證據なり。親類同士、戦に赴けば、他人の功の有無を保證して、くれる者無しとの意。【案】…音サイ。とりで。【篠木】…並に尾張に在り。【樂田】…尾張に在り。【岩崎】…尾張に在り。【長湫】…尾張に在り。【敏軍機】…軍の機を見ることが敏捷なり、軍の懸引が素早い。【奮袂】…奮は振なり。袖をふりきる。【小幡】…尾張に在り。【二帥】…家康、信雄を指す。【不出世】…音フセイシュツ。世に稀なる。いつの時代にでも有るわけでは無い。世にめつたに無い。【其可狃而輕之乎】…一度勝つたりして、それになれて、いつでも勝たれると思つて、輕んずることは出来ぬ。【利井】…美濃に在り。當に加賀野井に作るべし。【嶺】…神戸。【松島】…伊勢に在り。【竹鼻】…美濃に在り。【兄邑】…美濃の金山なり。

た。秀吉は、すでに信輝等を遣はしてから、自身は従つて、樂田に陣取つた。かくて、信輝、長可は、進んで、岩崎を攻め落した。ある人が、走つて、此事を徳川公に告げた。徳川公は、信輝とともに、信輝等の守備を怠つて居るのを伺つて、長湫に不意撃ちして、之を殺した。その大將たちが曰ふには、秀吉は、まことに、軍の懸引の素早い人であるから、今に必ず来るで御座りませうと曰つたので、徳川公は、そこで、兵を引ききまゝとめて、退軍した。秀吉は、敗戦の報知を得ると、袖をふり切つて起ち上つて曰ふには、敵は、勝つた勢に乗じて、順序を取り亂して来るであらうから、吾は出で迎へて手きびしく撃つときは、之を皆殺しにすることが出来るであらうと曰ひ、大急ぎで、すべり抜き兵士二萬人を抜き出して、自身に大將となつて、長湫に出掛けて行つたが、敵軍は退却して小幡に入つたといふ事を聞いて、隨つて之を攻めやうとした。すると、稲葉通朝が、日は暮れて仕舞ひ軍勢は疲れて居りませうと云つて、諫めたので、そこで、止めることにし、命令を下して曰ふには、明日、改めて、敵の二人の總大將家康と信輝とを生捕りにせよと曰つた。三河の將士どもは、先を争うて、秀吉の陣屋を不意撃ちやうと請うたけれども、家康は承知せずして曰ふには、秀吉の武勇謀略は、實に世に稀なるものであるから、よしや一度勝利を得たとしても、それによつて之を輕んじてはならぬのであると曰ひ、夜の間に、退軍して、小幡に引き返した。秀吉も亦、樂田に還つた。五月に、秀吉は、諸大將を留めて、樂田を守らせて置き、兵を引き連れて、利井、嶺、神戶、松島、竹鼻などの諸城を攻め落した。六月に、秀吉は、竹鼻を以て一柳直末に與へ、森長可の弟忠政をして、兄の領地を繼がしめることにし、又蒲生氏郷を松島に封じ、十二萬石を領せしめ、近傍の諸城を統轄せしめた。秀吉は、自ら大垣に陣取り、伊勢、尾張の間を往來し、諸所の城やとりでを修復し、脇坂安治を派遣して、志摩をふれまはつて平定せしめ、大和の國主筒井定次を伊賀に移し、大和をば弟秀長に賜ひ、志摩をば九鬼嘉隆に賜はつた。

十月、陣羽津。信雄陣桑名。其君臣内相猜疑。軍中數驚。秀吉乃謂富田知信。津田信季曰。我爲先君復仇。務鎮定國家。而諸郎聽細說。遽欲誅我。我不得已。起與之較。神戸君既不良死。我至今悼焉。爲我謝北畠君。盍捐細故。與共富貴。二人往告之信雄。信雄許之。相見于矢田河原。和成。徳川公使使賀之。公尋送其子秀康爲質。

【羽津】……伊勢に在り、諸郎……若殿達。信雄、信季等を指す。【細說】……こまかくの説、まことに瑣細なる風説。【較】……音カク。勝負を争ふ。【神戸君】……信季を云ふ。【不良死】……良き死に様をせしなかつた。信季が出走して自殺せしを云ふ。【捐】……棄つ。【北畠君】……信雄を指す。【細故】……微細なる事故。【矢田河原】……伊勢に在り。

十月に、秀吉は、羽津に陣取つた。信雄は、桑名に陣取つたが、信雄の君臣の間は、内にて互に疑ひ合ひ、軍中たび／＼騒ぎ立てた。秀吉は、そこで、富田知信、津田信季に向つて曰ふには、我は、先殿様(即ち信長の爲めに仇をかへし、務めて國家を鎮撫平定しやうとして居る。

しかるに、若殿達は、まことに詰らぬ些細なる風説を聞いて、あはて、我を誅しやうとせられたので、我は、止むを得ずして、起つて、之と勝負を争うたのである。神戸殿は、すでに、目出たからぬ死に様をせられ、我は、今日に至つて、之を哀み悼んで居るのである。どうか、我が爲めに、北畠殿に御託して、細々した事故をすて、仕舞つて、富貴を共にしては、如何で御座ると申してくれと曰つた。知信、信季の二人は、往きて此事を信雄に告げた。すると、信雄は、之を許し、矢田河原に會見して、和睦が調うたので、徳川公は、使者を遣はして之を賀せしめた。徳川公は、又、問も無く、其子秀康を秀吉の處へ送つて人質とした。

秀吉之東也。南海盜數攻岸和田。土佐國主長曾我部元親。略定四國。發兵援之。窺大坂。中村一氏守岸和田。擊却之。佐佐成政。又以越中。應北畠氏。將兵萬餘。攻末盛城。城屬前田利家。城將奧村永福與其妻。獎厲士卒。固守。利家赴救。大破成政。成政求援於徳川公。公辭之。十一月。秀吉進從三位。任大納言。十二年。二月。進正二位。陞内大臣。於是。議用兵於南海。北陸。欲先定南海。南海賊根來。雜賀最強。聞羽柴氏且來。築三寨于千石塚。悉銳守之。二月。秀吉將兵十萬。南伐。令秀次備三寨。而直指根來寺。寨兵以弓銃要之。秀次縱騎傍擊。遂合兵圍寨。我軍發火箭。中賊硝櫃。悉焚死。諸寨皆解走。秀吉則以生兵六萬。急襲根來。焚之。遂攻下雜賀。引紀伊川。灌太田壘。磔其魁首五十人。進下熊野。高野。撤諸關寨。以紀伊和泉。加賜秀長。以近江。賜秀次。四月。歸大坂。

【岸和田】…和泉に在り。末盛城…能登に在り。奥村永福與其妻慶隆士卒…慶隆は音シャウレイ、すゝめはげます。永福は、助右衛門と稱す。其妻、小狭かいとり、鉢巻しめ、刀横たへ、下女に命じて粥を提桶に入れさせ、堀内の軍兵共に、手づからくみのませ、且つ勇めて申すやう、昔、楠正成とやらん聞えし大將は、僅なる小城に籠り、日本國の軍兵を皆敵に引き受け、堅固に籠城したりけるとかや。此城、今、事急なりといへども、明日は必ず利家卿の後詰これあるべきに、只一夜をよく防ぎ給へと云々。【根來】…並に紀伊に在り。【千石濠】…紀伊に在り。【悉銳】…精銳なる兵士を残りず繰り出す。【硝櫃】…音セウキ、火薬を入れ置く箱。【生兵】…新士の兵。【熊野】…並に紀伊に在り。【撤】…音テツ、除き去る。關所を取り除いて以て商旅の往來に便にす。

秀吉が東方に向つたときに、南海道の一揆が、たゞく岸和田を攻め、又、土佐の國主長曾我部元親は、四國を切り取り平定して、兵を繰り出して、南海道の一揆を援けて、大坂を窺つた。中村一氏が岸和田を守つて居つて、撃つて之を退却させた。佐佐成政は、又、越中を以て、北島氏（即ち信雄）に味方し、一萬餘人の兵を引き連れて、未盛城を攻めた。この城は前田利家に附屬して居つた。城の守將なる奥村永福は、其妻とともに、士卒をすゝめはげまして、固く守つて居つたが、やがて、利家が赴き救ひ、大に成政を撃ち破つた。すると、成政は、加勢を徳川公に求めたが、徳川公は、之を斷つた。十一月に、秀吉は、從三位に進み、大納言に任せられ、天正十三年の二月に、正二位に進み、内大臣に昇された。こゝに於て、秀吉は、南海道と北陸道とに兵を用ふることを評議し、先づ南海道を平定しやうと思つた。南海道の賊の中では、根來と雜賀とが、一番強かつたが、羽柴氏が將に攻め寄せやうとして居るといふ事を聞いたので、三つとりで、千石濠に築いて、あるだけの銳兵を繰り出してこれを守つて居つた。三月に、秀吉は、十萬の兵を引き連れて、南方を征伐し、秀次をして、千石濠の三つとりで備へしめ、そして、自身は、直接に、根來等を指して進んだ。千石濠のとりでの兵は、弓と鐵砲とを以て、之を待ち受けた。秀次は、騎兵を縱つて横合から撃ち、それから、遂に兵を合はせて、とりでを圍んだが、我が軍は、火矢を射て、それが、賊の硝櫃に當つたので、爆發して、賊兵は、悉く焼け死んで仕舞ひ、諸のとりでは、皆守備を解いて逃げ走つた。秀吉は、そこで、新士の兵士六萬人を引き連れて、手きびしく根來をつけにし、進んで熊野、高野を攻め下し、諸處の關所やとりでを除き去つて、旅人の便利をはかり、紀伊と和泉とを以て、秀長に増し、近江を以て、秀次に賜はり、四月に、大坂に歸つた。

秀吉遂以書諭長曾我部元親當獻伊豫讚岐來朝天子否則有罰元親不聽五月秀吉令秀長秀次以舟師六萬往討之自阿波入又令浮田秀家自讚岐小早川隆景自伊豫並攻元親元親將兵拒羽津秀次攻和氣秀長攻一宮皆降之合攻木津又降之諸城解走仙石秀久前受封淡

路七月以其兵拔屋島秀家隆景亦陷數城諸軍刻期萃于羽津元親乃乞降送質遂入朝秀吉讓曰來何晚也乃奪其三國賜阿波于蜂須賀家政讚岐于仙石秀久十河存保伊豫于小早川隆景來島康親以伊豫正木賜加藤嘉明以淡路洲本賜脇坂安治南海盡定

【羽津】…外史補には、羽久地に作る。【和氣】…【一宮】…【木津】…並に伊豫に在り。【屋島】…讚岐に在り。【刻期】…期日を定める。【萃】…あつまる。【讓】…責むる也。【存保】…一に存に作る。【關】 秀吉は、それから、遂に、書面を以て、長曾我部元親に諭すには、伊豫と讚岐とを獻上して京都に來つて天子に入朝すべきである。さうでないならば、罰があらうぞと諭したけれども、元親は聞き入れなかつた。五月に、秀吉は、秀長と秀次とをして、舟いくさ六萬人を引き連れて、往いて之を征伐せしめ、阿波より討つて入ることとし、又、浮田秀家をして、讚岐より入らしめ、小早川隆景をして、伊豫より入らしめ、同時に、元親を攻めさせた。元親は、兵を引き連れて、羽津に拒いだ。秀次は和氣を攻め、秀長は一宮を攻め、皆之を降服せしめ、兵を合はせて、木津を攻め、又、之を降服させた。所々の城は、守備を解いて逃げ走つた。仙石秀久は、以前に、領地を淡路に貰ひ受けて居つたが、七月に、部下の兵を引き連れて、屋島を攻め落した。秀家、隆景も亦、數城を攻め落した。かくて、諸軍は、日限を定めて、羽津に集まつた。元親は、そこで、降参を乞ひ、人質を送り、遂に京都に入朝した。すると、秀吉が之を責めて曰ふには、來ることが、大層遅いではないかと曰ひ、そこで、其三國を取り上げ、阿波を蜂須賀家政に賜ひ、讚岐を仙石秀久と十河存保とに分け與へ、伊豫を小早川隆景と來島康親とに分ち賜ひ、伊豫の正木を加藤嘉明に賜ひ、淡路の洲本を脇坂安治に賜ひ、かくて、南海道は、すつかり、平定した。

初秀吉起微賤無姓氏始稱平氏中稱藤原氏於是欲爲征夷大將軍右大臣藤原晴季素與秀吉善爲之謀曰故事大將軍非源氏不可公稱藤原氏宜爲關白秀吉曰關白何物晴季曰位亞天子統御百官秀吉大喜時藤原昭實爲關白晴季諷辭其官以秀吉代之朝廷重違其意遂詔許之秀吉具驕從入朝謝恩奏請授子弟將士以官爵秀吉羞冒他

姓請賜新姓。曰豐臣。置吏五人。奉行政令。淺野長政。石田三成。增田長盛。掌諸訟獄。長束正家。掌錢穀。前田玄以。掌僧祝。長政任彈正少弼。後封甲斐。玄以稱德善院。任法印。嘗爲織田氏吏。後封篠山。正家任大藏少輔。嘗爲丹羽氏吏。後封水口。三成任治部少輔。後封澤山。長盛任右衛門尉。後封郡山。秀吉戒五人曰。大事會議決之。小事不必然。勿使有留滯。勿納贈賄。勿挾恩仇。訟獄之事。無貧富貴賤。一切從事。當是時。豐臣氏歲入二百萬石。府庫稱之曰。吾不可獨自封殖。遂下令。分金五千枚。銀三萬枚於諸將士。償其軍費。設場于京師第門。一日悉散之。

【藤原晴季】……菊亭右大臣。【亞】……次。【昭實】……二條關白。【諷】……音フウ。遠まはしに諭す。【重】……難なり。はかる。【騶從】……音スウジユウ。僕御儀從。大勢の伴人。奉行……奉は承くる也。上。主君の命令を奉じて下に施行するなり。【諸訟獄】……一に諸の字無し。僧祝……僧侶神官。【法印】……僧官なり。僧正に亞。【篠山】……丹波に在り。【水口】……近江に在り。【澤山】……近江に在り。【郡山】……大和に在り。留滯……音リウタイ。稽留遲滯。留めて置いて滞らすこと。【贈賄】……音ゾウワイ。贈遺賄賂。他よりおくりしむひな切從事……富貴貧賤の區別なく。一切、聽断によつて事を裁判する。【府庫】……府は寶藏貨財の處。庫は器械兵仗の處。二字合はせて。倉庫の義。稱……かなふ。【府庫稱之】……諸の貨財も。歳入の高に應じて太だ多きを云ふ。【封殖】……本を殖ふを封と曰ひ。財利を興生するを殖と曰ふ。財産を増加すること。吳語に。封殖越國とあり。

關白はじめ、秀吉は、微賤なる身分から起つて、姓も氏も無かつたので、始めには、平氏と稱し、中ごろには、藤原氏と稱して居つたが、こゝに於て、征夷大將軍とならうと思つた。右大臣藤原晴季は、平素、秀吉と仲が善かつたが、秀吉の爲めに謀つて曰ふには、先例によれば、征夷大將軍は、源氏でなければ、成ることが出来ない。御座る。貴殿は、藤原氏と稱して居られるから、關白となられるが、宜しう御座ると曰つた。秀吉が曰ふには、關白と云ふのは、どんな物で御座るか。曰つた。晴季が曰ふには、關白はその位は、天子に次ぎ、百官をすべく、つて取り締まるもので御座ると曰つたので、秀吉は、大に喜んだ。その時に、藤原昭實が、關白であつたが、晴季は、遠まはしに言つて、その官を辭

職せしめるやうにし、秀吉を以て之に代へやうとした。朝廷に於ては、秀吉の心に違ふことを遠慮し、とう／＼、詔して、秀吉を關白にすることを御許しになつた。すると、秀吉は、關白となつたので、大勢の從者を引き連れて、參内して、御禮を申し上げた。又、秀吉は、奏上し請うて、子弟將士どもにも、官職位階を授けられるやうにした。秀吉は、又、平氏とか藤原氏とかの姓を名乗ることを恥づかしと思つて、請うて、豐臣といふ新しい姓を賜はるやうにした。秀吉は、又、役人五人を置いて、諸々の政令を施行はせることにした。即ち、淺野長政、石田三成、増田長盛の三人が、諸の公事訴訟をつかさどり、長束正家が、金錢米穀の事をつかさどり、前田玄以が、僧徒神官の事をつかさどつた。長政は、彈正少弼に任せられ、後に甲斐に封ぜられた。玄以は、德善院と稱して居つて、法印に任せられ、以前に、織田氏の役人であつたが、後に篠山に封ぜられた。正家は、大藏少輔に任せられた。嘗て、丹羽氏の役人であつたが、後に水口に封ぜられた。三成は、治部少輔に任せられた。後に澤山に封ぜられた。長盛は、右衛門尉に任せられた。後に郡山に封ぜられた。秀吉は、この五人を戒めて曰ふには、重大なる事件は、五人集會し評議して之を決定するやうにし、小なる事件は、必ずしも左様に致すには及ばぬ。事務を留め滞らせしてはならぬ。人から贈つた賄賂を受け取つてはならぬ。私の恩と仇とを心に持つて居つてはならぬ。公事訴訟の事は、富貴貧賤の區別なく、一様に、如何なることに相應して、はなはだ澤山にあつた。そこで、秀吉が曰ふには、吾は、自分獨り財産を貯へてはならぬと曰ひ、遂に、命令を下して、黃金五千枚、銀三萬枚を、諸の將士たちに分配して、その軍費を償ふことにし、假小屋を京都なる屋敷の門に設けて、一日にして、残らず之を散じて、將士どもに分ち與へて仕舞つた。

八月。自將騎卒十萬。北伐。北畠信雄以尾張。伊勢兵。前田利家以能登。加賀兵。皆會焉。佐佐成政據富山。築三十餘壘于栗殼嶺。秀吉張疑兵當之。而航海直襲富山。成政惶駭。削髮出降。乃加賜越中于利家子利長。以丹羽氏有罪。奪越前。割其半予堀秀政。令村上溝口二氏屬之。以鎮北陸。而越後國主上杉景勝未來。秀吉既勝。成政。則與石田三成等十餘騎。踰險直入越後。謂其疆上吏曰。吾秀吉也。汝主已通使於我。我故來見。欲面議事。吏馳使告景勝。景勝大驚。遂來盟。秀吉屏左右與語。既畢。西還。使金

森長近略飛彈攻其國司姉小路賴綱滅之因封長近焉。

【富山】…越中に在り。【栗殼嶺】…越中に在り。【丹羽氏有罪】…長秀が死するや、其嗣長重尙は弱し、秀吉未だ職を襲がしめず。長秀の舊臣、先主長秀が織田氏に忠あり、志を齎らして歿するを痛み、削黜せられんと恐れ、しばし事を擧げて以て先主の志を繼がんと謀れども、諸はすして止む。議亦微しく泄る。この役に及んで、長重、微發に應ず。部下、律を犯すものあり。秀吉怒を發し、越前及び加賀の田を收め、若狹の舊邑に反し、前日の首謀者を收へて、之を誅せり。【村上】…周防守。【溝口氏】…伯耆守。【未來】…未だ服従せざる也。【疆上吏】…國境を守る役人。【屏】しりぞける。

八月に、秀吉は、自身に、騎兵歩卒十萬人を引き連れて、北方を征伐した。北畠信雄は、尾張、伊勢の兵を引き連れ、前田利家は、能登、加賀の兵を引き連れて、いづれも皆會合した。佐佐成政は、富山に立て籠つて、三十餘のとりでを、栗殼嶺に築いた。秀吉は、疑兵を張つて栗殼嶺のとりでに當りて置き、舟に乗つて海を渡つて、直に富山を不意撃した。すると、成政は、おそれおどろいて、髪を剃つて坊主姿となつて、出でて降参した。秀吉は、そこで、越中を、利家の子利長に増し、又、丹羽氏が罪があつたので、越前を取り上げて、越前の半分を堀秀政に與へ、村上、溝口の二氏をして、秀政に附屬せしめ、以て北陸道を鎮撫した。しかるに、越後の國主なる上杉景勝は、未だ來り服従しなかつた。秀吉は、すでに成政に勝つた後に、石田三成など僅に十餘人の騎士とともに、險阻を越え、直に越後に入り、越後の國境を守つて居る役人に向つて曰ふには、吾は秀吉である。汝が主人の景勝は、すでに我が方に使者をよこしたので、我は、それ故に、來つて會見して、面のあたり、事を相談しやうと思ふのであると曰つた。その役人は、急使を以て、此事を景勝に告げた。すると、景勝は、大いに驚いて、遂に來つて盟約をなした。そこで、秀吉は、左右の者を遠ざけて、景勝とともに語り、すでに終つて、西に引き返した。そこで、秀吉は、金森長近をして、飛彈を切り取りしめ、其國司姉小路賴綱を攻めて、之を滅ぼし、因つて、長近を飛彈に封じた。

先是信濃豪族眞田昌幸來送款納子幸村爲質昌幸自父幸隆屬武田氏及武田氏亡屬德川氏領上田攻北條氏取沼田德川氏與北條氏婚令昌幸還致沼田答曰公之所賜上田掌大之地耳至沼田我以吾兵力取之焉得予他人哉德川公怒率步騎七千來攻閏月上杉景勝以秀吉自發兵援昌幸昌幸延之内城而自居外城植柵城內伏兵城外而出羸卒誘敵敵進入城柵內銃發敵陣亂二城夾擊破之敵走出伏起

又破之昌幸子信幸亦迎擊北條氏兵于沼田破之九月景勝自將來援敵軍退去小笠原貞慶亦因昌幸送款與景勝並連衡於豐臣氏以圖關東德川氏北條氏懼而約從十一月德川氏將石川數正來奔其國大擾秀吉乃謂信雄曰吾既定中州東西未服近日將西伐宜先與德川和以拒北條也子爲我圖之信雄乃遣二使諭德川公公恐其有變不敢來

【幸隆】…一德齋と號す。【上田】…信濃に在り。【沼田】…上野に在り。【掌大之地】…手のひら程の大きさの土地。狭小なるを云ふ。【内城】…本丸。【外城】…二の丸。【羸卒】…音ルキソツ。弱き兵卒。【連衡】…音レンカウ。兵をつらね組み合ふこと。東西に兵を連ぬるを連衡と云ふ。【從】…從は音シヨウ。合従なり。兵を合はせて好む結ぶこと。南北に兵を合はせることを合従と云ふ。上の連衡とにも、戰國策史記等に見ゆる語。【中州】…猶ほ中國といふが如し。畿内の近傍を云ふ。

是歲。毛利氏遣小早川隆景。吉川元長來大坂。元長。元春子也。秀吉善待之。曰。天主閣新成。當使卿等一觀。乃自從一侍女。導隆景。元長。及其從者數十人。上閣。指示遠近山海。因謂元長曰。吾子乃叔。以伊豫。乃翁未有所予。吾數與乃翁治兵。常恨不相見。以談往日戰略。明年。吾將伐九州。煩乃翁為先鋒。事平。予之筑前也。

【乃叔】…音ダイシユク。汝の叔父、即ち隆景。【乃翁】…音ダイヲウ。汝の父、即ち元春。【治兵】…兵を整へること、勢揃して出陣すること。

【關】この歳に、毛利氏は、小早川隆景と吉川元長とを派遣して、大坂に來らしめた。元長は、元春の子である。秀吉は、隆景、元長二人を善く待遇し、そして曰ふには、天主閣が新に落成したから、貴公等に見せやうと曰ひ、そこで、自身に、一人の腰元を從へ、隆景元長及びその從者數十人を案内して、天主閣に上り、遠近の山や海を指さし示し、因つて、元長に向つて曰ふには、吾は、汝の叔父(即ち隆景)には、伊豫を與へたが、汝の父(即ち元春)には、未だ何處をも與へては居らぬのである。吾は、たゞ、汝の父と、軍勢を勢揃して對陣したとがあるが、一度會見して以前の戰略を談し合はないことを、常に残念に思つて居るのである。來年は、吾は、九州を征伐しやうと思つて居るから、其時には汝の父を煩はして先鋒となし、事が平定したならば、汝の父に筑前を與へやうと思ふのであると曰つた。

十四年二月。内野第成。命名聚樂。秀吉將請天子幸焉。率諸侯朝之也。是歲。又建方廣寺。以木造大佛。高十六丈。興卒數萬人。四方工人盡集。四月。以其妹。妻德川公。

【内野】…京都の西北に在り。【方廣寺】…京都の東に在り。【其妹】…さきに佐治日向に嫁せしもの。德川記を參看すべし。  
【關】天正十四年の二月に、秀吉の内野の屋敷が落成したので、聚樂と名づけた。秀吉は、まさに天子様の行幸を請ひ奉つて、諸侯を引き連れて、朝見しやうとして居つたのである。この年に、秀吉は、また、方廣寺を建て、木を以て大佛を造つたが、高さ十六丈あつた。その爲めに、人夫數萬人を徵發し、四方の職人などが、盡く集り來つた。四月に、秀吉は、その妹を、德川公に妻はした。

五月。上杉景勝入觀。先是。豐後國主大友義鎮亦入觀。初。島津義久。自薩摩起。荐食九國。義鎮與肥前國主龍造寺政家。歲被其兵。竝乞援於秀吉。窟城主高橋鎮種。立花城主戸次宗茂。皆來送款焉。於是。秀吉將西伐。下教列國。竝固守以俟。七月。義久遣弟義弘。家久。略一筑。降秋月氏。筑紫氏。乃攻鎮種。鎮種自殺。宗茂固守。來使告急。秀吉乃遣黑田孝高。趣毛利輝元。吉川元春。小早川隆景。九月。又遣加藤嘉明。脇坂安治。趣長曾我部元親。十河存保。皆發兵西向。遂遣書義久曰。關白問。何以不朝貢。何以坐取官爵。何以縱出兵攻略鄰國。使仙石秀久齎書往。因誡秀久曰。彼若不服。且勿與戰。退以俟我。秀久至。義久投書於地曰。我族國于此十四世矣。促朝貢者。獨有近衛氏。猴冠者。敢欲屈致我乎。秀久憤恚。以大友氏兵。進擊家久。元親。存保。從之。元親子信親。與存保。皆敗死。元親走伊豫。秀久走豐後。嘉明。安治。力戰而退。義久遂大舉入豐後。下十六城。大友義鎮既死。其子義統出戰。大敗。事聞。秀吉怒。奪秀久邑。予之尾藤知定。終議西伐。益促德川公入朝。十月。公從萬餘人而發。秀吉母曰。大廳往問。女子岡崎。以



安其國人。德川公到京師。秀吉從數人。就其館。握手款語。遂呼酒。召其諸將。談小牧之戰。盡歡而出。十一月。德川公入謁于聚樂第。畢禮而去。

【卷食】……音センシヨク。荐は、數々なり。しきりに地を食む、たんに土地を切り取る。【宿城】……筑前に在り。【立花城】……筑前に在り。【二筑】……筑前、筑後。【秋月氏】……筑前守種實。【筑紫氏】……上野介廣門。【趣】……うながす。催促する。【坐取官爵】……朝親せが國にじつとして居つて官位を貰ふ。【十四世】……或は云ふ、十五世の誤ならんか。島津氏は、源忠久より出づ。忠久は頼朝の庶子にして、母は丹後局と稱す。子孫、忠義、久綱、忠宗、貞久、久氏、元久、久豊、忠國、春久、忠昌、忠治、勝久、貴久、義久に至る十五世と云ふ。【猴冠者】……信長嘗て、秀吉を視て、汝が面猴に似たり、其心必ず捷ならんと言へり、故に、時人、猿面冠者と云ふ。秀吉を指して言ふ也。【屈致】……屈服させて引き寄せる。【大廳】……秀吉の母、大北廳と云ふを略したる者、大北政所といふ。大は尊稱、北は居所の方角、政所は家政を取る故に云ふ。政所と廳とは、和訓同じ。【往問女子岡崎】……實は秀吉、母を質として家康の入朝を促がすなり。秀吉の妹の家康に嫁せしむるを見舞に行く。家康は岡崎に在り。【安國人】……人質を送りて、家康の身に別條なきことを安心さす。【款語】……音クワンゴ。打ち解けて物語る。

五月に、上杉景勝は、京都に入つて朝親した。これより先に、豊後の國主なる大友義興も亦、京都に入つて朝親した。はじめ、島津義久は、薩摩より起つて、九州地方をだんに切り取り、義興と、肥前の國主なる龍造寺政家とは、年々、義久に攻め立てられるので、並に、加勢を津を征伐しやうとして、命令を國々に下し、並に固く守つて、自分が出征するのを待つて居れと命令した。七月に、義久は、弟義弘と家久とを派遣して、筑前、筑後を切り取り、筑前なる秋月氏と筑後なる筑紫氏とを降参させ、そこで、鎮種を攻めた。すると、鎮種は自殺した。宗茂は、固く守つて、使者を秀吉の處に遣はして、危急なることを告げた。秀吉は、そこで、黒田孝高を派遣して、毛利輝元、吉川元春、小早川隆景を催促させ、九月には、又、加藤嘉明と脇坂安治とを派遣して、長曾我部元親と十河存保とを催促させ、いづれも皆、兵を繰り出して西に向ふ。あるかといひ、仙石秀久をして此手紙を持参して行かせることにし、因つて秀久に注意して曰ふには、彼れ義久が若し服従せずとも、その手紙を地上に投げつけて曰ふには、我が一族が、この薩摩を領地として居ること、十四代になるのである。そして、朝貢を催促するの、近衛家が有るだけである。しかるに、あの猿面冠者は、無禮にも、我を屈服させて招き寄せやうとするのかと曰つた。秀久は、之を聞いて、憤激して腹を立て、秀吉の注意を忘れて、大友氏の兵を引き連れて、進んで家久を撃ち、元親、存保は、之に従つて往つた。すると、元親の子の信親と存保とは、皆、敗戦して討死し、元親は伊豫に逃げ走り、嘉明と安治とは、力を盡して戦つて、退却した。義久は、とうとう、大軍を引き連れて、豊後に打ち入り、十六城を攻め下した。この時に、大友義興は、すでに死んで仕舞つて、其子の義統が出で戦つたが、大に敗戦した。この事が、やがて、聞えり、秀吉は怒つて、自分の注意を用ひざりし秀久の領地を奪ひ取つて、之を尾藤知定に與へ、とうとう、西方の島津征伐を評議し、それにつけて、ますます、徳川公の京都に入つて朝親することを催促した。十月に、徳川公

は、一萬餘人を従へて、出發した。秀吉の母は大政所と云つたが、この時に、出かけて岡崎に行きて、其娘（即ち家康の夫人）を訪問し、以て、其國の人々を安心させるやうにした。やがて、徳川公が京都に到着すると、秀吉は、わづかに數人の子を引連れて、徳川公の旅館に出かけて、手を握つて、打ち解けて物語り、遂に酒を呼んで、徳川公の諸將を召し寄せて、小牧の戦の話をなし、十分に機嫌よくして、立ち出でた。十一月に、徳川公は、聚樂の屋敷に入つて、秀吉に謁見し、禮を畢つて立ち去つた。

先是。皇太子殂。是月。天皇禪位于皇太孫。皇太孫即位。是爲後陽成天皇。十二月。天皇詔以秀吉爲太政大臣。關白職如故。於是。秀吉奏請曰。臣徵島津義久入朝。義久不奉命。臣請自將伐之。乃令越中。尾張以西三十七國發兵。以明年二月。會大坂。命石田三成。大谷吉隆。長束正家。掌糧餉。小西隆佐。建部壽德。掌漕運。先赴小倉。具三十萬人糧。一萬匹馬芻。使可支一歲。十五年。二月。兵會大坂者。十五萬人。秀吉下令。禁鹵掠。止鬪諍。又置吏于沿道驛舍。使軍行莫蹇滯。乃遣秀長。將前軍先發。三月朔。秀吉自將諸軍。發京師。水陸俱下。義久既逐大友義統。居豊後府内。發兵四出。聞豊臣氏前軍至豊前。乃使家久守耳川。引兵而退。秀長至耳川。諸將先濟。家久夜襲南條。宮部氏營。南條敗。宮部擊卻之。明日。秀長乃濟。敵遂退保高城。既而又退。二十五日。秀吉至赤間關。留增田長盛。守關戶城。丸毛某。城戶某。守門司城。徵國人質子。濟海入豊前。廿八日。陣于馬岳。分

兵竝進。時秋月種實招島津氏兵。據岩石城。城跨豊前。筑前之間。以險固。聞秀吉遣義子秀勝攻之。令蒲生氏郷。前田利長輔之。自以麾下登杉原山。四月。氏郷攻其南。利長攻其北。城兵能拒。氏郷先入其郭。秀吉自山上望見其徽號。自脫其袍。使人齎賜之曰。被此以登内城。氏郷感激。身先士卒。會風大起。縱火焚城。城即陷。秀吉乃進至小熊。種實遁走。使子種長以城降。秀吉悉收其地。進軍高良山。龍造寺政家以肥前兵來會焉。肥後諸城皆解走。

【皇太孫】……死なり。書經の祖落の語に本づく。天子に崩と云ひ、親王及び三位以上に薨と云ふ。祖は、崩の下、薨の上に設けたる一稱なり。【皇太孫】……諱は周仁。【糧餉】……兵糧。【小倉】……豊前に在り。【馬駕】……音バスウ。馬を飼ふ草、まぐさ。【塞滯】……音ケンタイ。塞は跛なり。猶ほ滯留と云ふがごとし、行程のはかどらずして留まること。【耳川】……日向に在り。【南條】……伯耆守。【宮部】……善祥坊。【高城】……日向に在り。【赤間關】……長門に在り。【關戸】……長門に在り。【丸毛某】……三郎兵衛。【門司】……豊前にあり。【郭】……音フ。城の外郭。そとをわ。【砲】……音ハウ。陣羽織。【小熊】……筑前に在り。【高良山】……筑後に在り。

これが、後陽成天皇である。十二月、天皇は、詔して、秀吉を以て太政大臣に任ぜられたが、關白職は、もとの通りであつた。こゝに於て、秀吉は、奏上して請うて曰ふには、私は、島津義久が京都に入つて朝覲することを催促いたしましたけれども、義久は、命令を奉じませぬ。私、何卒、自身に大將となつて之を征伐したいと思ひますと曰ひ、そこで、越中、尾張より西なる三十七箇國に命令して、兵を繰り出し、明年の二月に、大坂に會合せしめることにし、石田三成、大谷吉隆と長束正家とに命令して、兵糧の事をつかさどらしめ、小西隆佐と建部壽徳とをして、舟の運送の事をつかさどらしめ、先だつて小倉に出かけて行つて、三十萬人の兵糧と馬二萬匹のまぐさを用意して、一年の間を支へることの出来るやうにさせせ。天正十五年の二月に、兵の大坂に會合するもの、十五萬人あつた。そこで、秀吉は、命令を下して、人民の物品を掠奪することを禁じ、喧嘩することを差し止め、又、通行の道筋の宿場に、役人を置いて、軍勢の進行に遲滞の無いやうに取り計らはしめ、そこで、秀吉を派遣して、前軍の大將として、先だつて出發させた。三月の朔に、秀吉は、自身に、諸軍を引き連れて、海と陸と兩方から西に向つて下つた。この時に、義久は、すでに大友義統を逐つ拂つて、豊後の府内に居り、兵を繰り出して、四方に出でさせたが、豊臣

氏の前軍が豊前に到着したといふ事を聞き、そこで、家久をして耳川を守らしめて置き、自身は、兵を引き連れて退却した。やがで、秀吉は、耳川に到着し、諸將は先づ川をわたつた。すると、家久は、夜に乘じて、南條氏、宮部氏との陣營を不意撃したが、南條は敗北し、宮部が撃つて家久を退却させた。明るる日に、秀吉は、川をわたつて進んだ。敵は、そこで、遂に退却して、高城に立て籠つたが、とかくする中に、又退却した。二十五日に、秀吉は、赤馬關に到着し、そこで、増田長盛を留めて、關戸城を守らせて置き、丸毛某、城戸某をして、門司の城を守らせて置き、此國の人々から人質を差し出さしめ、海をわたつて豊前に入り、廿八日に、馬岳に陣取り、兵を手分けして相並んで進むことにした。この時に、秋月種實は、島津氏の兵を招き寄せて、岩石城に立て籠つて居つた。この城は、豊前と筑前との間に跨り、險阻にして堅固である。と云ふので、名高いものであつた。秀吉は、養子の秀勝を派遣して、之を攻め、蒲生氏郷と前田利長とをして之を輔佐せしめ、自身は、旗もとを引き連れて、杉原山に登つた。四月に、氏郷は、其南を攻め、利長は、其北を攻めた。城兵は、なかく巧に拒いだ。が、氏郷は、第一番に、其をとるわに討ち入つた。すると、秀吉は、杉原山の上から、その旗じるしを望み見て、それが氏郷であることを知り、自ら、著て居る陣羽織を脱いで、人をして之を持參して急ぎ馳せて氏郷に賜はらしめて曰ふには、これを著て本丸に攻め上れと曰つた。氏郷は、感激して、自身に士卒に先だつて進んだ。折しも、大風が吹き始めたので、火を放つて城を焼いた。城は、即座に落城した。秀吉は、そこで、進んで小熊に到着すると、種實は遁れ走り、其子種長をして城を以て降参させた。秀吉は、殘らず其土地を取り上げ、進んで高良山に陣取つた。龍造寺政家は、肥前の兵を引き連れて來り會した。そこで、島津方なる肥後の諸城は、皆守備を解いて逃げ走つた。

薩摩驍將新納忠元。伊集院忠棟。守合子城。走保八代。與島津征久。合兵堅守。秀吉以兵艦攻之。忠元等夜逃。秀吉入其城。謂諸將曰。吾征誅僻遠之國。苟期於盡。勢有所不可。且見吾狹也。宜從優容。速成大功。乃榜于衢路曰。名門故家。脅從於敵者。及豪俠大盜。聚徒結黨者。一切皆宥。聽其自新。令初下。軍門如市。秀吉進入薩摩。降島津忠良。五月。進至千代河。河接海港。前所發漕船盡湊焉。乃命水軍將加藤嘉明。脇坂安治。九鬼嘉隆。造浮梁濟軍。建牙于太平寺。環布軍營。填池澤。夷丘阜。方二里餘。中開門巷。縱橫四達。遠近望風而潰。乃遣水軍三將。攻桂忠昉于平佐。脇

坂安治先登。忠昉降。於是秀長以日向故主伊東祐丘爲先鋒。以五萬人自日向入。前田利長與淺野彈正。以龍造寺政家爲先鋒。以五萬人自大隅入。家久以佐土原降。義弘退陣。求麻。諸軍合而南下。臨於鹿兒島。島津氏將佐交勸。義久乞降。乃遣伊集院忠棟。因秀長謝罪。秀吉曰。吾初欲誅不庭之臣。使無遺類。吾聞島津氏源右大將之遠裔也。四百歲名族。一日滅之。吾亦不忍也。其宥之。義久大喜。削髮被僧衣。從近臣五六人。詣太平寺降。秀吉延見。以溫言慰藉之。命以義弘爲嗣。琉球國馳使修貢獻。

【新納忠元】……武藏守。【伊集院忠棟】……右衛門大夫。【合子城】……八代。【肥後に在り】……征久。【右馬頭】……僻遠。【音へキエ】。邊鄙にして遠き也。【見吾狭】……わが度量の狭小なることをしめす。【優容】……寛裕にして容るゝところある也。號令處分などをゆるやかにして小罪をば赦すなり。【榜】……音バウ。標榜、かけふだ、高札、衢路。【音クロ。四辻】……音ケフシウ。おびやかされて致し方なく服従する。【聽其自新】……自分から心を取りかへる者は善惡を咎めず。【忠良】……又太郎。【千代河】……薩摩に在り。【漕船】……運送船。【湊】……會聚なり、あつまる。【浮梁】……音フリヤウ。うきはし、舟橋。【太平寺】……薩摩に在り。【墳】……うづむ。【夷丘阜】……夷は平らな也、小陵を丘と云ひ、大陵を阜と云ふ。阜は音フ。【中開門卷】……陣中に門を立て小路を造る。【平佐】……薩摩に在り。【家久】……義久の弟。【佐土原】……日向に在り。【義弘】……義久の弟。【求麻】……肥後に在り。【鹿兒島】……即ち義久の治所。【不庭】……庭は堂階なり。諸侯の朝覲せざるを不庭と云ふ。【源右大將之遠裔】……源右大將とは、源頼朝を指す。義久の遠祖忠久は、頼朝の庶子なり。【溫言】……溫和なる言語、やさしき言葉。【慰藉】……なぐさめやすんずる。

薩摩の武勇なる大將新納忠元と伊集院忠棟とは、合子城を守つて居つたが、走つて八代に立て籠り、島津征久と、兵を合はせて堅く守つた。秀吉は、兵船を以て之を攻めた。すると、忠元等は、夜に乗じて、逃げ去つた。秀吉は、其城に入つて、諸大將に向つて曰ふには、吾は、邊鄙にして遠い國を征伐するのであるから、若しも是非とも残りなく皆殺しにしようとする、勢に於て、どうしても出来ないところがあるし、其上に、吾が度量の狭小なることを示すのである。されば、何事もゆるやかにして、大概な事は赦すことにして、速に大功を成就するが宜しいのであると曰ひ、そこで、四辻に高札を立て、曰ふには、名高い家柄や舊い家柄で、敵におどかされて已むを得ずして従つた者、及び、俠客や大盜賊で徒黨を組んで居つた者は、一切皆、其罪を赦して、自ら改心して服従することを許すと曰つた。この命令が、はじめて下

るや、降参する者が引きつゞいて、軍門は市の如くであつた。秀吉は、そこで、進んで、薩摩に入り、島津忠良を降服させ、五月には、進んで千代川に到着した。この川は、海の港につゞいて居つて、さきに出發したところの運送船が、残らず、此處に集まつた。そこで、秀吉は、水軍の大將なる加藤嘉明、脇坂安治、丸鬼嘉隆に申し附けて、舟橋を造らしめて、軍勢をあたし、やがて、總大將の旗を太平寺に立て、その周圍に陣營を布き列ね、池や澤を埋め立て、岡をくづし平らげること、二里餘四方であつて、その中に、門を立て、小路を通じて、縦横十文字に往來の出来るやうにし、なか／＼盛んなる有様であつた。そこで、遠近の者共は、その威風の盛んなるを望み見て、ちり／＼になつて崩れて仕舞つた。秀吉は、そこで、水軍の三人の大將を派遣して、桂忠昉を平佐に攻めしめたが、脇坂安治が先登したので、忠昉は降参した。こゝに於て、秀長は、日向のもの領主なる伊東祐丘を以て先鋒となし、五萬人を引き連れて、日向より入り、前田利長は、淺野彈正とともに、龍造寺政家を以て先鋒となし、五萬人を引き連れて、大隅より入つた。そこで、家久は、佐土原を以て降参し、義弘は、退却して、求麻に陣取つた。こゝに於て、我が諸軍は、一所になつて南に向つて攻め下り、鹿兒島の近くまで押し寄せた。すると、島津氏の大將どもは、かほ／＼、義久に、降参を乞ふことを勧めたので、義久は、そこで、伊集院忠棟を派遣して、秀長に因つて、罪を謝した。すると、秀吉が曰ふには、吾は、はじめに、朝廷に参觀せざる無禮なる臣下を誅殺して、残る者は無いやうにしやうと思つた。けれども、吾聞くに、島津氏は、源右大將頼朝の末孫であるといふことである。四百年以來の名高い家柄を、一日にして亡ぼして仕舞ふことは、吾も亦忍びぬところであるから、赦すことに致さうと曰つた。義久は、大に喜んで、髪を剃つて、僧侶の衣を着て、近侍の家來五六人を従へて、太平寺に至つて降参した。秀吉は、引き入れて對面し、やさしい言葉を以つて、之をなぐさめ安んじ、命じて義弘を後繼となさしめた。琉球國は、此事を聞き及んで、使者を馳せて、貢物を献上した。

六月。凱旋。至太宰府。盡收九州質子。大論功罪。令島津氏因故土。領薩摩。大隅。日向。削其侵地。賜肥後于佐佐成政。筑前于小早川隆景。豊前于黑田孝高。森勝信。筑後于毛利秀包。立花宗茂。而大友義統。高橋統增。伊東祐丘。龍造寺政家。皆復舊領。差有增損。使政家族鍋島直茂攝國事。及政家天。乃立直茂。耳川之事。尾藤知定。教秀長不即救。因奪其讚岐。後以賜生駒親正。丹羽長重。犯軍法。因奪其若狹。賜之淺野氏。削阿蘇大宮司。邑律彦山僧徒。大村氏私舍。西蠻妖賊。奪其長崎邑。磔賊二十餘人于邑中。

使鍋島氏監外國互市焉。禁天主教。遂大修西海政令。七月。復命于京師。天皇遣使郊勞之。八月。徳川公自來賀戰捷。是歲。西海諸侯皆就國。秀吉誠成政。善待土豪。勿擾國民。成政違教。士民皆叛。踰年粗定。秀吉讓之。賜死。以肥後分賜加藤清正。小西行長。清正爲主計頭。行長爲攝津守。行長卽彌九郎也。秀吉謂二人曰。他日將有以用汝也。

【差】……や。【天】……音エウ。若死する。【耳川之事】……前節に見ゆ。南條氏の敗北せしときの事を指す。【阿蘇】……肥後に在り。【彦山】……豊前に在り。【大村氏】……丹後守。新八郎。【西變妖賊】……西洋の切支丹宗の賊徒。【天主教】……基督教の一派。【郊勞】……邑外を郊と云ふ。勞は慰なり。郊外に出迎へて慰勞する。【士民皆叛】……士民は一に士民に作る。【讓】……責むる也。【分賜加藤清正小西行長】……清正は此時僅に祿五千石の旗本なりしが、一躍して肥後熊本二十五萬石の城主となりしなり。小西行長は、肥後半國の主十九萬石の大名となりて、宇土の城を賜はる。

六月に、秀吉は、凱旋して、太宰府に至り、殘らず、九州地方の人氣を收め納れ、大に功績罪過を評定した。即ち、島津氏をして、もとの領地に因つて薩摩、大隅、日向を領地とせしめ、その侵略したる土地を削り減らして、肥後をば佐佐成政に賜ひ、筑前をば小早川隆景に賜ひ、豊前をば黒田孝高と森勝信に分ち賜ひ、筑後をば毛利秀包と立花宗茂に分ち、そして、大友義統、高橋統增、伊東祐兵、龍造寺政家は、いづれも皆、もとの領地をかへして貰ひ、多少は、増されたり減らされたりし、政治家の一族なる鍋島直茂をして、その國の政事を後見せしめ、その後、政治家が若死するに及んで、そこで、直茂を立てた。さきに、耳川に於て、南條氏が敗北したときに、尾藤知定が、秀吉をして卽座に南條氏を救はしめなかつたので、因つて、知定の領地なる讃岐を取り上げ、後に、讃岐をば生駒親正に賜はつた。丹羽長重が軍法を犯したのを、因つて長重の領地なる若狹を取り上げて、之を淺野氏に賜はつた。又、阿蘇神社の大宮司の領地を削りへらし、彦山の坊主の掟(オキテ)を定めた。大村氏は、内々、西洋のキリシタン宗の賊徒をかまつて置いたので、大村氏の領地長崎を取り上げ、賊徒二十餘人を長崎に於てはりつけにし、鍋島氏をして外國の貿易の事を監督せしめ、天主教を禁じ、遂に、大に西海道の政治法令を整へ、七月に、京都に還つて、報告した。すると、天子様は、御勅使を遣はして、秀吉を郊外に於て迎へさせられた。八月に、徳川公は、自身に來つて、戰勝を賀した。この歳に、西海道の諸侯は、いづれも皆、自分々々の領地に赴いた。その時に、秀吉は、成政に注意するには、土地の豪族どもを善く待遇して、その國の人民を馴がせてはならぬぞと注意した。しかるに、成政は、その命令に違つたので、士民が皆をむき、その翌年になつて、ざつと平定した。そこで、秀吉は、成政を責めて、死を賜はつた。かくて、秀吉は、成政の領地たりし肥後を以て、加藤清正と小西行長に分ち賜はつた。この時に、清正は主計頭となり、行長は攝津守となつた。行長といふのは、卽ち彌九郎のことである。秀吉は、そこで、この二人に向つて曰ふには、他日、吾は、汝等を大に用ひる場合があるであらうぞと曰つた。

十六年。正月。秀吉遂奏請臨幸。時承大亂之後。典籍殘亡。乃令前田玄以與公卿雜議。用足利義滿義教故事。四月。十四日。天皇幸聚樂第。關白秀吉率文武百官扈從。扈從者。蓋新典也。遠近縱觀。父老或有流涕者。曰。吾儕聞有行幸之儀久矣。今得親觀之。卽日。行享禮。使伶人奏五常。太平諸樂。明日。秀吉早盛服出侍于御座之右。盡召天下牧伯。使列於前。內大臣信雄。大納言家康。大納言秀長。中納言秀次。左近衛中將秀家。右近衛少將利家。侍從元親。侍從義統以下。以次而進。盟曰。奉戴皇恩。竭力王事。莫敢或怠。皇家之邑。莫敢或侵。侵者相共誚責之。戒囑子孫。莫敢或渝。關白所令。事無大小。莫敢或不奉。所違斯盟者。六十六州神祇。大罰殛之。覆其國家。莫能享其祿。明日。宴諸牧伯。天皇賜歌。關白以下皆賡之。車駕駐五日。還宮。秀吉以京師戶稅。奉供御。以其戶租。爲上皇湯沐邑。以近江高島郡。充廷臣采田。凡金帛珍貴之獻。前後無算。九月。諭毛利氏。割其出雲。伯耆。予族吉川廣家。廣家元春子。元長弟也。十月。大張茗燕于北野。十七年。五月。復分金銀各三十六萬五千兩于文武百官。

【典籍】…音テンセキ。經籍、古き書物。【殘亡】…そこなはれほろぶ。或は缺本となり或は無くなつて仕舞ふ。【義滿義教故事】…後小松帝、應永年中、義滿の第に行幸あり、後花園帝、永享中、義教の第に行幸したまひしとき先例。【扈從】…後從、供奉、御供をする。【新典】…典は法なり。新しき例。【縦觀】…縦に放なり。民にゆるして行幸を觀せしむるなり。【享禮】…音キヤウレイ。饗應の禮。【俗人】…音カイシヨク。堅く戒め言ひつける。【渝】…變る。【罰極】…音ハツキヨク。罰せられ殺さる。【國家】…一に家國に作る。【享其祿】…祿とは、天祿なり。その幸福を受くること。【賫】…つぐ、續くる也。御製の歌に和して賦詠する也。【駐】…とどまる。【戶稅】…戶數割の税金。銀地子錢五千五百三十兩を禁中の料となすと云ふ。【戶租】…商業稅及び其他の雜稅。京師地子米八百石の内三百石を以て御湯殿の御入用となすと云ふ。【爲湯沐邑】…爲は恐らくは充の誤ならんか。湯沐邑とは、湯沐の具を供する爲めの領地との義にして、御領地を云ふ。【充廷臣采田】…充は恐らくは爲の誤ならんか。廷臣は、公卿。采田は領地。【茗燕】…茶の會。天正十六年十月朔日、華洛北野の松原に於て、貴賤都鄙打ちまじり、大茶の會催さるべしと、去る八月上旬より、京、大津、伏見、奈良、大坂、堺等へ高札を立て置かれ、數寄の茶人を召されける。其高札の文に曰く、來る十月朔日、北野松原に於て、茶湯興行せしむべき也。貴賤によらず、貧富にか、はらず、望みの面々來會せしめ、一興を催すべし。尤も美麗を禁じ、質素なること專一なり。秀吉所持の道具がざり置き、望の者に見すべき者也。八月二日。

【開】天正十六年の正月に、秀吉は、遂に、奏上して、聚樂の屋敷に御臨幸あらんことを請うた。その時は、應仁以來天下の大亂の後であつたので、古き書物は、或は缺本となり、或は無くなつて、御臨幸の儀式を取り調べることに出来なかつたので、そこで、前田玄以をして、公卿達と、色々相談せしめ、足利義滿のときと足利義教のときとの先例を用ふることにした。かくて、四月の十四日に、天子様は、聚樂の屋敷に行幸の儀式を、勝手に觀せしめることにした。すると、年寄りたる者どもの中に、涕を流して曰ふには、我々は、天子様の行幸の儀式といふものがあるに云ふ事を、聞いて居つたが、今日、はじめて、自分の眼で之を見ることが出来たと曰つた者があつた。直に其日に、饗應の禮儀を行ひ、樂人をして、五常樂、太平樂などの雅樂を奏せしめた。その明くる日に、秀吉は、早朝より、立派なる衣服を着て、天子様の御座の右に侍坐し、天下の諸侯どもを殘らず召し寄せて、御前に列座せしめ、内大臣北畠信雄、大納言徳川家康、大納言豊臣秀長、中納言豊臣秀次、左近衛中將浮田秀家、右近衛少將前田利家、侍從長曾我部元親、侍從大友義統以下の者共が、官位の順序を以て進み出で、盟をなして曰ふには、天子様の御恩をありがた戴き奉つて、天子様の御事の爲めに力を盡し、敢て怠るやうなことを致すことありませぬ。皇室の御領地をば、敢て侵すやうなことを致すことありませぬ。もしも侵した者があるときは、相共に之を責め正しませぬ。各々、子孫に戒め言ひ附けて置き、後日に至るまで、敢て之に變はるやうな事を致すことありませぬ。關白殿下の御命令は、事、大小となく、如何なる事にも、敢て之を奉せぬやうな事を致すことありませぬ。若し此盟に違ふ者があるときは、我が日本全國六十六州の天神地祇が、之を罰し誅し、その領國をくつがへされて、決して其幸福を受けること出来ぬでありませぬ。やうと曰つた。その明くる日に、多くの諸侯どもを饗宴した。天子様は、御製の歌を賜はり、關白秀吉以下、皆、之に和して歌を詠んだ。かくて、天子様の御乗物は、聚樂に駐まること五日にして、御所に還幸になつた。秀吉は、そこで、京都の戸數割の税金を以て、天子様の御入用にあて、又、京都の商業稅などを以て、上皇の御入用に於て、近江の高島郡を以て、公卿達の領邑となした。すべて、黄金、織物、珍しき物貴き物を献上すること、前後數へ切れぬほどであつた。九月に、秀吉は、毛利氏に諭して、其領地なる出雲、伯耆を割いて、一族なる吉川廣家に與へさせた。廣家は、元春の子で、元長の弟である。十月に、大に、茶の湯の會を京都の北野に張り行つた。十七年の五月に、秀吉は、ふた、び、金銀各々三十六萬五千兩を文武百官に分配した。

是時。秀吉威令幾遍。天下東北豪傑。佐竹。里見。結城。那須。岩城。葦名。松前。諸族。爭修使幣。秀吉禁其私鬪。使之朝覲。而獨北條氏政據關東八州。伊達政宗據陸奥。出羽不肯降。天子幸聚樂之次月。秀吉遣富田知信。津田信季。赴相模。諭氏政曰。吾子席五世之勢。擅有八州。而不修朝貢。不義。今天子新立。天下莫不嚮歸。吾子宜速入覲。氏政與子氏直議。不敢堅對。八月。氏政使使來請曰。眞田昌幸取我沼田。請令昌幸返之。然後入朝。諸將皆忿曰。氏政亡狀。請發兵討之。秀吉曰。未也。是年七月。復使知信。信季。就昌幸諭之。昌幸奉命。致沼田于北條氏。於是。一使遂往小田原。趣其入朝曰。不朝則有罰。氏政與其親族將領議曰。我與彼相距遼遠。彼何輒來。且彼特能服畿內。西國耳。古稱關八州可敵天下。且箱根天險也。彼果來乎。我以八州勁兵。要諸箱根。彼何能爲。在昔平氏。發大軍。來攻源氏。至富士川。聞鵜鴨起。遂恇慄而潰。關白又如此爾。乃不禮使者。使者微聞其言。歸報秀吉。秀吉怒曰。氏政以吾比平維盛邪。吾將示之我技倆也。徳川公數勸氏政入朝。不肯。是歲。伊達政宗滅葦名氏。并會津四郡。滅二階

堂氏并仙道七郡。佐竹岩城諸族討之。皆敗。秀吉使使責讓政宗。命其入朝。政宗亦不肯。

【幾】……ほとんど。【佐竹】……常陸介。【里見】……左衛門佐。【那須】……太郎。【岩城】……修理大夫。【葦名】……日向守。【松前】……民部大輔。【吾子】……御前。貴公。【席】……猶ほ因のごとし。人の席に坐するが如きを云ふなり。【五世】……早雲氏綱氏康氏政、氏直。【堅對】……しつかりと返答する。確答する。【沼田】……上野に在り。【令昌幸返之】……返は一に還に作る。【趣】……うながす。【距】……違なり、去る。【遠達】……音レウエン。遠も亦遠なり。遙に遠きこと。【在昔平氏發大軍來攻源氏】……治承四年に、維盛、大兵を率めて、頼朝を撃ちしを指す。平氏記に詳なり。【恠】……音キヤウキ。恠は怯なり、怪は心動く也。氣おくれして恐れること。【技倆】……音ギリヤウ。手なみ。【會津四郡】……會津、耶麻、大沼、河沼の四郡を總稱して會津四郡といふ。【二階堂氏】……陸奥守。【仙道七郡】……白川、石川、磐瀨、安達、安積、伊達、信夫の七郡を云ふ。仙道は一に山東に作る。

關原の時に、秀吉の威勢命令は、ほとんど、天下に行き渡つて居つて、東北の地方の豪傑なる佐竹、里見、結城、那須、岩城、葦名、松前の諸族は、先を争うて使者を遣はし、幣物を送つたので、秀吉は、そこで、彼等が銘々自分勝手に喧嘩することを禁じ、彼等をして京都に入つて朝覲せしめた。しかるに、たゞ北條氏政は、關東八州に立て籠り、伊達政宗は、陸奥、出羽に立て籠つて、降服することを承知しなかつた。天子様が聚樂の屋敷に行幸になつた次の月に、秀吉は、富田知信、津田信季の二人を派遣して、相模に往かしめ、氏政を諭して曰ふには、貴公は、五代の間の勢によつて、勝手に、關東八州を占領し、をして、入朝して貢物を奉らぬのは、不義である。今、天子様が、新に御位に御即きになつて、天下の人々は、之に驚ひ歸服しないものは無い。貴公は、速に入朝すべきであると曰つた。氏政は、氏直と相談して、敢て確答をしなかつた。八月に、氏政は、使者をして來つて請はしめて曰ふには、真田昌幸は、我が領地沼田を攻め取りました。どうぞ、昌幸をして沼田を返さしめて下さい。其後、私は入朝いたしまじやうと曰つた。すると、諸大將は、皆腹を立て、曰ふには、氏政は實に無禮で御座ります。どうぞ、軍勢を繰り出して氏政を征伐いたしたいと思ひますと曰つた。けれども、秀吉が曰ふには、まだ其れには及ばぬと曰つた。この年の七月に、秀吉は、ふたゝび、知信、信季の二人をして、昌幸の處に往きて、此事を諭さしめた。すると、昌幸は、命令に従つて、沼田を北條氏に引き渡した。こゝに於て、二人の使は、遂に小田原に行き、氏政の入朝を催促して曰ふには、もし入朝しないときは、罰があるぞと曰つた。すると、氏政は、その親族及び大將ととも、相談して曰ふには、我と彼れ秀吉とは、相去ること、遙に遠いことであるから、彼れは、どうして、たやすくは來らうぞ。其上に、彼れは、たゞ畿内、西國などの弱者共を服従させることが出来ただけである。むかしの言葉に、關東八州は、天下に敵對することが出来ると言はれて居るし、其上に、箱根は、天造の要害であるから、彼れが果して來るとしても、我は、關東八州の剛勇なる兵士を引き連れて、之を箱根に待ち受けるときは、彼れは、どうすることも出来はせぬ。昔、平氏が、大軍を繰り出して、源氏を攻め寄せたとき、富士川に到着して、あひるや鴨の起ちあがる聲を聞きつけて、遂に氣おくれがして恐れて、ちり／＼に崩れたことがある。關白秀吉も亦、こんな事であらうぞと曰ひ、そこで、二人の使者を禮遇しなかつた。二人の使者は、ほのかに、上の言葉を聞いたので、歸つて秀吉に報告した。すると、秀吉は、怒つて曰ふには、氏政は、吾をば平維盛に比べるのであるか。吾は將に氏政に我が手なみを見せてくれるであらうと曰つた。徳川公は、たゞび／＼、入朝することを氏政に勧めたけれども、氏政は、承知しなかつた。この歳に、伊達政宗は、葦名氏を滅ぼして、會津四郡を併せ、二階堂氏を滅ぼして、仙道七郡を併せ、佐竹、岩城の諸氏族が、政宗を討つたけれども、いづれも皆敗北した。そこで、秀吉は、

使者を派遣して政宗を責めしめ、そして京都に入朝することを命令したけれども、政宗も亦承知しなかつた。

十月。真田昌幸來告曰。沼田有那胡桃城。爲臣墳墓之地。北條氏將守沼田者。欲遂取之。臣曰。殿下命致沼田。未聞致那胡桃也。彼不聽。遂攻取之。敢告。秀吉大怒。遂奏請討氏政。氏政使者石卷康昌。在京師。懼。陳謝之。秀吉不聽。押送康昌相模。遺書氏政。絶之曰。秀吉起微賤。爲先右府所拔擢。攻城野戰。立功弓馬之間。既而遇變。故提兵東上。誅夷逆臣。以答右府恩眷。遂忝太政之任。佐天子以定亂。逆叛者伐。服者撫。七道豪傑。無不從。我所麾。汝氏政負險恃力。敢不修朝貢。狡詐貪婪。輕蔑天子之命。夫天地之際。一有違。詔勅者。而漏於誅討。秀吉恥之。修乃城池。厲乃甲兵。明年。吾將操王節。率諸軍。以正汝氏政之罪。書至相模。氏政不以爲意。曰。彼欲以虛聲脅我。彼誠來。大舉則少食。小舉則少力。是易與耳。

【墳墓之所】……先祖の墓所。【殿下】……陛下に次ぐの稱。秀吉を指す。伊勢貞丈云ふ、上古は皇太子の御事を殿下と云ふ、公式令見るべし。關白を殿下と云ふことは、諸臣の藤氏に詔諛に出で、一條院以後の事と也。【押送】……音アサウ。牢典に入れて送る。【先右府】……信長を指す。【拔擢】……音バツテキ。抜き上げて重く用ふる。【變故】……信長の弑害せられしを云ふ。【恩眷】……恩顧眷遇。【應】……音キ。指麾、指圖する。【狡詐】……音カウサ。狡猾にして間に合はせの詐を言ふこと。【貪婪】……音タンラン。婪も亦貪る也。はなはだしく慾張る也。【乃】……汝。厲乃甲兵。厲は厲と同じ、磨ぐ也。甲は帶言なり。戰國策に、練甲厲兵とある、これ易の潤之以風雨、左傳の被甲兵二等の風の字、兵の字は帶言なりと同じ類なり。厲は一本には勵に作る。【操】……とる。【王節】……天子より賜はるしるし、節刀なり。【易與】……くみしやすし、相手にするのは何でも無い。

十月に、眞田昌幸が来て告げて曰ふには、沼田に那胡桃城といふ城があります。これは私の先祖の墓所で御座ります。しかるに、北條氏の大將で、沼田を守つて居る者が、遂に之を奪取らうと致しましたので、私が申すには、關白殿下は、沼田を引き渡せよと、私に御命令なされたけれども、那胡桃を引き渡せよとの仰をば未だ聞かないことであるから、之をわたすわけには行かぬと申しましたけれども、彼れは聞き入れずして、とうとう、那胡桃を攻め取りました。敢て申し上げて置きますと曰つたので、秀吉は、大に怒つて、遂に、奏上して、氏政を征伐することを請うた。氏政の使者なる石巻康昌は、京都に居つたが、懼れて、色々と申述べて御説をしたけれども、秀吉は、聞き入れずして、康昌を牢輿に入れて相模に送り、手紙を氏政に送つて、交を絶つた。其文面に曰ふには、われ秀吉は、微賤なる身分より起りて、右大臣殿(即ち信長)に引き上げて用ひられ、或は城を攻め或は原野に戦ひ、戰場に於て手柄を立てたが、とかくする中に、右大臣殿が逆臣光秀の爲めに弑害せられたといふ變亂の事故に出遇ひ、直に軍勢を引き連れて、東の方京都に上り、逆臣を誅滅し、以て右大臣殿の恩遇に報い奉り、それから、遂に太政大臣といふ重大なる任務を辱うし、天子様を輔佐し奉つて、亂逆を平定し、叛く者をば征伐し、服従する者をば撫で安んじたので、我が日本全國七道の豪傑は、我が指圖に従はないものは無い。しかるに、汝氏政は、地の險阻なるをたのみとし、勢力あるをたのみとし、無禮にも、入朝して貢物を奉ることを致さず、惡賢くして善い加減の間に合はせの詐を言ひ、甚しく貪り慾張つて、天子様の御命令を輕んじないがしろに致して居る。夫れ、天地の間に、一人でも、詔勅に違背しなからず、かき、誅罰に漏れて居る者があるのは、われ秀吉は、之を恥づる次第であるから、苟くも詔勅に違背する者があるときは、是非とも誅罰しないわけには行かぬ。されば、汝は、汝の城や池を修繕し、汝の鎧をつくろひ、汝の兵器を磨いで置け。明年、吾は、將に朝廷より賜はりたる節刀を持つて、諸軍を引き連れて、汝氏政が罪を正さうとするのであると曰つた。その手紙が、相模に到着したけれども、氏政は、それを格別氣にも懸けずして曰ふには、彼れ秀吉は、たゞ、から聲を以て我をおどかさうとするのである。若し又彼れ秀吉が本當に來るとも、大軍を引き連れて來るときは、兵糧が少くて困るだらうし、又、小勢を引き連れて來るときは、力が乏しいであらうから、相手にするには何でも無いことであつて、格別恐れるに及ばぬのであると曰つて居つた。

秀吉遂令駿河。越後以西四十五國發兵。以明年三月會京師。其遠京師者。便道直赴關東。命長束正家運粟二十萬石。至駿河。又出金一萬枚。糴於海道諸國。時海路久絕。民皆憚風濤之險。曰。海龍王爲祟。秀吉笑曰。吾受王命。討不庭。何物龍王。敢得沮我也。作檄授之。投海而進。使水軍三將與長曾我部元親護糧船以東。

【糴】音テキ。米を買ひ入る也。崇……たり。檄……檄文。海龍王を諭すの書なり。其文に曰く、今度北條追伐に付いて、吾が

馬船を相州三島の津に赴かしめんとす。海上難なく、通さるべき者也。關白秀吉 龍宮殿。「水軍三將」……加藤嘉明、脇坂安治、九鬼嘉隆。又、其の京都に遠く離れて居る者は、便利なる道から、直接に關東に赴かしめることにし、又、長束正家に申し附けて、米二十萬石を運送して駿河に至らしめることにし、又、黄金一萬枚を出して、東海道諸國の米を買ひ入れることにした。その時に、海上の交通は久しく絶えて居つたので、人民は、皆、大風大浪の危険なることを畏れ憚りて、曰ふには、海の龍王が、たゞりを爲すで御座りましやうと曰ふと、秀吉は、笑つて曰ふには、吾は、天子様の勅命を受けて、入朝せざる不忠の臣下を征伐するのであるから、何の龍王などが、敢て我を邪魔することが出来やうぞと曰ひ、そこで、龍王を諭す檄文を作つて之を與へ、海に投げ込んで進ませることにし、水軍の大將三人をして、長曾我部元親とともに、兵糧船を護衛して東に向つて出發せしめた。

十二月。德川公來請約束。氏直因公謝罪。請入朝。秀吉弗許。於是會德川公以下將帥。開關東地圖。指畫部署。眞田昌幸素與德川公惡。時在下坐。不得窺圖。秀吉呼前之曰。吾以家康爲海道先鋒。以汝爲山道先鋒。昌幸感喜。退而謂人曰。得殿下一言。多於得百萬封矣。十八年。正月。德川公送其嗣子爲質。秀吉賜之姓羽柴氏。名秀忠。遣歸之。曰。卿以其與氏直有姻焉乎。吾何疑卿哉。德川公乃空海道諸城。除道供帳以待。二月。秀吉召毛利輝元守京師。弟秀長守大坂。令德川北畠前田上杉諸將以其兵先發。三月朔。自戎服入朝。受節刀于陛。拜辭。起出關上馬。率騎卒十七萬而東。部伍整肅。鎧仗鮮明。使士民縱觀之。

【約束】……軍令などを云ふ。【指畫部署】……畫は音クワク、分つなり。地圖を指し示して諸將を手分けすること。【多】……勝なり、多さる。【與氏直有姻】……氏直、さきに、德川氏に娶れり、故にかく云ふ。【吾何疑卿哉】……北條氏を援くるかも知れぬなどの疑念なきを

云ふ。【除道】……道をばらふ、道を掃除する。【供帳】……幕を張りて場所の手當などをするを云ふ。【戎服】……軍服。【陸】……音ヘイ。御所のきぢはし。【部伍】……隊伍。【整肅】……整頓して物靜なること。【鑑伏】……甲冑と兵器。【鮮明】……音センメイ。奇麗なること。あざやかにして立派なること。

十二月に、徳川公は、來つて軍令を受けんことを請うた。氏直は、徳川公に因つて、罪を謝し、入朝いたしたいと請うたけれども、秀吉は、許さなかつた。こゝに於て、秀吉は、徳川公以下の諸大將たちを寄せ集め、關東の地圖を開いて、地圖を指さし諸將の向ふところを手分けした。眞田昌幸は、平素、徳川公と仲が悪かつたが、此時に、末席に居つて、地圖を窺ひ見ることが出来なかつた。すると、秀吉は、昌幸を呼んで其座を進ましめて曰ふには、吾は家康を以て東海道の先鋒となし、汝を以て中仙道の先鋒とするぞと曰つた。昌幸は、感激して大に悦び、其席を退いて後に、人に向つて曰ふには、吾は、關白殿下の此度の御一言を得たのは、百萬石の領地を貰つたよりも有り難いと曰つた。天正十八年の正月に、徳川公は、その跡取り息子を送つて、人質となした。すると、秀吉は、之に羽柴氏の姓と秀忠と云ふ名とを賜はつて、之を歸してやつて曰ふには、貴公は、氏直と縁者であるといふので、人質を送つて來たのであるか。吾は、どうして貴公を疑ふことがあらうぞと曰つた。徳川公は、そこで、東海道の諸處の城を明け、道路を掃除し、宿泊休憩の場所の手當などをなして、秀吉の出陣を待つて居つた。二月に、秀吉は、毛利輝元を召して京都を守らせ、弟秀長をして大坂を守らせ、徳川、北畠、前田、上杉の諸大將をして、先だつて出發せしめた。三月の朔に、秀吉は、自ら軍服を着て參内し、きざはしの下に於て、節刀を頂戴し、御暖乞をし、起ち上つて、御所を出で、馬に乗り騎歩兵卒十七萬人を引き連れて、東に向つて下つた。その隊伍は整頓して物靜に、鎧や兵器は華やかにして奇麗であつて、士民を差し許して、之を見物させた。

氏政盡召八州城主。集于小田原。遣親信將帥拒箱根諸城。以兵數萬守其後。二十七日。秀吉至沼津。明日。自上山候視敵城寨。即夜下令。令秀次以五萬攻山中。信雄以三萬攻葦山。而徳川公以二萬五千直踰箱根。明日。諸將蓐食竝發。秀次以中村一氏爲先鋒。令徒陣近城。城上銃丸雨注。一柳直末死之。一氏厲衆攻破其郭。斬敵將間宮好高。進薄内城。其騎士渡部了攀堞而上。秀次乃麾軍齊登。走城將北條氏勝。信雄亦破葦山郭。徳川公陷三城。至酒匂。戍兵皆潰。四月。秀吉率諸軍抵小田原。建牙于

石垣山。夜令萬卒築城焉。糊紙于壁。望之如望。城兵驚以爲神。秀吉携徳川公登城樓。下視曰。關東八州。在我目中。不日取以予卿耳。徳川公拜曰。幸甚。秀吉附其耳。語曰。卿亦居小田原乎。曰。然。秀吉曰。不可。我嘗觀地圖。自此迤東可二十里。有地曰江戶。襟帶山海。地濶土肥。卿宜居此。徳川公曰。謹奉教。於是令諸軍圍城數重。水軍將士。又破沿海諸城。而來會焉。

【小田原】……相模に在り。【沼津】……駿河に在り。【山中】……伊豆に在り。【葦山】……伊豆にあり。【葦食】……音シヨクシヨク。葦は藤席なり。早く炊きて寝るの上にて食ふ也。【厲】……勵と同じ。【郭】……音フ。外郭。【薄】……せまる。攻め寄せる。【内城】……本丸。【攀堞】……攀は、よち上る。堞は音テフ。城上の女牆なり。ひめがき。攀ちのぼる。【三城】……鷹巢、足柄、新莊。並に相模に在り。【酒匂】……相模に在り。【抵】……至る。【牙】……牙旗。總大將の旗。【石垣山】……小田原の西南に在り。武徳大成には、笠掛山に作る。【糊】……粘なり。のりに附ける。【如望】……望は音アク。白壁なり。白土にて壁を塗りたるが如し。【迤】……音イ。斜に。【襟帶山海】……襟山帶海の互文。そばに山や海があること。土地の要害のよきを云ふ。【濶】……廣き也。

氏政は、殘らず、關東八州の城主どもを召し寄せ、小田原に集め、親近し信用せる諸大將を派遣して、箱根に在る諸城を拒がせ、數萬人の兵を以て、其後を守つて居つた。二十七日に、秀吉は、沼津に到着し、翌日、自身に山に上り、敵の城やとりでの様子を伺ひ見て、其夜に、命令を下して、秀次をして、五萬人の兵を引き連れて、山中を攻めしめ、信雄をして、三萬人の兵を引き連れて、葦山を攻めしめ、そして、徳川公をして、二萬五千人の兵を引き連れて、直に箱根を踰えしめることにし、明るる日に、これ等の諸大將は、朝早く寢床の上で飯を食つて、いづれも皆、出發した。やがて、秀次は、中村一氏を以て先鋒となし、陳營を移して城に近がしめると、城の上からの鐵砲玉が、雨の如く降り注いだので、一柳直末は、そこで討死したが、一氏は、部下の人々を勵まして、その外郭を攻め破り、敵の大將間宮好高を斬り、進んで本丸に攻め寄せると、部下の騎士渡部了が、城のひめがきを攀ち上つたので、秀次は、そこで、軍勢を指揮して、一齊に登らしめ、城の守將北條氏勝を敗走させた。信雄も亦、葦山の外郭を破つた。徳川公は、鷹巢、足柄、新莊の三城を攻め落して、酒匂に至ると、其處の守備兵は、皆、崩れ潰えた。四月に、秀吉は、諸軍を引き連れて、小田原に至り、總大將の旗を石垣山に建て、夜の間、一萬人の工夫をして城を築かため、白紙を壁に糊を以て貼りつけて置いたが、之を遠方から望むときは、ちやうど白土の様であつたので、小田原の城兵は、驚いて、これは人間業では無いと思つた。秀吉は、徳川公を引き連れて、城の高級に上つて、視察して曰ふには、關東八州は、我が目の中にある。日ならずして取つ



て、貴公に與へるであらうと曰つた。徳川公は拜して曰ふには、有りがたう御座りますと曰つた。すると、秀吉は、徳川公の耳に口を付けて語つて曰ふには、さうなると、貴公も、小田原に居られる積りであるかと曰つた。徳川公は、左様で御座りますと曰つた。秀吉が曰ふには、それは宜しくない。我、嘗て、地圖を觀るに、此處より斜めに東に當つて、二十里ばかりのところ、江戸と云ふ土地があるが、山や海を近く控へて居つて、地形は廣大にして、土質は肥沃である。貴公は、此處に居るが宜しいと曰つた。すると、徳川公が曰ふには、謹んで仰の通り致す。御座りませうと曰つた。是に於て、秀吉は、諸軍に命令して、幾重にも小田原城を取り圍んだ。水軍の將士が、又、海にそつたる土地の諸城を破つて、來つて會合した。

上杉景勝。前田利家將北陸兵三萬。以眞田昌幸爲先鋒。入上野。大導寺政繁以松枝降。導入武藏。下七城。攻鉢形。秀吉遣淺野彈正少弼。木村常陸介助之。二將別徇武藏。攻岩築。淺野氏嗣子幸長稱左京大夫。甫十五先登。遂拔之。二將遂徇上野。至二總。安房。一月下六十餘城。而小田原固守不下。有流言曰。徳川。織田通款城中。衆情疑懼。秀吉即從近臣數人。與信雄。俱飲于徳川氏營。明日。與徳川公。俱飲于織田氏營。衆疑即釋。遂令諸軍休戰。築長圍。更番游息。徵海道妓樂。置酒高會。秀吉與徳川公以下。造歌詞。被之。謹呼連晝夜。以示據久之意。城兵大困。徳川公初度大衆久屯。穀價必騰。私命其吏。多蓄糧餉。已而長束正家掌漕轉。米粟狼戾。乃服秀吉善用人也。當是時。豊臣氏軍環城而陣者。幾二十萬。山陵林麓。莫非兵者。關以東望風降附。相馬。秋田。南部。津輕諸族。或執謁軍門。或使

納幣。項背相望。

【松枝】…上野に在り。【鉢形】…武藏に在り。【岩築】…武藏に在り。一に岩槻に作る。【二總】…上總、下總。【流言】…根無き風説。【妓樂】…音ギガク。女樂、藝妓の類。【被之】…被は加へる也。妓樂の調子にあはせる。【騰】…のぼる、騰貴する。【狼戾】…音ラウレイ。狼藉と云ふが如し。あり餘るほど多きを云ふ。【相馬】…彈正少弼。下總に在り。【秋田】…城介。今の羽後に在り。【南部】…大膳大夫。今の陸中に在り。【津輕】…右京亮。陸奥に在り。【項背相望】…項は首す。背は脊中。連續して來るを云ふ。【關】上杉景勝、前田利家は、北陸道の兵三萬人を引き連れて、眞田昌幸を以て先鋒となして、上野に打ち入つた。すると、大導寺政繁は、松枝を以て降参し、之を案内して、武藏に打ち入り、七箇所の城を攻め落し、鉢形城を攻めた。秀吉は、淺野彈正少弼と木村常陸介とを派遣して、之を助けさせた。淺野、木村の二將は、別に武藏をふれ下し、岩築を攻めた。淺野氏の嗣子なる幸長は、左京大夫と稱し、年はやつと十五歳であつたが、先登し、遂に岩築を攻め落した。淺野、木村の二將は、それから、遂に上野をふれ下し、上總、下總、安房に至り、わづかに、一箇月にして、六十餘城を攻め落した。しかるに、小田原は、固く守つて下らなかつた。すると、根の無い風説があつて曰ふには、徳川氏と織田氏（北島信雄を指す）とは、小田原城中に内通して居ると曰ふ風説があつたので、人々の心は疑ひ懼れて居つた。秀吉は、之を聞くと、即座に、近侍の臣下四五名を從へて、信雄とともに、徳川氏の陣營に於て、酒宴を開き、明くる日は、徳川公とともに、織田氏の陣營に於て、酒を飲んだので、人々の疑念は、即座に、釋けて、安心した。秀吉は、遂に、諸軍に命令して、戰爭することを休み、城の周圍に土塀を築いて、かはり番に、遊び休息することにし、東海道の藝妓を召集し、大勢集まつて盛んに酒宴を開いた。秀吉は、徳川公以下の人々とともに、歌の文句などをつくつて、之を樂器にあはせ、大いに喜びさわいで、晝夜引き續き、以て、長く持ちこたへて居るのであるとの意を示した。そこで、小田原の城兵は、大に困却した。徳川公は、はじめに、大勢の人数が久しく駐屯することから、米穀の價が屹度騰貴するであらうと思つて、内々、其部下の役人に申し附けて、兵糧を澤山に蓄へて置いた。とかくする中に、長束正家が、船の運漕の事をつかさどりて、米穀は、澤山に到着して、有り餘る程であつたので、そこで、徳川公は、秀吉が善く人を用ふることに感服した。この時に當りて、豊臣氏の軍勢で、小田原城のぐるりを取り巻いて陣取つて居る者は、ほとんど、三十萬人であつて、山も岡も林も麓も、兵士でない者は無いと云ふ位であつた。關以東は、その威風の盛んなるを望み見て、降参し來り附き、相馬、秋田、南部、津輕などの諸氏族は、或は自身に軍門に出掛けて來て謁見したり、或は使者をして幣物を差し出さしめたりして、その往復するもの、引き續いて居つた。

伊達政宗使人覘形勢。還報則大懼。乃肯修使幣。就徳川氏乞降。徳川公戒使者曰。不可不亟來謁。六月。政宗與百餘騎入下野。路塞不得通。還由越後。信濃。間行至箱根。請謁秀吉。秀吉問謁者曰。政宗狀貌如何。曰。齡可二十歲。眇而被髮。奇偉甚。秀吉不許。輒見使人詰責之曰。吾受王

命經略天下。雖遐方絕域之人莫不來歸。汝屈強東北。擁兵數萬。未嘗發一介之使。葦名義廣歸心王室。而汝擅攻之。是何故。政宗答曰。義廣納臣之叛將。結佐竹岩城。以圖滅臣。臣欲討二本松氏以復父仇。又爲義廣所拒。故臣日夜攻擊。終得克之。臣在敵中。不知四方事。及殿下東伐。然後知天下有所歸也。是以來謁。秀吉又使言之曰。汝之所陳。果無僞也。則盡獻所侵會津。仙道之地耳。不則亟歸汝國。徐修守備。吾討滅北條氏。然後見汝於戎馬之間也。政宗曰。臣生死唯殿下之令。況邑土乎。致其侵地。乃入見。秀吉便服而坐。慰勞之。問曰。卿在陸奥幾戰。曰。三十餘戰。秀吉曰。是村巷小鬪耳。意未知部勒大兵之法也。因起。引政宗而出。下臨廣壑。秀吉在前。指示曰。彼畿内軍也。彼坂以西軍也。彼海道軍也。政宗唯唯。莫敢仰視。既罷。遣歸。諸將交勸留之。不遣。曰。遣之。是猶縱虎於野已。秀吉晒曰。吾不用寸兵而取五十四郡。非汝輩所知也。政宗退謂人曰。關白天威也。遂去之國。

【眼】……うかふ、物の陰よりのぞき見るの意なり。【壘】……速に。【間行】……しのび行く。【謁者】……取り次ぎの者。【眇】……音ベウ。すがめ。目つかち。【奇偉】……體格が人なみにすくれて大きいこと。【遐方】……音カハウ。遠方。【絶域】……海外。【風強】……梗戻の貌。剛情

に構へて居る。【一介之使】……一人の使。【二本松】……右京亮。【復父仇】……政宗の父輝宗は、右京亮義繼に殺さる。【見汝於戎馬之間】……戰場に於て會見せんとの意。【便服】……便安に就く所以なり。【平服】。【村巷小鬪】……村や小路の小せり合ひ。【部勒】……音ブロク。手分し勢揃する。【唯唯】……音ヰヰ。はいはいと云つて居る。【莫敢仰視】……秀吉の顔を見上げることが出来ぬ。大氣に吞まれて大に恐れ入つたる也。【五十四郡】……當時の陸奥全國。【天威】……天然の威光。

伊達政宗は、人をして其様子を窺はしめたが、その人が還つて、其様子を報告したので、そこで、大に懼れて、使者を派遣し幣物を送ることを承諾し、徳川氏に就いて、降参することを乞うた。すると、徳川公は、使者に注意して曰ふに、政宗自身に速に來つて謁見しなければならぬぞと曰つた。六月に、政宗は、百餘騎の者共を引き連れて、下野に入つたけれども、路が塞がつて居つて、通行することが出来なかつたので、引き返して、越後、信濃を通過して、しのび行きて、箱根に到着し、秀吉に謁見せんことを請うた。すると、秀吉は、取り次ぎの者に問うて曰ふには、政宗の様子は、どんな風であるかと曰つた。取り次ぎの者が曰ふには、年は二十歳ばかりで、目つかちで、なで髪にして居つて、その體格は、人並より大層すくれて大きう御座りますと曰つた。秀吉は、たやすく對面することを許さずして、人をして政宗を語り責めしめて曰ふには、吾は、天子様の勅命を受けて、天下をはかり定め、遠方の人海外の人といへども、來つて歸服しないものは無いのである。しかるに、汝は、東北に頑張つて、新萬人の兵士を擁して居つて、未だ嘗て一人の使者をも差し送らざり、又、葦名義廣は、朝廷を尊崇して居るものであつたのに、汝は、勝手に、義廣を攻めた。これは、何故であるかと曰つた。政宗が答へて曰ふには、義廣は、私の謀叛したる大將をかくまひ、その上に、佐竹、岩城など、結托して、私を滅ぼさうと巧んで居りました。そして、又、私は、二本松氏を征伐して、亡父輝宗の仇を復さうと思ひましたのに、又、義廣に妨げられました。それ故に、私は、止を得ず、日となく夜となく、義廣を攻撃して、とうとう、之に勝ちおほせることが出来たので御座ります。又、私は、敵の中に包まれて居りましたので、天下四方の様子を知りませぬ、關白殿下が東方なる北條氏を征伐なされるに及んで、然る後に、天下は歸從する所があつて、皆、關白殿下によつて平定せられたのであることを承知したので御座ります。それ故に、來つて謁見を願ふので御座りますと曰つた。すると、秀吉は、又、人をして政宗に言はしめて曰ふには、若し汝の申し述べるところが、果して僞が無いのであるならば、侵し取つたる會津四郡、仙道七郡を殘らず差し出すべきである。さうでないならば、汝は、速に汝の國に歸つて、ゆつくりと、拒き守るべき備を整へて置け。吾は北條氏を討ち滅ぼして、然る後に、汝と戰場に於て對面するであらうと曰つた。すると、政宗が曰ふには、私の生きるのも死ぬるのも、唯だ殿下の御命令次第で御座ります。まして、領地などのことは何でも御座りませぬ、勿論御命令に従ひますと曰ひ、その侵し取つたる土地を差し出すことにした。そこで、政宗は、内に入つて謁見した。秀吉は、平常の服装で、坐つて居つて、政宗を慰めたはり、そして問うて曰ふには、貴公は、陸奥に居つて、およそ幾度戦争を致したかと曰つた。政宗が曰ふには、三十餘度戦争を致しましたと曰つた。すると、秀吉が曰ふには、それは、村や小路の小せり合ひである。意ふに、貴公は、未だ大軍を手分けし勢揃へする仕方を知らぬであらうと曰ひ、因つて起ち上つて、政宗を引き連れて出で、廣き谷を見おろして、秀吉は、政宗の前にだ、はい、はいと曰つて居るだけで、敢て秀吉を仰ぎ見やうとしなかつた。かくて、謁見の儀式が畢つたので、秀吉は、政宗を國に歸らせることにした。すると、諸大將は、かはるく、政宗を留めて置いて國に歸らせぬが宜しう御座りませぬと、秀吉に勸めて曰ふには、彼れを國に歸らせるのは、ちやうど、虎を野原に放つやうなもので御座りますと曰つた。すると、秀吉は、微笑して曰ふには、吾は、少しばかりの兵器をも用ひずして、陸奥五十四郡を取つたのである。此邊の事は、汝等の分る事では無いと曰つた。政宗は、其席を退いて、人に向つて曰ふには、關白は、天然の御威光で、とて、叶ふことでは無いと曰ひ、それから、遂に立ち去つて國に歸つた。

石田三成。大谷吉隆。長束正家等。於是。攻降館林。遂攻忍城。城將成田長康在小田原。其兵留守不下。秀吉令彈正少弼父子助攻。終降之。景勝利家亦降。鉢形以下諸城。并降附五萬人來謁。秀吉不甚賞。二人頗嫌之。秀吉謂近臣曰。二人非無功。然降輒受之。不足稱勤勞。或降或屠。恩威並行。然後可賞耳。二人聞之。復發。屠八王寺城。還効首級。秀吉乃賞之。

【館林】……上野に在り。【忍城】……武藏に在り。【味】……音ケン。衛なり。猶ほ恨と云ふが如し。不満足に思ふ。【八王寺城】……武藏に在り。

【調】石田三成、大谷吉隆、長束正家等は、こゝに於て、館林を攻めて降服させ、それから、遂に忍城を攻めた。忍城の主將成田長康は、小田原に居つたが、其部下の兵が、留まり守つて、なかく、落城しなかつた。秀吉は、淺野彈正少弼父子をして助け攻めしめて、とうく之を降服させた。景勝、利家も亦、鉢形以下の諸の城を降服させ、降参し附き従つた者共五萬人を併せて、來つて秀吉に謁見した。けれども、秀吉は、大層には賞美しなかつたので、景勝、利家の二人は、餘程之を不満足に思つた。秀吉は、近侍の臣下に向つて曰ふには、景勝、利家の二人は、手柄が無いのではない。けれども、敵が降参すると、いつでも直に、之を受け約れたのであるから、勤勞したと稱するに足らない。あるときは降参させ、あるときは屠り殺し、恩惠と威光とが並び行はれて、然る後、はじめて、賞美すべきであるといつた。景勝、利家の二人は、此事を聞いて、ふたゝび出發し、八王寺の城を屠り殺し、引き返して、討ち取つた首級を差し出した。秀吉は、そこで、この二人を賞した。

於是。八州諸城。大半皆破。而其將士在小田原城内。我兵虜其父母妻子。視之。將士逃降相踵。我侍史山中某。與成田長康善。秀吉命陰以書招之。長康乃送款。秀吉使德川公以其降書遺氏直曰。子之將帥皆有貳心。事已危迫。子盍早自爲計。氏直與氏政議。召長康。不至。乃環柵長康營。置兵監護。自是城中人人相疑。秀吉遣黑田孝高。羽柴勝雅。入城。見氏政父

子。說以禍福。氏政不肯。七月。氏直遂出就德川氏營。乞降。德川氏避嫌不敢通。使之因勝雅。勝雅以告。秀吉許之。使氏政致城而出。因謂諸將曰。吾此行欲誅不庭之臣。今而釋之。是失信天下也。吾欲誅氏政而釋其餘。諸將曰。善。乃遣使者四輩。就氏政舍賜死。秀吉覽其首。罵曰。汝輕蔑王命。敢笑侮我。今如何也。使石田三成齋之京師。梟于一條戻橋。氏規聞小田原既下。亦以葦山降。乃縱氏直。氏規等三十人于高野。給俸百口。尋給萬石。乃舉北條氏故地八國。以賜德川氏。別以十萬石。爲其湯沐邑。舉德川氏故地五國。以賜信雄。信雄不肯受。秀吉怒曰。卿才不可爲民上。吾特以先右府之子也。欲厚封之。卿乃薄之乎。乃放之秋田。賜駿河于中村一氏。甲斐于加藤光泰。尾張及北伊勢五郡于秀次。參河于池田輝政。田中吉政。遠江于堀尾吉晴。山内一豊。有馬豐氏。信濃于森忠政。石川數正。仙石秀久。論關東諸豪功罪。黜陟之。執大導寺政繁。誚之曰。汝以北條氏舊將。而首降於我。我之功臣。乃北條氏之叛臣。叛臣。天下罪人。吾不能私釋焉。乃誅之于櫻田。遂引兵東下。至宇都宮。伊達政宗。南部信直等。皆迎

謁焉。

【視】……しめす。【相踵】……あひつゞ、引き續く。【山中某】……山城守。【羽柴勝雅】……初め瀧川雄利と稱す。【説以禍福氏政不肯】……

兩將、城を致して降参せば、伊豆相模兩國の領主となさんと説きしに、氏政云はく、吾、關八州を領せし身の僅に二國の主たらんよりは、潔く討死すべしと。【遊嫌】……縁類の間柄なりとて嫌疑をさける也。【是失信天下也】……不庭の臣を誅すと云ひて、之を誅せざるときは、信義をたがへるにあたる也。【使者四輩】……後北條記には五輩に作る。こゝには德川氏の使者を省略する也。【氏政舎】……氏政の宿舎は醫師安樓の宅なりと云ふ。【縱】……放つ、追撃する。【俸百口】……百人扶持。【黜陟】……音チユツチヨク。黜は退なり、陟は進なり。罪過ある者を退け、功ある者を昇進させる也。【請】……責むる。【櫻田】……武藏に在り。【宇都宮】……下野に在り。

に我に降参した。我の功臣ではあるけれども、北條氏の叛臣である。叛臣は天下の罪人であるから、吾は、勝手に叛臣たる者を宥ふことは出来ぬと曰ひ、そこで、之を櫻田に於て誅殺した。秀吉は、それから、遂に、兵を引き連れて東に向つて下り、宇都宮に至つたが、伊達政宗、南部信直等は、皆、出迎へて謁見した。

八月。至白河。命淺野彈正少弼。大谷吉隆。石田三成。檢陸奥。出羽地。問諸謀臣曰。吾欲擇一將鎮撫東北。卿等皆陳所見。衆所對各異。秀吉曰。皆非也。非蒲生氏郷無可者。賜氏郷以會津。仙道十一郡。以葛西。大崎。賜木村秀俊。政宗因故土。賜米澤。長井。謂氏郷曰。爲我守東門。因指授方略。戒德川前田。上杉氏。爲之應援。終整諸軍。凱旋至岡崎。吉川廣家受命守焉。則迎饗之。明日。以鞍馬二百餘匹。送秀吉。秀吉擇黑馬騎焉。屏其徒御。獨吉川氏卒栗棲武格者爲之圍。行入尾張。秀吉指路傍聚落。謂武格曰。此名中邑。吾所生長也。吾欲一往觀汝能從我乎。武格曰。謹諾。於是秀吉騎入中邑。留武格于閭首而入。周馳街巷。出遂召邑中父老。笑曰。吾藤吉也。父老皆惶恐俯伏。秀吉曰。比吾少時。邑閭甚整。戶口亦似滋息也。因賜之酒及物。與語舊故而去。九月。復命於京師。

【白河】……今の磐城に在り。陳所見……自分の見込を申し述べる。【賜氏郷以會津十一郡】……常山記談に云ふ、秀吉、陸奥に赴き、蒲生氏郷に八十萬石の地を賜はりたり。氏郷退出し柱に倚り掛りて涙ぐみけるを、山崎の某居寄りて、辱く思はれん事尤なりと言ひしに、氏